

平成 30 年度メディア芸術連携促進事業 連携共同事業

「1985～2005 年間の企業メセナによるメディアアート
展示資料の調査研究事業」 実施報告書

愛知県公立大学法人 愛知県立芸術大学

平成 31 年 2 月

目次

第1章 概要	3
1.1 事業背景	3
1.2 事業概要	3
第2章 事業の目的・趣旨	4
第3章 研究実施体制	5
第4章 実施スケジュール	6
第5章 実施内容	8
5.1 作品史料調査・収集業務	8
5.2 インタビュー調査業務	9
5.3 デジタルデータ化業務	10
5.4 調査史料目録制作業務	11
5.5 作品プログラム最適化業務	11
第6章 成果	14
6.1 作品史料調査内容 各史料のカテゴリライズ	14
6.1.1 企業資料と個人資料	14
6.1.2 資料目録のメタデータ・スキーマについて	14
6.1.3 資料の分類	16
6.1.4 調査対象別の資料の特徴	20
6.2 各インタビューからのまとめ	26
6.2.1 スパイラル／株式会社ワコールアートセンターについて 岡田勉氏	26
6.2.2 CyGnet について 岩城陸奥氏、戸村朝子氏	27
6.2.3 CyGnet について 樋口昌樹氏	29
6.2.4 資生堂ギャラリーについて 眞家恵子氏	30
6.2.5 キヤノン・アトラボ第8回企画展アーティスト 江渡浩一郎氏	31
6.2.6 スパイラル／株式会社ワコールアートセンターについて 岡田勉氏	33
6.3 キヤノン・アトラボに関する鼎談	34
6.4 アトラボ第8回／第9回企画展の作品プログラムの実行状況	65
6.4.1 1998年アトラボ第8回企画展《SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ]》作品プログラム	65
6.4.2 1999年 アトラボ第9回企画展「Connected Re-Body」作品プログラム	70
6.5 企業メセナによるメディアアート史と歴史表	75
第7章 総論	82
7.1 企業メセナによるメディアアート活動とその歴史的評価 四方幸子	82

7.1.1	はじめに.....	82
7.1.2	日本のメディアアート（1950 年代以降）	83
7.1.3	企業のメディアアート支援（1960 年代以降）	85
7.1.4	メディアアートの活動と評価.....	88
7.1.5	1990 年代のメディアアート、そして 21 世紀へ	112
7.1.6	まとめ（歴史的評価）	115
第 8 章	まとめ.....	118
付録		121
付録 1	イメージデータ目録.....	121
付録 2	史料目録.....	124

第1章 概要

1.1 事業背景

現代アートが、1980年代後半からリアルタイムで世界のアートシーンに紹介され始め、ニューテクノロジーに対して日常社会に浸透しやすい状況が生まれていた。そのような中、日本のメディアアートは、ユニークでクオリティの高いものとして、世界においても重要な役割を当初から担ってきた。その日本のメディアアートの黎明（れいめい）期からの興盛を支えたのが、同じく1980年代の経済成長期を背景にして生まれた民間企業のメセナ（文化貢献）活動である。この時期に様々な企業によるメディアアートへの文化支援プログラムが生まれたが、1990年代に入ってから景気低迷とともに終焉（しゅうえん）を迎えたものも多く、現在も継続しているものはわずかとなってしまった。そして、メディアアートの歴史が長いものではなく、美術史としてオーソライズされておらず、その活動の情報の少なさからも公立の現代美術館でのメディアアートのコレクション化はいまだにほとんど事例がない。さらに、企業が運営していたアートプロダクションは、企業が著作権を保持していることが多く、作品から資料まで、情報化が進まない中での廃棄や放置に晒（さら）されているケースが見られる。現在、文化庁ではメディア芸術のデータベース化を進めている。メディアアート分野のデータベースではアーカイブを進めてきている状況である。

1.2 事業概要

本調査研究事業では企業メセナ活動が始まった時期の1985年から20年間の2005年に発表されたメセナ事業によるメディアアート分野の調査を対象とし、特にメディアアート活動の主な活動の重責を担ってきたと考えられ、かつ、現在ウェブサイトにおいてファクトデータが公開されていない企業などによるメセナ活動のうち株式会社ワコール（株式会社ワコールアートセンター）、キヤノン株式会社、株式会社資生堂の3社の活動を中心に調査を行う。資料調査は浅く広くではなく、内容の濃い調査／資料収集を目指し、他のアートジャンルとは異なりメディアアートの場合、ハードからソフトにわたる多彩な資料や、アップデートの記録など、複雑な調査収集が必要なため、この事業のトライアル&エラーを基軸として、今後のアーカイブ調査の雛形（ひながた）となることを目指している。

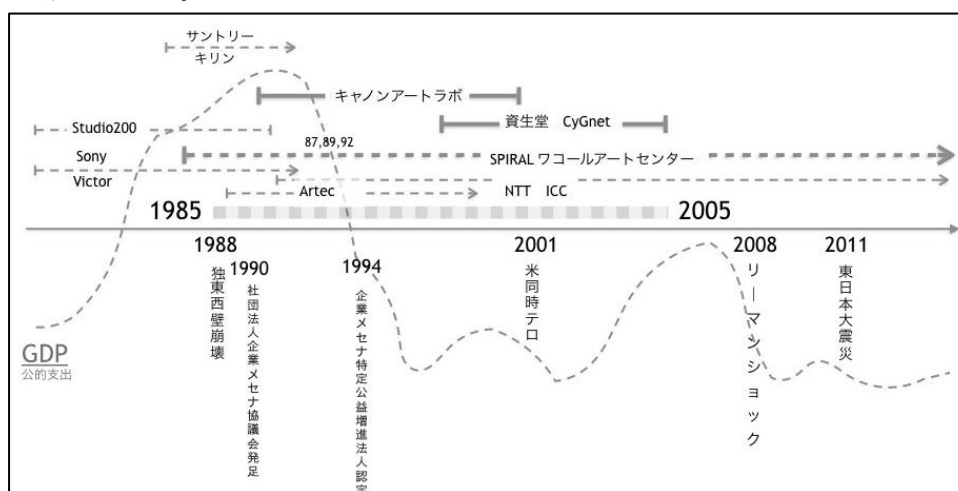


図 1-1 メセナ事業関連図

第2章 事業の目的・趣旨

本調査研究事業の目的は、メセナ活動による企画によって生み出された展覧会に関する調査とともに、企業の協力を得られる場合、残された作品記録、関連資料をプロジェクト単位でできるだけ収集し、後世のためにデジタルデータ化し保存していくことである。この調査を手始めに、日本のメディアアート史のアーカイブ構築の基礎の一つとなるものを目指した。

調査対象のメセナ企業は以下のとおりである。

A) キヤノン株式会社「キヤノン・アートラボ」

1991年から2001年まで、都内各地で新制作のメディアアートを発表した。キヤノンのエンジニアとアーティストのコラボレーションによるアートプロダクション制作と企画展示を主眼とした。国際的な先鋭アーティストを多数起用した。

取扱い作家として、コンプレッソ・プラスティコ、中原浩大、ミッション・インヴィジブル、ウルリーケ・ガブリエル、古橋悌二、三上晴子、ノウボティック・リサーチ、江渡浩一郎、関口敦仁、カールステン・ニコライ&マルコ・マルコ・ペリハンなどがある。

B) スパイラル／株式会社ワコールアートセンター

1987年、1989年、1992年に「ビデオ・テレビ・フェスティバル」の開催場所となるなど、先駆的なメディアアート発表の場として機能したスパイラル／株式会社ワコールアートセンターは、主催事業として、ダムタイプの連続的な作品発表、クリスティアン・メラーの個展などを企画した。取扱い作家として、ダムタイプ、クリスティアン・メラーなどがある。

C) 株式会社資生堂「CyGnet」

1998年8月から2003年まで株式会社資生堂がインターネット上で展開したサイバーギャラリー。ネット上でしか成立しない新しいアートを紹介する実験的なサイト。CyGnetのためにアーティストが新作を制作した。

取扱い作家として、EastEdge、朝岡あかね、エキソニモ、ミリッツァ・トミッチ、JODI、doubleNegativesなどがある。

また、関連事項として、当時の時代背景を探るため、同時期の企業メセナ活動によるメディアアート制作事例についても情報を集め、メセナ活動による企画も含めた、メディアアート史の土台を示す。

第3章 研究実施体制

研究実施体制として、対象とするメセナ活動によるメディアアート展示企画に深く関わったメンバーを中心として全体像を共有しながら、客観的評価を意識しながら調査を進めていこうとした。メンバーとして関口敦仁（総合ディレクション）、阿部一直（ディレクション）、四方幸子（ディレクション）、明貫紘子（メディアアート史研究、資料整理、デジタルデータ化）、水野響（事象整理）らを本調査研究事業の非常勤研究員として、資料／分析調査及びインタビュー調査事業などに分担して当たる。研究員による研究会議を月一回程度開催し、調査の取りまとめと分析を行った。

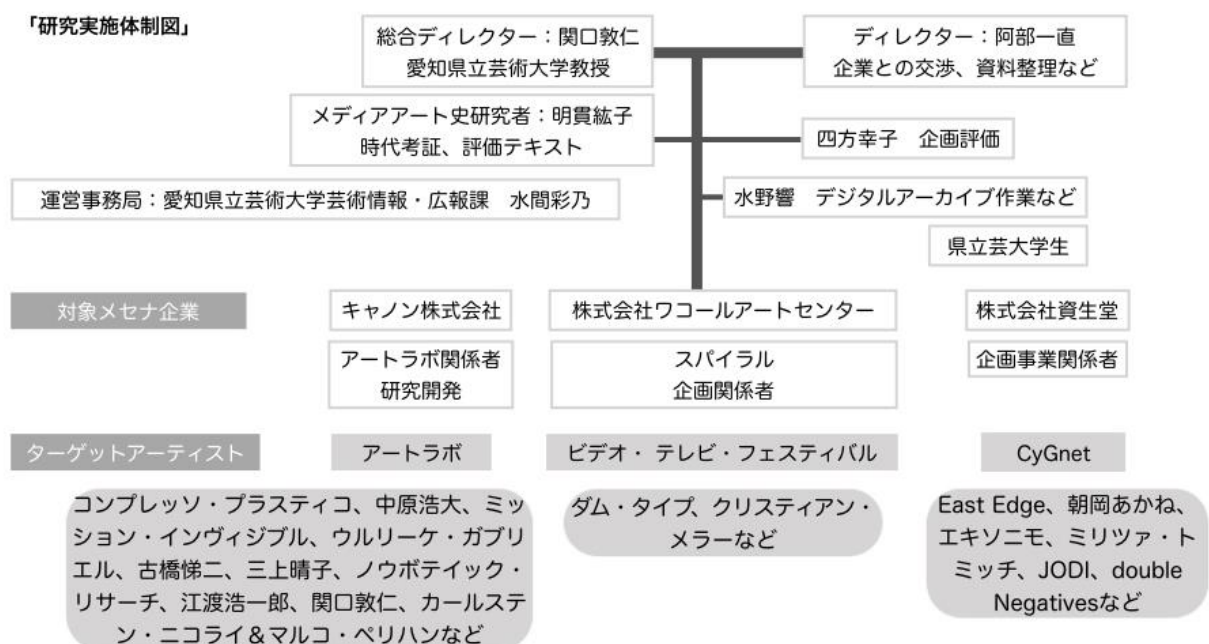


図 3-1 研究実施体制図

第4章 実施スケジュール

本調査研究事業では大きく五つの事業に分けて調査、作業を効率的に進めた。

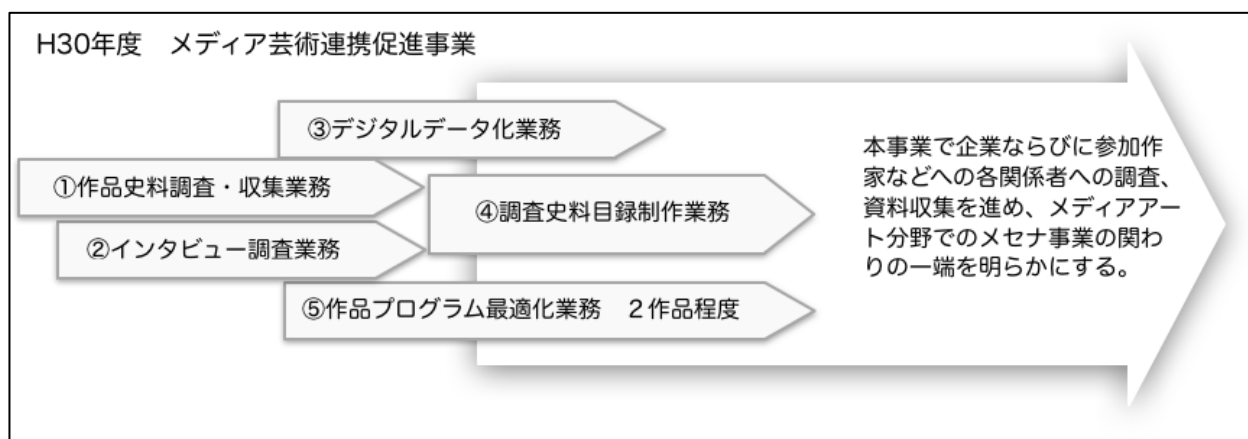


図 4-1 事業実施プロセス

(1) 作品史料調査・収集業務

対象となるメディアアート作品の、埋没している原史料や関連二次史料の発掘調査を行う。関係者へ問い合わせやヒアリングなどにより、資料の所在を確認する作業を行う。また、資料の保管先について、デジタル化の許可を取り、紙媒体などの資料を収集する。

(2) インタビュー調査事業

メディアアートの当時の活動状況をできるだけ明白にするため、作品に関わったキーパーソン〔アーティスト、キュレータ、企業企画者など〕へのインタビューを行い、音声記録し保存する。

インタビューイとして、キャノン・アートラボ企画に関わった関係者、スパイラル／株式会社ワコールアートセンター、資生堂文化事業部及び CyGnet 関係者、キャノン・アートラボ出品作家など。キャノン・アートラボ企画関係者は鼎談（ていだん）形式でインタビューを行いテキストによって提示する。

(3) デジタルデータ化業務

1985年～2005年に発表された企業が主催の展覧会におけるメディアアート作品、及び関係資料を調査し、公的に芸術価値のあるもの（企業の宣伝物は除く）に対して、データの有無を確認し、リスト化する。また、所有権を持つ企業の協力を得られた場合は、データを全てデジタル化し、本調査プロジェクトへのアーカイブ資料として提供を行ってもらう。

予想される調査対象物：＊映像（多様なストレージ）＊写真（ネガ&ポジフィルム、プリント、デジタルデータ）＊設計図、ドローイング、制作進行プロセス記録（プリント、デジタルデータ）

第4章 実施スケジュール

*展覧会フライヤーや取材記事、批評など、関連紙媒体資料（プリント、印刷物）・ウェブ公開用プログラムデータ*カタログなどの書籍印刷物。

業務項目	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①作品史料調査・収集業務	→								
②インタビュー調査業務				●	●	●●	●●		
③デジタルデータ化業務				→					
④調査史料目録制作業務				→					
⑤作品プログラム最適化業務						→			

図 4-2 事業実施スケジュール

(4) 調査史料目録制作業務

調査収集業務で集めた史料はデジタルデータ化するとともに、それぞれの企画において生み出された企画史料、システム史料、プレスリリース、カタログ、プログラム関連史料、展示物など、その内容や所在も含め目録を作成する。

(5) 作品プログラム最適化業務

対象となる展示企画で利用された作品の実行プログラムの所在を確認し、今後の復元も視野に入れた調査を行う。作家や関係者からプログラムを預かり、現在の PC 環境で実行可能かの調査及び稼働状況の確認を行い、プログラムの最適化を行う。

第5章 実施内容

5.1 作品史料調査・収集業務

メセナ企業の企画に関わった関係者から、史料の所在を確かめ史料を預かり、データスキャンニングを中心に、目録化のための内容確認や整理を行った。

キャノン・アートラボは本調査研究事業メンバーの四方幸子が企画メンバーの一人であり、当時の史料などを多く保管していたため、それらの整理を行った。四方は同様に資生堂 CyGnet についても企画メンバーでもあり、関係した企画の史料の一部を保存しており、それらについてデータスキャンニングを行った。

スパイラル／株式会社ワコールアートセンター（以下、スパイラル）は、ギャラリーやスタジオのレンタル運営も行っていて、重要な展示や公演も多く行われてきたが、スパイラルが主体となる企画については、プレスリリースを中心に史料保存されており、開館時から発行している冊子のスパイラルペーパーがあり、そのデジタル史料も保管されていた。そこには外部団体が企画しスパイラルで展示や公演についても記事が掲載されている。また、メイン企画についてはプレスリリースが保存されているためそれらをスパイラル事務局において、スキャンニングを行った。

キャノン・アートラボ資料は企画ごとにまとめられており、書類関係資料と写真資料としてそれぞれバインダーにまとめられていた。書類関係資料のバインダーは17冊、写真資料のバインダーは13冊に上った。



図 5-1 キャノン・アートラボ関連資料の一部

第5章 実施内容

また、キャノン・アートラボでは展覧会カタログ、広報資料についての収集も行った。



図 5-2 キャノン・アートラボフライヤーなど

5.2 インタビュー調査業務

インタビュー調査業務は本調査研究事業のメディアアート分野でのメセナ活動の調査に伴い、それらの活動に関わる情報の収集を目指した。

資生堂ではメセナ活動は文化事業部で企画運営を行っており、CyGnet の企画と運営を行った樋口昌樹氏に部を通してコンタクトを行った。また、当時所属していた、戸村朝子氏、広報部に所属し情報デザインを中心に担当した岩城陸奥氏、そして、現在資生堂ギャラリー学芸員の真家恵子氏にインタビューを行った。

スパイラルはワコールの文化活動拠点として 1985 年から設立された文化複合施設として、芸術文化振興のためのギャラリースペース、ホールを中心に自主企画による展示公演、スペースの貸出しなどを行っている。当センターを企画運営する事務局で 1988 年から各活動のキュレーションやディレクションを行ってきている岡田勉氏にインタビューを行った。

キャノンは 1980 年代前半からメセナ活動を行っており、その特徴は社内技術を活用した芸術文化振興を行った点が挙げられる。それらの活動のうち、研究者とのコラボレーションを率先して進める企画を運営していたのが、キャノン・アートラボであった。

そこでのグループの取りまとめを主に行っていた玉井俊一氏に単独のインタビューを行った。

また、キャノン・アートラボについては、多くの研究者とアーティストが共同制作に関わったこともあり、そのプロセスなどについても話を聞くために鼎談形式で再度他の研究者として天野真一氏、秋定浩和氏と共にインタビューを行うこととした。また、本調査研究事業メンバーの阿部一直と四方幸子は初期段階から展示のキュレーションを行っており、また関口敦仁は第 9 回企画展にアーティストとして参加しており、鼎談形式で全体像をつかむことが望ましいと判断した。

インタビューの具体的なスケジュールは以下の通りである。

10 月 15 日 岡田勉氏、加藤育子氏、五十嵐光弘氏 株式会社ワコールアートセンター

第5章 実施内容

15:00～17:00 スパイラル事務室

出席者 関口敦仁

12月1日 岩城陸奥氏 株式会社ミラコム、戸村朝子氏

14:00～16:00 株式会社ミラコム

出席者 関口敦仁、四方幸子、藤田千彩

12月3日 樋口昌樹氏 株式会社資生堂 ビューティークリエーションセンター

16:00～18:00 株式会社資生堂本社汐留ビル

出席者 関口敦仁、四方幸子、後藤流音、藤田千彩

12月26日 眞家恵子氏 株式会社資生堂文化事業部

15:00～17:00 資生堂ギャラリー

出席者 関口敦仁、明貫紘子、後藤流音

1月13日 江渡浩一郎氏 産業総合総研究所人間拡張研究センター

13:30～14:00 産業技術総合研究所人間拡張研究センター

出席者 関口敦仁、明貫紘子

1月23日 岡田勉氏 株式会社ワコールアートセンター

14:00～16:00 スパイラル事務室

出席者 阿部一直

1月30日 玉井俊一氏、秋定浩和氏、天野真一氏 キヤノン株式会社

15:00～17:00 キヤノン株式会社本社

出席者 関口敦仁、四方幸子、阿部一直、水野響、後藤流音

5.3 デジタルデータ化業務

作品史料調査・収集業務によって集められた、資料を整理し、順次デジタルデータ化業務を行った。書類関係のテキスト資料をスキャニングしデジタルデータ化やキヤノン・アートラボを中心とした展示フィルムについてはオリジナルイメージとデュープなどの貸出し配布用の複製フィルムを整理しデジタル化を進めた。それぞれ 4x5 1500DPI、125mm 2000DPI、35mm 3500DPI、でデジタルスキャニングしていった。映像データはオリジナルのテープ類やDVDなどは、変換してデジタル化を進めた。これらのデータや元資料をもとに目録化し作業を進めた。

5.4 調査史料目録制作業務

調査資料について、初めに今回調査対象とした企業への残存する企画資料の問い合わせを行った。資生堂文化事業部では企画した CyGnet が本社ビルの移転に伴う一時的閉鎖に伴うサイバーギャラリーとしての機能を持たせるようネットスペースでの開催としたため、物理的な作品はなく、既に書類は残っていないとのことであった。その後、元文化事業部の樋口昌樹氏から、掛川のセンターにプレスリリースの一部と掲載情報の一部の存在が確認されたと連絡を受けた。元資生堂広報部の岩城陸奥氏とのインタビューから、当初の技術的プロセスについては伺ったが、その資料などについては所有されていないとのことであった。また、資生堂 CyGnet の企画に関わった四方幸子が保管するプレスリリースや担当したアーティストとの打合せ資料などを確認し、スキャンニングを行った。

キヤノン・アートラボに関しては企画メンバーでもあった、四方幸子と阿部一直が保管していた資料について、紙資料のスキャンニングを行い、ポジフィルム、ネガフィルムなどの撮影フィルム資料はデジタルスキャンを専門業者をお願いした。

また、キヤノン・アートラボについては、第8回企画展アーティスト江渡浩一郎氏にインタビュー後に所有する資料を預かり、データ化を進めた。第1回企画展アーティスト中原浩大氏には同様に作品関連資料を預かり、目録化し、スキャンニング及びデジタル化作業を行った。

スパイラルについては、事務局から本体企画と外部企画に関する年表を預かり、本体企画については保管するプレスリリースのスキャンニング、また、開館時から発行している *Spiral Paper* のデータを預かった。「ビデオ・テレビ・フェスティバル」はビデオギャラリーSCANの企画として、スペースを使った展示イベントであったため、スパイラルでは関連資料の保管は行っていなかった。そこで、主に本体企画でのメディアアート関連展示の情報を集めた。この点は以後の課題となった。

5.5 作品プログラム最適化業務

本調査研究事業は対象とする各資料の存在を明らかにし、目録化することを目的の一つとしている。そしてその先に、各企画で制作展示された作品の復元やアーカイブにつながる情報についてもそれらの一部を試験的に調査した。そこで本調査研究事業では1998年キヤノン・アートラボ第8回企画展「SoundCreature」作品プログラムと1999年キヤノン・アートラボ第9回

「Connected Re-Body」作品プログラムについて稼働調査を行った。展示で使用したデバイスがない状況ではあるが、現存するプログラムだけでどの程度の復元や最適化ができるのかを実験的な作業として行った。これらのプログラムの実行調査については、メディアアーティストであり情報デザイナーである河村陽介が主に行った。テストケースとしてプログラムコードのみの確認からどの程度プログラムの確認ができるのか、細かい指定をせずに実行テストを行ってもらった。

第5章 実施内容

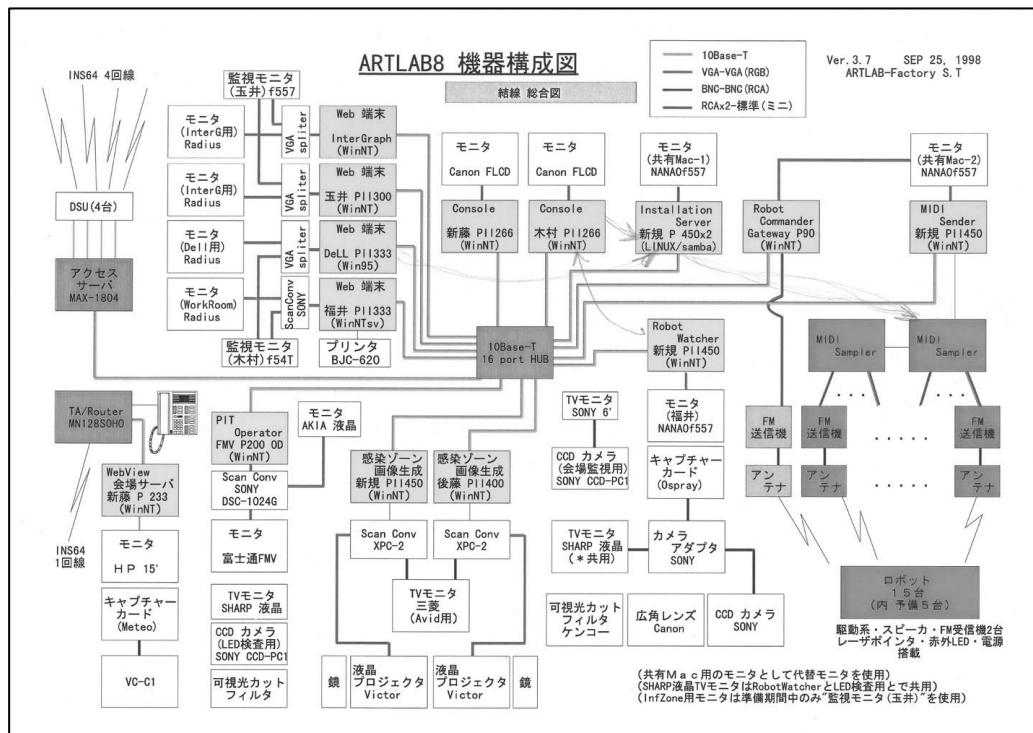


図 5-3 アートラボ第 8 回企画展 機器構成図

・アートラボ第 8 回企画展は、ヒルサイドプラザ内の稼働スペースに配置された 15 台のロボットの動きを、通信によって自動で相関コントロールし、それらロボットの動きによる音楽を作り出すシステムとなっている

図 5-3 はアートラボ第 8 回企画展の展示時のシステム図である。ロボットをコントロールするネットワークシステムや入力端末システム、表示システムなどがある。

これらのうち、ロボットにコマンドを送るシステム、ロボットの動きを関係付けるプログラム、サウンド構築エディターなどについてプログラムの検証を行った。

また、アートラボ第 8 回企画展はその後の展開として、アルスエレクトロニカでの展示バージョン、香港での展示バージョン、ON the WEB バージョンが存在し、展示環境によって異なる機器環境が想定される。

・アートラボ第 9 回企画展はヒルサイドプラザに身体キャプチャ部、経路ビューワ部、身体パーツ編集部、環境エフェスター部、アーカイブビューワ部、サブビューワ部など 10 エリアがネットワークで連携して設置されている。

第5章 実施内容

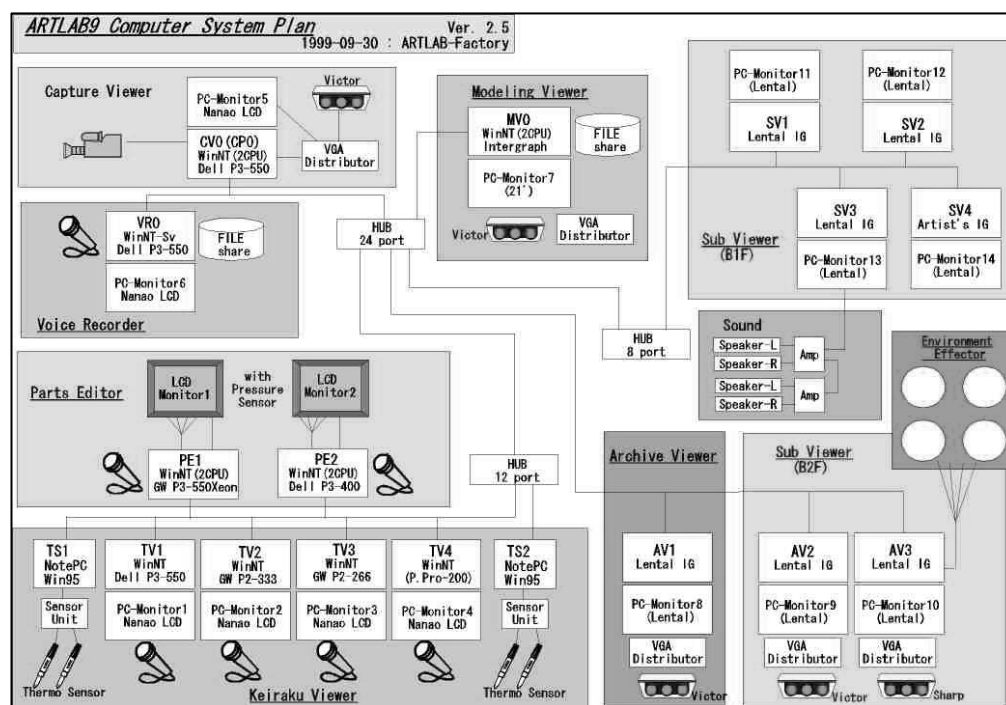


図 5-4 アートラボ第 9 回企画展 機器構成図

図 5-4 はアートラボ第 9 回企画展のシステム図である。図にあるようにセンシングや表示環境によって 10 グループのシステムが生まれ、集められたデータベースから接続して様々な表示がなされる環境となっている。

各パーツは現存しないため、これらのうち、汎用 PC で稼働可能なソフトウェアとして keirakuViewer-KV と ModeringViewer-MV について稼働状況の検証を行った。

第6章 成果

6.1 作品史料調査内容 各史料のカテゴリライズ

6.1.1 企業資料と個人資料

本調査研究事業の調査対象となる史料に共通する特徴は、特定の場所にまとまった資料体ではないという点である。つまり、メセナ事業を実施した企業が保管する資料体（企業資料）のみならず、当時の展覧会の関係者や出品作家らが個人的に保管している資料体（個人資料）も含まれるため、分散した資料をイベントごとに編さんする必要がある。

本調査研究事業で調査対象になる資料の主な所有者は下記の通りである。

- (1) 企業資料：メセナ事業を実施した企業
- (2) 個人資料：キュレータ／アーティスト／作品制作関係者（エンジニア、プログラマー、デザイナーなど）

企業資料のうち、宣伝露出に関する資料（プレスリリース、掲載媒体雑誌・新聞等の切り抜き、機関誌など）、事務書類（見積書、請求書、契約書など）は、キュレータやアーティストの資料には含まれていないものがある。また、キヤノン・アートラボの場合、キヤノン社のエンジニア（アートラボ・ファクトリー所属）らが作品制作に協力していたことと、多くの機材提供があったため、アーティストがシステムに関する資料やプログラミングデータを保管していないケースがある。このような資料はキヤノン社の企業資料としては残されていないため、当時の作品制作関係者の個人資料を調査する必要がある。今年度は、企業資料、キュレータ、アーティストらの個人資料の一部の調査を実施したが、抜けや不足が散見されるため、今後も継続して調査することが望ましい。

このように、出所の異なる資料体をイベントベースで編さんすることはややイレギュラーなことである。当然ながら各所有者の資料間には重複した資料も含まれるが、それぞれの立場から残された資料体の特徴を調査することは、展覧会を多面的な視点から総合的に振り返り、分析できる貴重な機会になると考えられる。また、メセナ事業として実施された展覧会に関する企業資料の多くは破棄されているため、展覧会の全容を把握するレベルの資料編成のためには個人資料をより発掘していくことが重要である。

6.1.2 資料目録のメタデータ・スキーマについて

本調査研究事業で制作した目録は、調査対象となるイベントをベースにして、資料アイテムの情報を記述した目録である。したがって、目録はイベント情報とアイテム情報の二つから構成されている。更に、本調査研究事業では収集した資料体のデジタル化を進めているので、物理的な実体を伴うアナログ資料とデジタル化された資料の両方が存在する（例：紙資料からデジタル化されたPDF、ポジフィルムから生成されたデジタル画像など）。その両者を併置して記述することを試みた。一方で、入手時点で既にデジタル化されている資料（例：キヤノン・アートラボの記録映像、

第6章 成果

スパイラルの機関紙「Spiral Paper」など）やボーンデジタルな資料（例：キヤノン・アートラボのウェブサイト HTML データ、作品のプログラムデータなど）に関する記述方法は検討中である。

目録作成に当たり、下記の通りメタデータの属性を定義した。資料体が文書一般から出版物、印刷物、写真、映像、プログラムデータまで多様な形式である上にアナログとデジタルの両者から構成されているため、一つのメタデータ・スキーマにまとめることは困難であるが、できるだけ共通の目録フォーマットで入力できることを優先させ、最低限の属性で構成した。もちろん、今回提出した目録が完成形ではなく、今後、入力を続けながら改善していきたいと考えている。

本報告書に添付されている目録は、紙面の関係上、下記の属性から一部を抜粋して掲載した。

（1）目録上で参照されるイベント

1. イベント整理番号
2. イベントの名称 1：展覧会やフェスティバルなどイベントのシリーズ名やメインタイトル
3. イベントの名称 2：展覧会やフェスティバルなどイベントのタイトル又はサブタイトル
4. イベントの会期（始）
5. イベントの会期（終）
6. イベントの開催場所

（2）資料

【共通項目 1】

1. アイテム番号
2. アイテムカテゴリーの定義：
現状は、資料提供者がまとめた状態（バインダーや段ボール箱など）で分類。今後、各アイテムのカテゴリーを定義して、資料を再編成する必要がある。
3. 著者＝オリジナル・アイテムの作成主体：
アイテムの制作者。出版物の場合、出版社や編集者をどのように記入するか課題。
4. アイテムの類型：＊後述する「調査対象別の資料の特徴」を参照のこと。
5. アイテムの定義：
アイテムの内容をより具体的に記述。
6. アイテム固有の日付

【物理的な実体を伴うアナログ資料】

7. オリジナル・アイテムの判型・寸法・尺：
現状、文書一般、書簡、図面などは判型、寸法。映像は秒数。出版物はページ数を記入。
8. オリジナル・アイテムの物理的＝形式的記述：
＊後述する「調査対象別の資料の特徴」を参照のこと。
9. オリジナル・アイテムの数量：

第6章 成果

アイテム部数の記入。複数部ある場合は数字のみで、複数枚から構成される資料は (combined) や (bound) で記入。

10. オリジナル・アイテムの出所：

資料の来歴を記入。

11. 備考

【デジタル化された資料】

12. デジタル・ファイル名

13. デジタル・ファイルの寸法・尺 (mm・秒)：

デジタル画像や映像は解像度やピクセル数の記述を想定されるが、PDF 資料が過半数のため、現状、静止画はファイルの寸法、動画は尺を記入。

14. デジタル・ファイルのサイズ (MB)

15. デジタル・ファイルの拡張子

16. デジタル・ファイルの形式的記述

17. デジタル・ファイルの制作年

18. デジタル・ファイルの制作者

【共通項目 2】

19. 記入者名

20. レコード登録年月日

21. レコード更新年月日

22. 作業用番号

6.1.3 資料の分類

本年度、収集された資料は大きく下記の通り分類できる(目録の「アイテムの類型」より抜粋)。この分類は資料の目的ではなく形態に基づいた分類である。また、目録の「アイテムの定義」及び「オリジナル・アイテムの物理的＝形式的記述」では、更に詳しい資料の形態を記述した。

なお、各資料の目的別分類については未着手である。想定される目的別の分類は「図 6-1 メディアアートの資料 (2010 年)」を参照されたい。今後、入力を進めながら目的別分類に関する情報の記述方法について検討し、本調査研究事業での資料の特徴に適したアイテムの類型、アイテムの定義、アイテムの物理的＝形式的記述を整理していきたいと考えている。

表 6-1 主なアイテムの類型

アイテムの類型	アイテムの例
文書一般	企画書、プレスリリース、各種事務書類
書簡	FAX、Eメールのプリントアウト
クリッピング	雑誌や新聞などの記事切り抜き

第6章 成果

資料複写	企画書の添付などの目的のために書籍や資料を複写したもの
出版物	カタログ、コンセプトブック、定期刊行物など（非売品も含む）
印刷物	チラシ、DM、レセプション招待状など催事印刷物
出力物	スクリーンショット、イベント会場配布用資料、プレゼン資料などプリントアウトされた資料
図面	フロアプラン、什器設計図など
イラストレーション	システム構成図、図解、手書きスケッチなど
メモ	スケジュールやアイデアなどの手書きメモ（文字が中心）
リスト	招待状送付先、連絡網、機材リストなど
写真	記録写真（紙焼き、フィルム、デジタル写真）
映像	記録映像、テレビ番組録画（デジタルムービー）
プログラムデータ	作品用プログラムデータ、ウェブサイト用 HTML データなど

表 6-2 主なオリジナル・アイテムの物理的＝形式的記述

アイテムの類型別形式的記述	説明
文書一般／書簡／メモ／リスト	
typescript	タイプスク립トで記入した文書
typescript (photocopy)	タイプスク립トで記入した文書（複写）
typescript (printout)	タイプスク립トで記入した文書（プリントアウト）
typescript-in-form	様式にタイプスク립トで記入した文書
typescript-in-form (photocopy)	様式にタイプスク립トで記入した文書（複写）
typescript-in-form (printout)	様式にタイプスク립トで記入した文書（プリントアウト）
manuscript	手書き文書
manuscript (photocopy)	手書き文書（複写）
manuscript-in-form	様式に手書きで記入した文書
manuscript-in-form (photocopy)	様式に手書きで記入した文書（複写）
manu/typescript	手書き／タイプスク립トの両方で記入した文書
manu/typescript (photocopy)	手書き／タイプスク립トの両方で記入した文書（複写）
manu/typescript-in-form	様式に手書き／タイプスク립トの両方で記入した文書
manu/typescript-in-form (photocopy)	様式に手書き／タイプスク립トの両方で記入した文書（複写）
form	様式
form (photocopy)	様式（複写）
form (printout)	様式（プリントアウト）
envelope	封筒
クリッピング	
magazine (clipping)	雑誌切り抜き

第6章 成果

newspaper (clipping)	新聞切り抜き
web site (clipping)	ウェブサイト切り抜き (プリントアウト)

図面

floor plan	フロアプラン
floor plan (photocopy)	フロアプラン (複写)
floor plan (printout)	フロアプラン (プリントアウト)
equipment drawing	什器設計図
equipment drawing (photocopy)	什器設計図 (複写)
equipment drawing (printout)	什器設計図 (プリントアウト)

イラストレーション

system diagram	システム・ダイアグラム
system diagram (photocopy)	システム・ダイアグラム (複写)
system diagram (printout)	システム・ダイアグラム (プリントアウト)
hand drawing	手書きドローイング
hand drawing (photocopy)	手書きドローイング (複写)
drawing	ドローイング
drawing (photocopy)	ドローイング (複写)
drawing (printout)	ドローイング (プリントアウト)
drawing/hand drawing	ドローイング／手書きドローイングの両方

印刷物

sheet	チラシなど一枚の紙
card	ハガキや招待状などカード状のもの
brochure	ブローシャー

出版物

exhibition catalogue	展覧会カタログ
product catalogue	製品カタログ
concept book	コンセプトブック
periodical	定期刊行物
report	報告書
web site (printout)	ウェブサイト (プリントアウト)

出力物

screenshot (printout)	ディスプレイなどのスクリーンショット
-----------------------	--------------------

写真

print	紙焼き (写真)
digital photo	デジタル写真

映像

第6章 成果

digital movie

デジタル映像

プログラムデータ

web site (html)

ウェブサイト用プログラム言語

その他

digital document

デジタル文書 (PDF など)

digital image

デジタル画像

unknown

不明

分類については、「平成 24 年度文化庁メディア芸術デジタルアーカイブ事業メディアアート分野」報告書を参照した。今後、入力を進めながら改善が必要。

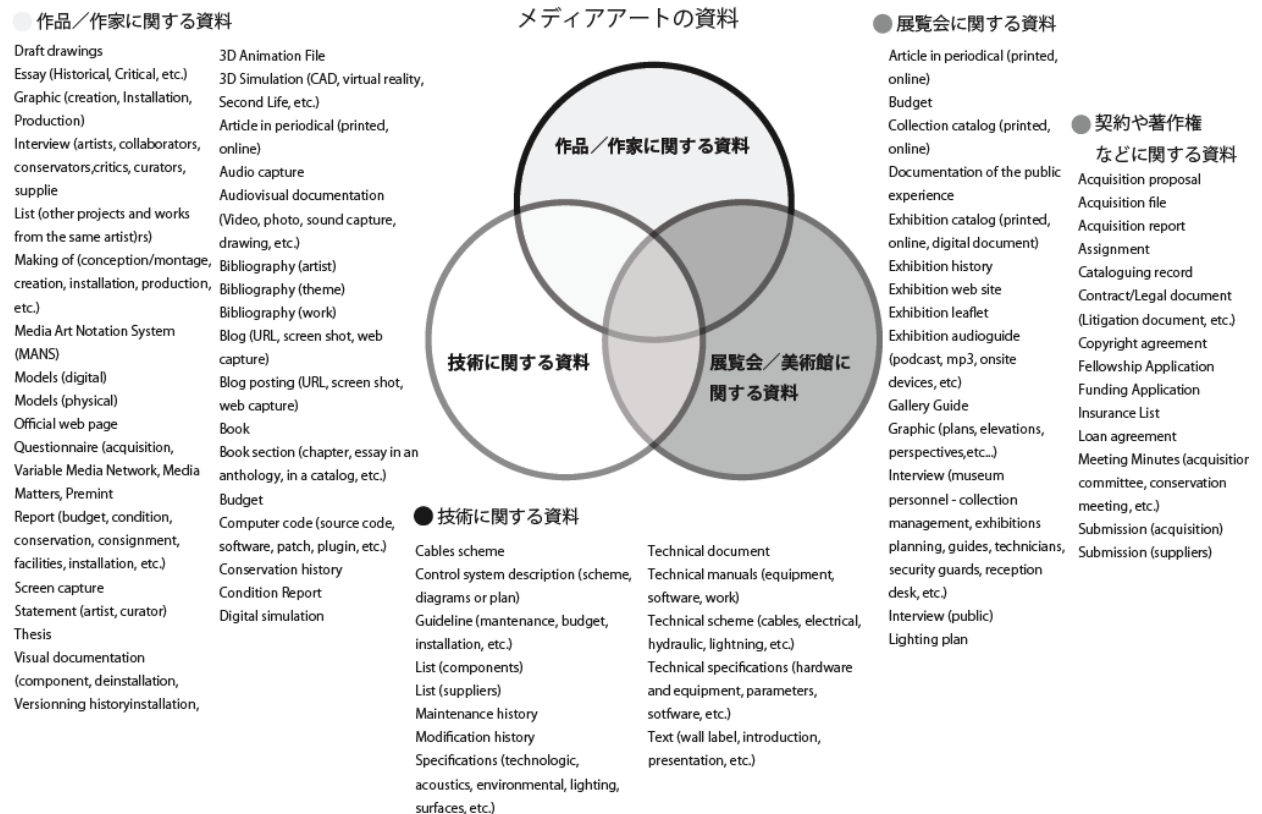


図 6-1 メディアアートの資料 (2010 年)

出展：平成 22 年度メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業「メディアアートの記録と保存」調査研究報告書 資料 2-2-3-② *DOCAM が提示した「Typology of documents」を参照して、筆者が作成した。

6.1.4 調査対象別の資料の特徴

(1) 資生堂 CyGnet

【資料の特徴】

1. 企業資料

資生堂 CyGnet は、資生堂ギャラリー本体の建て替え時期に実施された実験的なプロジェクトであったため、プレスリリース、雑誌切り抜き、企画資料などが資生堂企業資料館（静岡県掛川市）に保管されているが、まとまった資料は残されていない。

2. 個人資料

今年度は、四方幸子（キュレータ）の資料を入手した。企画書、プレスリリースが中心で、実現しなかった企画書も含まれる。ミリツァ・トミッチ（アーティスト）からはネットアート作品のデータを手に入れた。EastEdge の作品《タイレル・ハンガリー》（1998 年）の記録映像がウェブ上で公開されているが、このような資料をどのように扱うかが課題である。今後はアーティストや資生堂を退社した当時の関係者の個人資料の調査が必要になる。

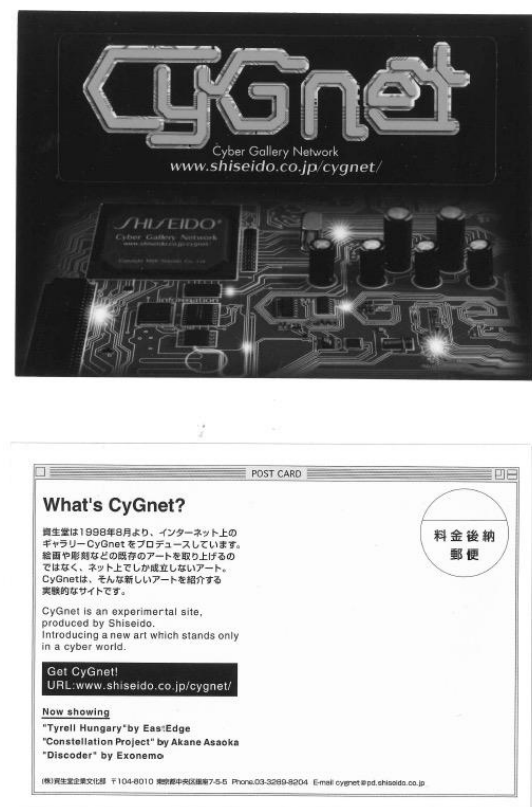
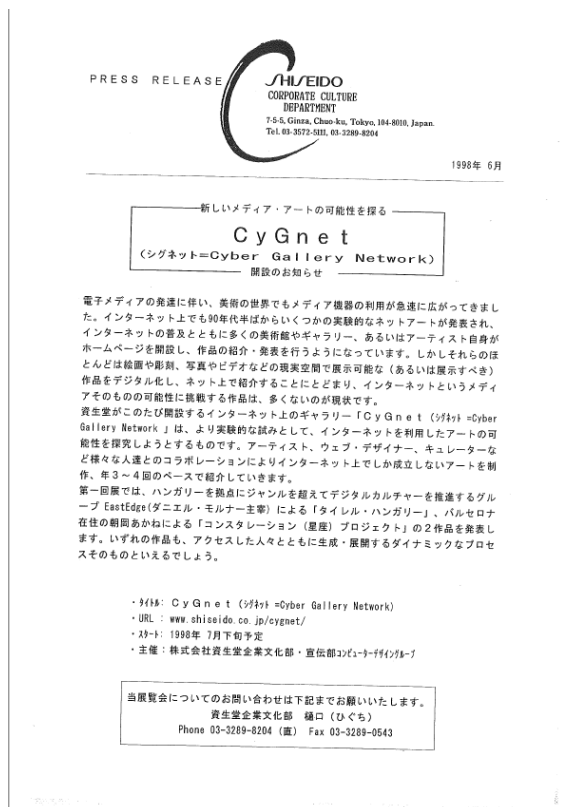


図 6-2 (左) CyGnet 開設プレスリリース (1996 年 6 月)

図 6-3 (右) CyGnet ポストカード

第6章 成果

表 6-3 資料の内訳

アイテムの種類	件数
印刷物	4
クリッピング	3
出力物	1
書簡	11
文書一般	34

(2) キヤノン・アートラボ

【資料の特徴】

1. 企業資料

キヤノン社が正式に保管している資料については未詳。しかし、本調査事業への正式な協力を得ることができたため、今後、社内での調査が進むことが見込める。同様に、現在キヤノン社員でキヤノン・アートラボ関係者（事務局スタッフ、エンジニア）が個人的に所有する資料の提供が見込める。

2. 個人資料

今年度は、四方幸子（キュレータ）、江渡浩一郎（アーティスト）、関口敦仁（アーティスト）、中原浩大（アーティスト）から資料を入手した。今後、継続して海外も含めたアーティスト、プログラマーやエンジニアらから資料を提供してもらう必要がある。今年度は四方幸子から提供された資料が中心であったが、その資料にはキヤノン社事務局スタッフが作成したと考えられる事務資料やシステム構成図など技術に関する資料も多く含まれる。キヤノン社員が作成した文書はドラフトやバージョン違いなど細かく日付が付与されて保管されていた。さらに、「キヤノン・ビデオ・ニュース」やアルスエレクトロニカ・フェスティバルのエントリーのために制作した記録映像がよくまとめられており、資料価値が高い。特にデスクトップを撮影した映像（ウェブサイト、Java アプレット画面など）からは記録写真からは分からないディテールが理解できる。また、キヤノン・アートラボで制作された作品の多くは国内外で巡回展示しているため、プレミア発表後の展示歴をまとめ、関連資料を収集することが望ましい。さらに、アートラボ・ファクトリーに所属していたキヤノン社のエンジニアらのうち、作品制作のプロセスで開発した技術や手法について論文発表を行っていたので、それらの資料も含めたエンジニアらの個人資料の収集は重要だと考えられる。

第6章 成果

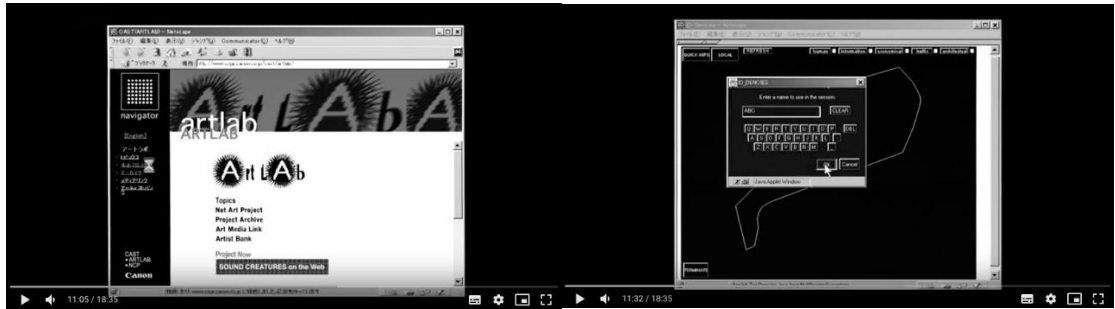


図 6-4 アートラボ第7回企画展 ノウボティック・リサーチ《IO_DENCIES [テンデンシーズ]—情報からの都市への問い》のウェブサイトの記録映像



図 6-5 (左) アートラボ・ファクトリー所属のエンジニア（玉井俊一）らによる論文「メディアアートにおけるアーティストとエンジニアのコラボレーション キヤノン・アートラボの事例から」（1999 年）

図 6-6 (右) プレスリリース「アートラボ特別展「LOVERS」古橋悌二／「frost frames」高谷史郎」（1998 年 3 月）

第6章 成果

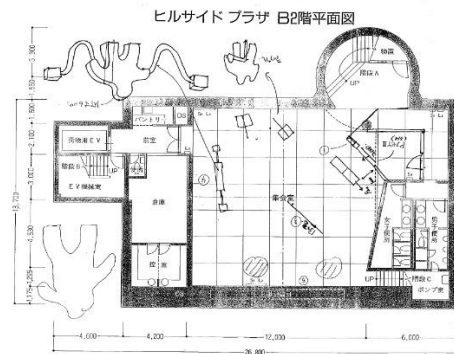
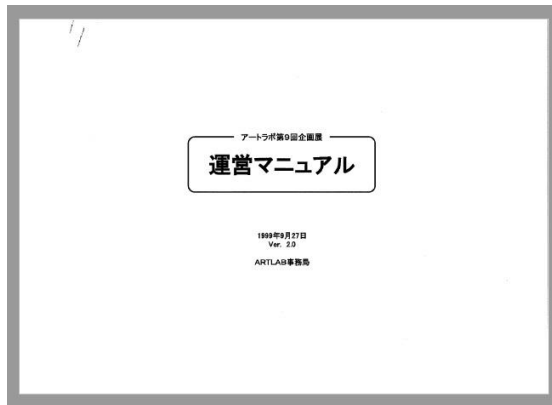


図 6-7 (左) アートラボ第9回企画展 関口敦仁《分離する身体》運営マニュアル Ver.2.0 (1999年9月27日)

図 6-8 (右) アートラボ第9回企画展 関口敦仁《分離する身体》展覧会平面図 (1999年)

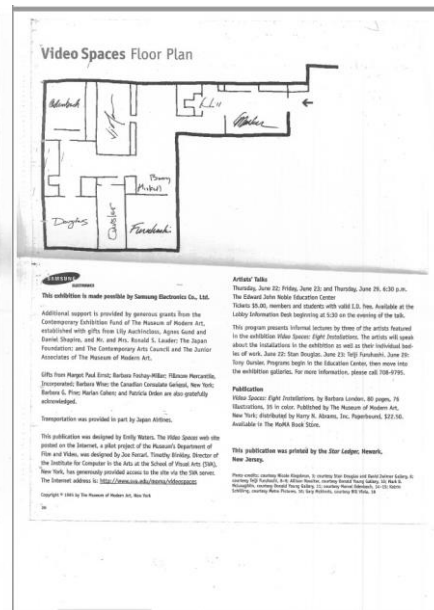
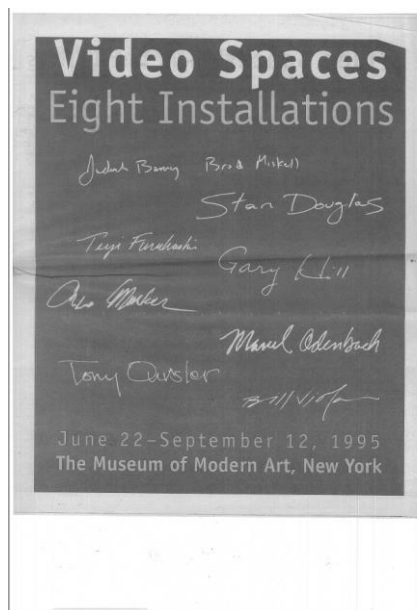


図 6-9 (左) 展覧会ブローチャー「Video Spaces: Eight Installations」
MoMA で《LOVERS》が展示された際の資料 (メセナ協議会情報ライブラリー資料)

図 6-10 (右) 展覧会フロアプラン「Video Spaces: Eight Installations」
MoMA で《LOVERS》が展示された際の資料 (メセナ協議会情報ライブラリー資料)

表 6-4 資料の内訳

アイテムの種類	件数
映像	41
出版物	14

第6章 成果

印刷物	28
出力物	7
文書一般	239（未登録 25 資料体）
クリッピング	31（未登録 5 資料体）
写真	*「付録1 イメージデータ目録」を参照
書簡	100(未登録 6 資料体)
資料複写	11
図面	23（未登録 4 資料体）
イラストレーション	37
プログラムデータ	2
メモ	10
リスト	7

(3) スパイラル／株式会社ワコールアートセンター

【資料の特徴】

1. 企業資料

2015年にスパイラル／株式会社ワコールアートセンター（以下、スパイラル）開館30周年を記念し、開館当時から刊行されていた機関紙（フリーペーパー「Spiral Paper」）をまとめた特別版「Spiral Paper 139」を発行するに当たり、全「Spiral Paper」がPDF化された。今年度の調査では、スパイラルからそのPDFデータを手に入れた。また、主催イベントについてはプレスリリースが保管（*2000年以降は紙のプレスリリースはない）されており、調査対象となるイベントのプレスリリースのスキャンデータ（PDF）を作成した。その他、イベントをまとめた年表も入手した。また、スパイラルは貸スペース事業を実施しているため、スパイラルで開催されたイベントでもプレスリリースがない場合がある。スパイラルではキャノン・アートラボ主催によるイベントが多く実施されたため、本調査で入手したキャノン・アートラボの企業資料が参照できる。

2. 個人資料

今年度は、イベント「ビデオ・テレビ・フェスティバル」のカタログを手にし、PDF化を実施した。今後、調査対象になる各イベントのキュレーターやアーティストの資料に当たる必要がある。

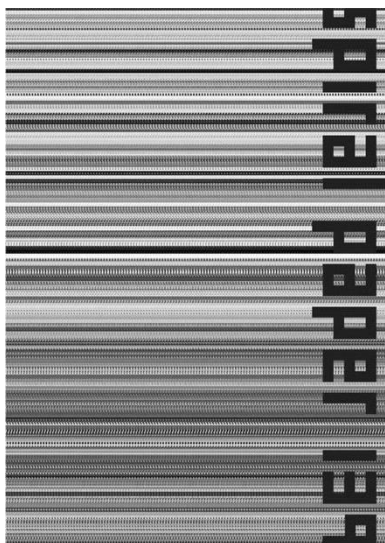


図 6-11 (左) Spiral Paper NO.139 (2015 年) 30 周年記念特別号 (165x117x60mm)



図 6-12 (中) Spiral Paper NO.62 (1997 年夏) 「クリスティアン・メラー」展 (1997 年 5 月 8 日～28 日) の特集。



図 6-13 (右) Spiral Paper NO.59 (1995 年 1 月から 3 月) ダムタイプ「S/N」CD リリースの案内や、「人間の条件—私たちは、どこへ向かうのか。」展 (1994 年 2 月 1 日～20 日) のテクノロジーの作品レビューなど。

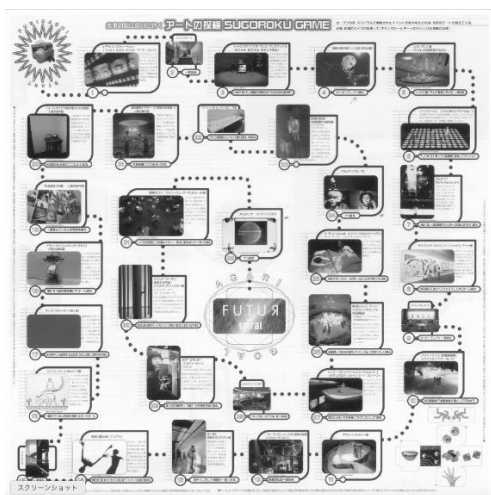


図 6-14 (左) Spiral Paper NO.67 (1998 年秋)、図 6-15 (右) Spiral Paper NO.62 (1997 年夏)



図 6-14 ではスパイラルで展示された主な作品が俯瞰できる。リードテキストに「オープン以来、スパイラルで開催されたイベントの数々をたどれば、未来のアートが見えてくる。さあ、付属のサイコロを使って、テクノロジーとアートのジャングル探検に出発!」とある。

第6章 成果

図 6-15 のスパイラルペーパーにはスパイラル以外の展覧会情報や作品レビューなども掲載されている。

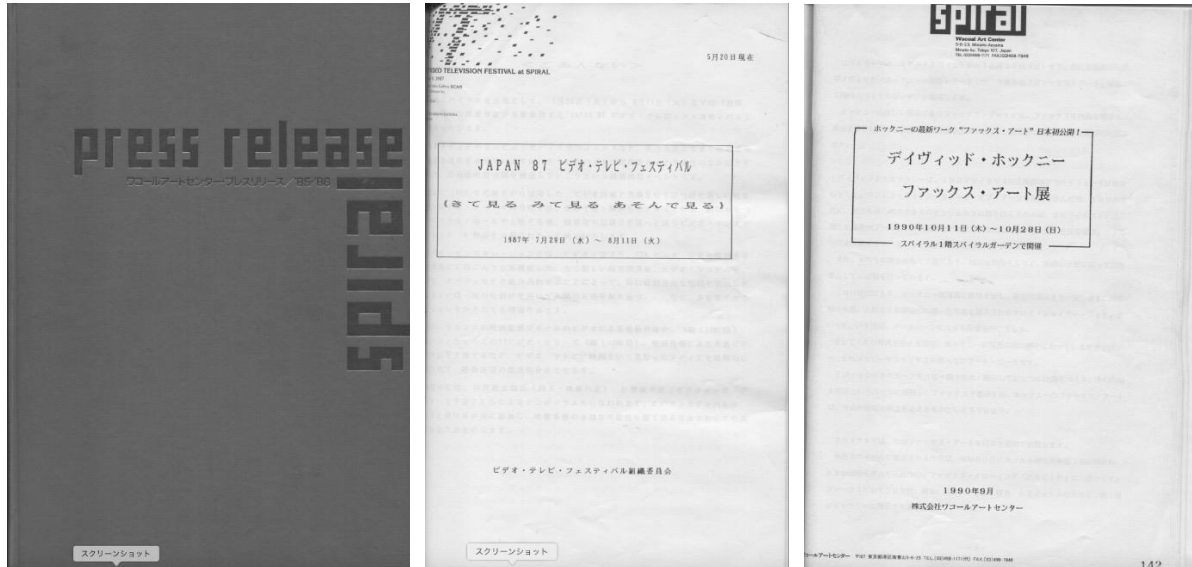


図 6-16 (左) スパイラル プレスリリース合本表紙

図 6-17 (中) プレスリリース「JAPAN 87 ビデオ・テレビ・フェスティバル」(1987 年 7 月 29 日～8 月 11 日)

図 6-18 (右) プレスリリース「デイヴィッド・ホックニー ファックス・アート展」(1990 年 10 月 11 日～28 日)

表 6-5 資料の内訳

アイテムの種類	件数
映像	2
出版物	3
印刷物	33
文書一般	58

6.2 各インタビューからのまとめ

6.2.1 スパイラル／株式会社ワコールアートセンターについて 岡田勉氏

インタビュー日程：2018 年 10 月 15 日 15:00～17:00

インタビュー場所：スパイラル事務室（東京都港区南青山 5-6-23）

インタビュイー：岡田勉氏（スパイラル シニアキュレーター）、加藤育子氏（スパイラル）五十嵐光弘氏（スパイラル）

インタビュアー：関口敦仁

第6章 成果

スパイラルは、1985年に設立され、槇文彦の建築によって、特徴的な展示スペースと舞台スペースを持つ、多彩な文化発信施設である。岡田勉氏は1988年スパイラルに入社、キュレーターとして活動してきた。現在までの催事企画を通して、メディアアートのみならず文化としての活動状況について、氏の立場から俯瞰した状況を伺った。スパイラルでは、自らが主催の自主企画と外部企画による展示／公演を運営しており、岡田勉氏は両方の企画、運営に関わりながら、展示環境の質を保ちながら継続的に芸術発信を支えている。今回は始めに「ビデオ・テレビ・フェスティバル」の関連資料の所在確認をお願いしたが、本企画がビデオギャラリーSCANによる外部企画でもあり、資料について所有していないことを確認した。この点は今後当時の関係者や出品アーティストに当たっていく必要があるであろう。また、スパイラル主催企画については、その自主企画のアクティビティをまとめた年表をいただいて本調査研究事業の比較年表の参考とさせていただいた。

開館以来発行を続けている、スパイラルペーパーは時期ごとでその形態や発行スケジュール、ボリュームなどが変化しているが、質の高い広報資料としても、また、時期ごとの催事情報やアーティストのコメントなども含み、各イベントとの関連性を検証する上でも重要な資料である。近年これらをA5にスケーリングしてまとめたスパイラルブックを発行している。この編集用アーカイブデータを保管しており、参考データとしてお預かりした。

主催事業及び外部事業において、キャノン・アートラボ、資生堂 CyGnet のアーティストが参加した展示も多く企画しておりそれらの関係性や企画背景、及び関連資料については改めてお願いすることとした。

6.2.2 CyGnet について 岩城陸奥氏、戸村朝子氏

インタビュー日程：2018年12月1日 14:00～16:00

インタビュー場所：株式会社ミラコム（東京都港区新橋2-10-3）

インタビュイー：岩城陸奥氏（株式会社ミラコム、元株式会社資生堂）、戸村朝子氏（元株式会社資生堂）

インタビューアー：四方幸子、関口敦仁、明貫紘子



図 6-19 岩城陸奥氏（写真左）、戸村朝子氏（写真右）

資生堂は、宣伝部にデザイナー、エンジニア、プログラマーなどが同居するコンピュータデザイングループを持っており、CyGnetはこのユニークな部署と企業文化部と共同で立ち上げられた。デザイナーで同グループを率いていた岩城氏は、資生堂でCADに加えCG映像制作やマルチメディアシステムの開発を推進、資生堂が1995年10月に他の企業に先駆け立ち上げたウェブサイトの構築・運営も担当した。戸村氏は同部署でウェブデザイン全般を担当していた。

岩城氏は自社サイトで「資生堂らしいものがないか」と考え、「アクティブ・レクタングル」などウェブ上で稼働するコンテンツを開発していた。このような流れを背景に、企業文化部と組み、宣伝部が技術を提供するCyGnetが生まれたという。

1998年8月に第一弾としてハンガリーのプログラマー集団EastEdgeの《Tyrell.Hungary》、朝岡あかねの《Constellation Project》を発表、その後年に1、2作品のペースで作品が更新された。宣伝部は、CyGnetのロゴやトップページを含む、資生堂サーバ上のコンテンツとシステムを構築、作品は、自社サーバに置かれるものと、作家側のサーバにありCyGnetからリンクされるものがあつた。宣伝部が制作に関わる作品も一部あつたが、ほとんどの作品は作家自身が制作しそこにリンクされていた。

インターネットへのアクセス人口も少なく、常時接続も普及していなかった時代において資生堂CyGnetは、作品的、技術的に先んじていた。「作品についての社内の反応は様々で、例えば《Tyrell.Hungary》は理解されやすかったが、エキソニモの《DISCODER》（1999年）はそうではなかった」（岩城氏）という。

現在作品データも資料もほぼ残されていないことについて、岩城氏は、「当時はまだ残そうとするような時代ではなかった」と述べている。ネット上の作品は、アーカイブ自体がそもそも困難である。また当時、全世界的にネット上のデータや作品の保存についての眼差しが未成熟であつた。

岩城氏は、「資生堂 CyGnet は決して順調ではなかった」とも述べている。資生堂 CyGnet 公開期には、企業内の再編成があった。そのような経緯もあり、宣伝部にも企業文化部にも資料が残されていない。

6.2.3 CyGnet について 樋口昌樹氏

インタビュー日程：2018 年 12 月 3 日 16：00～17:40

インタビュー場所：株式会社資生堂 汐留オフィス（東京都港区東新橋 1 丁目 6-2）

インタビュイー：樋口昌樹氏（株式会社資生堂 ビューティークリエーションセンター）

インタビュアー：四方幸子、関口敦仁

まず CyGnet の資料が紙、データとも企業文化部に残っていないことを告げられた。当時はフロッピーディスクを使用していたが、それらを含む資料は廃棄されたという。静岡県掛川市の資生堂企業資料館に一部資料がある可能性を示唆され、プレスリリースやプレス掲載資料の一部について、保存の確認をいただいた。「CyGnet のきっかけは、企業文化部から宣伝部に打診しました。岩城さんもいろいろと考えられていて、渡りに船、という感じだったのではないのでしょうか。ならばこういうことができる、ああいうこともできると、いろいろとアイデアを出していただいた記憶があります」。1997 年 5 月にビルの建て替えで資生堂ギャラリーが閉鎖中で、竣工予定が 2 年ほどずれ込んだ時期である。宣伝部との共同プログラムであり、「技術的バックボーンがない作家は、宣伝部の技術者と組んで」作品が制作できる体制を備えていた。

CyGnet は、社内では「「やれば」という反応だったが、注目されてはいませんでした」。「公開当時は、インターネットを見られる環境も少なく、まだまだアナログ主体で、プレスリリースも紙の時代。ネットではメールをしていたぐらいでした」。公開した作品も「社内ではセキュリティのためサーバに Firewall があり、作った我々が自社のネット環境に遮られて見れない」という状況だった。「トップページのデザインもスムーズに動かなかったり、作品が途中で止まったり、という時代でした」。社内では「認知度が思ったより上がらない、アクセス数が伸びない、予算がかかる、という意見もありました」。

第6章 成果

CyGnet は 2003 年に閉鎖が決定した後もしばらく公開されていた。終了の状況としては、「ビルが完成し資生堂ギャラリーがオープンしたこと」「一定の役割を果たしたという認識」があったとしている。



図 6-2 樋口昌樹氏インタビュー風景

キュレーション内容には満足しているという。エキソニモの《DISCODER》は、「とりわけデジタルならではの作品でした」。「ソースコード表示モードがあり、ネット世界の脆弱性が見える、という面でも評価しています」という。CyGnet 後に国内外で活躍を始めた作家も多く、plaplaX の近森基はその後資生堂関係の展示の空間演出なども手掛けたとのことである。

ネットコンテンツについて樋口氏は、「システムが背後にないと動かないため、保存が困難」と述べている。「掛川市の資生堂企業資料館には、膨大な宣伝制作物がありますが、保存が最も困難なのは今世紀以降のデジタル広告です」という。

「当時は文化支援や企業メセナ協議会がアクティブな時代で、作品は理解できなくても CyGnet への反対はありませんでした」「2000 年代に入り、リーマンショックを経て、会社にはベネフィットを求める状況になりました。1990 年代には多くの企業に企業文化部がありましたが、今はほぼなくなり、「社会」「環境」と名の付く部署が増えています。ここ 10 年で「環境」「LGBT」「サステナビリティ」が注目され、芸術にもイノベティブなものを求める傾向になっています」。資生堂でも、2018 年末に（1990 年に企業メセナの胎動とともに先駆的に設立された）企業文化部が 2019 年 1 月より「アート&ヘリテージ」室に変更になるという。

6.2.4 資生堂ギャラリーについて 眞家恵子氏

インタビュー日程：2018 年 12 月 25 日 16:00～17:40

インタビュー場所：株式会社資生堂 資生堂ギャラリー

第6章 成果

インタビュー：眞家恵子氏（株式会社資生堂 企業文化部

（2019 年 1 月より社会価値創造本部 アート&ヘリテージ室））

インタビュアー：関口敦仁、明貫紘子



図 6-3 眞家恵子氏インタビュー 資生堂ギャラリーにて

CyGnet の調査の過程で資生堂ギャラリーの活動について、企業文化部の眞家恵子氏に話を伺った。眞家氏はこれまでギャラリーで、コンテンポラリーアートのキュレータを中心に内外で活躍するアーティストを紹介している。また、コンテンポラリーアートだけではなくザ・ギンザ・アートスペースでやっていた、少しサブカルチャー的なものを企画していた時代もあったという。1985 年から 2000 年までの 15 年間、アウトサイダーアートやサブカルチャーなどを開催していた。ギャラリーの基本的な活動方針として、福原信三氏が始めたコンセプトを元に、才能があるがなかなか発表の場が持てない作家に非営利で展覧会を開催し続けている。企業文化部では他にはハウス・オブ・シセイドウなども本社移転後に旧社屋で運営し、本社移転にあわせてギャラリーが移転した 1997 年から 2001 年の時期に、今回の調査ターゲットのサイバーギャラリーが企画された。他にも企画にあわせて、メディアアート作家を展示に採用している。2004 年には伊藤俊治氏も企画に関わったハウス・オブ・シセイドウでの「KARAKUSA」ではクリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョノのインタラクティブ・インスタレーションの展示があった。また 2016 年 11 月に資生堂ギャラリーで行われた「Les Parfums Japonais 一香りの意匠、100 年の歩み」展では plaplax の近森基氏と企画展示を行ったことなども伺った。

6.2.5 キヤノン・アトラボ第 8 回企画展アーティスト 江渡浩一郎氏

インタビュー日程：2019 年 1 月 14 日 13：30～14：30

インタビュー場所：産業技術総合研究所 人間拡張研究センター（茨城県つくば市梅園 1-1-1）

第6章 成果

インタビュイー：江渡浩一郎氏（産業技術総合研究所人間拡張研究センター）

インタビュアー：関口敦仁、明貫紘子

江渡氏は1997年センソリウムプロジェクトチームでウェブを中心に担当し、アルスエレクトロニカで受賞した。その後坂本龍一と岩井俊雄とリアルタイムセンシングによる「リモートピアノ」において、ネットワークを中心としたソフトウェアの開発を行った。そのような状況の中、キャノン・アートラボから第8回企画展アーティストとして作品依頼された。そこでの作品

《Sound Creatures サウンド・クリーチャーズ》は、会場となるヒルサイドプラザのキュービックなスペースを広く活用し、ロボティクスネットワークによって、海洋のある一定の深層内での音の反響領域をイメージさせる先進的なジェネレイティブ・サウンド・メディア・インスタレーションであった。

「コンセプトメイキングとしては、クジラの歌をテーマにしている、クジラは歌を歌うし、その歌を歌っているものが一つ一つの個体ごとに違って、かつ、毎年その歌がアップデートして、全体の流行みたいな物があったりするみたいな事が興味深くて。」「サウンドチャンネルと言って、海の中にある音が集積する仕組みができてるんですよ。」このような視点から江渡氏は

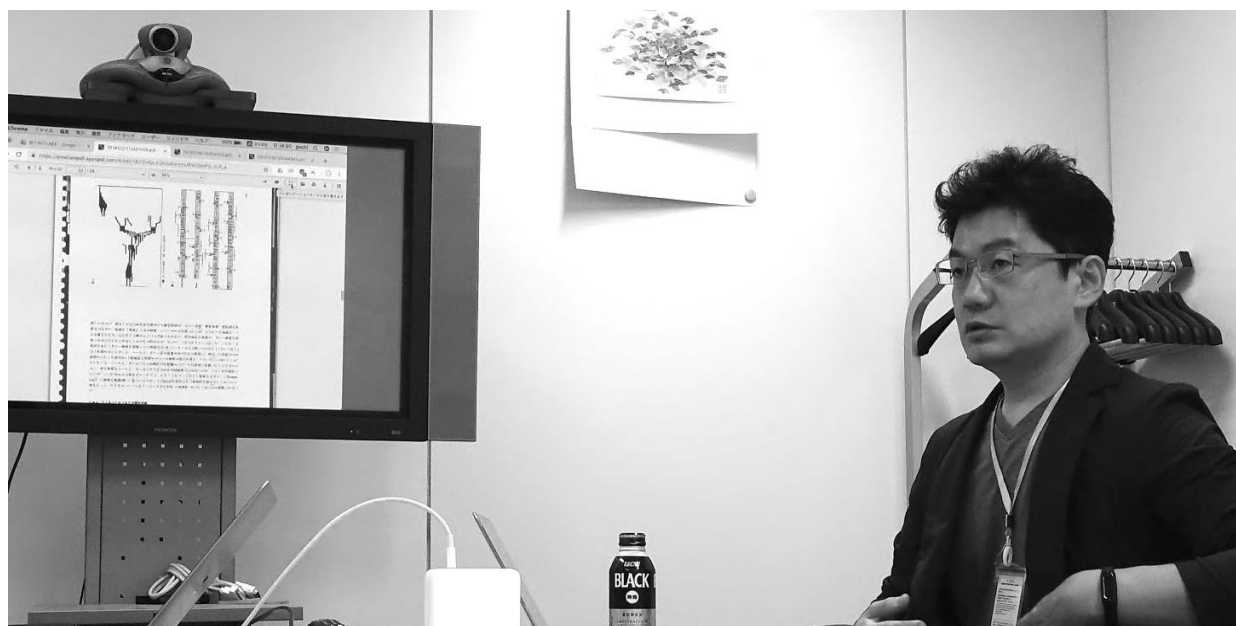


図 6-22 江渡浩一郎氏

「インターネット上で音を使ってチャットをしているところと似ているなと思ったので、そういうふうなテーマにしようとして、で《Sound Creatures サウンド・クリーチャーズ》というタイトルにして、実装した」と語っている。展示スペースでの観客が入力する装置について「端末って呼んでいましたが、あれの扱いもやや微妙で、本当はなくても成り立つわけですね。で、インターネットから音を送られてきていて、それが1個1個のロボットに代替されていて、ロボットは空間内を動き回っていて、ぶつかるとう音の交換がされていて、どんどん音の響きが変わっていくというのが面白いなと思ったんです。観客はこのロボットにタッチすることはできず、何も介入する方法

がないので、それはそれで詰まらないし、何かこうメタ的に、場の雰囲気を変えるみたいな操作を会場にいる人ができるとどうだろうか、みたいなことを考えて」二つの端末が生まれた。「音については、山口優さんをお願いして、ルールと一緒に相談したということですね。基本的にプログラムについては僕が書いていて、ただ、どんなふうな音で、どんなふうにぶつかるってどんなふうに変化するみたいなことを考えるというのは山口さんと小野くんがやっていた」という。

人工生命に対しては「人工生命は当時の流行でもありました。むしろ人工生命批判の方が強くて、当時、いろんなルールで生命っぽいのを作るのが流行（はや）っていて、すごく面白かったんですけども、ルールを複雑にするとだんだん生命っぽくなるみたいな単純な信仰があって、もうちょっとシンプルに機械的に動いててもいいのかなと。人間ってそこに生き物らしさを読み取ってしまったので、何となく全体として音楽作品なんだけど生き物の鳴き声も聞こえるし、生命的な流行とか衰退みたいなものも感じさせるみたいなルールを、比較的何か単純なルールで作った方がいいかなと思っていましたね。」と語っている。

また、オンライン仕様のものを **on the web** と呼んで、ウェブから参加できるインターフェースとして作られた。キャノン独自のテクノロジーとの関係性としては「そのインターネット部分を作ってくれるのはキャノンなんです。1996年に作って、1997年に《リモートピアノ》を展開して、98年にそういったソースコードも含めてキャノン側にお渡しして、クライアントの画面にこういうのが表示されて、こういうコマンドを送るとこういうのがサーバ側に伝わって、他のクライアントこういうのが伝わるみたいなことを僕がまとめて、それをプログラムに変えてくれたのはキャノン。何人かのエンジニアで、サーバ側とクライアント側を手分けして、この画面を3Dで表示するというのも、キャノン側で作ってくれましたね。僕はその中で、音のルールを作る部分だけに専念する形で実装したので、そこは比較的うまい関係性だったかなと思います」と述べている。また、アートラボ第8回企画展作品に関する資料について、打合せ資料や当時の開発データも含めて、江渡氏が担当されていたものをお預かりした。

6.2.6 スパイラル／株式会社ワコールアートセンターについて 岡田勉氏

インタビュー日程：2019年1月23日 14:00～16:00

インタビュー場所：スパイラル事務室（東京都港区南青山 5-6-23）

インタビュイー：岡田勉氏（スパイラル シニアキュレータ）

インタビューアー：阿部一直

改めてスパイラルのキュレータである岡田勉氏に、「ビデオ・テレビ・フェスティバル」前後で、スパイラルが自主サポート、プロデュースしてきたアートユニット「ダムタイプ」の動向を中心に、スパイラルの自主的文化事業の中でのメディアテクノロジーの導入や、メディアアーティストら表現者との具体的な関係性に関してヒアリングを行った。

スパイラルは、ワコールの文化事業のブランチとして自主的な企画事業を行うことが企業としてプログラムに組み込まれていたため、次世代の新しいアーティストを発掘する意欲を常に持ちなが

第6章 成果

ら活動してきたモチーフがある。その中で、「ダムタイプ」前史として、日本の現代アートの変遷において、空間的な表現であるインスタレーション発表形式の導入やそこにメディアテクノロジーや電子機器デバイスが組み込まれる表現の過程が生まれる中で、舞踏集団「山海塾」の存在の重要性が指摘された。「山海塾」は、1970年代後半から、世界的な巡回公演を前提にした表現を意識しており、そのため新しい表現方法への積極的導入を行い、それがスパイラルにとっても表現への社内的な理解普及の前提を形成していた。（「山海塾」主催者天児牛大氏は、1989年にスパイラルホール芸術監督に就任している。）「山海塾」、そして「ビデオ・テレビ・フェスティバル」における世界的なビデオアーティストの東京への紹介という前史と影響があり、そこからよりメディアテクノロジーに親和性を持ち積極的に電子機器や自作メカニクスを表現に持ち込む新興アート集団「ダムタイプ」を発掘し、サポートを行う気風が企業内に醸成されていった。それによって「ダムタイプ」の代表作である「pH」から「S/N」「OR」までが、スパイラルで主体的にサポートして発表されることになる。特に1990年の「pH」では、メディアテクノロジーを導入したダンスパフォーマンス、インスタレーション、コンセプトノート刊行を同時に行うという、これまでの日本のアート集団では未曾有（みぞう）のマルチアウトプット表現を実現する背景には、スパイラルの空間的特性を背景に芸術的理解や事前の作家リサーチ、情報収集が大きく影響していた点が、岡田氏のヒアリングから明らかになった。

6.3 キヤノン・アートラボに関する鼎談

キヤノン株式会社が文化支援活動として独自に1991年からスタートした「キヤノン・アートラボ」活動は、まだメディアアートという名称すらなかった時代に、メディアテクノロジー、コンピューティングを導入したアート表現を推進し、東京及び海外各所でその成果を発表するという活動である。1990～2001年の間の活動期間内に、オリジナル作品を、キヤノンのエンジニアを配したラボを設立してアーティストと作品を共同製作するスタイルと作品のクオリティは、国内においてメセナ大賞'96で評価されて審査委員特別賞を獲得し、その後世界的にもユニークで注目を浴び、オーストリア・リンツの国際的な電子芸術フェスティバル「アルスエレクトロニカ」のコンペティション「プリ・アルスエレクトロニカ」では、二度もグランプリを獲得するなど、その評価や影響力は世界的であった。ここでは、キヤノンの協力を得て、当時ラボに所属していたエンジニアの方々を中心に出席を頂き、発足当時の事情、その後の活動展開などに関して、内部の当事者としての意見をヒアリングする機会を設けた。

出席者：玉井俊一氏（キヤノン株式会社 グローバル IT 統括センター）、秋定浩和氏（キヤノン株式会社 グローバル IT 統括センター）、天野真一氏（キヤノン株式会社 CSR 推進部）

＊玉井氏、秋定氏はキヤノン・アートラボのエンジニア、天野氏は事務局担当者。阿部、四方はアートラボ全期でキュレータを務めた。関口敦仁は、アートラボ第9回企画展アーティスト。

阿部一直、四方幸子、関口敦仁、水野響、後藤流音

日時：1月30日（水）15：00～17：00

第6章 成果

場所：キヤノン株式会社 本社（東京都大田区下丸子 3-30-2）



図 6-21 左から天野真一氏、玉井俊一氏、秋定浩和氏

関口：本日はお時間取っていただきありがとうございます。キヤノン・アートラボを始めとして、当時のメセナとしてのアクティビティの中で、特にメディアアートの活動について、この後アーカイブとか、具体的に何かものを残していけることも含めて、実際にどういうことが起きていたのかが、現状では、美術、芸術界含めて、歴史的な出来事としてきちんと残されてないので、そういう情報としてまとめておきたい、玉井さんが退社されてしまうと、散逸してしまうということもあります。こういう機会を取っていただいて、できるだけ色々な状況も含めてお話を伺っていければと思うのです。とりあえず、時間的な流れに従っていろいろ伺って行きたいなと思います。特に、1990年代に入って文化支援という形で、企業が文化支援をする気風が出てきた、とは言っても、やっぱりキヤノンがリーダーになって、最初にやっ払いこうということでやられていったと思います。その活動をまとめた『Partner of Forerunners - Canon's Cultural Support Activities キヤノンの文化支援プロジェクト〔1991-2000〕』（2000年）に、文化支援の考え方、ビジョンというのがあります。これまでにない文化支援の形を作り出すということの名目のもと、すごいなと思ったのは、「既存のアートにとらわれず、写真を始めとする映像文化の開拓や、デジタル・テクノロジー、マルチメディア環境を反映させた、斬新かつ先鋭的なアートの領域を創造する」それと、「キヤノンの人的、技術的資源を積極的に活用した独自の芸術支援形式を見出し、発展させる。それによってアーティストに新たな芸術的実験の契機を提供する。これは、当時を考える上では、他の会

社ではほとんどあり得ないことだったと思うのです。そこで、キヤノン・アートラボを立ち上げた経緯、アートラボと、写真新世紀ができる以前の文化支援の活動もあったと思いますが、そもそもの成り立ちから教えていただけますでしょうか。

●キヤノン・アートラボの始まり

玉井：はい。もう頭の中にしか残っていないんですが、最初に取り組んでいたのは、画像処理をしましょうということです。その画像処理は、写真で撮った画像をビデオに取り込んで、それをデジタルで加工すること。カメラのレンズの鏡筒にフィルター付けて、絵にいろいろな効果を付けることがアナログでできるように、デジタルでやろうというのが、最初ですね。ちょうど私が会社に入ったときから始まったものです。

関口：それは何年になるのでしょうか。

玉井：はい。1984年ですね、特別なプロジェクトを立ち上げて、次の世代にどういうものを作っていきますかというリサーチプロジェクトを立ち上げたんですね。その中で、これからはものを作ってものを売るだけじゃなくって、文化的な切り口というか、文化を創っていくアプローチをして、新たな切り口、突破口を作って行こうという考え方が出てきました。それが一番の根本的な、考えだと思います。その中で、我々は技術者なので色んな処理を、最初はアナログのフィルターをベースにして、いくつもいくつも処理を作っていました。今でいうデジタルエフェクトです。それがベースになっていろいろ発展していったと。中には、似顔絵作っちゃおうとか、お遊び的ですけどもありましたね。

それは当時の部門のトップの方針です。例えば、一眼レフカメラが各家庭に1台以上あるとしたら、ものとしてはだんだん売れなくなるんじゃないかという危機感を持っていました。一生懸命良いものを作ったり、色んなバリエーションを増やして売るとか、当然部門としてやるのだけれど、そうじゃない方面からの切り口を考えようというトップダウンが出たのですよね。

四方：キヤノン・アートラボ設立のきっかけは、大阪の花博（注：「国際花と緑の博覧会」、1990年開催、以下、花博）だ、と以前聞いたことがあるのですが、それに至る前の動きがかなり前からあったのですね。質問ですが、例えば1985年のつくば科学万博は、キヤノンさんは何かそういったアプローチを取るきっかけになったのでしょうか。

玉井：つくば科学万博のとき、我々は何もアプローチはせず、逆にそういう万博を、社会のこれからの流れをつかむという方面でリサーチをする立場で行きました。

関口：それで、花博も含めて、アートラボのプロジェクトが始まる体制になるまでっていうのは、他には。

玉井：そうですね、事務局は特になかったです。

関口：なかったんですか。

玉井：もう開発一辺倒で。だから見方としては片面だけ、技術面からしか見てないですね。

関口：それで、技術の部局で色んな開発をされていったのですね。

第6章 成果

玉井：そうですね、右行ったり左行ったりしながら、我々も、一般コンシューマ向けに何かやろう、そういうのを手探りしながら、実験を重ねながら、いろいろやっていました。似顔絵という話を出しましたが、それは一つのコンシューマへのアプローチとして、です。例えば、小田急百貨店で、一週間場所借りて、我々の作っているシステムを使って、テレホンカードに似顔絵処理をした画像を焼き付けて、売ったりということをしました。私たちが核に持っているのは、画像処理技術です。花博ではアーティストを引っ張ってきて、こういうデジタルの処理ができるので、何か作品に活かしてみませんかというアプローチをした。それがアートラボの一步手前だと思いますね。

関口：そのときには、まだ組織的には開発の方だけですか。

玉井：開発だけで、事務局がない状態ですね。ちょうど花博の年に、こういった技術を使って、何か次のアプローチっていうことで何かできないかということで、例えば関口さんは多美術大学美の伊藤俊治先生等にインタビューさせていただき、アドバイスを頂戴しました。そのときには、四方さんも代理店を通して紹介していただいて、キヤノン・アートラボ構想ができていきました。

四方：関口さん、それ覚えてらっしゃいますか、1990年の半ばくらいですよ。

関口：僕が広告代理店とサントリーさんのギャラリー（注：銀座 SONY ビルに 1980 年代後半にあった **Suntory Art Box**）で展示をして、それで付き合いができて、「キヤノンからアドバイザリーをしてもらえないか」とお話が来たことがあります。その際には、四方さん、杉山さんもいらっしゃいました。そこからプロジェクトが始まったかと思います。キヤノンの社内では、キヤノン・アートラボという組織づくりをする段階は、どのように進められていたのでしょうか。

玉井：当時、部長だったかセンター長だったか、はっきり覚えていないのですが、木村善将という者が居りまして。

関口：それは何部になるのですか。

玉井：製品事業部じゃなくて、画像処理をやっている部隊だとか、機器のソフトウェアをやっている部隊だとかを取りまとめていた所です。そこが情報システム研究所みたいな名前に変わって。当時、画像処理をやっている部隊が、技術的な切り口だけでものを探し始めて、企画を作って、上に稟議を回して認められた段階で、事務局を付けていかないと大変だとなりました。花博のときの延長みたいな形で、事務局が付きまして。花博のときに一緒にやっていたメンバーを中心に再構成したようなものだったと思います。

秋定：赤松さんとか、秋濱さんとか。アートラボ第1回企画展は、赤松さん。

四方：赤松さんは、花博にも関わっていらっしゃったんですね。

玉井：そうですね。で、花博で一緒にやっていた色々動いてくれる男性が1名いました。それを引き継ぐ形で、他の事務局のメンバーも一緒になって初めて事務局の課ができ、技術の部隊と、二つ

第6章 成果

が一緒になって、という形です。場所を六本木に定めて。そのときにはもう四方さん、入っていましたね。

四方：そうですね。赤松さんが事務所を探していたのは、覚えています。その頃は西新宿のキャノン本社の方に、ときたま通っていましたが、皆さんは下丸子でしたね。

関口：それは、1990年ですか。

四方：1990年ですね。

玉井：1990年。

秋定：アートラボ第1回企画展の開発はこちら、下丸子でしたね。下丸子のL棟って、もうないですけど。

四方：1991年くらいに引っ越したかと。

秋定：アートラボ第2回企画展の準備ぐらいからですかね。

四方：アートラボ第1回企画展の開発は、こちら（下丸子）でしたね。

秋定：1991年か1992年か、

玉井：いや1991年にはもう六本木には移っていましたよ。

秋定：移ったのだけど、アートラボ第1回企画展が終わってからですよ。

玉井：かもしれない。

四方：そうですね。キャノンの創業の地は六本木と聞いていたから、それで六本木にしたとも伺いました。

玉井：そうですね。花博のときは下丸子の別館という所にいて、そこに日比野（克彦）さんとかもちょこちょこ来られてました。そこで一緒に色んなものを作ったり、打ち合わせをしたりとかしていました。

●AL1 アートラボ第1回企画展「ARTLAB」（コンプレッソ・プラスティコ、中原浩大、福田美蘭）（1991年）

関口：アートラボ第1回企画展のときは、まだ事務所は最初の形態だったのですかね。

玉井：そうだったと思いますね。

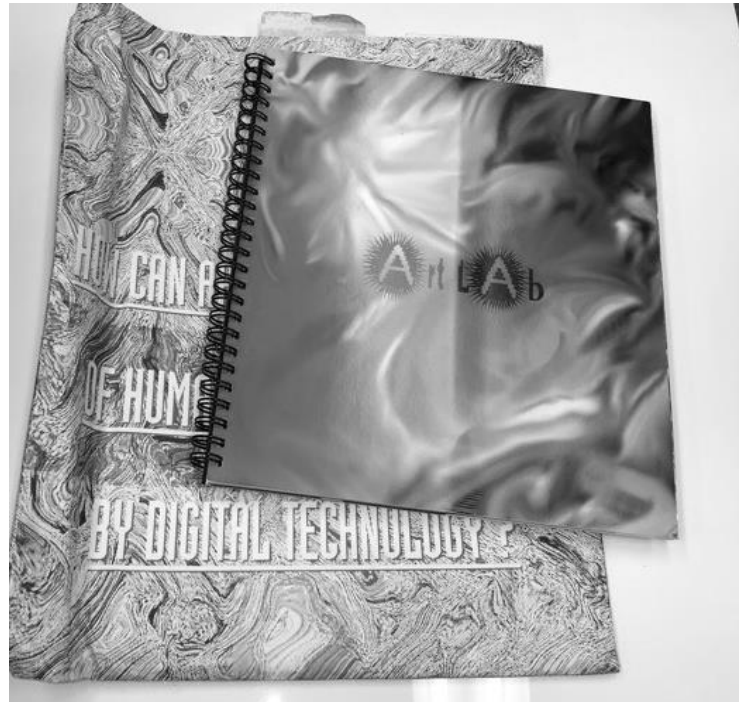


図 6-22 キヤノン・アートラボ・コンセプトブック 1991 年

玉井：事務局が新宿で、開発は下丸子で。確かそうだったですね。1991 年の展覧会がちょうど終わる頃に、六本木に移ったような記憶があります。

秋定：最初から話をすると、このコンセプトブック。

四方：これは六本木だった。

秋定：あ、六本木でしたっけ。六本木ですか。

関口：そうですね、このコンセプトブックですね。

四方：コンセプトブックの発行の住所は、新宿になっていますね。

秋定：新宿ですよ。

関口：コンセプトブックと企画展の位置っていうのは、同時期、全く一緒でしたっけ。

四方：同時でしたね。全く一緒。

秋定：アートラボ第 1 回企画展のときにはできていましたね。

玉井：コンセプトブックが先だったかな。

秋定：コンセプトブックの発行住所が新宿になっていますね。

四方：そうですね。でも発行日が 1991 年 6 月 27 日ということは、第 1 回目の企画展と同じ時期。

関口：じゃあ、アートラボ第 1 回企画展の体制のときには、まだ下丸子の方で開発をされていて。

玉井：確か、開発は下丸子でしたね。開発のメンバーは人数的には、何人いたのだろう、8 人ぐらいいたのかな。

第6章 成果

秋定：いましたね。全員が全員、キヤノン・アトラボを担当はしてなかったですが。

玉井：全員が全員じゃなくて、大体リードするメンバーが3名。アーティストは3組いたので、各アーティストに1人ずつ付いて、1人若しくは2人くらいがサポートに入るという体制ですね。コンプレッソ・プラスティコの主担当が秋定で、

秋定：私がコンプレッソですね。

玉井：（福田）美蘭さんが杉山で。中原浩大さんが山田、の3人。1人ずつ一応メインで付いて、後は作業的に必要なものは、残りのメンバーにヘルプして、皆で作っていくという最初はそんな体制でしたね。

関口：当時の部局に具体的な名称はありますか。どういう傘の下でやっていたのでしょうか。

玉井：文化支援課だったよね。

天野：そうですね。1991年だと、文化支援課です。

関口：文化支援課そのものは、前からあったのですか。

玉井：多分そのときに作ったのだと思います。

関口：それに合わせて作って、キヤノン・アトラボを含んでいる形だったと。

玉井：そうですね。そのときの長が。

天野：薬真寺さん。

玉井：薬真寺さんか。多分その辺は、写真新世紀と一緒にだった。それで、写真新世紀のメンバーが3人、キヤノン・アトラボの事務メンバーが3人ぐらい、合計6人ぐらいのメンバーが六本木に来たのだと思います。それで、アトラボの事務局が赤松と。

天野：秋濱さん。

玉井：秋濱さん、だね。だから2人ですね。あと、外部の方をお願いすることもありましたね。

●AL2 アトラボ第2回企画展「ARTLAB2」（ヘラルド・ファン・ダー・カープ、ミッション・インヴィジブル）（1992年）

関口：アトラボ企画展の2回目はテピアホールではなくて。

玉井：2回目は何だっけ、湾岸の方。

四方：ニューピアホール。

玉井：竹芝ニューピアホールか。

関口：はい。これですね（カタログを見る）。恐らく、最初の段階から体制的な進め方は、そんなに変わってないと思いますし、関係した四方さんもいらっしゃるから、良く分かるかなと思うのです。では実際に企画を起こす手続きはどういう段取りで内容を決めていったのですか。

玉井：それは基本的に、キュレータとしてお願いした四方さん、阿部さんに、最初、企画のベースを出してもらって。それを、事務的な面からと技術的な面からと、両方から揉（も）んで行くという形でした。技術的な面というのは、最初の頃はどちらかというと、デジタルが盛んに使われる作品は少なかったもので、その特徴を逆にアーティストに意識してもらうような形で、こういうのができますよとか。

阿部：わたしが参画したのが、やや後からの1990年の12月からです。すぐにプロジェクトのコンセプトなど、ドラフトとして提案されていたものを元にリデザインしてみんなでまとめ、同時にコンセプトブックの製作にかかった記憶があります。コンセプトブックは、ポウル・ヴィリリオらにオリジナル原稿を発注したもので、実際は、アトラボ第1回企画展のオープニングでリリースしました（注：非売品）。第1回企画展の候補作家は、外部のアドバイスも含めて何人かいたのですが、四方さんと私と当時入っていた制作会社のウィズブレーンとで協議し、その候補者から最終的に3組に絞った、と記憶しています。

●アトラボ・オープン・コラボレーション展「PSYCHOSCAPE [サイコスケープ] —アートからの精神観測」（Bulbous Plants（バルバス・プランツ）、DTI（Digital Therapy Institute）、本木秀明）（1993年）

関口：スケジュールを拝見すると、企画展が1991年に1回されて、その後第2回の企画展があります。その後公募展を開催していますが、公募はアトラボ第1回企画展と同時期ぐらいですか。

玉井：公募はアトラボ第2回企画展のときぐらいですね。

関口：公募開始が結構早いのかなと。

玉井：公募開始は展示の1年半前くらいでしょうか。

天野：1991年11月から1992年4月。

関口：公募期間が1991年の11月から1992年の4月って、結構早いですよね。

玉井：そうですね。こちらから企画してアーティストを呼ぼうというのと、公募しようという、2つの考え方が元々あった。企画展をまずふりだしとして、企画展の2回目も準備しておき、その段階でキャノン・アトラボのオープンをやろう、という話だったと思います。

関口：それは最初の段階からそういうつもりで。

玉井：はい。阿部さん、四方さんがよくご存知かと。

阿部：プロジェクトのスタートの段階では、活動自体が未知のものだし、グランドプランを広げてやろうという方向になっています。

玉井：あれもこれもと。

阿部：確か公募展は1回しかやっていないですね。

玉井：公募展は実際に蓋を開けてみたら、色んな意味で難しいという話が出て、それで1回で終わったと記憶しています。

関口：応募点数、カタログに出ていたかな（カタログを見る）。応募点数が65点で、そのうち3グループ選んで、展示したということです。

第6章 成果

阿部：伊藤俊治さん、榎木野衣さんらも審査員でした。それと内部スタッフ全員で決めたと思います。



図 6-23 鼎談風景 左から、玉井氏、秋定氏、水野、四方、阿部

関口：公募展が1回で終わったのは、質の高いものをしていくのだったら公募展ではなくて、しっかり企画を立てていくことにした、ということですね。

玉井：そうだったと記憶しています。

阿部：それと、やはり主催者側の戦略、方針がなかなか公募展だと反映できないみたいな所があって、手間が掛かる割には公募作品に引っ張られてしまうというのがあったように思います。また3組同時というのが続くとかかなり大変で、それだったら、技術開発も含めて中身に特化した企画展に集中した方が良く、という判断にもなった。

玉井：やってみてからの結果でしたね。

関口：これも展示場所としてはO美術館（注：オー美術館、大崎駅に隣接する美術館）で、ちょっと珍しい場所で展示はされていますね。

阿部：菊竹清訓の建築の、品川文化事業団の建物に入っている施設です。当時デジタルアートをかなり先導して企画していましたね。

四方：ビデオ関係の編集機材など最新設備があって、それに当時学芸員だった天野一夫さんがアート&テクノロジーの展覧会を数多く手掛けていて、親和性がありました。

玉井：会場セレクションについては、技術部隊のメンバーはあまりタッチしていないと思います。

四方：キヤノン・アトラボ開始当時は、NTT インターコミュニケーション・センター[ICC]（以下、ICC）も始まった頃でした。ICCはキヤノン・アトラボより少し前から準備していて、予算

第6章 成果

規模も大きかったですね。キヤノン・アートラボは準備時間も少ない中、1991年半ばの公開を目指すことになった。ICCは、センターの設立を目的としていました。

玉井：ICCは自分で会場を持つと言っていました。

阿部：ICCの開場は1997年からですね。

四方：キヤノン・アートラボは会場を持たないということにして、事務局とファクトリーのための構成で、開発や活動を主体として、スペースは毎回借りるという方向にしていました。

玉井：そうですね。

阿部：ICCは、1997年以前は、都内の様々な場所を使って多様な準備イベントをやっていました。

玉井：開始は、ほぼ同時期。

●AL3 アートラボ第3回企画展「パーセプチュアル アリーナー空間のパラドックス」（ウルリーケ・ガブリエル）（1993年）

関口：アートラボ第3回企画展のウルリーケ・ガブリエルから、会場が変わって。

四方：ヒルサイドプラザ。

阿部：ヒルサイドプラザは商業利用施設ではなく、地域の文化に貢献する活動に対して門戸を開くという方針を持つ施設で、槇文彦事務所の関係者のつながりで特別に貸してもらった事情がありました。当時の代官山は今のようには開発されてなくて、ヒルサイドしかなかったんですよ。

四方：1980年代後半に、アンジュ・レッチアというフランスのアーティストの展覧会や、その後川俣正さんの出版記念パーティなどがありました。会場を探していたとき、以前にコシミハルのライブをこの会場で見たことから、アートラボ第3回企画展として提案しました。

関口：1980年代の終わりは少し、そういうコンテンポラリーな展示もやっていたイメージがあります。

四方：やっていましたね。ただ限られた関係者に貸していた場所だったので、ハードルが高いかないかと思っていました。

関口：あそこはキュービックな空間で、天井も高くて。

玉井：天井高かったですね。

関口：こういう展示をするには、見せるとこは見せて、隠すところは隠す細工があるという所は、特徴的だったと思う。それでアートラボ第3回企画展のウルリーケの展示で初めて、VR的な、割と具体的にデバイスを使うようなものにちょっと変わって。1993年にヘッドマウントディスプレイ（以下、HMD）を使うのは、当時最先端でした。何百万円もするものを被るという感覚だったと思います。

阿部：リアルタイム画像インタラク션을作品で使うことが、1992年くらいから世界的に可能になって、例えば、当時ヨーロッパで発表されたノウボティック・リサーチ（KR+cF）の作品で

第6章 成果

《SMDK》というのがありましたが、全面的なリアルタイム画像を生成してインタラクションで使うという画期的な表現を試みており、それこそはしりで。それまではデータをその場でレンダリングしてリアルタイムで動かして見せるなんてあり得ない話だったのが、シリコングラフィックス（以下、SGI）のグラフィックボードが出現してくることで視覚表現として可能になりました。

玉井：ハードウェアの進歩は、急に変わって。

関口：1993年ぐらいからですね。

玉井：まあSGIですね、その頃は。シリコングラフィックス。

秋定：SGI、借りましたよね、マシンを。ウルリーケとボブがプログラムのチューニングを当時恵比寿にあったシリコングラフィックスの本社でやっていました。



図 6-24 AL3 アートラボ第3回企画展「パーセプチュアル アリーナー空間のパラドックス」
（ウルリーケ・ガブリエル）（1993年）

阿部：キャノン・アートラボに即していうと、1992年の第2回企画展のときに（注：ミッション・インヴィジブル《Mission Invisible》）、プリント画面に、鑑賞者がズームイン&アウトできるようなインタラクティブな体験型作品を導入したりして、インタラクションに挑戦していました。これから本格的にインタラクティブティが来るだろうということで、静止画の画像処理だけでなく、インタラクティブな要素をこのキャノン・アートラボにも入れた方が良さだろうという話が出てきて、海外をリサーチしようということになり、1992年に、ヨーロッパに視察に行ったわけです。当時フランクフルト大学のニューメディア研究所の所長がペーター・ヴァイベルという、アルスエレクトロニカを立ち上げた有名な人がいて、ヨーロッパで最先端のラボだったんですね。そこにクリスティアン・メラーやミヒャエル・ザウプ、ボブ・オケーンやウルリーケ・ガブリエルらが集結していて、研究員としてヴァイベルのアシスタントをしていたんですよ。ウルリーケは学生だったのかな。そこで、ミュンヘンでウルリーケに会って、作品構想やテクノロジープランをプレゼンをしてもらったときに、これは非常に面白いアイデアだということで、ではキャノン・アートラボでトライしようということになっていったのです。そのリサーチを四方さんやウィズブレンの人らと数人で行った記憶があります。

四方：1991年には、アートラボ第2回企画展のリサーチのため、トロントなどに行きましたよね。

阿部：トロント大学のマクルーハンセンターとか、ブルース・マオやブライアン・ボーゴンのオフィスなどに行ったはずですよ。

四方：アートラボ第2回企画展のリサーチは、大きな国より周辺の国の方が面白い文化やオルターナティブな動きがあると感じていたため、カナダとオランダを中心に回りました。1992年はウルリーケから直接コンタクトがありました。どこかでアートラボのことを聞いたようです。近くヨーロッパに行くから会いましょうという連絡し、お会いしたら、そのとき彼女はまだミュンヘンの芸術大学を出たばかりで、絵画を専攻していたけれど、インタラクティブ・アートの可能性を感じてプログラミングを独学し始め、1992年に《BREATH》というインタラクティブ作品（注：1995年の第1回プロスペクト展に招聘（しょうへい））を発表したところでした。

阿部：プログラマーのボブ・オケーンは、アートラボ第3回企画展のとき、ウルリーケのコンexionで一緒に制作に東京に来たんですよ。

四方：1992年にウルリーケに会ったとき、強い意志とエネルギーが感じられとても印象的でした。《sphere》っていう、壮大なプロジェクト構想を聞かされたことを覚えています。人々がエージェントのような存在となって、飛行機を乗り継ぎながら地球上を飛び交っていく。誰も考えないようなスケールのアイデアと世界観を持っていたこともあり、若手で無名でしたが、アートラボ第3回企画展に誘いました。その前に、1990年9月にリサーチで、エンジニアの山田さん、ウィズブレーンのプロデューサー七瀬さんと、ヴェネツィア（ビエンナーレ）とアルスエレクトロニカ（フェスティバル）に行きましたが、アルス（エレクトロニカフェスティバル）の体験がとても重要で。VRがテーマで、ジャロン・ラニアーなどが招待されていて、西海岸のVR、サイバーカルチャーが初めてアルスで大きく取り上げられた年でした。

阿部：リアルタイムで動く仮想現実なんか想像できないという。

四方：アルス（エレクトロニカフェスティバル）のテーマは、1991年がVR、1993年にアーティフィシャルライフ（人工生命、以下、AL）で、科学技術のインタラクティブ・アートへの実験的な応用とともに、ヨーロッパならではの哲学的な議論がされていました。そのこともあり、いずれVRを扱ってみたいと思っていました。

阿部：関口さんも当時IAMASで取り組まれていたと思いますが、ポヒマスという三次元位置センサがありましたね。頭の位置角度をデータで取れて、それによって三次元の位置変化をVRに反映するセンサデバイスでした。それを使いました。

四方：ウルリーケのアートラボ第3回企画展では、直径2.5メートルぐらいの狭いエリアでしか位置センサが使えなかったんで、その範囲を「アリーナ」として囲って、体験者がその中でインタラクションするという作品になりましたね。

第6章 成果

秋定：ポヒマスは買いましたっけ。

四方：もしかしたらウルリーケが持ってきた。

秋定：ウルリーケが持ってきたのだと思う。後はね、グローブがありました。

阿部：秋葉原で買い込んできたのですよね。

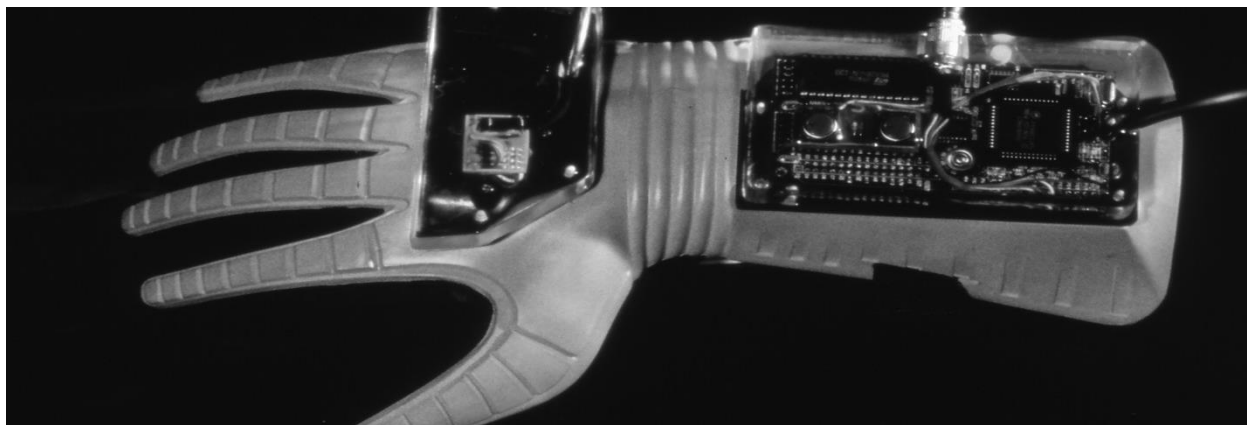


図 6-25 アートラボ第3回企画展展示でのデータグローブデバイス

秋定：私一緒に行って、秋葉原で。

関口：ボックスですよね。

秋定：カタログがあります。ちょっと脱線して申し訳ないですけど、彼は仲間の分も買うと30個ぐらい買いました。箱が一つでも大きいので、その店先で中身だけ出して持って帰りました。

関口：あのときHMDは1台だけでしたっけ。展示のときに。

阿部：1台か、バックアップにもう1台あったかもしれません。

●キャノン社内の反応

玉井：アートラボの最初の方は特に、キュレータの力がすごく大きくて、アーティストについては、技術屋も事務屋さんも、誰も何もよく知らないですから。技術部隊で分からないことは全部（アーティストやキュレータに）お願いしていて。逆に作品製作に必要なリサーチとかはするけれど、キャノン側はない部分には投資をすると、そういうアプローチだったと思います。

関口：企画展の3回目ぐらいまでの社内的な評価や開発側の評価はどうでしたか。

玉井：何やっているか分からんということだと思いますね。

阿部：VRの導入は、社内への刺激はあったんですか。こういった新規技術に対しての取り組み、あるいは技術的な価値評価というものに関しては。

玉井：どうでしょうね。開発している人たちでも、製品開発をしている人たちは、例えば文化的な側面を見て、感動はするとは思いますが、ただそれをしている仕事にどう生かすのかとは、全くかけ離れた所にある可能性が高いですね。だからその辺は、仲介役である我々開発部隊が、社内

の人たちに向けてどういう風なプレゼンテーションをすれば来てくれるかなと、段々進めていきました。最初は理解してもらうこと自体が難しかったです。

阿部：この頃から、映像を、リアルタイムでリンクするようになっていった。キヤノンも、基礎開発として音の技術開発をやっていると、あの当時聞きました。社内的にその音と映像の連動はどういう風に捉えていたのですか。

玉井：当時、音はほとんどやってなかったと思います。

阿部：やはり関心は映像中心ですか。

玉井：そうですね、映像中心ですね。それも三次元はほとんどなくて、二次元です。我々技術者の方の立場として見れば、VRの音や三次元とのリアルタイムなリンクを切り口にして、何か新しい形で二次元に取り入れる、可能性を提案しました。

関口：キヤノンの活動を見ると、生活に関わる保守的な部分はきっちり抑えるけれど、先端的な所までやってすぐ製品にするというイメージはないですね。そういう意味でも、このキヤノン・アートラボの活動自体はキヤノンがそこまでやるんだって言う、はたから見ても驚きで。それはやっぱり強かったですよね。

阿部：そう、先端性のインパクトはありましたよね。

関口：そうは言っても、製品にすぐVRとか三次元とか取り込むのかというと、そういうわけでもなかった。だからキヤノン・アートラボでの活動には、何か新鮮に周りも受け止めていたかなという感じはしますね。

●AL4 アートラボ第4回企画展「LOVERS—永遠の恋人たち」（古橋悌二）（1994年）

関口：この古橋さんの展示は技術的な面で言うと、プロジェクターの同期の取り方が一番苦労されたと思う。映像を映しながら、同期を取って行く部分で一番苦労された所はどの辺りですか。

玉井：ああ、ここは杉山が担当してました。

阿部：しかも当時はHi8を何台もデッキ並べて、全部アナログで繋（つな）いでいました。

玉井：制御系のプログラム自身がパラメータで大きく振れてて、その辺の調整はアーティストにやってもらうという形で、汎用的なものを作っていたはずです。そのため最終的にはプロジェクターそれぞれを単独できちんとコントロールさえできれば、後は時間的なファクターをアーティストに入れてもらう形でできました。

関口：じゃあ、玉井さんたちがベーシックな部分を作っておいて、後はアーティスト側が調整できる範囲もある程度意識されて作られて、アーティストに渡す。

阿部：同期のシステムは全て、キヤノン側で開発でしたよね。

玉井：はい。ディレクター（旧マクロメディア）で開発しました。

第6章 成果

四方：ディレクター使っていましたね。

玉井：基本的にそんなに難しいことはやらなかったんですよ。確かビデオの回転台のコントローラ（ハード）も、アーティスト側で作ったはずです。そんなに技術的要素を、例えば新しいことは取り入れたというのはあまりなかったはずです。

関口：基本的にはシリアルのコントロールですか。

玉井：そうですね。基本的には映像創出のための機器コントロールだけなので、そんなに難しいものはないはずですね。

秋定：ソニーのデッキだったと思います。それでインターフェースがあって、ライブラリとかがあったので、比較的やりやすかったというのがありますね。

玉井：映像自身も作家側が作ってましたから。

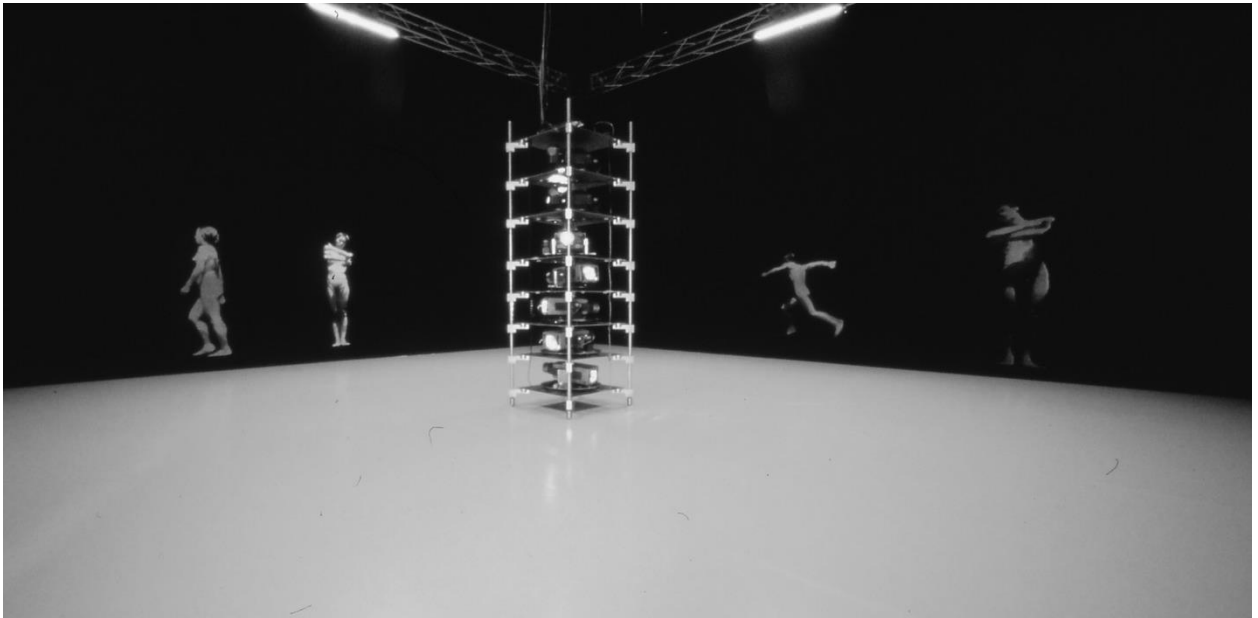


図 6-26 AL4 アートラボ第4回企画展「LOVERS—永遠の恋人たち」（古橋悌二）（1994年）

阿部：撮影の立ち合いに京都に行った覚えがあります。補足すると、ウルリーケと古橋さんはほぼ同時に進行してて、1992年からプロデュースしていて、どちらが先になるかは半々でした。ただ、古橋さんからHIV+のカミングアウトがあって、そんなにハードに製作はできないだろう、余裕を見て、ゆっくりやっていかないと体調的に厳しいかもしれませんね、と我々のアートラボチームには伝えられていたので、古橋さんの方が1年遅くなった。実際にはウルリーケより先にスタートしていたのですが、古橋さんの方が発表としては遅くなった。古橋さんには1992年に共同製作の話を持ちかけているはずですよ。

第6章 成果

関口：だから両方とも9月23日から展示が始まってるけれども、ウルリーケの方が1993年で、ちょうど1年後に《LOVERS》が始まってるわけですね。そして、その半年後にはプロスペクト展という形で、新しい形態のものが行われます。

●アートラボ第1回プロスペクト展 「TERRAIN [テライン]」 (ウルリーケ・ガブリエル) (1995年)

関口：場所を変えて、東長寺講堂 P3 (以下、P3)。公募展がなくなって、その後、企画展とプロスペクト展という感じで、半期ごとに開催する感じのイメージがあります。

玉井：多分、時期はそのときの忙しさや、事務的な予算などに、左右されていると思います。基本的な考え方は、プロスペクト展は自分たちの技術を使うというのではなくて、良い作品を持って来ていただいて、国内に展開しましょう、見せましょうという考え方でした。

阿部：この辺りから、メディアアートを推進するという意識、新しいジャンルを定着させましょうという意識が、活動の中にも自覚的に表れてきました。

関口：それで一緒に作るというよりはラボはプロジェクトとしてサポートするように。

玉井：はい。私たち開発部隊のサポートはありません。

関口：プロスペクト展はアーティストの紹介ですか。

四方：まだ国内でインタラクティブなメディアアートがなかったということと、エンジニアの方もいろいろ学んできていたけれど、まだもう少し掛かりそうな状況がありました。海外から重要な作品を紹介する枠をもつ必要性を、公募展の後に感じました。

秋定：最後のプロスペクト展には、私たちも関わりました。

四方：「R111」 (第5回プロスペクト展) ね。

玉井：プロスペクト展と言えども、という事で。

四方：「Ultima Ratio」 (第3回プロスペクト展) もだったかと。プロスペクト展も、結果的にはエンジニアの皆さんに関わってもらったことが多くなりました。

玉井：(キヤノン・アートラボ活動) 後半の話になりますが、後半は技術者も芸術に対する知識が増えたので、何か言おうよ、意見を言おうよ、自分たちのアイデアを出して、それをアーティストに見てもらって、それで採用されたら面白いねという感覚、ノリがありましたね。(キヤノン・アートラボ活動の) 最初のうちは、勉強しなきゃねと言いながら、なかなか芸術の勉強はできなくて技術志向になっちゃう、というのはありましたね。

四方：三上さんの作品 (アートラボ第5回企画展、第6回企画展) 辺りから変わったんでしょうか。

玉井：そうですね。

第6章 成果

四方：当時のメディアアートは、暗い空間が必要なものが多かったので、スパイラルで行うのが難しかったんです。スパイラルは、アトリウムの上を遮光しないといけないので。会場が暗くでき、気持ち的にも音響的にも隔絶させられるのは、地下の空間。企画展ではヒルサイドプラザ、プロスペクト展ではP3を使いました。P3自体、インゴ・ギュンターとか三上さんなどのアート&テクノロジーの展覧会を実施していたので、親和性が高かったと思います。プロスペクト展の3回目から5回目はスパイラルになりましたが、それはP3が閉じたことと、その頃からプロジェクションの輝度が増して、光が入る空間でも展示できるようになったためでした。

阿部：P3は当時三上さんがフランチャイズ的に企画展示をやっていました。バックミンスター・フラーであったり、ジョン・ケージであったりを企画展示していました。ライブではメルツバウなどがよくやっていました。ちょうど方針としてもアートラボと合いました。ニュー・エイジ、メディアアートみたいなものが、非常に合う場所でした。アートラボでは第1回プロスペクト展で、ウルリーケの《TERRAIN》ともう一つ作品。

四方：《BREATH》。

阿部：《BREATH》をやったのですが、これはなかなか壮大な作品でね、すごかったんです。

《TERRAIN》はこの後に、1997年のICCのオープニングのときに、縮小版がコレクションに入りますが、そのときより全然、P3での展示の方が壮大でスケールが大きくてすごかったですね。今のロボティクスブームを先端的に取り入れて、鳥のボイドプログラムみたいな非常にシンプルなルールを持ったロボットが、集合的に動いたらどうなるかということを実装していて非常に最先端の表現でした。

関口：ALを取り入れ始めて、作品化し出したのはこの頃ですか。

阿部：そう、最初のALブームでした。

関口：後はALifeも含めて、AIの学会が日本で始まったのもこの頃。

阿部：すぐ取り入れてやりました。

四方：ALがテーマになった1993年のアルスエレクトロニカ（フェスティバル）に《TERRAIN》が出ていて、ALの提示する問題系も含めて、この作品を紹介できないかなと思いました。

阿部：小さい規模でしたよね、アルス（エレクトロニカフェスティバル）のときは。

四方：そうですね、初の展示でしたし。

阿部：アルス（エレクトロニカフェスティバル）では少数のロボットでしたが、P3では理想形というほど大きな規模に拡張してやったわけですね。

関口：アルスの方が展示は先ですよ。

四方：先です。プロスペクト展での展示は、1995年なので。

第6章 成果

阿部：アルスのがプロトタイプのようなものでした。例の、何十個あるか分からないけど、結構な量で脳波を計測するソフト、

秋定：Macの脳波可視化ソフトのイーバ（IBVA）です。

阿部：イーバを使って、それによって光が反応して、光によってソーラーセンサが活性化するという循環構造が起きる作品でした。

四方：オウムのサリン事件が3月にあったばかりで、大変な時期だったんですよね。設営時期に、テロの予告が新宿あたりであった。ロボットが動くフィールドの「ステンレス」が、同じ名前で発注しても日本とヨーロッパで違っていることを、現場で届いたときに初めて知って。ヨーロッパではステンレスは磨いてなくて、届いたのが磨かれたステンレスで。表面処理しないと作品がうまく稼働しないということで、化学系の溶剤を撒（ま）くことになり手配したのですが、テロ予告の時期と重なっていてかなりひやひやしました。

●AL5 アートラボ第5回企画展 三上晴子「Molecular Clinic [モレキュラー クリニック] 1.0 on the Internet」 (1995年～1996年)

関口：それが終わって今度は三上さんの第5回と第6回が始まる。説明を見て、アートラボ企画展の第5回と第6回、ネット上でやるのとVR上で展開するという話は元々最初の段階で同時に起きたということなんですけど、これはどういう形で始まったんですか。

四方：1993年ぐらいに、インスタレーション作品を前提に打診を始めていて、プランが出ました。その後のやりとりの中で、インターネット上の展開が浮上して。インスタレーションをその後にするという、一人のアーティストの企画展を連続で開催する案へと発展していったんです。三上さんがニューヨークに滞在し始めた頃、インターネットが面白くなっていて、コンピュータウイルスとかアーティフィシャルライフの最前線にリアルタイムで触れていたんで、これまでにないものができるはずだと。

阿部：インターネットが民生化、一般化されてすぐのときでしたね。三上さんはニューヨークではベル研究所に所属しており、ネットやハッカーとの繋がりがあったこと、もう一つはモレキュラーテクノロジーという、何らかのコマンドでプログラムを与えると全ての粒子を色んな形を生成できるという、今の3Dプリンターの元になるような考え方がありました。三上さんはそれらにはまり込んでいて。先端科学の思想を、ずっと研究して来っていて、第5回と第6回の2つのプロジェクトに分化した、のだと思います。

関口：今から考えると、ネットワーク展示をこの時期にやるって言うのは、かなりリスクな部分もあったと思うのですが、開発側はそういう考えはなかったんですか。

第6章 成果

玉井：この当時は、ウェブの世界というのはこれからすごいことになるんだろうと想像してたので、技術的にはすんなり入れましたね。当時は、ウェブサーバのソースコードを読んだりもしましたよ。

阿部：検索エンジンもなかったですよ、当時。

四方：AltaVistaとかあったけど、まだ少なかったですね。

阿部：一般化はしてなかった。

玉井：クローラーもあったことはあったのですが、今のようないろいろは全然なくて。

関口：そういう意味では一般的でもなかったし、なかなか外でアクセスする環境でもなかったと思います。

玉井：まず通信速度がものすごく遅かった。大体の方は自宅からモデムでアクセスするような時代ですから、非常に遅い。三上さんの作品も相当怒られた。絵をいっぱい出すものですから、環境によってはずーっと待っても出て来ないよと言われてました。なので、三上さんには、画像を軽くしてと相当注文しました。

四方：（アートラボ、写真新世紀があった）文化支援課のサイト CAST（Canon Art Support & Traffic）ができたのもほぼ同じ時期ですよ。

玉井：そうです。アートラボのサイトは六本木に専用線を引いて、そこのサーバに直接アクセスしていただくように作りました。

関口：結局展示は、六本木のアートラボの事務局で展示、ということになりました。

玉井：オープニングはそうですね。

四方：アートラボ第5回企画展は、会期の最初辺りに、2週間ほどアートラボに端末を置いて公開しました。それぐらい、インターネットにアクセスできる人が少なかった。

玉井：少なかったですね。

阿部：この培養器フレームは（カタログを指して）。

四方：これはレンダーウェア（RenderWare）です。

阿部：レンダーウェア、（秋定さんが）開発したんでしたっけ。

秋定：Mac版は私です。

玉井：Mac版は彼で、Windows版は磯沼君。

秋定：後、このところにも出るんですね、CGが、ちょっとカクカクっていうか、リアルタイムには動かないけど。角度を変えればこう。

四方：レンダーウェアは、キヤノンの関連会社が作ったものですね。アートラボでは、キヤノン関係の技術を使う、ということを機会があれば行いましたね。

玉井：レンダーウェア社はイギリスの会社で。それを買収して、その技術を磯沼君は完全に向こうに行って、技術を習得して来て、レンダーウェアの日本語の技術書も磯沼君は書いたんです。

四方：この頃からキヤノンの技術もうまく使えるといいな、という話を結構していた。

玉井：そうですね。もっと技術の範囲を広げたいというのと、それから、要は 2D からの脱却ですよ。

四方：そうですね。

阿部：このユーザインターフェースのデザインは、どういう風に進めたのでしょうか。。

玉井：これ、三上さんがデザインしてきたんですよ。

阿部：三上さんが指定して、こうして欲しい、みたいな。

玉井：うん、ポンチ絵みたいなのを描いて来て。

四方：そうですね、ありました。

玉井：使うファクターはこういうの、こういうの。そのファクターをどういう風に影響させるかは、お互い両方で意見を出し合って、考えて。ここで本当のコラボレーションが行われた、と言えます。

阿部：三上さん、プログラムは全然関わってなかったのですか。

玉井：プログラムは関わっていません。

阿部：本人はやってない。

阿部：素材は。

秋定：データは作りましたね、このクモの、DXF。

玉井：モデリングデータなどは彼女からもらっていました。

秋定：取り込んでと。

玉井：Softimage3D を使っていたでしょうか

秋定：それとも 3DstudioMAX か。忘れました。

玉井：その手の市販の 3D ソフトを使って素材を彼女が作って。アルゴリズムはこちらで作って。

阿部：これは細胞培養の母体のイメージを何にするか、いろいろな案が出て。最終的にクモになった、ということですね。ウェブということで、スパイダーに。

●AL6 アートラボ第6回企画展 三上晴子「Molecular Informatics [モレキュラー インフォマティックス] —視線のモルフォロジー」 (1996年)

関口：このアートラボ第6回企画展での VR 表示は、リアルタイムレンダリングであの 3D データで表示すると、すごく重かったと思います。計算的には。あれも SGI ですか。

玉井：PC ですね。アートラボ第6回企画展はインターグラフですね。

四方：突然機材を変えたんですよ。展示は 1996 年 3 月なんですが、年末にインターグラフにすると。ギリギリになって変えたという経緯がありました。

阿部：その理由は何だったんですか。

四方：インターグラフが出たから、WindowsNT が使えると。エンジニア側と確認して、それで行きましょうということになった。

阿部：それは三上さんの都合？

第6章 成果

秋定：一応資料を見ると、ワールドツールキットっていう VR ツールと、TD8、インターグラフを三上さんが。

玉井：持ってきたんだっけ。

秋定：FAX してきて。そういう資料もあります。

四方：三上さんが提案したのを、取り入れたのかな。

玉井：そこは資料がないと分かりません。

秋定：ただ、まあ SGI のプランもあったような気がします。

玉井：安価なソフトウェアとして、ウォークスルーができるような表現ができるようなものは限られていたんです。高級なものは幾らかありましたけれど。ある程度のスピードがあって、予算内に収まるものというので、決めたはずです。

関口：リアルタイムにデータ出力されて、自動的に描画されるのは相当重たいですよ。

阿部：モレキュラーテクノロジーは、3D のボールモデルじゃないと駄目ということになり、これでもよく見ると全て面取り多面体になっています。演算にすごく掛かるから。それをどう解決するかは、かなり言われていて。それでも描画の最後の方になって来ると、カクカクとゆっくりになります。

玉井：そうですね。

阿部：たくさんモレキュラーが増えて来るとね。

阿部：体験が何分でしたか。

四方：4 分でした。アートラボ第 6 回企画展ではキャノンの視線入力技術も使いました。キャノンが 1992 年に視線入力カメラを発売していたので、その技術が使えないかと持ち掛けて、やりましょうということになったんです。

玉井：それって三上さんから言ってきたんじゃないの。

四方：私から。

玉井：多分、身体的なそういう情報を何か取るという。

四方：「知覚のインターフェース」と、彼女は言っていましたね、当時から言っていたかは、今思い出せないけど。視線入力カメラには、私の方でずっと興味があって、三上さんに視線入力はどうかと打診した。

玉井：ああ、なるほど。

関口：それはキャノン製だったんですか。

四方：キャノン製だったんですよ。ただ視線入力技術や視線を可視化する装置自体は、日本のナックという会社が国内外で有名で、その製品を 80 年代末に知り合いのドイツのアーティストが使

第6章 成果

って、視線によるドローイング作品を作っていました。そのこともあって、視線入力技術に個人的に興味があったので、キヤノンに技術があるなら使えないかと、かねがね思っていました。

玉井：その技術は技術志向というよりは、製品でもう出ちゃったので。

四方：そうなんです。

玉井：市販のカメラの中に含まれた形で出ていたんです。その技術を使えないの、という話があって。それをゴーグルの中に入れましょうと。

秋定：EOS5 だったかな。

玉井：ピントを合わせるのに、目の見ている所で合わせるというのが、実際の製品の中に入っていました。その部品を開発したメンバーを引っ張り込んで、ゴーグルにその素子を付けてもらいました。

秋定：それだけ依頼したわけじゃなくて、たまたま視線入力する HMD があったと思います。プロトタイプとして。

玉井：HMD はまだ事業になってないところでした。電子映像とレンズ事業部が取り組んでいました。



図 6-27 AL6 アートラボ第 6 回企画展 三上晴子「Molecular Informatics [モレキュラー インフォマティクス] —視線のモルフォロジー」 (1996 年)

四方：視線入力ありますね、キヤノンのね。カメラはキヤノンの EOS 5QD ですね。銀塩フィルム用のね。それが 1992 年 11 月に発売されている。

四方：実は、ウルリーケ・ガブリエルもアートラボ第 3 回企画展の VR の作品で、見たものが活性化するようなことを構想していて。結果的には、位置センサでの体験者の位置や、データグローブ

第6章 成果

で仮想空間の中のポリゴンを歪（ゆが）めたり活性化させるインタラクションになったんですが、当初彼女は、視線入力的なことを考えていました。当時はVR作品に取り入れられる視線入力技術は見つからなかったのですが、ずっと気になっていたこともあり、キヤノンの視線入力カメラのことを知って、三上さんに提案したんです。

阿部：当時はプロトタイプHMDをスカウターと言っていましたが、何台作ったのでしょうか。

玉井：5台。

阿部：5台。バックアップを含めてですか。

玉井：バックアップを入れると6台でしょうか。我々のところに来たのは5台だったと思います。

阿部：ロゴを三上さんが貼っていたのを覚えてますよ。

玉井：あれは、レンズ事業部が試作品として作っていたものを、使ったんです。だから個体数が少ないものですから、高い。多分一体50万ぐらいとかそれぐらいだったんじゃないかなと思います。

阿部：ゴムで止めてとか、こっちで仕様をいろいろ変えたりしました。プロモーションビデオでどうやってくださいという指示を、僕がやっているんです。メガネを掛けて。

四方：ああ、記録映像で、体験者の案内とキャリブレーションをやってましたね。

玉井：その時は、デバイスとしてその視線入力HMDと、それと今監視カメラで出ているカメラの大きいのがあったのですが、それらを使ったというのが、デバイスとしては新しいところですね。

四方：監視カメラを使っていましたか。

玉井：監視カメラをそのまま使うんじゃなくて、その雲台を使いました。

要はリモートコントロール、鏡を付けて映像を反射させて動かすというものです。

阿部：見た視線の行き先に、雲台でプロジェクションがムービングで空間内にあちこち動くというのは自作したんでしたね。1人の体験者が見ている映像の視線の運動が、周りで見ているお客さんにも分かるようにといった意図でした。

関口：実際ね、描画でそれやったら計算追いつかなくて大変ですもんね。

四方：監視カメラ技術を雲台に使った、って具体的にどういう意味ですか。

玉井：監視カメラの雲台部分を使った。

関口：向きだけ。

玉井：動かすだけなんですよ。そこに特別なアルゴリズムがあるわけではないんですよ。

●アートラボ第2回プロスペクト展 「Virtual Cage [ヴァーチャル・ケージ]」（クリスティアン・メラ）（1997年）

関口：その後、クリスティアン・メラの第2回のプロスペクト展をやりました。そのとき、メラはほかで何か所かで展示をして。

阿部：スパイラルでも同時にやりました。これにはキヤノン・アートラボは関わっていません。メラが連れてきた技術や音響チームが手伝いました。主催はスパイラルと東京ドイツ文化センタ

第6章 成果

一。スパイラルの展覧会のキュレータも四方さんと僕で。P3でのプロスペクト展はキャノン・アートラボとして、スパイラルはキャノン・アートラボの枠外で。

四方：共同キュレーションということ。

阿部：そのときのスパイラルの担当は、住友文彦くんですね。この3人でスパイラルをやり、P3の方はキャノン・アートラボチームだけでやって、表参道（スパイラル）と四谷（P3）でほぼ同時に公開したという感じです。

四方：スパイラルは新作でしたね。

阿部：P3は旧作のアップデートだったんですが、スパイラルでのメインの作品《オーディオ・グローヴ》は、プリ・アルスエレクトロニカの準グランプリ（ディステインクション）を取ってるんですよ。インタラクティブ・アート部門で。

阿部：実は《Virtual Cage》は、フランクフルトでの初公開時は、とても小さいスケールだったんですね。あまりに非常に効果的な作品だということで、今度は東京では壮大な規模で、P3全体にレーザー光線とスモークを焚（た）いて拡張してやるみたいな形でやったのですね。メラーとしては同じ作品は2度展示しないという不文律があったのですが、スケールアップする意味で、メラーとしても非常に挑戦的だと本人にも認めてもらって、東京版が実現したという経緯があります。こんな規模でやることなんて全く考えてなくて、みたいな。実は山口情報芸術センター〔YCAM〕の会田大也くんが学生時代これを見に来て、一日中朝から晩までインスタレーションの中にいたということを言っていました。この体験があまりにディープで、メディアアートの方に進むという人生を左右した経験だったらしいです。この作品はたしかにインパクトは相当に大きかったかもですね。体験性や没入性という意味で。



図 6-28 アートラボ第2回プロスペクト展 「Virtual Cage [ヴァーチャル・ケージ]」（クリスティアン・メラー）（1997年）

玉井：この作品はね、当時の技術部隊の事業部長が雲台部分を使った作品を見に来て、月に一回、事業部にメッセージを出す媒体に、技術者もたまにはこういうの見に行って、自分の技術にとどまらない所を見た方がいいよといったメッセージを流してくれました。

関口：彼みたいな作品のタイプだと、社内開発でデバイスに技術を入れて行くという感覚と比べると、空間的にも広がってオープンに技術を使って行く感じで、少し方向性が違うと思う。そういうのに新鮮な印象というか、大分違うという印象は受けますか。

玉井：そうですね。だから自分たちが何か開発するのと違った意味で、新鮮な感覚を開発者は感じると思います。多分それは、我々の頭の中で感じたのと同じだと思うのです。私の印象はそこがものすごい強かったですね。

四方：実はこの作品、招聘前は映像しか見たことがなくて。

玉井：体験すると。

四方：実際に体験してないのにキュレーションして実施することは、リスクもあるし通常やらないんです。でもやはりこれは自分でも見たいし、日本でやる意味があると思って招聘した。

阿部：僕も最初にこのレーザーの水面、仮想の水面がばーっと出たときはぞよっと来ましたね。いまだに覚えています、おお、すごい、みたいな。ちょっとしただけで動く、みたいなね、変化するっていう。

関口：その空間の中にいる、っていうのがね。やっぱり感覚全然違うからね。

阿部：このメラーぐらいから、メディアアートが公共空間や都市に影響を与えて行く可能性が開けてきました。

四方：1992年にメラーは、環境を計測してインタラクティブに反応する作品を公共空間で行っています。フランクフルトの建築で、周囲の温度や風速、風向や音などのデータによってファサードの色や波形が変わるといって、私が知る限り世界初の環境に反応するパブリック・プロジェクトです。彼はそれを、「インタラクティブ建築」としてやっていた。

阿部：プロジェクションマッピングのはしりですね。全然早い。25年ぐらい前ですね。

●AL7 アートラボ第7回企画展「IO_DENCIES [テンデンシーズ] —情報からの都市への問い」（ノウボティック・リサーチ（KR+cF））（1997年）

関口：これはモバイル環境（注：インストール空間内で携帯端末を使って情報を得るシステム）の中で、空間的に作品を見るという極めて現代的で、今の技術に近い形での、一番最初のタイプでしょう。一方で当時無線技術も少ない中で、これを取り入れるのは、すごく見せづらい作品だったかなと思います。

玉井：難しい部分がいっぱいありましたけど、ほとんどがノボたちのアイデアで、様々なもののデバイスを彼らが持ってきました。逆に我々の方はサーバ、クライアントのコンピュータ技術を使って、色んな通信をやりましょうと、通信プログラムを我々開発部隊が作りました。我々が技術を出

し、自分たちでアイデア出して、描画しましょうって言ったのはこれなんですよね、これは我々のアイデアで取り入れた。

秋定：（クライアント端末のプログラムは）Java アプリで。あ、これですね。



AL7 アートラボ第7回企画展「IO_DENCIES [テンデンシーズ] —情報からの都市への問い」
（ノウボティック・リサーチ（KR+cF））（1997年）

玉井：うん、これはサーバ間の通信がどういう風に行われているかというのを可視化するものです。これは磯沼作ですね。

四方：サーバ間の通信の可視化については、見せるかどうか、すごい議論しましたね。私としては、この作品はサーバ内で起こっている、見えない情報の「IO_DENCIES [テンデンシーズ]（傾向）」の変化が重要で、それは可視化できないしする必要はないかなと思っていたので。見えないことこそが、このプロジェクトでは重要だと。

玉井：そうですね。

阿部：でも、今から考えると色んな部分で、非常に先駆的ですよね、スマホのようなデバイスも自作で導入してるし。

関口：これは当時の印象として強いですね。

玉井：ノボにしても、いいねって言ってくれた気がしたので。

阿部：トレーサビリティを表示出しちゃうとかね。

関口：むしろそこが真骨頂な気がします。

阿部：情報エージェントを作り出して多層に走らせ続け、それによって全てを動かすみたいな構想も、ものすごく先駆的だし。

玉井：彼らは技術力があつたので、どういう所を我々がカバーして行ったらいいかが一番難しかったアーティストですね。そういう経験がなかったのも、これまではどちらかというと自分たちの持

第6章 成果

っている技術をうまく使えば、うまくこなせるのですが、このときは彼らがプログラマーも連れて来ていますし、そういう意味では難しい作品作りでしたね。

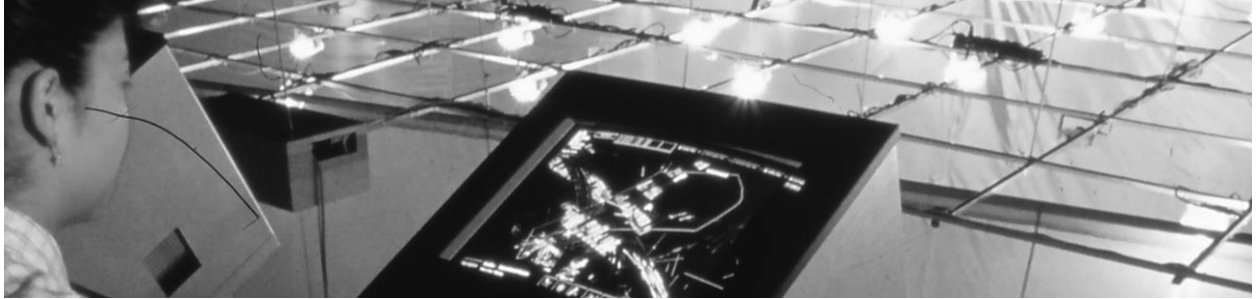


図 6-30 AL7 アートラボ第7回企画展「IO_DENCIES [テンデンシーズ] ―情報からの都市への問い」(ノウボティック・リサーチ (KR+cF)) インターフェース

阿部：市川創太さんにこのプロジェクトに都市リサーチャーとして入ってもらって。この後に彼は、多摩美術大学の情報デザインで、三上さんと一緒に演習を持つということにつながるわけですね。ここから平川紀道くんとか、毛利悠子さんとか、今の若い世代のすごい才能が輩出するという。全部これが縁だったのですよ。

四方：私も三上さんと一緒に演習を持っていて、3人で同じ学生を担当しました。その後三上さんは、市川さんと《GRAVICELLS》(2004年～)を共同制作しています。多摩美術大学の後ICCでプロトタイプを展示して、翌年山口情報芸術センター〔YCAM〕で阿部さんキュレーションのもと、壮大なインタラクティブ作品として発表されました。

関口：そのときに市川さんはどういう立ち位置だったんですか。

四方：都市リサーチ・コラボレーターですね。

四方：アートラボ第7回企画展では、「都市リサーチ・コラボレーター」ですね。

阿部：市川さんは都市フィールドワーク担当ですね。建築家だったので。

四方：彼は1998年に初個展「2 SKINS」を開催するんですが、当時はまだ作家的な活動は始めてなくて。コラボレーターとしてリサーチに入ってもらいました。この頃、ノウボティックと三上さんはお互い良く知っていて、そこに市川さんも紹介して。キャノン・アートラボに関わったアーティストのネットワークができていました。

●アートラボ特別展「LOVERS / frost frames」古橋悌二／高谷史郎(1998年)

関口：それで特別展として、古橋君と高谷さんの展示。これは古橋君が亡くなって、追悼展という形でやったということですね。

阿部：はい。このポイントとしては、ここで初めてダムタイプの高谷さんにソロでやってもらった。これは僕がかなり高谷さんを押して、ソロでやるべきなんじゃないかと言って。本人はソロでやる気は全くなかったんだけど、古橋さんの追悼ということで、個人名で初めてやることになっ

第6章 成果

た。実はこの《frost frames》で、唯一高谷さんと池田（亮司）さんがコラボをやってるんですよ。それ以降はやっていないんです。ダムタイプとしてはやってるけど、個人名ではやってない。

四方：高谷さんのソロについては、私のアイデアであった気がするんですけど。阿部さんと話している中で、どちらともなく出てきたのではと思います。高谷さんは、古橋さんが亡くなった後ダムタイプの中心的存在になって、1997年に《OR》を発表したところでした。《LOVERS》に関わってきた高谷さんですが、彼のソロ作品を見たい、と思ったんです。結果、《frost frames》は、とてもいい作品になりました。高谷さんの機器のスペックから発想する映像や光学的な実験は独特で。

関口：これの実際の復元のときには、どういう形で行ったのでしょうか。単純に設計図があって、それをそのまま復元したのでしょうか。

四方：《LOVERS》は、キャノン・アートラボの展示の後に、「国際バージョン」として変更を加えた後海外を巡回したので、国内初展示でもありました。古橋さんの指示で壁プロジェクションのテキストを大幅に減らしたり、体験者がセンシングされるとその人の周りに円形にプロジェクションされるテキストもなくなりました。機能を削ぎ落とした最終形を、MoMA（ニューヨーク近代美術館、以下 MoMA）に收藏される前に見てもらおうと。

阿部：凱旋（がいせん）記念でした。それでスパイラルの吹き抜けの奥の空間、完全に天井部分を真っ暗な黒幕を張って閉じて真っ暗な空間を作った。

四方：1994年の《LOVERS》への注目もあり、1996年にアートラボがメセナ大賞の審査委員特別賞を受賞しました。そのことで、アートラボが存続した気がします。

阿部：しかも MoMA の作品は、キャノンからの寄贈という形で出したんですね。この展示が終わって、そのまま MoMA に行ったと思います。

●AL8 アートラボ第8回企画展「SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ]」（江渡浩一郎）（1998年）

四方：江渡さんは、ICCで1995年の「ICC on the Web」に関わったり、1996年に「センソリウム」へ参加したりと、プログラミングやインターネット技術に強かった。

阿部：「センソリウム」を作っていたんですね。それでプリ・アルスエレクトロニカで大賞を取った。

四方：プログラミングとアートの両方が分かる人だったけど、空間を使ったインスタレーションの経験はなかった。アートラボで初のインスタレーションを、という話をしたのが最初。

阿部：それと、坂本龍一と岩井俊雄のコンサート《MPI X IPM》のネットワークも全部江渡君がやってたんですね。あれもアルスで大賞を取って、アルスで公演もしてる。

第6章 成果

四方：1997年に話を始めた当時、江渡さんはコミュニケーションをとるのがすごく難しいタイプ。今は柔らかくなって、普通に話ができるのですが、当時はすごくロジカルで厳密だったのでエンジニアさんには、話が通じやすかったと思います。

玉井：彼は技術者だから我々はいまよくコミュニケーションとれたと思います。技術面で我々が何をやるべきか、というのはすごく考えさせられましたね。

四方：プログラミングとアート両方分かっていますから。

玉井：我々がやったのは、実際に動くロボットたちの位置センシングですよ。それをカメラ一台で撮りましょうと。要は個体識別と場所センシング。そして、全体制御。

阿部：独自でやったんでしたっけ。

玉井：そうそう、それは我々で全部作りました。

阿部：先駆的ですね。今やってたら、監視テクノロジーの方に応用してる。

四方：本当にそうですね、この作品。インターネットとインスタレーションを結んだのは、前の年のノウボティック・リサーチ（アトラボ第7回企画展）が最初でした。

関口：この間インタビューして、話を聞いて面白いと思ったのは、通信にFMを使うなど、そういった所が特殊で、総合的に作られている所が面白いと思いましたね。

玉井：そのアイデアは、全部江渡ちゃん自身からなんですよ。

阿部：彼はネットワークの技術者ですからね。

玉井：ネットワークのプログラムも、彼がオープンソースを持って来てくれました。

関口：カメラは赤外線バンドまで使って、センシングする感じですか。

玉井：赤外線バンドですね。フィールド全体が撮れる広角レンズと、ロボット上部にLEDを使っているのですが、LEDのところに光学フィルターを付けました。可視光の範囲をカットするんです。赤外光だけ出すように変えています。

関口：それで見えないようにした。

玉井：見えないようにして。

阿部：ロボティクスの開発はキャノンでやったのでしょうか？

玉井：確か筑波大学の人だったと思います。

関口：筑波大学の人で。ただロボット関係の図面は、一切自分の方で持ってないということでした。キャノン・アトラボで撮った写真資料にはロボットの一部分が写っています。

阿部：本人は現物を持ってないんですか。

関口：持っていないようです。

阿部：あら、もったいない。

関口：通信関係の、一部をコントロールするためのセットは、自分で基盤を作ってるから、持っているようです。

玉井：動くロボットは全部江渡さんが制作されたということですね。

阿部：じゃ、そのサウンド機構の方も筑波大学の先生が作っているのでしょうか。

四方：山口優さんっていうサウンドアーティストに、江渡さんがお願いしていましたね。



図 6-31 AL8 アートラボ第 8 回企画展「SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ]」（江渡浩一郎）（1998 年）

関口：端末入力のインターフェースは、キヤノン・アートラボの方で。

玉井：作りました。

秋定：これも私がやりました。ただ、最初のベースは江渡さんから技術的なことも提案がありました。

玉井：基本的な作りだとかね。

秋定：後、音楽系の **Beatnik** っていうプラグインを初めて導入して、ピコピコ鳴るようになったんです。それも江渡さんからの提案で。これはレンダーウェアじゃなくてカスタムで作った。

玉井：この辺から **Java** ですよ。アートラボ第 7 回企画展の頃から。

秋定：そうですね。アートラボ第 5 回企画展のときは、あれは **Java** じゃないですよ。あれはレンダーウェアでした。アートラボ第 7 回企画展から **Java** ですね。

阿部：このときはインストールとして会場をヒルサイドで想定して作ってるので、ヒルサイドでうまく見えるようなサイズ感になっています。《LOVERS》辺りから全部そうですね。

関口：これも当時は、どこを見たら良いんだろうと見られてた所もあると思います。現在だと皆、すぐ受け入れるそうです。なかなか見る視点が多すぎて、分かりづらいと思っていた人たちが多かったと思う。そこはやっぱり大分先駆的だった。

四方：AL 的な見方もできますね。ロボットは、最低限のルールを持ちながらそれぞれ自律的に動いていて。全体で音の生態系を作っていた。あと、感染ゾーンがあって、会場の体験者が端末で、

第6章 成果

複数の感染エフェクトをロボットに加えることができましたね。そのゾーンをロボットが通ると、感染して音が変わってしまう。

関口：後ね、想像以上にスムーズだったので、それを素直に受取ながら見る習慣がまだなかった。ギクシャクしてくれた方が解釈しやすいという、当時はね。

阿部：入力インターフェースがグリッド構造になって、簡単な十二音階の音列を全部入れられる。それを全部ウェブからやれるっていう所がミソで。

関口：曲は全部オリジナルで作ったのでしょうか。山口さんが。

阿部：ウェブからやれて、それをリアルな世界に反映するという。

関口：ユーザはあるけど、オリジナルだって、それをベースに引っ張り出して、ですよ。

四方：音色は基本が決まっていて、インターフェース上で1オクターブの幅の音階と音符の数が決まっていて、そこに入力して送信すると、ロボットがそのフレーズを反復し始める。

玉井：音は音階。

阿部：マトリックスで入力する。

玉井：技術的な観点から見ると、これは音楽と言って良いと思うんですが、自分で曲を作るような感覚で、それが勝手に第三者の環境によって音を交換していったって、どんどん曲が変わっていったって、それが全体で見ると曲のような感じに見えるという。

四方：江渡さんは、最初クジラの歌が変わる話をしていましたね。

玉井：最初はそうでしたね。

四方：クジラが出会うと、互いに音を交換していく、それによって毎年歌の流行が変わる。そのようなことをやりたい、というのが最初のプランでしたね。

玉井：新鮮な感じがしましたね。

関口：そこがクリーチャーズって言う命名の元だとは思いますが。彼が言っていたのは海の中の特定の温度層でクジラの声とか音が一定にたまる層があって、太平洋の端で発生した音が反対の端に届くという現象があって、何か、インターネット上で音を使ってチャットしているのと似ているということからだったと。

阿部：この感染ゾーンに入ると突然変異でガラッと変わってしまうというのは、非常に面白いアイデアでしたよね。

四方：あと、音や音環境を形成する作品だけど、ロボットにスピーカー付いてて、音が移動するのが面白いですね。

玉井：音が流れるような感じがするんでね、面白かったですね。これもブリ・アルスエレクトロニカに応募して、入選した。

四方：オナラリーメンションになったんですよ。ノウボティック（・リサーチ）は、ゴールデン・ニカ賞を取りましたよね。

玉井：そうですね。

関口：ではそろそろ時間がなくなりましたので。

第6章 成果

阿部：まだアートラボ第9回企画展の話もあります。

関口：今日は残念ながらアートラボ第9回企画展以降までは行けませんでしたね。

本日はお忙しい中、お時間を取っていただきまして、どうもありがとうございました。

6.4 アートラボ第8回／第9回企画展の作品プログラムの実行状況

6.4.1 1998 年アートラボ第 8 回企画展《 SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ]》作品プログラム

作品には展示に合わせていくつかのバリエーションが存在するが、インスタレーション版、ウェブ版の大きく2つに分けられ、プログラムソースからそれぞれ最新バージョンを中心に動作検証を行った。

マニュアル等のdocファイルは現行のwordのバージョンでは開けなかったものが多かったため、全てpdfに変換して利用した。作品は6つの稼働ブロックに分けられている。

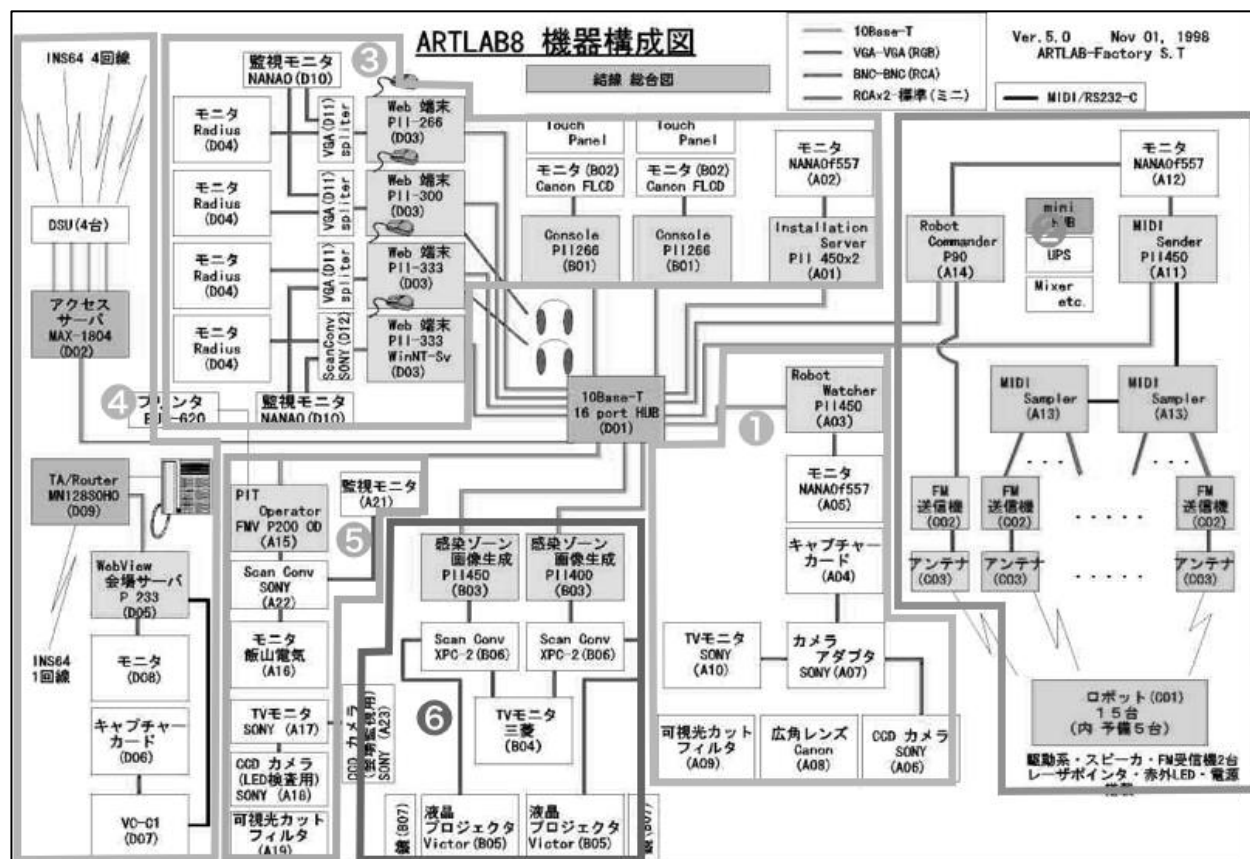


図 6-41 アートラボ第 8 回企画展システムブロック分類図

① RobotWatcherについて

- ・「TVモニタ」「CCDカメラ」は監視用のためシステムから除外する（ロボットの位置判定に使用）

第6章 成果

システム図では CCD カメラ、キャプチャカードを用いているが、代替として USB カメラを使用する（のちに赤外線カメラで検証予定）。ロボットの上部の赤外線 LED マーカー（図 6-52）をキャプチャするために用いると思われるが、現時点では解析の確認はできていない。



図 6-42 USB カメラ稼働状況（左）、右-ロボットの LED マーカー配置パターン（右）

動作条件として Channel.ini の IP を 127.0.0.1 に変更し、JavaApp/InServer 内 InsServer.java、SmallServer を起動させて動作を確認した。

② RobotCommander MIDISender

1.JavaApp / RobotCommander は動作確認できず。ロボットがないためだと思われるが、要検証

2.JavaApp / MIDISenderはそのままではNullを返すのみだったが、IPを127.0.0.1に変更したところ、InsServerにデータ送信されるのを確認。

MIDISender-MIDISampler 間はハードウェアの Sampler 若しくはソフトウェアで検証予定



図 6-43 展示ロボット(現存せず)

第6章 成果

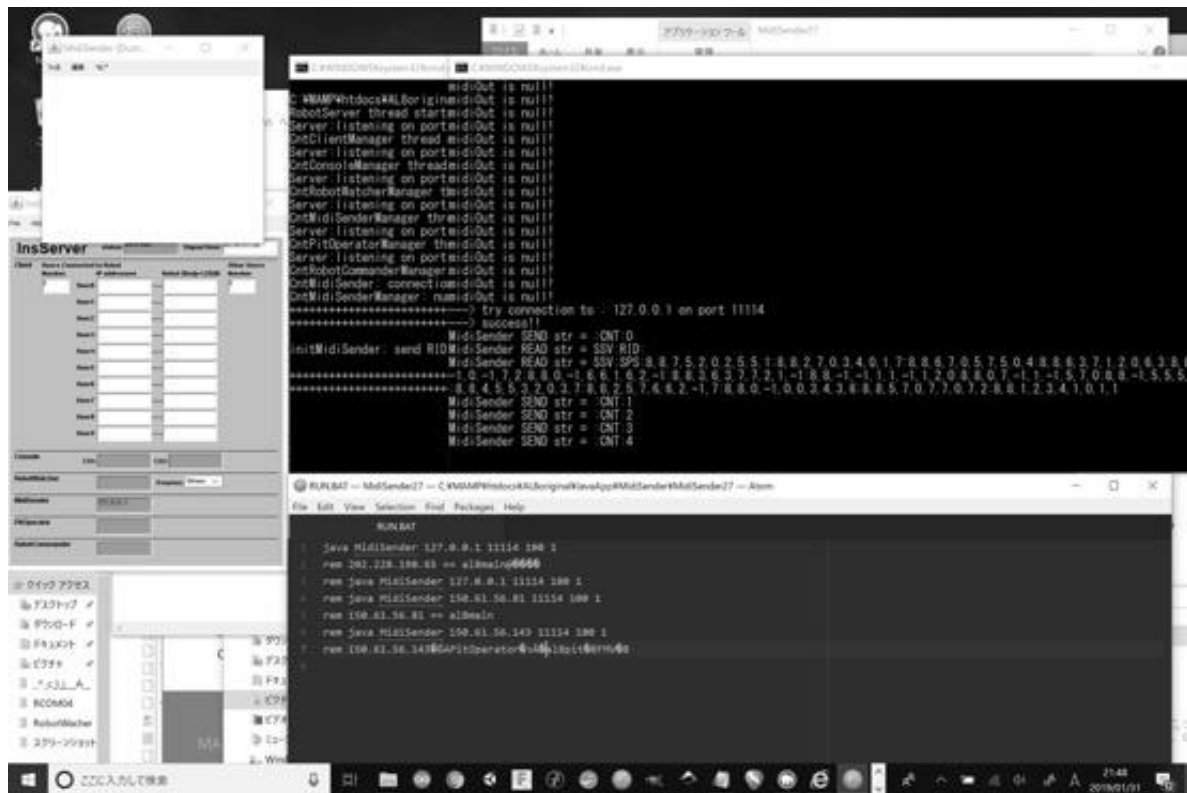


図 6-44 ウェブ端末 コンソール稼働状況

② Installation Server／Console／Web端末

・ InstallationServer [20010830AL8HK] > [dev] > [InsServer]run_localとSmallServerで検証、動作を確認。

・ GUIのOperationのPrepareボタンを押すと各ロボットがReady状態になり、上部のStartInst.

開始されると思われる。現状ではRobotWatcherとの接続がされていない

ため、エラーメッセージが出て開始されない。[dev] > [DummyRW15] >

run_localを立ち上げたところエラーメッセージが消え、シミュレーターの動作が確認できた。

・ その他赤色の項目（Console1,2・MidiSender。RobotCommander）の動作は現時点では確認できていない。各プログラムの接続IPをローカルサーバ127.0.0.1／11113に変更したが反応はなかったため、要検証。

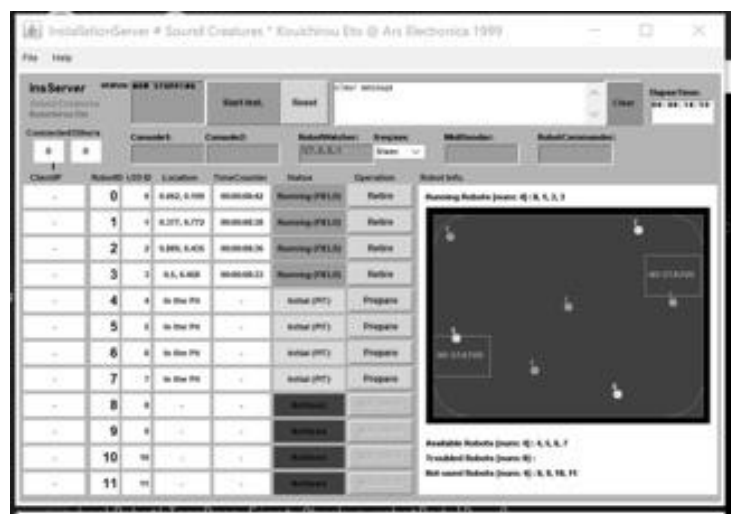


図6-45 ロボット配置環境稼働状況

第6章 成果

・ Web 端末 [dev] > [ClientApplet]を検証ブラウザが Java のセキュリティのため、アプレットをブロックし、確認ができない。MAMP にてアパッチサーバを設置し、セキュリティの除外をした場合でも、高い確率でブロックされるため、動作が確認できず、検証が必要。

④ WebView会場サーバ

VC-C1 (communication camera) を動作させるためのサーバ環境だと思われる。システムに直結する部分ではないと思われる

⑤ PIT Operator

・ [AL8original]>[JavaApp]>[PitOperator]
> {PitOperatot16} > Run_MySmallServer /
RUN を検証した。

＊この際前項の InsServer、SmallServer が立ち上がっているとエラーが出るため、ここでは独立したブロックとして検証する。

・ また、[AL8original] > [JavaApp] > [DummyRW]>[DummyRW15]>run_local
を起動

＊指示書では DummyRW11 と指定があったが、該当するフォルダがなかったため、15 を用いた

・ GUI の SoundTest ボタンを何度か押すことでロボットの起動を行う。前項と違って Dummy のロボットシミュレータが動作しなかった。IP などを再確認する必要がある。

＊ロボットがないため、実際の動作を再現するのは難しい。

また音は出なかった。Java の問題か、ロボットから音が出る設定か検証が必要である。

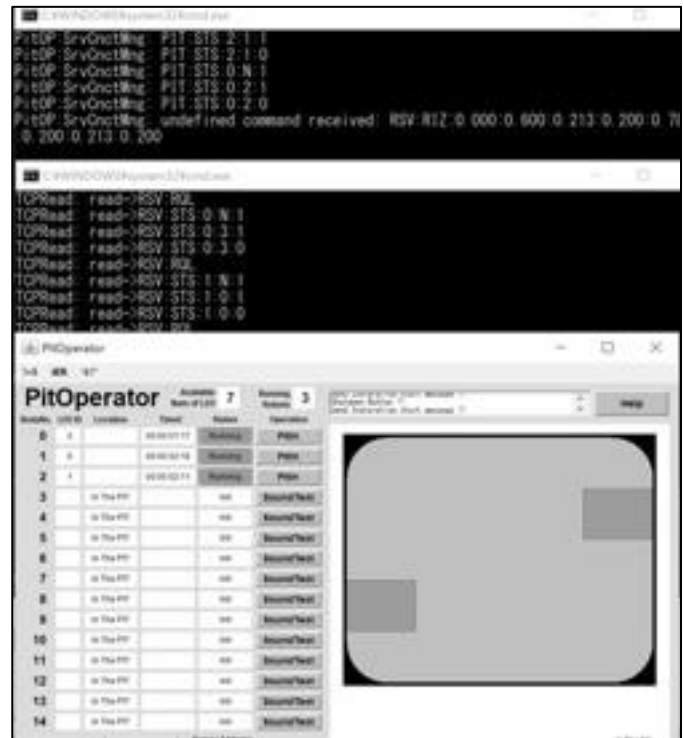


図 6-46 ロボット配置エリア稼働状況

⑥ 感染ゾーン画像生成

・ [AL8original] > [JavaApp] > [Projector] を検証した。

・ [PRO05]～[PRO12]があるが、PRO05、PRO06 のみ動作した。

ただし、黒い画面が出るのみで、感染ゾーンの生成は確認できなかった。

検証は InsServer を動作させた状態で行ったが、変化はなかった。

＊フォルダ内に Adapter のクラスが確認できるため、専用のアダプタが必要なのか、プロジェクト、サーバの設定が必要なのか検証が必要である。

● [Apatch フォルダ] / [htdocs] 内の html 及び [cgi-bin] 内ファイルを検証環境は

Windows10 にサーバ構築

・ トップページから推移。

・ MIDI 音源を再生するための Beatnik Player のインストールを求められる。[al8] / [Beatnik] 内に確認したが、インストールはできなかった。代替として

Sonic's Beatnik Player をダウンロードしインストール。特定の音源は再生できたが、サーバからの音声は再生できなかった。もともと Netscape 用のプラグインであり、IE 用にも提供されていた

が、現状の IE (ver11) で使用できるのか検証が必要である。

・ MAMP で Apatch サーバを設置し、HTML、CGI 関連を格納していくつかのページを確認した。

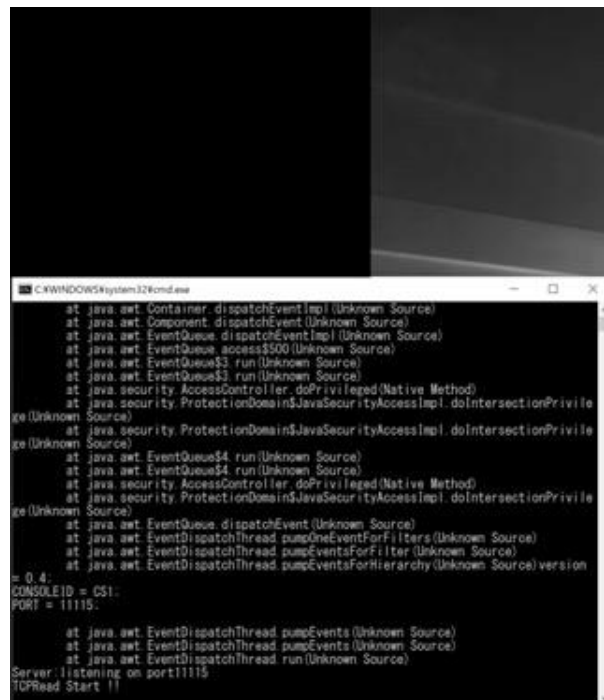


図 6-47 感染ゾーン稼働状況



図 6-48 ウェブインターフェース稼働状況

図 (6-48) は localhost/scins/0client/ClientBeatnikDemo.html のもの

- ・動作したものはデモ用で、サーバからの情報が反映されているものではないため、実際の動作のさらなる検証が必要と考えられる。

- ・Java アプレットで動作するため、現 OS 環境 (Win10) でのセキュリティの関係で高い確率でブロックされる。セキュリティから除外するよう設定しても同様なので解決する必要がある。(若しくは OS のバージョンを下げるなどの対応が必要であるかもしれない。)

今後のアーカイブのためにはロボットを再構築するかロボット間通信をシミュレートするソフトを制作し、全体の通信環境の再構築をした上で全体の復元を進める必要があるだろう。

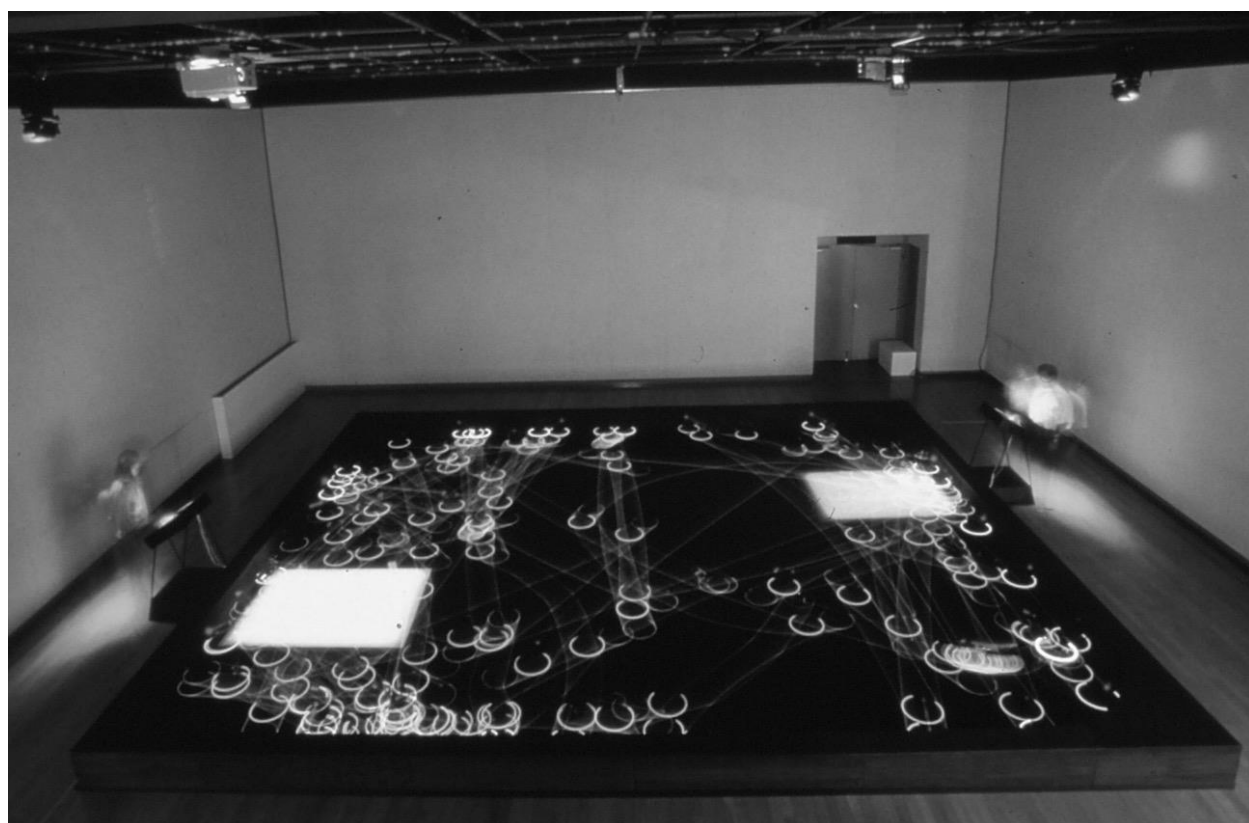


図 6-49 AL8 アートラボ第8回企画展「Sound Creatures」 展示風景

6.4.2 1999 年 アートラボ第9回企画展「Connected Re-Body」作品プログラム

アートラボ第9回企画展作品は大きく2つのバージョンがあり、以下の図は元の展示バージョンである。他にフランスでの展示のために作られたポータブルバージョンがある。ポータブルバージョンはKVとHMDによるVR表示機能のみで稼働するようになっている。

図 6-50 のようにアートラボ第9回企画展での作品は細かなシステムに分かれており、ネットワークを介して動作する。

NR250 など専用のハードウェアが欠損していることから完全な検証は不可能なため、各システムをブロックに分けてそれぞれの動作を検証した。

*ただし相互に動作するシステムなので完全な切り分けはできないものとして考える。

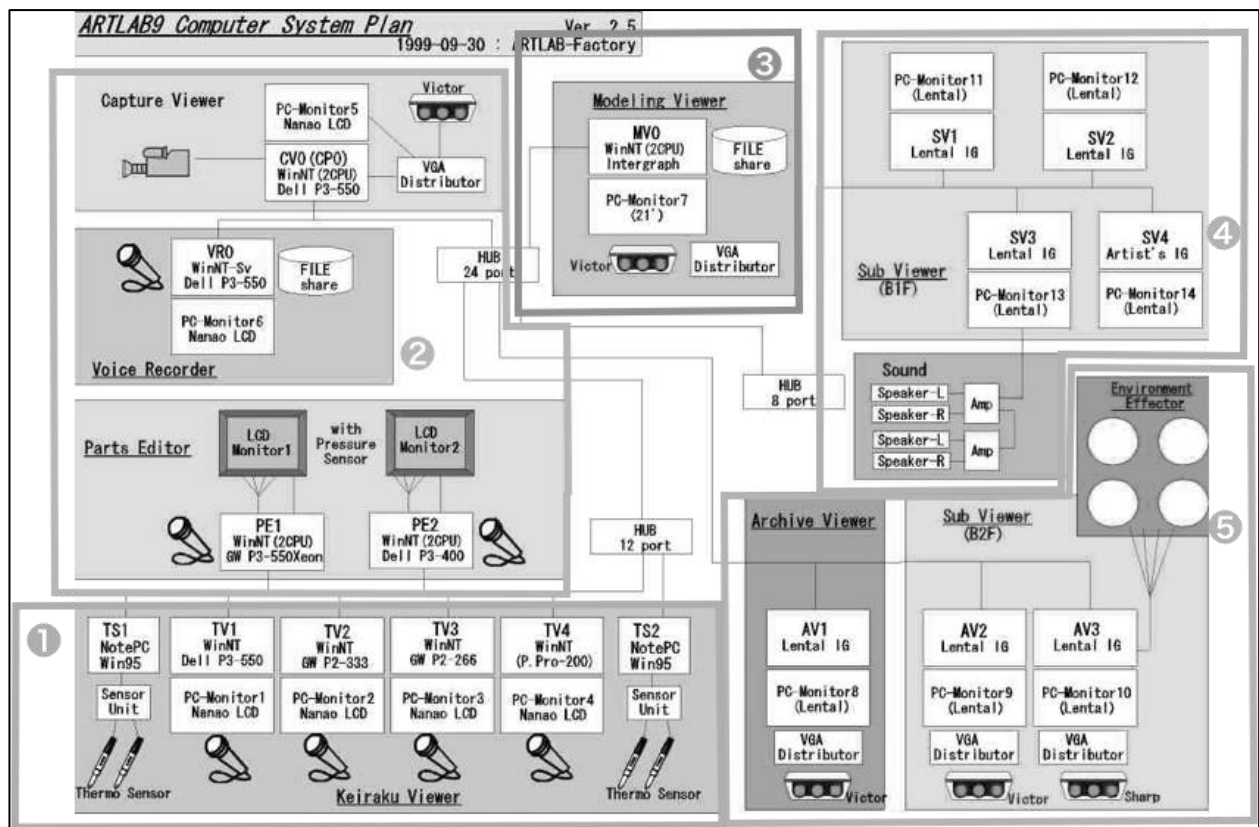


図 6-50 アートラボ第9回企画展システムブロック分類図

①KV (Keiraku Viewer)

KV には展示バージョン、ポータブルバージョンが存在するが、ポータブルバージョン最終版、[al9portable2]>[Kv2001-7-2]での検証を行った。

- ・実行ファイル al9p.exe を起動、以下のインターフェース画面
- ・事前に MV (Model Viewer) にデータ送信するため SendToMv を立ち上げる必要がある。
- ・KV では本来体験者が NR250 と電対温度センサを使用し、経絡の値を取得し、Excel にデータを格納するが、センサ入力のための AD 変換デバイス NR250 等のハードウェアが欠損しており、データを取得することは不可能であるため、代替案が必要である。

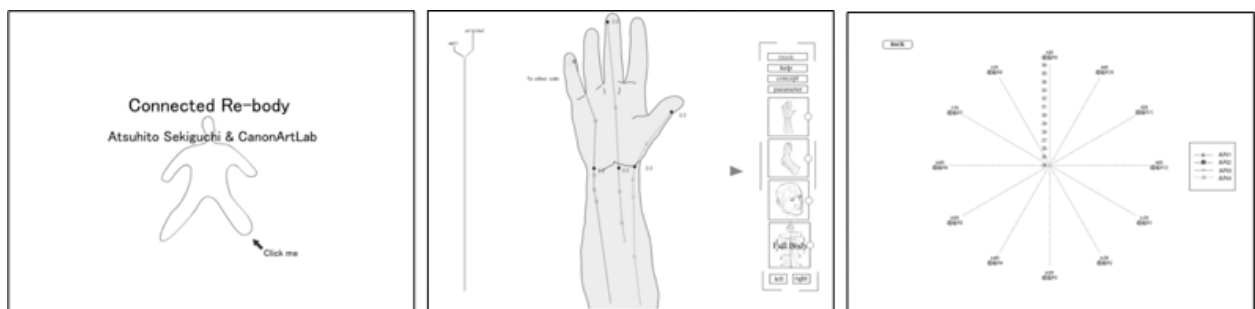


図 6-51 KV 画面 オープニング (左) 右手の入力画面 (中) 経絡バランス画面 (右)

② Camera Viewer カメラ入力

・システム図ではビデオカメラ入力により、MVにて合成し、下図のようなテクスチャ要素になると思われ、またアーカイブ映像では **Capture Viewer** の名称で紹介されていたが、カメラ入力に関するプログラムが見当たらず、KVや後述のMV起動時にもカメラが起動するような記述、エラーメッセージが見当たらないことから、現時点では検証を見送る。Voice Recorder も同様。

・また、アーカイブ映像では下図の **PartEditor** と呼ばれるエディット画面が紹介されていたが、それに該当するプログラムが見あたらなかった。映像を見る限り、感圧センサを用いてXY軸の値を取っており、ハードウェア的な課題もある。

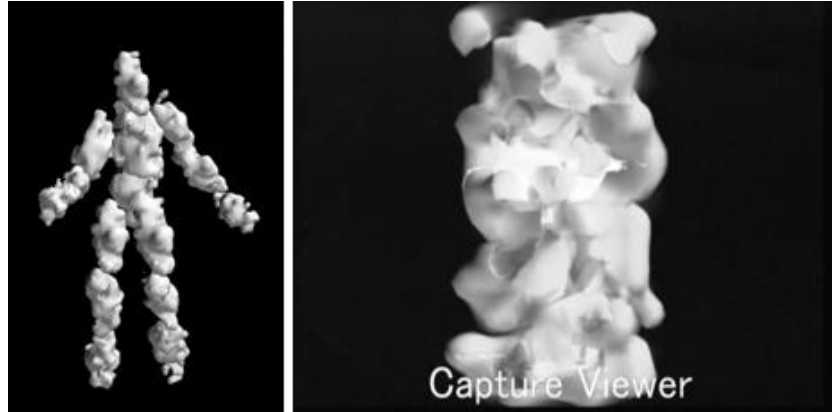


図 6-52 基本 3D モデル

③ MV (Model Viewer)

KV 同様いくつか過去バージョンが存在し、ポータブル版の最終版と思われる、[guchi-al9]>[modeier]>[Mv]での検証を行った。

基本的にはアートラボ第9回企画展展示用プログラムと同様の機能を持っている。

・事前準備としてDドライブを作成（簡易的な領域としてSDカードで作成）

・Mvフォルダー一式をDドライブに移動し、指示書の条件下で動作するか実験。

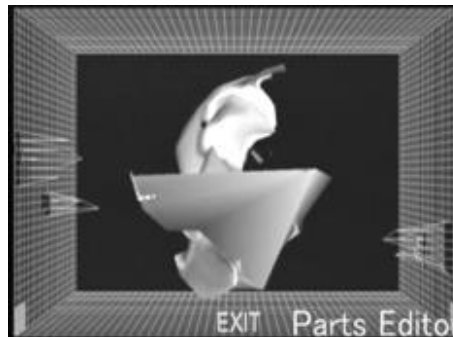


図 6-53 展示時モデルビューワコントロール画面

・関連ファイルである

mv_in.init.c (HMD 用) , mv_out.init.c (プロジェクター用) について 11,12,33 行目を変更。

D: mv ドライブにディレクトリ変更しているため、一部記述を変更。

- ・mv.exe をコマンドプロンプトより起動、動作を確認 例 (mv mv_in.init.c)
- ・mv_in.init.c, mv_out.init.c に引数を与えて起動するとそれぞれ以下の画面が立ち上がる。
- ・仕様書[MV228]>MvMan.txt の通り以下の動作が可能（詳しくは MvMan.txt を参照）

◇カメラ（視点）操作 以下のマウスによりカメラを操作することができる。

「左ボタンドラッグ」ターゲット（注目点）をロックしたままカメラ位置を回転させる。

「右ボタンドラッグ」カメラ位置を視線に平行な面内で移動させる。

「Ctrl+右ボタンドラッグ」カメラ位置を視線方向に沿って移動させる。

第6章 成果

→カメラ位置というかオブジェクトそのものが移動する。解釈が異なる？

「Tab キー入力」動かせるものが切り替わる。

「右ボタン+左ボタンドラッグ」左ボタンと右ボタンを同時に押してドラッグすることにより、ターゲットに対しズームイン・ズームアウトする。

「Home キー入力」カメラ位置と視線方向を初期値に戻す。(HOME キーのあるキーボードが必要)

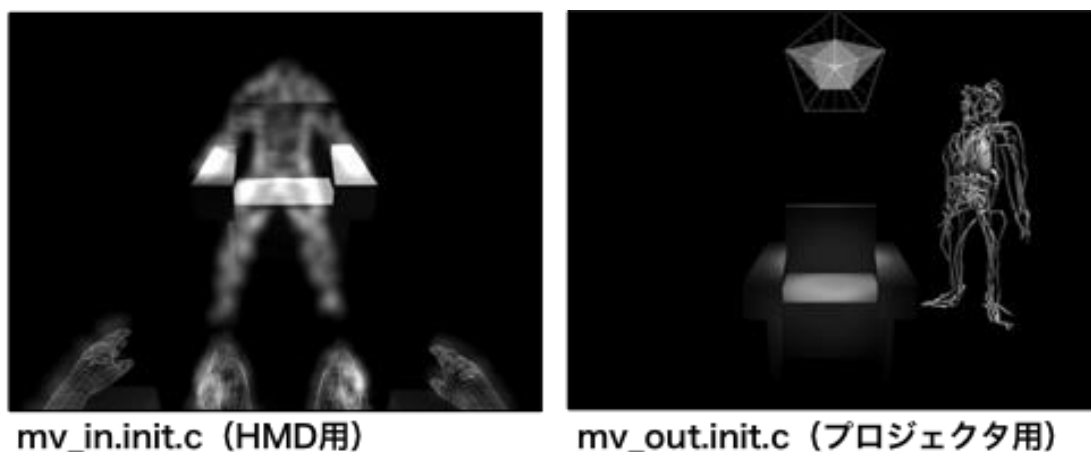


図 6-54 HMD 用モデルビューワ画面 1

◇ データファイルのロード シーンにオブジェクトファイルをドラッグ&ドロップすることで追加可能

◇ シーンの実行

「Ctrl+Delete」シーンの消去。シーン中の物体と光源を全て消去する。

「Delete」現在選択されている物体 (Tab で選択) を消去する。「選択されている物体」とは黄色いマーカーが表示されている物体であり、各種操作の対象となる。

「Tab」選択を別の物体に移動させる。(順方向) *移動は「Ctrl+右ボタンドラッグ」で行う。

「Shift+Tab」選択を別の物体に移動させる。(逆方向) *移動は「Ctrl+右ボタンドラッグ」で行う。

・ 内臓モデルの操作

内臓モデルを選択した状態で「r」キーを押すと、本来の仕様とは異なるランダムな方法により、色とサイズのアニメーションが変化する。色変化やサイズ変化のバリエーションを確認することができる。

・ ◇ ウィンドウの操作 以下のキー入力を利用可能。

「F2」 1024x768 のフルスクリーンモードとウィンドウモードを切り替える。

「F3」 1280x1024 のフルスクリーンモードとウィンドウモードを切り替える。

・ mv_out/in.init.c はシリアル接続のポヒマスセンサが欠損しているため、接続の無限ループが起きた。

代替として Arduino を使用しシリアルポートを設定したところ (図では COM6)、認識し無限ループが止まった。

Arduino 側でポヒマスセンサの代替としてジャイロセンサの接続とプログラムを作成し、シリアル通信を試みたが、センサの値は取れなかったため、検証が必要である。

・また、mv_out/in.init.c のモデルは本来は右図のようなテクスチャが実装されると思われるが、データベースへの接続が機能していないのか左図のような素体のままとなっているため、要検証である。

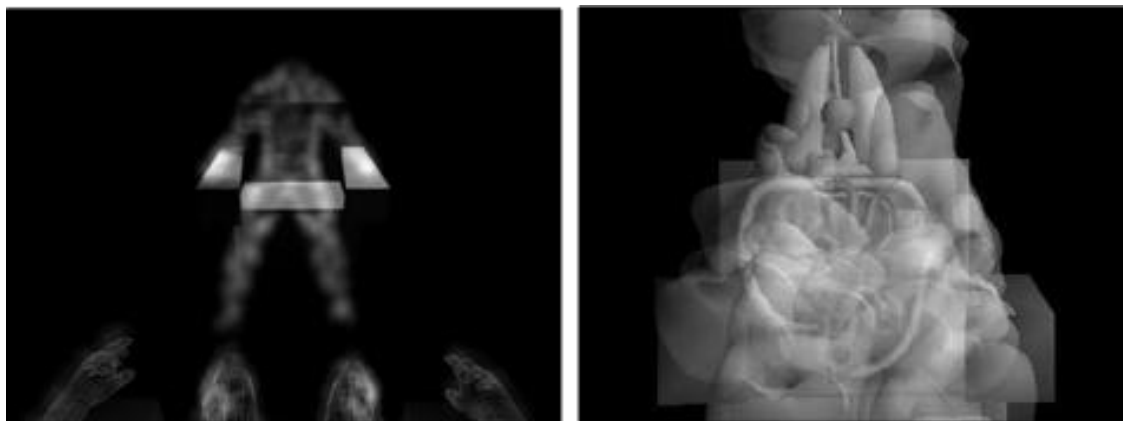


図 6-55 HMD 用モデルビューワ画面 2

③ SubViewer

・ヒルサイドプラザには中地下一階フロアがあり、そこには PC4 台を設置して、階下の大フロア EnvironmentalEffect のデータを取得して、アトラクター表示を行うサウンド環境と構築していた。プログラムは Houdini で構成されており、経絡の外部データを参照し、線画を描画している。

⑤SubViewer2+EnvironmentalEffect、Archive Viewer

KV、MV によって作られた人体群の視覚化を行っているブロック。4 つのドラムに人が乗った動き



図 6-56 アーカイブビューワ画面稼働状況（左）展示時アーカイブビューワ画面（右）

で、描画されるもので、本体システムから離れた PC4 台で表示するブロックであるが、表示するモデルデータがなかったため、スケルトンのみ表示された。

⑥ ファイル出力

KV、MV の各取得データを格納

KV データ[AL9Portable2]>[Kv2001-7-2]>[Exel]などの経絡データ (csv・左図) を MV データ[guchi-al9] > [modeier] > [Mv] > [mv_db]に渡し、モデリング情報を変化させるブロックだと思われるが、MV、KV のプログラム (若しくは関連プログラム) に組み込まれているため、独立したブロックとしては検証できていない。また、NR250 などのハードウェアが欠損しているため、KV に至っては情報が取得できないなどの課題がある。現時点で検証が可能なことは、現状存在する経絡データの CSV を MV に渡しての動作確認の検証を行う。

今後アーカイブ復元作業を行うには、経絡を測定するセンサデバイス、AD 変換デバイス、モデリング編集デバイスなど、いくつかのデバイスの再構築が必要となるが、センサデータのシミュレーション環境をベースとして進めて復元していく必要があるだろう。



図 6-57 展示時エンバイロメンタルエフェクトデバイス操作

6.5 企業メセナによるメディアアート史と歴史表

表 6-8 スパイラル／キヤノン・アートラボ／資生堂 CyGnet イベント年表 1985-2005 について

表 6-8 は、本調査研究の 3 つのターゲット「スパイラル」「キヤノン・アートラボ」「資生堂 CyGnet」の活動年表である。

まず、スパイラルは自主企画 (主催／共催) のほか、貸しスペース事業も実施しているため、地下レストランで実施されたライブイベントなど細かいものも含めたイベントを全て把握することが困難であった。また、本調査研究の対象範囲が課題であるが、ひとまず本年度は **Spiral Paper** およびプレスリリースの調査を実施して、対象になりそうなイベントをピックアップした。年表の中で「●□」印にしたイベントは調査対象候補のイベントで、「◎」印は詳細を把握した上で検討が必要なイベントである。

次に、恒常的な展示スペースを持っていなかったキヤノン・アートラボの活動については、キヤノン社が 2000 年に発行した報告書『Partner of Forerunners - Canon's Cultural Support Activities キヤノンの文化支援プロジェクト [1991-2000]』とチラシやカタログなど催事印刷物を参照した。なお、スパイラルでも展覧会が実施されたことがあったため、年表上で重複するイベントがある。

最後に、資生堂 CyGnet の活動記録については主催者であった資生堂に資料がほとんど残っていなかったため未詳である。現状、入手することができたプレスリリースの情報のみが掲載されており、全容がまだ把握できていない。

第6章 成果

表 6-9 企業メセナとメディアアート年表について

表 6-9 は、1980 年から 2005 年までに実施された企業によるメディアアート向けの支援活動をまとめたものである。多様な支援形態のうち、主に「文化イベントの主催／共催」および「ショールーム／企業文化施設の運営」が中心である。前者には日本各地で開催された博覧会、後者には、メディアアートに特化した文化施設だけでなく、度々イベント会場として使用された程度の場所も含まれる。さらに、「芸術作品の制作委託／購入」、「非金銭的援助」、「寄付・助成・懸賞」などの支援形態も含まれる。ただし、「非金銭的援助」のうち、機材提供や技術提供などによる「協力」や「協賛」といった支援形態は含まれない。今年度の調査では、とりわけ 1990 年代には短期間あるいは期間限定の企業スペースが少なからず存在したことが明らかになった。また、衛星放送や衛星通信の試験的運用が始まった 1980 年代半ばから 1990 年代半ばインターネットが一般化するまでの時期に、放送局や通信企業がアーティストとコラボレーションしてアートプロジェクトを実施した時期もあった。しかし、これらのプロジェクトの具体的な資料へアクセスすることが困難で、インターネットにもほとんど情報がないため表 6-9 には基本情報にも不詳が多い。今後、当時の関係者の個人資料調査やヒアリングを行いながら詳細を明らかにしていく必要がある。

第6章 成果

表 6-8 スパイラル／キャノン・アートラボ／資生堂 CyGnet イベント年表 1985-2005

事業名	スパイラル(3Fホール) *4Fビデオスタジオ(1980年代)	スパイラル (1Fギャラリー/ガーデン)	キャノン・アートラボ	資生堂CyGnet(シグネット) www.shiseido.co.jp/cygnet
活動期間	1985 - 現在	1985 - 現在	1991 - 2001	1998 - 2003
運営主体	株式会社ワコールアートセンター	株式会社ワコールアートセンター	キャノン株式会社	株式会社資生堂
1985年	*青い●◎はスパイラル主催または共催(プレスリリースあり) ◎ISSEY MIYAKE "JUST A MOMENT" (1985/12/不明)	*青い●◎はスパイラル主催または共催(プレスリリースあり)		
1986年	◎立花ハジメコンサート(1986/5/2,3,4)*ラジカルTV	◎ビル・フォンタナ「音の旅」展(1986/5/23-6/9)		
1987年	◎勅使河原三郎ダンス公演「月は水銀一匁 偏王子の旅」(1987/7/16-19) ●Japan 87 第1回ビデオ・テレビ・フェスティバル(1987/7/29-8/11)	●ビル・ヴィオラ——おのれとは如何なるものかを識らず(1987/2/7) ●Japan 87 第1回ビデオ・テレビ・フェスティバル(1987/7/29-8/11) ●東京国際ビデオビエンナーレ '87(1987/12/05-12/06)		
1988年	◎ダンス工場ベルリン(1988/8/5-8/7)	◎仁科茂/関口敦仁「Kodama: Neo Tone Neo Style」(1988/3/18-4/24) ◎本郷重彦「PONKO」展(1988/8/19-9/4) ●ジェネラル・アイデア 展(1988/10/14-11/6)		
1989年	●コンプレッソ・プラスティコ/小田秀之「メタリズム」(1989/3/30-4/23) ◎新鋭映画祭 The Festival Short Films Perspective of Cinema(1989/4/30-5/6)*石井聰互ほか ◎「吉原悠博展 Pleasure-Dome by Shachihata」(1989/5/1-5/14)*関連トークゲスト:加藤和彦、立花ハジメ ●Japan 89 第2回ビデオ・テレビ・フェスティバル——デリケート・テクノロジー(1989/7/31-8/7)	●Japan 89 第2回ビデオ・テレビ・フェスティバル——デリケート・テクノロジー(1989/7/31-8/7) ●クラウス・フォン・ブルッフ——ビデオ・インスタレーション個展(1989/7/31-8/7)		
1990年	◎スパイラルシアターNo.11 天児牛大「フィアス-V 表にふれて」(1990/2/9-2/21) ●パフォーマンス初演 ダムタイプ「pH」(1990/8/8-8/11)	●展示 ダムタイプ「pH」(1990/8/2-8/11) ●デイヴィッド・ホックニー「ファックス・アート」展(1990/10/11-28)		
1991年	●スパイラルシアターNo.12「新機械劇場」*小竹信節、船屋法水、コシミハルほか(1991/1/10-1/15) ◎スパイラルシアターNo.14「ミュンヘハウゼン男爵の大冒険」*小竹信節(1991/7/5-7/14)	◎氏家啓雄「バックグラウンド・ミュージック」(1991/12/10-12/17)	●アートラボ第1回企画展「ARTLAB」(1991/6/27-7/6)アーティスト:コンプレッソ・プラスティコ(平野治朗+松蔭浩之)、中原浩大、福田美蘭、会場:TEPIA	
1992年	●Japan 92 第3回ビデオ・テレビ・フェスティバル(1992/2/8-2/11) ◎勅使河原三郎+KARAS「NOJECT」(1992/7/3-7/11) ●NTT インターコミュニケーション'92「脱着するリアリティ」入江経一+藤幡正樹(1992/3/27-4/16)	●Japan 92 第3回ビデオ・テレビ・フェスティバル「ゲイリー・ヒル ビデオ・インスタレーション」展(1992/2/1-2/11) ◎津村耕佑「メデューサの視線」展(1992/7/29-8/7) ◎「ジョン・クスラー」展(1992/9/1-9/15)	●アートラボ第2回企画展「ARTLAB2」(1992/7/17-27)アーティスト:ヘラルド・ファン・ダー・カープ、ミッション・インヴァジブル(石原友明、松井智恵)、会場:ニューピアホール ●「NEn Research」シリーズ他、トークイベント	
1993年		◎マンフレート・シュトゥンプ展(1993/7/8-8/1) ●第1回Art Life 21「人間になろう」(1993/9-1994/3)*コンピレーションCD-Book「Silence」発売 ●立花ハジメとDEP'T「Maker」展(1993/9/14-10/1)*Art Life 21	●アートラボ・オープン・コラボレーション展(公募展)「PSYCHOSCAPE - アートからの精神観測」(1993/3/27-4/7)アーティスト: Bulbous Plants(岡崎乾二郎+津田佳紀)、DTI (Digital Therapy Institute)(神啓介、ヘンリー川原)、本木秀明、会場:O美術館 ●アートラボ第3回企画展「パーセプチュアル アリーナ - 空間のパラドクス」(1993/9/23-10/11)アーティスト:ウルリーケ・ガブリエル、会場:ヒルサイドプラザ	

第6章 成果

事業名	スパイラル(3Fホール) *4Fビデオスタジオ(1980年代)	スパイラル (1Fギャラリー/ガーデン)	キャンノン・アートラボ	資生堂CyGnet(シグネット) www.shiseido.co.jp/cygnet
活動期間	1985 - 現在	1985 - 現在	1991 - 2001	1998 - 2003
運営主体	株式会社ワコールアートセンター	株式会社ワコールアートセンター	キャンノン株式会社	株式会社資生堂
1999年	◎第8回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 (1999/7/15-7/20)	●Spiral TV (1999/3/10-3/28) * Art Life 21、デ ジタル衛星放送(Sky Perfect TV)、インターネッ トストリーミング放送 ●アートラボ第3回プロスペクト展「ウルティマ・ラ ティオ - 物語のカスケード」(1999/5/27- 6/6) アーティスト:ダニエラ・アリーナ・プレーヴェ、会場: スパイラルガーデン ●「SoundCreatures on the Web」(1999-2001) アー ティスト:江渡浩一郎、会場:インターネット(URL?) ●アートラボ第9回企画展「分離する身体」 (1999/10/6 - 17) アーティスト:関口敦仁、会場:ヒ ルサイドプラザ	●アートラボ第3回プロスペクト展「ウルティマ・ラ ティオ - 物語のカスケード」(1999/5/27- 6/6) アーティスト:ダニエラ・アリーナ・プレーヴェ、会場: スパイラルガーデン ●「SoundCreatures on the Web」(1999-2001) アー ティスト:江渡浩一郎、会場:インターネット(URL?) ●アートラボ第9回企画展「分離する身体」 (1999/10/6 - 17) アーティスト:関口敦仁、会場:ヒ ルサイドプラザ	●exoneme《DISCODER》(1999/4)
2000年	◎第9回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 (2000/7/19-7/23) ●Buro30: electronicaccident Experimental Express 2000(2000/11/3-11/5) * B1F CAYにて開催。池田亮二、竹村延和、カール ステン・ニコライほか	●IAMAS「electropti—あらかじめ失われた未 来のために展」(2000/3/7-3/12) ●スパイラル大作戦: スーパーサインプロジェクト (2000/3/29-4/16) * エキソニモ、小山田徹ほか ◎第1回 SICF(スパイラル・インディペンデント・ク リエーターズ・フェスティバル) (2000/4/14-4/16) ●アートラボ第4回プロスペクト展「DRIVE [ドライ ヴ]」(2000/5/17 - 28) アーティスト:ジョーダン・ク ランダル ●「キャンノン・デジタル・クリエイターズ・コンテスト」 (2000/12/2-12/10) ●第4回Art Life 21(未詳)	●アートラボ第4回プロスペクト展「DRIVE [ドライ ヴ]」(2000/5/17 - 28) アーティスト:ジョーダン・ク ランダル、会場:スパイラルガーデン ●アートラボ第10回企画展「polar [ポーラー]」 (2000/10/28 - 11/6) アーティスト:カールステン・ ニコライ+マルコ・ベリハン、会場:ヒルサイドプラザ	●Milica Tomic《i am milica tomic》 (2000/2)
2001年	◎第10回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 (2001/7/18-7/22)	●「ランデブー」展(2001/3/22-4/8) * エキソニ モ * 巡回: 飛騨・世界生活文化センター ミュージアム温故知新(2001/7/27-9/9) ◎第2回 SICF(スパイラル・インディペンデント・ク リエーターズ・フェスティバル) (2001/4/6-4/8) ●アートラボ第5回プロスペクト展「R111 - 仮想か ら物質へ」(2001/6/1 - 17) アーティスト:ミハ エル・サウブ+supreme particles ●「キャンノン・デジタル・クリエイターズ・コンテスト 2001」(2001/12/1-12/9)	●アートラボ第5回プロスペクト展「R111 - 仮想か ら物質へ」(2001/6/1 - 17) アーティスト:ミハ エル・サウブ+supreme particles、会場:スパイラル ガーデン	●doubleNegatives《plaNet Former》(未 詳) *ウェブサイトリニューアル
2002年	◎第11回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 (2002/7/31-8/4) ●Tower Records/Musee presents intoxicate: Dodart minus One(2002/6/8) * B1F Cay	●「ランデブープロジェクト みずのまゆ」展 (2002/3/15-3/31) * Toru Yamanaka+softpadほか ◎第3回 SICF(スパイラル・インディペンデント・ク リエーターズ・フェスティバル) (2002/5/3-5/6) ●「Visionaire Play △○×□ Exhibition」 (2002/10/29-11/4) * ソニーコンピュータエン ターテインメントとコラボ ●「キャンノン・デジタル・クリエイターズ・コンテスト 2002」(2002/12/7-12/15)		

第6章 成果

2003年	●クリスティアン・ツイーグラー レクチャー&デモンストレーション「Improvisation Technologies」から「scanned V(5)」まで (2003/4/20) ●ICC「E.A.T.ー芸術と技術の実験」展関連企画 コンサート ヴィット・チュードア「レインフォレストIV」(2003/5/25) ◎第12回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 (2003/7/17-7/21) ●「onedotzero_nippon」(2003/8/22-8/24)	◎「奥秀太郎映像展／濁画ーNigorie」(2003/1/6-1/19)＊関連イベントライブ「Nigorie-elements」(2003/1/11)高木正勝 ●「ランデヴァープロジェクト マイ・スイート・ホーム」(2003/3/27-4/14)＊森脇裕之、h.o.、宇川直宏ほか ◎第4回 SICF(スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル) (2003/5/2-5/5) ◎「Blue Horizon Contemporary Finnish Photography」(2003/9/10-9/21) ●「Take Art Collection」(2003/10/25-11/9)＊宇川直宏ほか ●EPSON カラーイメージングコンテスト 2003 (2003/11/27-12/1) ●「キャン・デジタル・クリエイターズ・コンテスト 2003」(2003/12/6-12/14)			
2004年	●ICC「ネクスト:メディア・アートの新世代」関連イベント コンサート「Live next」(2005/5/22) ◎第13回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 (2004/7/15-7/19) ●ダンスアンドメディア2004「ジョセフ・ハイトライブ・パフォーマンス」(2004/8/1) ◎第20回東京の夏音楽祭2004「うつなれ」(2004/8/7)＊dots ●キュビキュビ「グラント歌謡ショー キャバロディカ」(2004/8/18-8/30)	●Art Life Vol.2「鈴木康広／山極満博 行方不明」展(2004/1/6-1/18) ●Art Life + Vol.6「鈴木太郎」展(2004/3/16-3/28) ●Art Life + Vol.7「White Base 白い基地」展(2004/4/19-4/30)＊平野治朗 ◎エロメカ大作戦！——Mission 01(2004./5/4-5/5) ◎第5回 SICF(スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル) (2004/5/2-5/5) ◎Spiral Take Art Collection 2004 at Maison Moet(2004/10/23-11/7)＊エントランスデザインは藤本隆行 ◎第5回 SICFグランプリ作品発表展覧会 atiek+D「Cal.Log@spiral」(2004/11/5-11/8)			
2005年	◎kuki Vol.8 (2005/2/5) ◎第14回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 (2005/7/14-7/18)	●ピヨロン・メルフス「イースタン・ウェスタン・パーク」展(2005/4/28-5/8) ◎第6回 SICF(スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル) (2005/5/2-5/5) ◎「Exhibition C-Depot 2005: Face」(2005/6/8/6/12) ●Leading Edge Design「Moveー美しいテクノロジーを予見する10のプロトタイプ達」展(2005/12/9-12/11)			

第6章 成果

表 6-9 企業メセナとメディアアート年表

フェスティバル／万博などイベント	活動期間	運営主体	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	関係者／学芸員など	備考
ぴあフィルムフェスティバル(東京) Pia Film Festival (Tokyo)	1977-	ぴあ株式会社(現:一般社団法人PFF)																												
東京ビデオフェスティバル(東京) Tokyo Video Festival (Tokyo)	1978-2009	日本ビクター(現:JVCケンウッド)																											大林宣彦、小林はくどう、佐藤博昭、椎名誠、高畑勲、羽仁進	2009年以降はNPO市民がつくるTVFが運営
神戸ポートピアアイランド博覧会(通称:ポートピア'81)(兵庫) Portpia'81 (Hyogo)	1981.03.20-09.15	神戸ポートピアアイランド博覧会協会																												会場内で「ポートピア'81国際ビデオアート展」開催および国際シンポジウムを開催。
ハイテクノロジーアート国際展(東京) International High Technology Art Festival (Tokyo)	1981-1986?	グループ・アールジュニ、フジテレビ、東京新聞社など																												
全日本ビデオコンテスト(日本各地)	1982-?	朝日新聞社																												
国際科学技術博覧会(通称:つくば万博)(茨城) The International Exposition, Tsukuba, Japan, 1985 (Ibaraki)	1985.03.17-09.16	財団法人国際科学技術博覧会協会																												
東京国際ビデオ・ビエンナーレ(東京) Tokyo International Video Biennale (Tokyo)	1985-1987?	テレビマンユニオン、福武書店、東京朝日ホール、スパイラル																												
ビデオ・テレビ・フェスティバル(東京) Video Television Festival (Tokyo)	1987/1989/1992	ビデオギャラリーSCAN、スパイラル																											中谷芙二子	
世界デザイン博覧会(通称:デザイン博、デ博)(愛知) World Design Exposition 1989 (Aichi)	1989.07.15-11.26	財団法人世界デザイン博覧会協会																												
名古屋国際ビエンナーレARTEC(愛知) International Biennale in Nagoya: Artec (Aichi)	1989-1997	中日新聞社、名古屋国際ビエンナーレ開催協議会																												
国際花と緑の博覧会(大阪) The International Garden and Greenery Exposition, Osaka, Japan, 1990 (Osaka)	1990.04.01-09.30	財団法人国際花と緑の博覧会協会																												
インターカレッジ・テクノアート・ワークス(東京) Intercollege Techno-Art Works (Tokyo)	1994/1994?	東芝、T-BRAIN CLUB																												
ICC ビエンナーレ ICC Biennale (Tokyo)	1997/1999	NTT, NTTインターコミュニケーション・センター																												
2005年日本国際博覧会(通称:愛・地球博)(愛知) The 2005 World Exposition, Aichi, Japan (Aichi)	2005.3.25-9.25	2005年日本国際博覧会協会																												

第6章 成果

文化施設／ショールーム	活動期間	運営主体	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	関係者／学芸員など	備考
ソニービル(東京) SONY Building (Tokyo)	1966-2017	ソニー																												
西武美術館／セゾン美術館(東京) Seibu Museum of Art / Sezon Museum of Art (Tokyo)	1975-1988 1989-1999	西武百貨店, セゾングループ																												
スタジオ200(東京) Studio 200 (Tokyo)	1979-1991	西武百貨店, セゾングループ																												
INAXギャラリー(東京) INAX Gallery (Tokyo)	1981-	株式会社INAX(現:株式会社LIXIL)																												
ラフォーレミュージアム(東京) La Foret Museum (Tokyo)	1982-	森ビル流通システム																												
六本木WAVE(東京) WAVE (Tokyo)	1983-1999	西武百貨店, セゾングループ																												
スパイラル(東京) Spiral (Tokyo)	1985-	ワコールアートセンター																												
サントリー・アート・ボックス(東京) *ソニービル内	1986-1988?	サントリー／We's Brain																											四方幸子	
日立ヤングプラザ(東京)	1980年代後半?	日立製作所																												ビデオ・ギャラリーSCANと共に「HITACHI VIDEO FORUM」(1988)開催
東京パーン(東京) *ショールーム	1980年代後半?	パナソニック																											武昌光裕	壁面全面スピーカー、クリスチアン・マークレーやコンラート・ベッカーのライブやインスタレーションなど(四方)
246 Club(東京)	1980年代後半?	日産																											芳根聡	
ハイネケンビレッジ(東京) *3箇所ほど場所の変更があった	1988-1990	ハイネケン																											一色興志子	
ジーベックホール(兵庫) XBBEC Hall (Hyogo)	1989-	TOA株式会社/株式会社ジーベック																												
松下電器・情報通信システムセンター・AV＆CCシステムズスクエア	1990年代	松下電器																												シンボジウムおよび上映「Artificial Imaging 93ー人工生命＋ハイビジョンCG＋仮想現実感」(1993年)開催
パナソニック デジタル アート スクエア	1990年代	松下電器																												展示「鈴木直也《the happy medium》」(1998年)開催
キャノン・アートラボ(東京) Cannon ARTLAB (Tokyo)	1991-2001	キャノン／We's Brain																											四方幸子, 阿部一直	
T-BRAIN CLUB(東京) T-BRAIN CLUB (Tokyo)	1992-1998?	東芝																											有馬純勝	
ラフォーレミュージアム飯倉or六本木(東京) La Foret Museum Iikura (Tokyo)	1993-2016	森ビル流通システム																												スタジオ・アズーロ「映像の庭園ー環境ビデオ・インスタレーション」展(1993年?)開催
NTT インター・コミュニケーションセンター[ICC](東京) NTT InterCommunication Center [ICC] (Tokyo)	1997-	NTT																												
資生堂CyGnet(シグネット) *ウェブ上	1998-2003	資生堂																											四方幸子	www.shiseido.co.jp/cygnet
放送局	活動期間	運営主体	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	関係者／学芸員など	備考
日本放送協会(NHK)	1950-	*																												
		*																												
		*																												
テレビ朝日	1959-	*																												
フジテレビジョン	1957-																													
		*																												
福井放送(FBC)	1960-	*																												
		*																												
		*																												
		*																												

第7章 総論

7.1 企業メセナによるメディアアート活動とその歴史的評価

四方幸子

7.1.1 はじめに

企業による芸術文化支援は、1980年代日本企業の円高に伴う国際化の中、1990年の社団法人企業メセナ協議会（現：公益社団法人）創立に向けた動きを通してその必要性が認識され始めた。企業メセナ協議会は、企業による芸術文化支援（メセナ）活動の活性化」を目的とする日本で唯一のメセナ専門の中間支援機関として、企業が個別で行ってきた芸術文化支援の時代から、「志を同じくする企業が手をたずさえ」この国の文化状況の改善することを目指すものであった。「企業自身のイメージアップのための「企業の文化化」も叫ばれて」¹いる中、設立の機が熟した旨が記されている。

本調査研究では、企業メセナとしてのメディアアート活動として、1985年～2005年の期間を俯瞰し、その中でも、先駆的でありながらも十分にその活動が現在知られず、また資料として公開されていない3件、キヤノン株式会社によるキヤノン・アートラボ（1990年～2001年）、株式会社資生堂の資生堂 CyGnet（1998年～2003年）、株式会社ワコールホールディングスが運営するスパイラル／株式会社ワコールアートセンター（1985年～）を対象としている。この中で、キヤノン・アートラボと資生堂 CyGnet は活動を終了しており、現在ウェブ上でも情報を得ることが困難となっている。

資生堂の現・名誉会長である福原義春は、企業メセナ協議会の創立にキーパーソンとして関わった存在であり、企業メセナ協議会初代理事長、会長を経て現在は名誉会長を務めている。企業メセナ協議会創立と同年に、同社には「企業文化部」が誕生している。

「メセナ元年」と言われる企業メセナ協議会創立（1990年）以前の時期を含む本調査研究は、タイトルに「企業メセナ」を含むが、広く「企業による芸術文化支援活動」という意味で使用している。1980年代以降の国際化の流れの中で、企業イメージアップのための文化支援及び企業としての文化貢献意識の高まりが醸成していたことが背景にある。そのような潮流をいち早く捉え、「文化の事業化」を目指してオープンした複合文化施設スパイラル／株式会社ワコールアートセンターは、独自の企画に加え、共催やレンタルで数多くの先進的な展示やパフォーマンスを開催してきた。

本調査研究は企業メセナの中でも「メディアアート」に絞っている。「メディアアート」という言葉は、1980年代におけるコンピュータの高速化によりリアルタイムの演算処理が可能になることで、1980年代末に現れたインタラクティブ・アートの登場を契機としているが、本調査研究では先んずる数年をそこに至る過渡期として含んでいる。またメディアアートは、1990年代の科学技術の進展やインターネットの普及の中で、新たなメディアや手法を加え、極めて多様な表現へと拡張している。

日本は、戦後の高度成長以降、技術立国として海外に多くの機器を輸出してきた。ビデオ作品を可能にした Portapak（1967年）やライフスタイルを変えた Walkman（1979

¹ <https://www.mecenat.or.jp/ja/about/post/intention/>

年)などを生み出したソニーはもとより、映像音響メーカーのハードとしての作品への貢献は目覚ましい。1989年以前、企業の技術支援は単発的になされていたが、「企業メセナ」という新たなフレームを得たことで、まとまった予算や人材を投入し、体系的かつ継続的な活動を行う基盤が整ったといえる。メセナに際して企業は、資金提供、継続支援だけでなく、当該企業ならではの独自の支援を検討することが多々あるが、技術系企業の場合、技術や技術系人材の提供が特色となる。

そのために、技術系企業のメセナとメディアアートは相性が良い。とりわけ1990年代において、先進的なアート表現を芸術文化として受け入れ支援する企業が現れたこと、それが日本において起こったのは偶然ではないだろう。メディアアートは、1990年代において新たな実験や拡張が次々となされたが、それに同期するかのように、企業メセナとしてのメディアアート支援も1990年代にピークを迎えたといえる。その代表的事例がキヤノン・アートラボである。

本稿では、まず背景として、日本のメディアアートの歴史的背景、企業のアート&テクノロジー支援の歴史を確認する。その上で「メディアアートの活動と評価」として、1960年代以降から1980年代に至るまでを俯瞰した上で、1990年代の企業メセナとメディアアートの事例を確認するとともに、キヤノン・アートラボ、資生堂 CyGnet、スパイラル／株式会社ワコールアートセンターについて個別に企業背景、活動内容、成果、意義、問題点を検討する。また歴史的俯瞰として、メディアアートシーンの推移と展開、1990年代の世界の状況、1990年代後半のシーンの展開を記述する。

その上で、21世紀以降の企業とメディアアートの状況を確認し、そこに本調査研究対象である1985年～2005年の企業メセナとメディアアートがもたらした影響の検討を含め、歴史的評価を行っていく。

7.1.2 日本のメディアアート（1950年代以降）

ここではまず、日本における「メディアアート」の歴史的系譜として、アート&テクノロジーにおける実験的な表現や活動の代表的事例を振り返る。そこには既に、アートと企業との関係が生まれていた。アーティストたちは、常に同時代の技術的革新にいち早く向き合い、一定の距離を置きながら、技術をマニュアルから解き放ち、創造的使用に開こうとしてきた。

その場合、アートは科学技術の進展に依存するものの、直線的に突き進む科学技術への創造的な批評行為として、技術や人間とは、という問いを提示し、またかつてなかった視覚、知覚的体験や価値観へと体験する側を誘うことになる。その意味においてアートは、科学技術に従属するものではなく、科学技術の合理性から人々の心を解放する社会・文化的実践の役割を担うものである。

第二次大戦後、既に1951年には、戦前にシュルレアリスムを紹介した美術評論家・瀧口修造を中心的存在として、美術家、作曲家、詩人など多様な分野からメンバーが集まっ

第7章 総論

た「実験工房」が産声をあげている。メンバーの中には、山口勝弘（後にビデオアーティストとして活躍、また筑波大学の「総合造形領域」教授として1980年代に原田大三郎や岩井俊雄らを輩出した）がおり、また活動として東京通信工業（現・ソニー）の依頼によるオートスライド装置の制作とオートスライドプロジェクターを使用した作品（1954年）など、アート&テクノロジーの実践が展開されている。

1954年には関西で具体美術協会が活動を開始、田中敦子の《電気服》に代表される身体とテクノロジーの実験は、1970年の大阪万博のお祭り広場でのパフォーマンスへと展開していく。

大阪万博では、1968年にニューヨークで開始されたE.A.T. (Experiments in Art and Technology) のメンバーでもあった霧の彫刻家・中谷芙二子がロバート・ブリアと共にE.A.T.として《フロート》を実現するなど、企業とアート&テクノロジーの実験が展開された場となった。1960年代には、専任技術者と機器を備えた草月アートセンター（1958-1971）が前衛芸術やアート&テクノロジーの実験の重要な場となり、ホールでは音楽や映画、パフォーマンスなど実験的なイベントが開催された。またNHKは1950年～1960年代に、ドイツ・ケルンのWDR（西ドイツ放送）に1950年代初頭に開設されたケルン電子音楽スタジオ（～2000年）に倣ってNHK電子音楽スタジオを持ち、実験の場を提供した。

1960年代後半に多摩美術大学の学生（幸村真佐男、槌屋治樹、高橋士郎）によって結成されたC.T.G.（コンピュータ・テクニク・グループ）は、1967年にIBM社のコンピュータIBM7080とカルコンプ社のプロッター出力のドローイングを制作、1968年の「サイバネティック・セレンディピティ」展（ICA、ロンドン）に招聘されている。1972年に山口勝弘、かわなかのぶひろ、松本俊夫らが結成した「ビデオひろば」を始め、実験映像の展開とともに、1970年代前半には、銀座のソニービルを始め、複数の画廊やスペースでテクノロジー・アートの展覧会が開催されている。

1970年代以降は、西武百貨店が欧米の最先端の現代美術やアート&テクノロジーの動向を紹介する場として機能した。複数の美術館に加え、Studio 200（池袋西武、1979年～1991年）がトーク、現代音楽、ダンスパフォーマンスなど多岐にわたるイベントの重要な拠点となった。

1983年に西武は音楽・映像ソフトをそろえ、アートブックストアやミニシアター（映画館）を持つ商業施設六本木WAVEをオープン、CG、コンピュータソフト開発などを行う西武の関連会社、株式会社セディックも入居していた（現・ポケモン代表取締役社長・石原恒和が当時在籍）。また森ビルが、1978年にオープンしたラフォーレ原宿内のミュージアムでは、ニューヨークを中心とした最先端のアートやストリートカルチャーを紹介している。

1970年代から1980年代の実験映像やビデオアートを支えた組織としては、イメージフォーラム（1977年～）が実験映画の制作、配給、上映、作家養成を開始し、1980年に中

谷芙二子が開設したビデオギャラリーSCANが、米国のビデオアートやアクティビズムを紹介するとともに、新作公募展や個展を活発に開催、この活動が本調査研究でも取り上げるスパイラル／株式会社ワコールアートセンターでの「ビデオ・テレビ・フェスティバル」（1987年、1989年、1992年）へとつながっていく。1980年代にビデオギャラリーSCANのディレクターとして1989年の「ビデオ・テレビ・フェスティバル」に中心的に関わった清恵子は、その直後東欧に拠点を移したが、当時ビデオ機材は日本発、ビデオアートを含め国内に入る情報は欧米中心の中、ハンガリーのビデオマガジン

『Infermental』とその創立者ガボール・ボディに出会ったことが契機だという。ハンガリーでは企業とメディアアートの関係がそもそもなく、国営放送でビデオアーティストが市民にビデオの使い方や国の改革を指南している状況に驚いたという。²

1985年にはつくば市で筑波科学博が開催され、9月には坂本龍一、浅田彰、ラディカルRV（原田大三郎＋庄野晴彦）によるSONYの大型映像装置「ジャンボトロン」を使った大規模パフォーマンス「TV WAR」が行われる。大阪万博に続いて、技術立国としての科学技術の推進が、最先端の機器を駆使したメディアアートのパフォーマンスとして披露されたといえる。

日本では、欧米とも他のアジア諸国とも異なる形で企業とアート&テクノロジーの関係が展開してきた。高度成長による技術立国としての確立、東京オリンピック～大阪万博～つくば科学万博との関係、そしてアートにおいては、20世紀前半以降、欧米のアート&テクノロジーの実験をほぼリアルタイムで受容し、1960年代以降はフルクサスやE.A.T.に参加していた日本人が多くいたことも、日本のメディアアートを形成してきた要因となっている。

7.1.3 企業のメディアアート支援（1960年代以降）

1980年代は世界経済のグローバル化とともに、日本の企業が大きなプレゼンスを示した。メディアアートへの支援としては、当時ブラウン管TV受像機を空間に配置するインスタレーション形式へと展開したビデオアートを中心に、映像・音響機材を手掛ける企業（ソニー、ビクター、パイオニア、ヤマハなど）による展示やイベントでの機材提供が活発化する。実験映像分野では、飯村隆彦、中島興、出光真子らが、コンピュータグラフィックス分野では1970年代末から活動していた河口洋一郎に加え、藤幡正樹が登場した時代である。フジテレビ関連の制作会社、オフィスエイトには原田大三郎、庄野晴彦が所属し、コンピュータグラフィックスを手掛けていた。

そのような中、メディアアートの最前線として挙げられるのは、ほぼ米国発のものであり、ナムジュン・パイクによる人工衛星を介して地球上の複数の都市をつなげるプロジェクトやTV受像機を積み上げたモニュメンタルなビデオ・インスタレーション、ローリ

² クリティカル・ライティング講座特別編「映像とアクティビズム：全体主義国家の例」（講師：清恵子、2019年1月7日 イメージフォーラム）

ー・アンダーソンによる映像や音、身体を駆使したメディア・パフォーマンス、ゲイリー・ヒルやビル・ヴィオラのビデオ・インスタレーションなどであった。そのような中、六本木 WAVE が、アインシュツルツェンデ・ノイバウテン、デア・プランなど西ドイツの前衛アートシーンを紹介する場となっていた。

1980 年代前半という、バブル経済へと日本が上昇を続けていた時代に、これらアーティストの作品やパフォーマンスが日本で紹介されるとともに（パイクは 1984 年に東京都美術館で個展、アンダーソンは 1984 年に公演）、坂本龍一、浅田彰など彼らと交流を持つ存在との共同イベントも開催された。そのような中、つくば科学万博が開催されている。

1984 年に『構造と力』で一躍注目された浅田彰は、フランスのポスト構造主義思想を中心に諸領域を横断する論客として、アート、メディアアートにおいても発言するだけでなく、「TV WAR」などの制作にも関わっている。1984 年には、当時京都市立芸術大学の学生を中心に、映像、音楽、建築、パフォーマンスなど領域を横断するアーティストグループ、ダムタイプが結成されているが、京都を拠点としていた浅田は、その初期から彼らと交流し、相互触発を生み出していた。1989 年 NHK は、BS 一般放送開始記念番組として浅田彰監修の「メディアアート・ミュージアム」を放映したが、そこには同年の「ビデオ・テレビ・フェスティバル」出展作家も多く含まれていた。また浅田彰は「メディアアート」という言葉を、ナムジュン・パイクの人工衛星を介したプロジェクト「風呂敷天下」（1988 年 1 月）を説明した際に使っている。

1980 年代後半には、企業によるアートサポートが活発化する。ハイネケン・ジャパンによる「ハイネケン・ヴィレッジ」（原宿、1988 年～1990 年？）では中原浩大ら新進の現代美術作家の助成と展示を行い、サントリー株式会社の「Suntory Art Box」（銀座ソニービル、1987 年～1988 年）では関口敦仁や宮島達男の個展を開催、日産自動車株式会社が新コンセプトカー Be-1 のためにオープンした「246 Club」（南青山、1987 年～1990 年代初頭）では、芳根聡をプロデューサーとして飴屋法水率いる MMM の「SKIN」や同じく飴屋のチーム、テクノクラート名義のインスタレーション《WAR BAR》（1990 年）が開催されている。松下電器産業（現・パナソニック株式会社）による期間限定の体験型ショールーム「東京パーン」（汐留、1990 年～1991 年？）は同社の壁面スピーカーで壁全面を覆ったホールで、メディア美学者の武邑光裕がプロデュースを担当、クリスティアン・マークレーのライブ「100 台のターンテーブル」（1992 年）など音響やメディアアートのパフォーマンスが開催された。また株式会社ジーベックの「XEBEC ホール」（神戸、1989 年～）は、1989 年にブライアン・イーノのサウンド・インスタレーションを開催、1991 年に砥綿正之＋松本泰章による《DIVINA COMMEDIA》という、体験者がゼリーのプールに横たわり、音と光を浴びる知覚体験作品を実施している。三上晴子は、1990 年に自ら企業（トーヨーコ地球環境研究所）と交渉し、クリーンルームを含む新築の建物で壮大な展示《Information Weapon 1》を実施している（横浜・トーヨーコ・グローバル・エンバイラメント・ラボラトリー）。

企業ではないが、四谷の東長寺が新たな建物の地下を提供し、Alternative Museum P3（後の P3 Art and Environment）を 1989 年にオープン、「バックミンスター・フラ一展」を皮切りに、インゴ・ギュンター、三上晴子、小杉武久など、メディアアートやサウンドアートの企画展を実施し、アート&テクノロジーの動向の一端を担った。NEC は 1990 年代に、P3 Art and Environment と東京大学人工物工学研究センターとで「Art, Technology, Environment (A.T.E)」を展開している。

またアーティストの中村政人が中心に立ち上げたアーティストイニシアティブ、コマンド N が、秋葉原電気街の店頭に並ぶ TV 受像機でアーティストによる映像作品を流した「秋葉原 TV」（1999 年、2000 年、2002 年）が、商工会との交渉や大小に関わらず小売店の協力を得ることで、かつてない規模と内容のプロジェクトを都市空間で実現、企業とメディアアートとの新たな一面を開いたといえよう。

1990 年、企業メセナ協議会創立と同年、メディアアートにおいては、日本電信電話株式会社（NTT）が、「電話 100 年記念事業」として、「科学技術と芸術文化のコミュニケーションをテーマとするメセナ施設」として、NTT インターコミュニケーション・センター [ICC] 構想を浅田彰、伊藤俊治、武邑光裕、彦坂裕をコミッティメンバーとして発足、センター開館準備と並行して 1991 年より活動を開始する。キヤノン・アトラボと同年である。1991 年に初のプレイベント「電話網の中の見えないミュージアム」を開催、以降 1、2 年 1 回をベースに都内の会場を借りて展覧会を開催、1994 年に NTT MEDIA LAB（南麻布）開設、1995 年の NTT インターコミュニケーション'95「on the Web — ネットワークの中のミュージアム—」を経て、1997 年 4 月に東京オペラシティタワー内にセンターを開館した。展覧会以外にも、1992 年に季刊誌『インターコミュニケーション』を創刊、1993 年には「ニュースクール」を開始し、ワークショップやレクチャーを開催している³。

1990 年には、麒麟ビール株式会社が KPO キリンプラザ大阪をオープン（～2007 年）し、「麒麟アートアワード」を同年から 2005 年まで展開、ヤノベケンジ（1990 年）が初受賞している（1990 年）。

1990 年代前半には、ソニーが「ソニーミュージック・アート・アーティスト・オーディション」を開催、1993 年には明和電機が、また 1990 年代の、数年間ダムタイプにも参加していた高嶺格も受賞している。富士ゼロックスは、1990 年代に、アーティストが制作のためにコピー機の使用ができるサポートプログラムを行っていた。

1990 年代を通して名古屋は、メディアアートに関わる動きが活性化していた。1989 年の世界デザイン博覧会において、テクノロジー・アート、メディアアートを紹介する「名古屋国際ビエンナーレ ARTEC」（～1997 年）の前身となるイベントが開催され、2002 年には ISEA（国際電子芸術会議）が名古屋で開催（ディレクター：茂登山清文）されている。

³ http://artscape.jp/dictionary/modern/1198192_1637.html

上記（7.1.2, 7.1.3）の時代は「メディアアート」という言葉は使用されていなかったが、「メディアアート」に至るアート&テクノロジーの動きとして、本稿では「メディアアート」という語を使用している。

7.1.4 メディアアートの活動と評価

(1) スパイラル／株式会社ワコールアートセンター

1978年ワコールの創業者・塚本幸一がシャルル・ドゴール空港に到着した際、後に大統領となるジャック・シラクが出迎えた。ワコール社長としてではなく、同年彼が設立した財団法人京都服飾文化研究財団（以下、KCI）理事長として。そのようなエピソードがあるという⁴。この財団は、世界的なメゾンからの寄贈品を始め、貴重な品々の収集・保管・研究・展示で高く評価されている。「企業の本業そのものと密着した文化の基礎研究を財団が負担し、それを企業が支援し続けている」⁴。

ワコール株式会社（2005年株式会社ワコールホールディングスに変更、同時に同名会社立ち上げ）は、終戦後塚本幸一が婦人装身具の商売を開始、1949年に和江商事株式会社を創業、1957年にワコール株式会社となった。塚本は、事業の根幹に「日本の女性を美しくしたい」という思いを持っていた。下着やファッションの研究や資料収集の必要性を感じ、KCIを1978年に設立したという。財団は1980年に初の服飾展覧会「浪漫衣装展」（京都国立近代美術館）を開催、スパイラル／株式会社ワコールアートセンター誕生と同年の1985年から1987年には「現代日本画展」を欧米5か国の美術館に巡回させている。

服飾、女性、身体と密接に関わる事業内容から、生活と芸術が密接に関わることを企業人として理解するだけでなく、広く人々に知らせ体感してもらう場を持つことを塚本は望んだのだろう。

財団であるKCIが本社のある京都を拠点とする中、「文化の事業化」を目指す「複合文化施設」として選んだのが東京の南青山であった。

1985年10月に誕生したスパイラル／株式会社ワコールアートセンター（運営：株式会社ワコールアートセンター）は、槇文彦設計によるユニークな建築が、オープン後35年近い現在でもひととき目立ち、青山のランドマークとなっている。コンセプトの「生活とアートの融合」は、まさに創業者塚本が追求していたものであり、京都の財団KCIと、事業としての東京のスパイラル／株式会社ワコールアートセンターがそろい、企業文化・企業メセナの両輪が形成されたといっている。

「スパイラル／株式会社ワコールアートセンター」という表記は、施設とセンターの両機能をもつという意味だろう。文化の香りをもつ商業施設とアクセスがよく日常的にアートに出会えるセンターの複合体は、世界にも例がない。入ると、ショップもあるロビーからカフェの奥に採光があるアトリウムが見通せ、カフェに沿ったギャラリー経由でアトリ

⁴ 加藤種男『芸術文化の投資効果 企業メセナと創造経済』（水曜社、2018）P278

ウムへ、そこからスパイラル状のスロープを上がれば気分が高揚するだけでなく、異なるアングルや高さから空間や展示が味わえる。そのまま進むとスパイラルマーケットである。3Fのスパイラルホール、上層階や地下のレストランやビューティ・サロンなど、アートと生活が融合する居心地のよい空間である。

オープン当初から、1Fのスパイラルガーデン、3Fのスパイラルホールを中心に自主企画を数多く行ってきた。ガーデンでは、国内外の現代美術の企画展を開催⁵、京都をはじめ関西で注目される若手アーティストを東京で紹介する場でもあった。3Fでは国内外のダンス、パフォーマンスを中心にサウンドのライブや展示なども開催された。スパイラル／株式会社ワコールアートセンターの当時のプロデューサー尾崎宣之、キュレータ岡田勉、またホール担当の小林裕幸（現・館長、株式会社ワコールアートセンター代表取締役社長）らを中心にした豊かな人材があった。またプロフェッショナルな広報チームが、この洗練された施設の顔となっていた。

メディアアートに至るアート&テクノロジーの催しでは、ビデオギャラリーSCANと三度にわたり共同開催された「ビデオ・テレビ・フェスティバル」（1987年、1989年、1992年）が挙げられる。自主企画としては、ダムタイプの「pH」展（インスタレーション、パフォーマンス、出版）が筆頭に挙げられる。京都を拠点にし、パフォーマンス「PLEASURE LIFE」（原宿クエストホール、1988年）で東京に初進出したばかりの彼らの大規模個展であった。その後もダムタイプとは、パフォーマンス「S/N」など継続的に組んでいる。ダムタイプの古橋悌二はビデオギャラリーSCANでの受賞を契機に国内外のネットワークを形成し、ダムタイプは「ビデオ・テレビ・フェスティバル」にも関わっている。ビデオギャラリーSCAN、スパイラル／株式会社ワコールアートセンターは、東京でのダムタイプの重要な拠点だったともいえる。

筆者はその頃スパイラル／株式会社ワコールアートセンターといくつか仕事をしている。「笠原恵実子+モニカ・ブランドマイヤー・ジョイント展：浮遊するものさし」展（1990年）にタイトル命名やプレスリリース執筆に関わり、ダムタイプの「S/N」パフォーマンスは、仮設リハーサル中の京都・無門館に尾崎宣之、広報の今井美知と視察に行っている。1998年には、スパイラル／株式会社ワコールアートセンターが関わっていた茨城県守谷町（現・守谷市）の「アーカス構想」のパイロットプログラム⁶の国内アーティスト推薦委員としてエキソニモを紹介、その後エキソニモはスパイラルのウェブサイトを依頼され、2000年には企画展「スパイラル大作戦」に招聘されている。

⁵ 本調査研究統括ディレクター関口敦仁は、1988年「KODAMA<Neotone・Neostyle>」（仁科茂との2人展）に出展。

⁶ 現・ARCUS（国内で最も古いアーティスト滞在プログラム）。スパイラル／株式会社ワコールアートセンターは、国内の様々な地域で文化的イベントや展示のコンサルティングやプロデュースを手掛ける。

メディアアートにおいて印象的なのは、1992年、ICCがプレイベントとして開催した「IC'92 脱着するリアリティ」（入江経一＋藤幡正樹）である。黄色の薄い木材の層がなだらかな傾斜をなして積層した入江による空間を、受信機とヘッドホンを着用し歩くことで音声による異なるリアリティを脱着していく大規模な体験型インスタレーションであった。

自ら関わったメディアアートの展示としては、ドイツのメディアアーティスト／建築家のクリスティアン・メラーの新作展「サウンド・ガーデン」（主催：スパイラル／株式会社ワコールアートセンター、東京ドイツ文化センター、1997年、キュレータ：阿部一直、四方幸子）がある。キャノン・アートラボで同時期にメラーの「ヴァーチャル・ケージ」の展覧会を開催し相互連携を行った⁷。「サウンド・ガーデン」展は、ロビーには人々の動きをリアルタイムで抽象パターンと音に変換する《カメラ・ミュージック》、ギャラリーの壁面をプラットフォームに見立て列車が通過する《ヴァーチャル・トレイン》、アトリウムには、林立したステンレスの＜木立ち（グローヴ）＞林を人々が触れると音や光のパターンが複雑に形成される《オーディオ・グローヴ》を展開、開館以来最多の来場者数を数えたという。

キャノン・アートラボでは、1998年に「アートラボ特別展「LOVERS／frost frames」（古橋悌二／高谷史郎）を開催、1999年から2001年まで計3回プロスペクト展を1Fで開催している⁸。

近年も、メディアアートの展示やパフォーマンス開催の共催や受け入れは多い。スパイラル／株式会社ワコールアートセンターが、ダムタイプに代表される先進的な企画を送り出し、また数多くのメディアアート展やパフォーマンスをホストしてきたからだろう。例として、池田亮司⁹の「Red Bull Music Academy presents test pattern [n°6] : Ryoji Ikeda」（2014年）、ライゾマティクス創立10周年記念展「Rhizomatiks 10」（2017年）、Eleven Play Rhizomatiks Research×ELEVENPLAY最新パフォーマンス「discrete figures」（2018年）、「visual design studio WOWが動かす世界」（2018年）などがある。スパイラル／株式会社ワコールアートセンターは現在も今後も、先端的クリエイションやプロダクトのみならず、メディアアートの発信地であり、それを可能にしたのはこの企業ならではの文化理解であり、それを実践してきた現場に息づく企業メセナ精神であろう。

⁷ 「アートラボ第2回プロスペクト展「Virtual Cage [ヴァーチャル・ケージ]」（会場：東長寺講堂 P3）

⁸ 1999年「アートラボ第3回プロスペクト展「ウルティマ・ラティオー物語のカスケード」展（ダニエラ・アリーナ・プレーヴェ）／2000年「アートラボ第4回プロスペクト展「DRIVE [ドライブ]」展（ジョーダン・克蘭ダル）」／2001年「アートラボ第5回プロスペクト展「R111-仮想から物質へ」展（ミヒャエル・サウプ＋supreme particles）」。

⁹ 池田亮司は、1990年代にスパイラルの音響を担当していた。

(2) キヤノン・アートラボ

1. キヤノン・アートラボの成立

キヤノン・アートラボ（以下「アートラボ」）は、キヤノン株式会社の文化支援として1990-2001年に展開されたプログラムで、キヤノンのソフトウェア・エンジニアとアーティストとの約10か月のコラボレーションによって作品を制作し発表する「企画展」（年1回）、海外の重要なメディアアート作品を招聘する「プロスペクト展」（1995年～2001年に5回開催）、公募展（1993年）、特別展（1998年）、その他にトーク、シンポジウム、出版、機器サポートなどで構成、キュレーションは全期にわたって阿部一直と筆者が共同で担当していた。

キヤノンは、1988年に第二の創業を宣言、「共生」を企業理念としたグローバル企業構想（5か年）をスタートした。アートラボの構想は、1990年に企業メセナ協議会の活動が開始されたほぼ同時期に遡る。当時キヤノン株式会社取締役社長であった山路敬三のアイデアから生まれたと言われている。工学博士として初の社長になった山路は、レオナルド・ダ・ヴィンチを尊敬しており、そこにアートとサイエンスの創造的な関係を読み取っていた。アートラボの構想が具体化したきっかけは、1990年4月から大阪で開催された「国際花と緑の博覧会（花博）」での展示だという。アーティスト（日比野克彦、藤幡正樹ら）にデジタル静止画像処理技術をエンジニアのサポート込みで提供し、制作を依頼、作品の反響が良かったことから文化支援として本格的に取り組むことになったという。

アートラボを開始するに当たって、山路は以下の理念を掲げている。お金を提供するだけでなく、キヤノンの技術と人的資源を提供すること、継続的な活動とすること、である。企業メセナ協議会の創立時期でもあり、単発的な支援から、企業の特徴を生かした創造性を追求し、活動を継続する方向へと舵（かじ）を切ったのである。

キヤノンの当時の担当部署は、社会・文化支援センター 文化支援推進室である。文化支援推進室には、アートラボと同じ年に開始された若手写真家の発掘と育成のための公募プログラム「写真新世紀」（現在も継続）も属していた。1933年に小型写真機から出発したキヤノンは、1980年代にはファクスやプリンタなどOA機器でもグローバルなプレゼンスを獲得し、来るべきデジタル化に向けて新たな動きを起こそうとしていた。写真新世紀とアートラボは、到来した企業メセナの時代において、写真とデジタルというキヤノンの二つの軸に沿って開始されたといえる。

メディアアートにおいては、同年の1990年にNTTが「電話100年記念事業」としてNTTインターコミュニケーション・センター[ICC]の準備を開始していた。キヤノンは少し遅れながらほぼ同時期にアートラボを開始、ICCと比較すると予算や人員面など全般的に小規模であったが、だからこそ迅速に準備を進めていった。ICCは外部有識者によるコミッティ（浅田彰、伊藤俊治、武邑光裕、彦坂裕）をもち、1997年のセンター開館を前提としながらイベントや出版活動などを準備しており、アートラボはキュレータを配

し、エンジニアとアーティストのコラボレーションによる新作の制作を活動の軸に、展示スペースを持たないプログラムであった。振り返れば ICC とアートラボは、1990 年代のメディアアートの登場と発展という重要な時期に、その活動が世界的に大きく注目を集める存在となった。

筆者がキュレーターとして加わった 1990 年 6 月、アートラボはプログラムの方向性や内容を検討するため、エンジニア、事務局メンバー、キュレーター、プロデューサー（広告代理店）間の対話を開始、アートやデジタル技術に造詣の深い有識者やアーティストへのヒアリングを本格化する。同時に「アート」と「ラボラトリー」を合体させた「アートラボ」という名称が決定する。当時、エンジニアチームは下丸子本社、事務担当は西新宿と分かれていたが、これらの部署が「アートラボ」として同居する場を社外に設置することになる。1990 年 12 月に阿部一直がキュレーターとして加わり、1991 年年明けから、6 月のローンチ（アートラボ第 1 回企画展「ARTLAB」、アートラボ・オープニング・シンポジウム「デジタルアートの環境と未来」¹⁰（いずれも外苑前 TEPIA）、『アートラボ・コンセプトブック』出版）に向けて準備が本格化した。当時「メディアアート」という言葉はまだ流通しておらず、アートラボでは「デジタルアート」という言葉を使用していた。

アートラボは、アーティストの想像力とエンジニアの技術の融合により、新たなアートの領域の創造と実験を目指すラボラトリーとして誕生した。

第 1 回企画展では、コンピュータの使用経験がないものの、エンジニアを触発したり、コラボレーションを通じて新たな作品を生み出す可能性をもつ国内の若手アーティスト 3 組（コンプレッソ・プラスティコ（平野治朗＋松蔭浩之）、中原浩大、福田美蘭）を招いた。アーティスト、エンジニア、キュレーターとの対話の中から生まれた作品の構想は、下丸子のエンジニアのもとでデジタル処理され、それを確認するという制作プロセスとなった。

キャノン・アートラボの最初の企画展として「ARTLAB」というタイトルを冠した第 1 回企画展で、コンプレッソ・プラスティコは 3D ステレオ画像によるポートレート作品群（静止画）《REALIZE-すべては成就する》、中原浩大は、様々なレトロ家電製品のオン／オフがカップルの体験者それぞれの心拍とシンクロ作動する壮大なインタラクティブ作品《デートマシーン》を、福田美蘭は、日常からのイメージや自作を含む絵画をデジタルで再構成、3D 化（レンチキュラー）することでイリュージョン的空間を構成した（作品名：《3DS-緑の巨人》《3DS-テレビショッピング》《Joint—"緑の巨人" "テレビショッピング"》《Picture block-rearrangement No.1-3》《mirror》他）。本展は、現代美術、アート＆テクノロジー関係者双方に大きな反響をもたらした。参加アーティストの新たな側面を開いたこと、アートラボの追求するデジタルを介した実験的なアートを初めて提示し

¹⁰ 1991 年 6 月 23 日、TEPIA ホール。パネリスト：オットー・E・レスラー、フィリップ・ケオ、伊藤俊治、奥出直人、藤幡正樹。

たこと。社会的には、キヤノン株式会社が自社のデジタル技術を実験的なアートへと応用し、文化支援として打ち出したインパクトがあった。

1991 年秋にキヤノンは、創業の地でもある六本木にアートラボと写真新世紀もつ文化支援課のオフィスを開設、アートラボ担当の約 10 人のエンジニアが常駐する「アートラボ・ファクトリー」も入居した。異なる部署が独立して場を構えるのは、社内でも例外的であった。

キュレータは阿部一直と筆者が、プログラム全期に渡って務めた。アートラボは展示スペースを持たないため、作品に応じて会場を借りていたが、1993 年 9 月のアートラボ第 3 回企画展「パーセプチュアル アリーナー空間のパラドックス」（ウルリーケ・ガブリエル）以降、企画展は代官山のヒルサイドプラザでの開催が定着し（インターネット上で展開されたアートラボ第 5 回企画展を除く）、1995 年に開始したアートラボ・プロスペクト展（海外から重要な作品を招聘展示する枠）では、最初 2 回を四谷の東長寺講堂 P3、その後の 3 回をスパイラル／株式会社ワコールアートセンターで開催した。展覧会では、設営・撤去期間に加え、新作のための現場調整やバグ取り時間が必要とされた。そのため、実際の公開期間が 10 日前後と短期間とならざるを得なかった。

キュレーションに際しては、アーティストがアートラボとのコラボレーションを介してこれまでにないものを創造し、次の展開へと踏み出していくこと、同時代の技術・社会・思想的動向を読み取ること、エンジニアのスキルや機材を生かすこと、などを念頭に置きながら、最初にコンセプトとアーティスト候補を作成、エンジニアや事務局と話した上で、アーティストに打診し、相互にフィードバックをしながら進めていくことが重視された。

アートラボには参照できる組織はなく、先入観にとらわれず、キュレータ、エンジニア、アーティスト、事務局メンバーなどが共に対話し模索し作っていく体制をとった。キュレータは企業の人々とアーティストをつなぐ存在であり、またエンジニアとアーティストという、しばしば異なる思考回路をもつ人々をつなぎ、そこから創造的なものを生み出す存在と捉えられていた。既存のアーティスト／キュレータという分岐から離れ、かつてない作品実現のために共に進む「コラボレーター」としての在り方が、2 人のキュレータに共有されていた。エンジニアも、コラボレーターとして、技術面から情報やアイデアをアーティストに投げかけるなど、作品に能動的に関わっていった。それによってアーティストと担当エンジニアとの信頼関係が醸成されていった。また何人ものエンジニアが、アートに興味を持ち始め、実際に造詣を深めていった。

インタラクティブ・アートは、体験者によって異なる体験に開かれている。またメディアアートは、新たに登場したソフトやハードを取り入れてバージョンアップすることが可能である。そのためアートラボは、展覧会後も必要と判断される場合は作品のバージョンアップを行うなど継続的なサポートを行った。加えて、国内外巡回の際、必要に応じてエ

エンジニアを派遣した。作品制作の過程でエンジニアが作成したプログラムは、キヤノンが保有していたが、作品という範囲内で各アーティストが使用することが可能であった。

エンジニアは、作品制作において開発したプログラムやシステム、各自の担当やそのための調査研究、開発プロセスなどを社内的にまとめるだけでなく、論文として（ときにはアーティストと連名で）発表することもあった。また開発物の特許申請も行っている。

展覧会后、キヤノンは、アーティストが制作した作品の一部を買上げ、保管していた（アートラボ第6回企画展 三上晴子「Molecular Informatics [モレキュラー インフォマティクス] —視線のモルフォロジー」(1996年) までと思われる)¹¹。

2. アートラボの展開 1: デジタル静止画像処理技術からインタラクティブへ

アートラボのエンジニアは、デジタル静止画像処理のチームから成り立っていた。そのためアートラボ開始当初は、デジタル静止画像処理を前提としたキュレーションや作品制作を行った（アートラボ第1回企画展「ARTLAB」、アートラボ第2回企画展

「ARTLAB2」（ヘラルド・ファン・ダー・カープ、ミッションインヴィジブル¹²（石原友明+松井智恵）（会場：芝浦ニューピアホール）。現在では、スマートフォン上のアプリでも容易に可能な技術だが、当時は高価で巨大なワークステーションを必要とした。パソコンが普及しておらず、コンピュータにアクセスできる場所は大学や企業、研究所に限られていた時代である。

アートラボは、そのような技術にアクセスできる機会をアーティストに開き、またエンジニアなど異分野の人々と交流し共に作品を制作する場となった。

メディアアートにおいては、1990年のアルスエレクトロニカ・フェスティバルでのヴァーチャル・リアリティ（VR）、1993年の同フェスティバルでの人工生命への注目を始め、科学技術を転用した実験が開始されていた。1993年から1997年は、とりわけメディアアートの歴史において重要な作品が数多く生み出された実りの多い時期で、海外ではジェフリー・ショウを筆頭に、クリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョノー、リュック・クーレルシェヌ、ジャン＝ルイ・ボワシエ、ノウボティック・リサーチ（KR+cF）、クリスティアン・メラーなど枚挙にいとまがない。

日本では、これらアーティストによるような作品はまだ生まれていなかった。

1992年のアートラボ第2回企画展「ARTLAB2」では、エンジニアの持ち技術を活用しながら、デジタル時代のコラボレーションや匿名性に注目し、アーティストに本展のために新たにチームを結成することから打診した。アムステルダムを拠点とするファン・ダ

¹¹ 本展若しくはアートラボ第4回企画展「LOVERS—永遠の恋人たち」まで展示作品の一部若しくは派生的作品が購入された。具体的な作品と現在の保管先を確認する必要（破棄されている可能性も）。

¹² ミッション・インヴィジブルは、当時「本展のために結成された匿名チーム」であり、作品タイトルも同名。石原友明と松井智恵の初コラボレーション作品。

ー・カーブは、映像、音楽、詩、ファッションなど多分野のクリエイターと共に視聴覚や触覚を刺激する装置を含む《TOTAL HOVERTY》を空間で展開した。

《Mission Invisible》は、「絵画を見ることについて」の様々なテキスト（日英）の引用を3サイズの文字でプリントした2枚の巨大な「宗教画」を、それらの表面に設置されたXYプロッター上のカメラを体験者が遠隔的に操作（移動とズームアップ／ダウン）しながら走査するものである。デジタル静止画像処理を基軸としながら、インターネットのブラウズ体験を先見的に予見したような作品となった。

そのような中、1991年～1992年に作品構想の公募を行い、審査の上（外部審査員として伊藤俊治、樫木野衣）3組を選出、エンジニアとのコラボレーションを経て1993年にアートラボ・オープン・コラボレーション展「PSYCHOSCAPE [サイコスケープ]ーアートからの精神観測」展¹³を開催した（会場：大崎駅に隣接するO美術館）。Bulbous Plants（バルバス・プランツ）¹⁴の《Random Accident Memory》は、4人の体験者が任意の画像を選ぶことで、コンピュータ内の写真やテキストなど記憶の断片からストーリーが予測不可能的に組み立てられていくことで、記憶や歴史の生成の問題を問い直した。DTI (Digital Therapy Institute) ¹⁵の《Brain Wave Rider》は、脳波センサ（IBVA）付きヘッドギアを装着した体験者が、仮想空間を移動する中、脳波に応じて映像が挿入されるインタラクティブ作品である。本木秀明《On the Drift》では、作家が自動筆記した動物の骨の連鎖のような「未解コード」が、3台のディスプレイと壁面プロジェクションで不断に流れるプロセスを展開した。

3. アートラボの展開2：インタラクティブ・アートの展開へ

1993年以降、アートラボは、アルゴリズムによるプロセスを体験できるインタラクティブ作品へと移行する。また、プログラミングが理解できるアーティストとのコラボレーションというフェーズに入る。

1992年、公募展の準備と並行し、企画展の作品及び技術的な次の展開として、VRによるインタラクティブのアートとしての拡張を目指したアートラボ第3回企画展「パーセプチュアル アリーナー空間のパラドックス」（ウルリーケ・ガブリエル、1993年）を進めつつあった。本展では、ヘッドマウンテッド・ディスプレイ（HMD）とデータグローブを装着した体験者が、仮想環境とインタラクトすることで、抽象的なポリゴンがリアルタイムで更新されていく。プログラミングには、アーティストに加え、彼女を支える米国人プログラマー（ボブ・オケーン）が重要な役割を果たした。

¹³ 公募展開催は本展一回のみとなった。選ばれた構想が、コンセプトや立場を異にしながらも、デジタル・メディアによる社会環境の変化が人間の精神に及ぼす変化を探索していることから、タイトル（PSYCHOSCAPE[サイコスケープ]ーアートからの精神観測）を決定した。

¹⁴ 岡崎乾二郎＋津田佳紀で構成。

¹⁵ 沖啓介、ヘンリー川原で構成。

三上晴子とのコラボレーションは、アートラボ開始当初から検討していたが、1990年代にニューヨークでコンピュータ科学を学んでいた本人に時期も含めインタラクティブ作品の構想を打診したのは1993年頃である。その後の対話の中で、インターネット技術の台頭と人工生命（アーティフィシャル・ライフ、AL）としてのコンピュータウイルスへの興味から、それを応用したインターネット上の作品（アートラボ第5回企画展 三上晴子「Molecular Clinic [モレキュラー クリニック] 1.0 on the Internet」（1995年）をまず発表、その後インスタレーション（アートラボ第6回企画展 三上晴子「Molecular Informatics [モレキュラー インフォマティクス] —視線のモルフォロジー」（1996年）へと展開した。いずれも「あらゆる物体は、個体であれ、液体であれ、モレキュラー（球体分子）の連鎖を変えることで人工的に作り出すことができる」というモレキュラー・バイオロジーの理論がもとになっている。前者はユーザが仮想空間のスパイダー（クモ）から任意のモレキュラーをダウンロード後培養し、元の環境に戻すことで、不特定多数の人々によりスパイダーが変容していくもので、コンセプト、技術両面で、世界にも前例のない作品であった。後者は、体験者の視線の動きがモレキュラーとしてリアルタイムで生成する世界と関係していく自己言及的な作品で、キヤノンの視線入力技術が応用されている。これら2作は、ニューヨーク渡航後の三上の新展開であり、その後彼女はアルゴリズムをベースとしたインタラクティブ・アートの代表的な作家として国際的に活躍し始める。

インタラクティブ・アートの最前線の追求は、アートラボ第7回企画展「IO_DENCIES [テンデンスーズ] -情報からの都市への問い」（ノウボティック・リサーチ（KR+cF）（1997年）で、インターネットとインスタレーションをつなげた展開へと至る。ドイツ・ケルン拠点のKR+cFには1990年代前半からアートラボとの作品を打診していたが、1996年に「都市性（アーバニティ）」をテーマに、都市を様々な情報の流れ（フロー）と見なすプロジェクトが提案された。具体的には東京の新橋汐留跡地（現：汐留シオサイト）を起点に周辺を10地域に分け、人間・情報・経済・交通・建築的な情報フローをフィールドワークし分析、ウェブ上のインターフェースとし、不特定多数のインターネットユーザや来場者が任意の情報フローを可視化し変形することで、この地の未来を仮想的に想像していくボトムアップのプロジェクトである。とあるユーザの入力したデータは、サーバ内でそれと類似の傾向を持つデータと結合し、新たな傾向（Tendencies）へと変化していく。ダイナミックに変容し続ける情報の傾向に応じて、インスタレーション空間の光や音が変容し、来場者は平衡感覚が揺らぐ体験をする。本作では、データの類似度検索や解析など、現在のビッグデータ処理へと至る技術がアートとして応用されている。

4. アートラボの展開3：古橋悌二と高谷史郎

実験的なインタラクティブ・アートの流れとは別に、アートラボの活動で独自の位置を占めているのが、アートラボ第4回企画展「LOVERS—永遠の恋人たち」（古橋悌二、1994年）である。1992年にキュレータは、京都を拠点に国際的な活躍をしていたアーティストグループ、ダムタイプの中心的存在であった古橋悌二に初のソロ・インスタレーション作品を打診する。ダムタイプがまだ匿名的な集団として活動していた時期である。本件で古橋と会った際、HIV+であることを先日知ったこと、展覧会が1994年秋の場合、万一自分がいなくても公開できるようにする、との意向を聞いた。「情報化が進む時代において、情報へと還元できないものは何か」を始めとする古橋の切実な言葉が作品の初期段階から投げかけられ、それらの一部は作品にテキストとして組み込まれた。「LOVERS」は、ダムタイプの「S/N」と同時並行的に制作された（饒舌（じょうぜつ）な後者と対極的にミニマルで静謐（せいひつ）な作品である）。「LOVERS」という一見ロマンティックな言葉の陰には、既存の境界を超えていくかつてない「愛の発明」（ミシェル・フーコー／古橋）への意志があった。制作には高谷史郎、上芝智裕らダムタイプのメンバーが関わり、多くのメンバーが映像に出演している。暗い空間の中央にあるタワー（プロジェクター7台搭載）から黒い布で覆った四方の壁に古橋を含む裸体の人物たちが等身大で投影され、テキストの投影や音も含め、出会いやすれ違いなど様々な関係を繰り広げる。会場に設置されたセンサに観客が感知されると、古橋の映像のみが当人へと振り向き一連のシークエンスの後、背後へと消滅する。テクノロジーの存在が意識されず、各人の琴線に触れる作品として、広く様々な来場者が訪れた。本作は、古橋（1960～1995年）の最初で最後のインスタレーション作品となった。

「LOVERS—永遠の恋人たち」は、その後、古橋の指示のもと国際バージョンへの¹⁶改訂の後、海外11か所を巡回、1998年にニューヨークのMoMAの収蔵作品となる。アートラボ特別展「LOVERS / frost frames」（古橋悌二／高谷史郎）は、ニューヨークに送られる前の国際バージョンの披露に際し、《LOVERS》制作に中心的に関わり、古橋逝去後ダムタイプの中心的存在となった高谷史郎に初のソロ作品を依頼し開催したジョイント展である。会場は、ダムタイプと関係の深いスパイラル／株式会社ワコールアートセンターで、アトリウムに遮光空間を作り《LOVERS》を、ギャラリー空間には《frost frames》を展示した。空間中央の正方形の磨（す）りガラスのスクリーンをめがけて、両端から異なる映像（自動撮影の風景、身体表面）を投射、顕著な映像のノイズは、デジタル・ビデオカメラの高速シャッター（電子の目）で撮影した映像を、ビデオの1フレーム（1/30秒）で表示したことで生じている。古橋《LOVERS》の最初のイメージであったホワイトアウトをモチーフにした、高谷の古橋へのオマージュというべき作品である（音は池田亮司が担当）。

¹⁶ 壁面へのテキストのプロジェクションを減らし、センサに反応して稼働する床への円形のテキスト・プロジェクションをなくした。

5. アートラボの展開 4：技術的拡張

アートラボ第8回企画展「SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ]」（1998年）は、アートとテクノロジー双方に見識をもつ若手の江渡浩一郎の初のインタラクティブ・インスタレーションである。インターネット上のプロジェクト「ICC on the Web」（インターコミュニケーション・センター[ICC]、1995年）や「センソリウム」（1996年）に関わっていた江渡に、実空間を含む作品を打診した。江渡のアイデアは、誰ともなく歌い始めた歌が変容しつつ歌い継がれる、そのようなコミュニケーションをデジタル・ネットワークで作りたいというものだった。作品ではインターネットと会場をつなぎ、インターフェースにサウンド・パターンを入力すると、いずれかのロボットが反復し、ロボット同士が接触すると影響し合い音に変容し続け、ボトムアップな一種の音の生態系が出現した。

アートラボ第9回企画展「分離する身体」（1999年）は、本調査研究総合ディレクター関口敦仁とのコラボレーション作品である。会場では、体験者の身体に関わる情報（外形、経絡の体温）がセンシングされ、再構成され3DCGとして仮想空間に現れる。身体データを音声認識で登録すると、仮想の身体部位が作り出され、オリジナル・インターフェース「パーツ・エディター」でそれらを変形することができ、結果が全身像に反映されていく。自身のデータに由来する情報身体とのインタラクションとそのアーカイブ化、グルーピングも含め、現代における生体情報の取得・解析・操作の問題をアートとして暗示する先見的な作品であった。

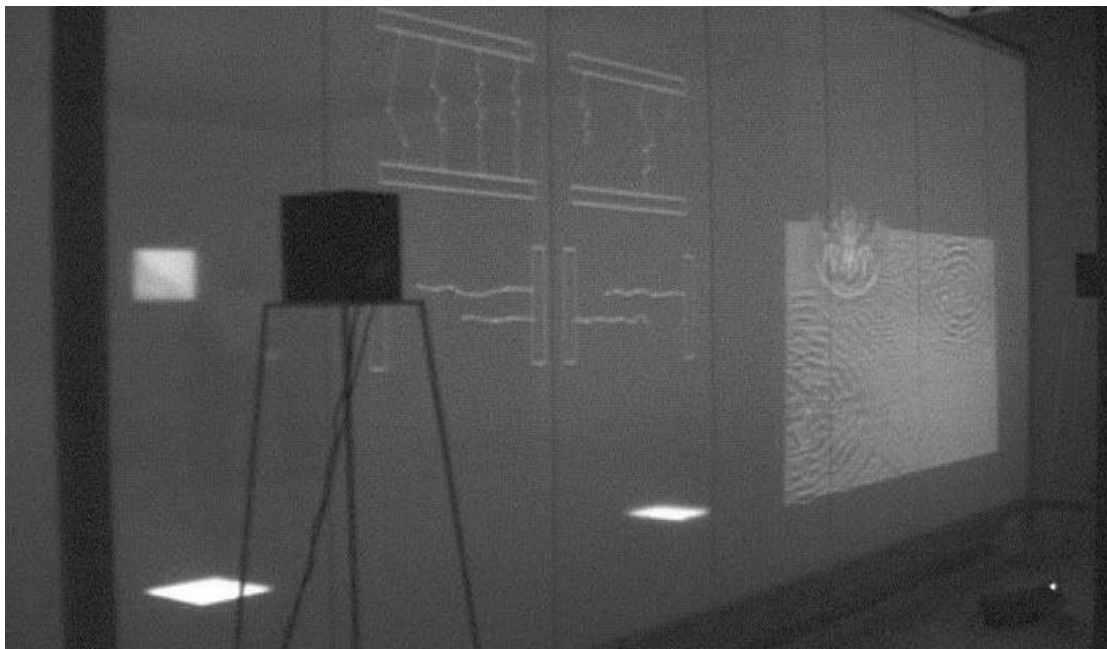


図 7-1 アートラボ第10回企画展「polar [ポーラー]」カールステン・ニコライ+マルコ・ペリハン

アートラボ第10回企画展「polar [ポーラー]」（カールステン・ニコライ+マルコ・ペリハン、2000年）は、東欧出身の二人（前者は東独、後者はユーゴスラビア／現・スロベニア）初のインスタレーションでのコラボレーションである。二人は、『ソラリス』（スタニスラフ・レムの1961年の小説、アンドレイ・タルコフスキーの1972年の映画）に出てくる、人間の記憶をインタラクティブに物質化する海「ソラリスの海」を起点とした。白い空間に2人の体験者がインターフェースを携え入り、収集した様々なデータ（温度、音、加速度など）がサーバに送られる。データに応じて端末上にキーワードが現れるが、それらはアーティストが世界を7つのカテゴリーに分け、それに沿って入力したテキストデータから抽出された「辞書」から選ばれている。任意のキーワードを選ぶと、検索エンジン経由でデータが収集され、サーバによる解析を経て抽出された言葉が辞書に追加されていく。情報の変動は、空間に音や光、水の振動や海のようにダイナミックに変容するCGやインターネットのトレースルートなどで示される。「polar（ポーラー）」は、検索、データの解析や可視化、AIを彷彿（ほうふつ）させる「知的情報体」など、21世紀に入り登場し始めた新たな技術を取り込みながら、デジタル／アナログをつなぐ情報生態系を予感させ、エンジニアにとっても約10年の活動で拡張してきた技術を駆使した記念碑的な作品となった。

6. アートラボの展開 5：5つのプロスペクト展、その他のアートラボ活動

ここでは、海外から重要なメディアアート作品を招聘する「プロスペクト展」について述べる。プロスペクト展は、1994年頃、国内ではまだインタラクティブ・アート作品が生まれていないことから、既存の作品を紹介するという枠としてスタートしたものである。まず1995年にアートラボ第1回プロスペクト展「TERRAIN [テライン]」（ウルリーケ・ガブリエル）が開催された（会場：東長寺講堂 P3）。1993年の企画展アーティストであるガブリエルの2作品《TERRAIN（テライン）》（1993年）と《BREATH（ブレス）》を紹介することに加え、アーティストの発想と展開や作品間の相違や関係性を提示する試みもあった。前者では、脳波センサ（IVBA）を装着した体験者の α 波が増すと（リラックス状態）ライトの光量が上がり、ソーラーセンサを付けたシンプルな機能のロボット群が活性化し、自己組織的に見えるが、それにより体験者の α 波が妨害されるループが起きる。後者では、意識と無意識の両方にまたがる呼吸に着目し、腹部のセンサを介した呼吸データが規則的な場合、ポリゴン（多角形）が活性化し有機的に見え、不規則になるとスタティックになる。体験者は、システム経由で環境とのループの中で流出的な「自己」に向き合うことになる。いずれの作品も、人間と環境をつないで生起するボトムアップの現象に人工生命的なものを感じ取る人間の眼差しを見ることができる。

1997年に開催されたアートラボ第2回プロスペクト展「Virtual Cage [ヴァーチャル・ケージ]」は、メディアアーティストで建築家であるクリスティアン・メラ（ドイツ）による光と音による＜インタラクティブ建築＞としての作品である（会場：東長寺講

堂 P3) 。暗い空間の中央に設置された床型のプラットフォームはその上で体験者が移動すると体重に沿って傾くが、床に設置されたレーザー光装置が水平に回転することで、床の傾きがスモークマシンでレーザーの膜として空間全体へと可視化・延長される。体験者の前のスクリーンには、虫のような音の群れが自律的に移動しているが、床の傾きが仮想空間にも連動することで、群れが移動し、それが音として会場全体を移動することで、空間全体が仮想空間とオーバーラップするヴァーチャルな「ケージ（鳥かご）」が浮上する。スモークマシンが空気の微細な流れを可視化することで、人々は自身の動きや呼吸でさえも空間に影響することを含め、デジタルとアナログが交差する生態系を体験した。メラーはほぼ同時期にスパイラル／株式会社ワコールアートセンターで新作を発表（主催：スパイラル／株式会社ワコールアートセンター、東京ドイツ文化センター、キュレータ：阿部一直、四方幸子）し、いずれも多くの人を来場者を得た。

1999 年のアートラボ第 3 回プロスペクト展「ウルティマ・ラティオ物語のカスケード」展（ダニエラ・アリーナ・プレーヴェ、ドイツ）から、会場がスパイラル／株式会社ワコールアートセンターとなる。

「ウルティマ・ラティオ」とは、審議における「最終判断」や「議論」を意味する。シェイクスピアの「ハムレット」や映画『ロボコップ』などポピュラーな物語の主人公の心理的葛藤を、神経ネットワークのような分岐構造で可視化しインタラクティブに体験できる作品で、プロトタイプは発表されていたが、本展が初のインスタレーションとなった。心理的葛藤がデータベース化されており、体験者は物語にない展開や、人間の意識とは異なる AI の意思決定や心理認識を体験することになる。

また、判断パターンの共通性から複数の物語が関係し連鎖していくなど、当時の AI を通したデータベースと関連付けの問題が扱われている。

2000 年のアートラボ第 4 回プロスペクト展「DRIVE 【ドライブ】」展（ジョーダン・克蘭ダル、ニューヨーク）は、当時いち早く DVD を取り入れながら、20 世紀からの 100 年間に開発されてきた様々な映像技術（映画、ビデオ、ナイトビジョン、ウェアブルカメラ、サーモカメラ、赤外線カメラ、モーショントラッキングなど）が、人間の欲望をいかに稼働（ドライブ）してきたかを、複数の映像コンテンツや異なる映像フォーマット（プロジェクション、小型 DVD プレイヤー、モニター、VR グラス）で展示した。映像では、都市や日常生活の欲望や無意識的な所作がテクノロジーによって稼働され、欲望が加速されていること、監視カメラの映像がネットワーク化されデータベースに連結されていることを提示しながら、内部／外部、視（のぞ）き見／露出、不安／快感が交錯する世界が描かれた。現代ますます加速している、稼働される人々の欲望、監視カメラや情報監視の問題の萌芽（ほうが）を見ることができる。

2001 年のアートラボ第 5 回プロスペクト展「R111—仮想から物質へ」展（ミヒャエル・サウプ+supreme particles、ドイツを中心にしたメンバーで構成）は、仮想と現実空間を超えて、行き交う情報を「エネルギー」と見なしたものである。同時にメディアアー

トの集大成ともいうべきものとなった。20 世紀前半の実験映画作家オスカー・フィッシンガーの作品『R1』にちなんで命名された本作は、来場者、インターネット経由の閲覧者、インターネット上の言語情報を検索するウェブロボットが影響し合い生まれるデータをエネルギーと見なし、映像、光、音、磁力などへと出力する、メディアアートの集大成的作品である。巨大な縦型スクリーンと床面へのプロジェクションや、変容し続けるマグネットの粒子が生命のように見えるフィールドなど、デジタル／アナログ、インターネット／実空間のつながりが体感された本展が、アートラボの最後の展覧会となった。



図 7-2 アートラボ第 5 回プロスペクト展「R111—仮想から物質へ」展 ミヒャエル・サウプ+supreme particles

アートラボでは、上述の展覧会に加え、以下の活動を随時行っていた。

- ・機器サポート：アートラボ内にあるキヤノンのコピー機、マッキントッシュ・コンピュータでの Adobe Photoshop をアーティストの制作のために解放。応募後、アーティストが所定の期間で作品や資料制作に使用することができた。
- ・資金サポート：最初の 1、2 年間、国内のメディアアートの新作制作・発表への助成を行った。ダムタイプ「pH」パフォーマンス（ICA 名古屋、1991 年）、砥綿正之＋松本泰章「DIVINA COMMEDIA」（神戸 XEBEC ホール、1991 年）など。
- ・シンポジウム、トーク、レクチャー：アートラボ・オープニング・シンポジウム「デジタルアートの環境と未来」（1991 年）（注(1)参照）、企画展アーティストのトーク、アーティスト・レクチャー（ロブ・ショルテ、ピーター・フェンド）、「オープン・アート」（岡崎乾二郎、榎木野衣、平川典俊、1993 年）。
- ・出版：オープニングの際の『アートラボ・コンセプトブック』に加え、活動開始当初に『NeN (NewEnvironment) 』#1、 #2 を刊行。企画展カタログ（アートラボ第 1 回企

第7章 総論

画展～第8回企画展まで、『Partner of Forerunners - Canon's Cultural Support Activities キヤノンの文化支援プロジェクト [1991-2000]』（2000年）、（いずれも非売品）。

- ・ ホームページ CAST (Canon Art Support and Traffic) <http://www.canon.co.jp/cast/>
（アートラボ及び写真新世紀）（現存せず）
 - ・ アートラボ第5回企画展「Molecular Clinic（モレキュラー クリニック） 1.0 on the Internet」（1995 年秋）を公開／アートラボ第8回企画展「SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ]」（1998年）のウェブ版《SoundCreatures on the Web》（1999 年）、ミッション インヴィジブル《Mission Invisible》インターネット版（1990年代末頃）を公開。

7. アートラボの展開 6：成果（受賞・巡回及び社内との連携・社内への貢献）

アートラボで制作された作品の受賞に以下がある。

- ・ 1996 年 社団法人企業メセナ協議会「企業メセナ大賞 ’96 審査委員特別賞」（アートラボ活動）
- ・ 1998 年 プリ・アルスエレクトロニカ（オーストリア）ネット部門ゴールデン・ニカ賞（グランプリ）（アートラボ第7回企画展「IO_DENCIES [テンデンシーズ] —情報からの都市への問い」 ノウボティック・リサーチ (KR+cF)、1997 年）
- ・ 1999 年 プリ・アルスエレクトロニカ（オーストリア）インタラクティブ・アート部門オナラリーメンション（アートラボ第8回企画展「SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ]」江渡浩一郎、1998 年）
- ・ 2001 年 プリ・アルスエレクトロニカ（オーストリア）インタラクティブ・アート部門ゴールデン・ニカ賞（グランプリ）（アートラボ第10回企画展「polar（ポーラー）」カールステン・ニコライ+マルコ・ペリハン、2000 年）

アートラボで制作された作品で収蔵されているのが以下となる。

- ・ 1998 年 「LOVERS-永遠の恋人たち」（アートラボ第4回企画展、古橋悌二、1994 年）が MoMA にコレクションとなる。

アートラボで制作された作品の主な国内外出展（バージョンアップも含む）

- ・ 福田美蘭作品（第1回企画展「ARTLAB」）：1 か所
- ・ ミッションインヴィジブル《Mission Invisible》（第2回展）：4 か所
- ・ Bulbous Plants（バルバス・プランツ）《Random Accident Memory》（第1回オープン・コラボレーション展）：2 か所

第7章 総論

- ・ DTI (Digital Therapy Institute) 《Brain Wave Rider》 (アートラボ・オープン・コラボレーション展「PSYCHOSCAPE [サイコスケープ] —アートからの精神観測」) : 1 か所
- ・ 古橋悌二《LOVERS-永遠の恋人たち》 (第4回企画展) : 11 か所
- ・ 三上晴子《Molecular Informatics》 (第6回企画展) : 1 か所
- ・ 三上晴子《Molecular Informatics Ver.2.0》 (バージョンアップ) 2 か所
バージョンアップにより2人体験用となった。1人用のオリジナルバージョンが「自己言及性」を扱うのに対し、本バージョンからは体験者同士のコミュニケーションへと問題が移行する。作品の根幹的な方向性がバージョンアップによって変更されるということは、キュレータとしてもかつてなかった経験であった。本作は、その後のバージョンアップ、15年後の再制作の際のタイトル変更など、メディアアートの保存・修復・再制作について、現在も新たなフェーズを実践し議論を誘発している。
- ・ 三上晴子《Molecular Informatics Ver.3.0》 (バージョンアップ) 3 か所
- ・ ノウボティック・リサーチ (KR+cF) 《IO_DENCIES [テンデンシーズ] —情報からの都市への問い》 (第7回企画展) : 5 か所
- ・ 高谷史郎《frost frames》 (特別展) : 4 か所
- ・ 江渡浩一郎《SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ]》 (第8回企画展) : 1 か所 (9)
- ・ 江渡浩一郎《SoundCreatures [on the Web]》 (ウェブバージョンを制作)
- ・ 関口敦仁《分離する身体》 (第9回企画展) : 3 か所

アートラボで制作された作品の派生形、進化形など

- ・ 1995年 三上晴子《Molecular Clinic [モレキュラー クリニック] 1.0 on the Internet》開催中、作品内のワクチンプログラム Digital Drug Store を、1995年11月1日-19日に開催された NTT インターコミュニケーション'95「on the Web—ネットワークの中のミュージアム」期間中は、三上作品《DDSmol (ディー・ディー・エス・モル)》として NTT インターコミュニケーション・センター[ICC]のサーバ上に移行し公開した。
- ・ 1997年 第1回プロスペクト展で紹介したウルリーケ・ガブリエルの《TERRAIN [テライン]》が、バージョンアップ、新制作され ICC の開館時の「ICC コレクション」常設作品として展示された。
- ・ 2001年 古橋悌二《LOVERS-永遠の恋人たち》の Ver.2 がせんだいメディアテーク開館時に製作され、展示 (LaserDisc から DVD へ、当時入手可能な機材の使用などの変更あり)。その後国内複数箇所で開催、2015年度に文化庁メディア芸術連携促進事業連携共同事業枠で京都市立芸術大学による修復作業を経て 2018年国立国際美術館に収蔵された。

第7章 総論

- ・2010年 カールステン・ニコライ+マルコ・ペリハン《polar [ポーラー]》が、山口情報芸術センター〔YCAM〕で、発表10年度に新たな作品《polar m [ポーラー エム]》として同じキュレータ（阿部一直、四方幸子）と共に YCAM InterLab で制作・発表された（阿部は当時 YCAM のチーフキュレータを務めていた）。
- ・三上晴子《Molecular Informatics [モレキュラー インフォマティクス] –視線のモルフォロジー》はその後アーティスト側で Ver.4.0 となり海外で展示された。同作は、発表から15年後の2011年に三上立会いのもと15年ぶりにアップデート。機材やシステムが入れ替わり、作品形態や体験レベルも大幅に異なるものとなったため、《Eye-Tracking Informatics (ETI)》というタイトルに変更され国内外を巡回。2017年度文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業で、山口情報芸術センター〔YCAM〕にて修復され（三上は2015年に逝去）、2019年1月多摩美術大学アートテークで公開された。保管先はYCAM。
- ・2013年 中原浩大の《デートマシーン》が「中原浩大 自己模倣」展（岡山県立美術館）の際に再制作され展示された。

アートラボでは、作品に応じて社内との連携や社内への貢献として、キヤノン製品や技術を活用する可能性を追求した。代表的な例として、以下がある。

- ・アートラボ第2回企画展の《Mission Invisible》で、キヤノンのインクジェットプリント及びビデオカメラを使用。
- ・アートラボ・オープン・コラボレーション展「PSYCHOSCAPE [サイコスケープ] –アートからの精神観測」展でのバルバス・プランツ作品に、キヤノンが極東地域販売権を取得していた NeXT コンピュータ（スティーブ・ジョブスが1985年に創業）を使用。
- ・アートラボ第5回企画展「Molecular Clinic [モレキュラー クリニック] 1.0 on the Internet」で、キヤノン・リサーチ・センター・ヨーロッパが開発したパソコン上でリアルタイム3Dグラフィックスを世界で初めて実現するソフトウェア「RenderWare」（英国のキヤノン関係会社クライテリオンソフトウェア社）を使用。
- ・アートラボ第6回企画展 三上晴子「Molecular Informatics [モレキュラー インフォマティクス] –視線のモルフォロジー」で、キヤノンの視線検出の基礎技術を、VRグラス用に独自に応用。
- ・アートラボ第9回企画展「分離する身体」で、キヤノン・リサーチ・センター・ヨーロッパで開発された音声認識エンジン「UCanTalk」を使用。
- ・アートラボ第10回企画展「polar [ポーラー]」およびアートラボ第5回プロスペクト展「R111」で、キヤノン社内で開発した知的情報検索の分類技術（知識ベース構築）を使用。

第7章 総論

エンジニアは、作品制作において行った調査研究、開発したプログラムやシステムで新たな技術やノウハウを得ることができた。それを技術報告としてまとめるだけでなく、社外への論文提出や特許取得も行った。

文化支援課から社内への貢献例として、以下がある。

- ・「ビジョン クエスト レクチャー」 (1994 年～1997 年)

主催：社会・文化支援センター 社会・文化支援室 文化支援推進（アートラボ、写真新世紀含む）

六本木オフィスでの活動で培った、キヤノンの事業領域と関係する分野の第一線で活躍されている方々とのネットワークを社内に還元し、新たな企画や開発に役立ててもらうための社内向けレクチャー。社会・文化支援活動の受益者が、社外のみならず社員もその対象である、との考え方に立脚して行った。年間前期後期の 2 クール、各クール 3 回。以下は各クールのテーマ。及びメディアアートに関係する方の回のみタイトルと名前を記載。

第 1 クール「コンピュータ&グラフィクス」

第 2 クール「イメージングにおける革命 - マルチメディア環境に向けて」

第 3 クール「ソフトを生み出す発想力」

第 4 クール「デジタルライゼーションの展望」

第 5 クール「デジタルメディア環境におけるパーソナルパワー」

第 6 クール「デジタルメディア環境の現在と未来」

第 7 クール「パーソナル・コミュニケーション時代とメディア」

第 8 クール「メディア・フロントーソフト環境のリアリティー」

*第 2 クールに石井裕（NTT ヒューマンインターフェース研究所 主幹研究員／現・MIT メディアラボ副所長）、第 3 クールに三上晴子、杉山知之（工学博士、デジタルハリウッド The Multimedia School 学校長）、第 5 クールにデヴィッド・ディヒーリ（ビデオ・ジャーナリスト）、第 7 クールに八谷和彦（メディアアーティスト）、第 8 クールに高間剛典（IT ジャーナリスト）、伊藤俊治（美術評論家）を招聘。

8. メディアアートシーンへの貢献、キヤノンへの還元

1990 年代という、メディアアートが出現し、次々と起こる技術革新に沿って表現を拡張した時代において、キヤノン・アートラボが果たした役割をここでは確認する。その上で、キヤノン・アートラボが、キヤノンにもたらしたものについても記述する。キヤノン・アートラボがメディアアートの企業メセナとして、1990 年代に ICC と並ぶブレイゼンスを国内外で誇ったことは前述したが、本活動のユニークな点は、エンジニアとの

コラボレーションによる新作、継続的なバージョンアップサポートなどに加え、キュレーションにおける一貫性した方向性であろう。

1990年代、インタラクティブ・アートは大きく二つの方向に分かれていた。一つは、コンピュータグラフィックスやネットワーク接続により、具体的な表象や物語性に依拠した作品の在り方である。二つ目は、コンピュータを介した情報の生成や変容そのもの、つまり表象よりもプロセスを重視するもので、ここでは素材や表象を超えて様々なものが「情報」として関係する中でその都度生まれていく現象、そしてそれを受容する知覚こそが重要となる。

シンプルな単体が自律的に環境に反応する中で、ボトムアップ的に往還する組織化／非組織化のプロセス、体験者の身体や知覚がシステムを介して環境と関わることで起こるフィードバック及び自己言及性。これまで体験しえなかった知覚の逸脱を伴うことで、身体、テクノロジー、自然、そして人間存在までが情報体として繋がっていることを発見すること。1993年のウルリーケ・ガブリエル作品以降、キャノン・アートラボは、企画展、プロスペクト展に関わらず、二つ目に沿った方向性を意識しながら作品を発信し続けてきた。その中から世界観や問題意識を共有するアーティストとの出会いが続き、キャノン・アートラボ参加アーティスト間の対話が促進されるなど（とりわけウルリーケ・ガブリエル、ノウボティック・リサーチ（KR+cF）、三上晴子）、メディアアートの対話と実験の場の一つとして機能した。

1990年代半ばより、海外のメディアアート関係者とのネットワークが強まり、キャノン・アートラボ作品の出展やキュレータによるアートラボの紹介プレゼンテーションなどが活発化する。招聘は主にヨーロッパからであり、キャノン・アートラボへの興味に加え、キャノンという大企業が実験的なメディアアートを制作支援していることへの賞賛の声が多くあった。海外出展に際して、バージョンアップ後の作品などは、エンジニアが同行することもあり、エンジニア、そして現地の人々にとっても貴重な経験となった。このような経験は、報告会やその後のエンジニアの活動としてキャノン社内へ還元された。またロッテルダムでは、キャノン・ヨーロッパから社員が展示に訪れるなど、現地のキャノンにとっても企業イメージアップになったようである。

9. まとめ：キャノン・アートラボの成果と意義

キャノン・アートラボは、2001年7月で活動が終了した。その前月、6月1日から17日まで第5回プロスペクト展をスパイラル／株式会社ワコールアートセンターで開催した直後のことである。当時の社長は御手洗富士夫であった。通達は急で、具体的な資料の保管体制や後処理などについて十分検討する時間がないままであった。

文化支援には、時間がかかるものである。1990年代半ばになって、アートラボ活動が国内外で認知され始め、1996年に企業メセナ大賞審査委員特別賞を受賞したことで、国内の芸術文化、企業関係者にキャノンのメディアアート支援が広く認知された。それ以降アー

トラボは、1990年代のメディアアートシーンを牽引（けんいん）する重要な拠点となっていた。突然の活動停止は、国内外の関係者に驚きと失望をもたらした。

理由の一つに、キヤノンの自社製品に直接関係した活動内容でなかったことが挙げられるだろう。企業として、21世紀を機に、ビジネスに近いものや製品の特色を引き出すものへと照準を合わせたのではないか¹⁷。キヤノン・アートラボが、10年である程度の実績を上げたこともあるだろう。

メディアアートの視点からは、1990年代はインタラクティブ・アートが牽引した時代であり、21世紀に向けて、パソコンやインターネットの普及によって個人による制作・発表環境が現実化していた。キヤノン・アートラボ開始当時とは雲泥の差である。大規模なインスタレーションを基本としたキヤノン・アートラボで展開していたインタラクティブ・アートの在り方から、必ずしも空間を必要とせず、モバイルを含め場所や時間を限定しない作品やプロジェクトへと拡散していく時代でもあった。

企業メセナ、そしてインタラクティブ・アートとしてのメディアアートが結びついた最盛期は、1990年代であった。時代と共に、物事は生まれそして消滅する。キヤノン・アートラボも同様であろう。

現在重要なのは、キヤノン・アートラボが築いた成果を資料と共にしかるべき形でまとめ、保管し公開できる体制を整えることである。本調査研究がその端緒となることを願ってやまない。

***1.2の時代は「メディアアート」という言葉は使用されていなかったが、「メディアアート」に至るアート&テクノロジーの動きとして、本稿では「メディアアート」という語を使用している。**

(3) 資生堂 CyGnet

資生堂は、創業以来、芸術文化への深い理解とともに「資生堂スタイル」という企業文化を培ってきた。1916年にインハウスデザイナーを持つ「意匠部」を、1919年に現存する日本で最古の画廊・資生堂ギャラリーを開設、1937年に『花椿』創刊、1978年には資生堂アートハウスが完成（静岡県掛川市）している。資生堂の初代社長の福原信三は写真家であり、企業メセナ協議会の設立に深く関わった10代目社長の福原義春も写真に造

¹⁷ キヤノンは、アートラボ展開期間を含む2000年から2003年頃、デジタルコンテンツ作品（静止画、ムービー、ウェブ）を広く募集する「キヤノン・デジタル・クリエイターズ・コンテスト」を主催（協賛にキヤノン販売株式会社やソフトウェア企業、後援にCG-ARTS協会、財団法人デジタルコンテンツ協会）、展示はパイラル／ワコールアートセンターで開催している。アートラボ終了後、アートラボ・エンジニアが映像同期を手伝ったものの、映像インスタレーション展「URBAN LENZ」展（キュレーション：デヴィッド・ディヒーリ、2000、ラフォーレミュージアム原宿）がある。2007年から展開される綴プロジェクトでは、日本の文化財の高精細複製品を製作することで自社製品の性能のアピールと伝統文化への貢献がなされている。

詣が深い。企業メセナ協議会の発足は、1984年の日仏文化サミットに遡るとい¹⁸。福原義春は、企業メセナ協議会創立時の理事長を務めるが、資生堂が創立時に受けたフランス文化の影響やそれ以降の長い由縁もあるだろう。企業メセナ協議会は、1990年2月に発起人会を開催、4月に社団法人の設立認可を得ている。

資生堂の企業文化部は1990年2月に設立、企業メセナ協議会と同時期である（これに倣って4月にアサヒビール株式会社が企業文化部を設立、以後複数の企業に企業文化部が誕生する）¹⁹。

資生堂 CyGnet は、宣伝部コンピュータデザイングループ（かつての「意匠部」）と企業文化部、つまり資生堂が独自に培ってきた企業文化を担う2つの部署が共同で立ち上げた、前例のないプログラムである。

資生堂の先進的な企業資質を基盤に、インターネットの台頭、デジタル化への潮流を敏感に捉えた宣伝部、企業文化部がそれぞれの立場から、共に組む意義を見出したことに由来する。資生堂は1995年10月にいち早く自社で企業サイトを立ち上げたが（契機の一つに、同年1月阪神淡路大震災で現地の状況がネットで伝えられた事実があったという）、その構築を担ったのが宣伝部コンピュータデザイングループである。資生堂サイトのために「アクティブ・レクタングル」などオリジナルコンテンツの開発も手がけていたこの部署は、岩城陸奥氏をキーパーソンにデザイナー、エンジニア、プログラマー、マーケッターが同居、デザインと技術の両輪を備えていた。

企業文化部は、当時資生堂ギャラリーの建て替え中で物理的空間を持たない中、ネット上のアートやギャラリーというコンセプトにいち早く着目した。1997年秋に両者がネット上のギャラリーを構想、筆者が企業文化部の樋口昌樹氏から相談を受けたのは12月である。「ヴァーチャル空間で体験できる作品を」という方向性に沿って、最初に提出した候補には、インターネット上で作品を発表したことがないものの、その環境を作品に生かせそうな作家としてフィッシュリ&ヴァイス、中村政人、ピピロッティ・リストなどを含めていた。その後筆者はゲスト・キュレーターとして、立ち上げや企画に終了まで関わることになる。

タイトルの CyGnet（シグネット）は、「Cyber Gallery Network」の略称だが、「白鳥（Cygnet）のひな」という意味ももつ。ネットアートは欧米を中心に1994年頃に登場したが、当初はHTMLコードへの介入やリンクを中心とした実験的な介入が多かった。ネットアートのギャラリーは、The Thing や Ada Web など、欧米のメディアアート関係者が立ち上げた数少ないサイトしかなく、国内ではキャノン・アートラボとICCが作品の発表（1995年～）をしていた時代である。そのような中、Flash などインターネットに新たな技術が登場した1990年代後半に開始された CyGnet は、最新技術を装備していた宣

¹⁸ 加藤種男『芸術文化の投資効果 メセナと創造経済』（水曜社、2018）P. 261

¹⁹ 加藤種男『芸術文化の投資効果 メセナと創造経済』（水曜社、2018）P. 258

伝部がデザイン、サイト構築、メンテナンスなどに関わることで実現した類を見ないものであり、企業によるネットアートのギャラリーとしても唯一であったはずである。

キュレーションは企業文化部の樋口昌樹氏と筆者が行い、「ネット上でしか成立しない新しいアートを紹介する実験的なサイト」として、ネットアート、メディアアート、現代美術のアーティスト、プログラマーなど多彩な人材を招聘し、合計7作品を制作、以下のURLで発表した（www.shiseido.co.jp/cygnet 現存せず）。

1998年8月に EastEdge の《tyrell.hungary》、朝岡あかねの《Constellation Project》を発表、その後エキソニモ（赤岩やえ+千房けん輔）《DISCODER》（1999年）、近森基《KAGE》（1999年?）、ミリツァ・トミッチ《i am milica tomic》（2000年）、JODI 《%WRONG Browser》（2001年）、doubleNegatives《plaNet Former》（2002年）が公開された（キュレーションは、朝岡、近森作品が樋口、その他は四方が担当）。



図 7-3 ミリツァ・トミッチ《i am milica tomic》

作品は、資生堂サーバに置かれるものと、作家側のサーバにあり CyGnet からリンクされるものがあつた。ほとんどの作品は作家により制作され、作家が管理するサーバに置かれ CyGnet からそこにリンクされていた。

ハンガリーの若手プログラマー・チーム EastEdge の《tyrell.hungary》は、映画『ブレードランナー』（1982年）のタイレル社のハンガリー支社という仮想の企業サイトで、ユーザの希望通りのアンドロイドを発注できるシステムによりバイオテクノロジー技術と人間の問題を投げかけた。同時に当時注目されていたインターネット・ラジオも取り入れている。《Constellation Project》は、朝岡が展開していたプロジェクトのインターネット版として、宣伝部が制作に関わった作品である。エキソニモ初のアート作品となった《DISCODER》は、任意のウェブサイトを仮想的に攻撃し HTML タグを破壊していく作

品だが、発想の契機に当時発射直後であった北朝鮮のテポドンへの脅威があったという。

《i am milica tomic》は、映像インスタレーションを手掛け、NATO 空爆後、経済制裁下のセルビア・ベオグラードを拠点に活動していたトミッチ初のインターネット上作品で、現地の技術者が作品を実装した。サイトにある彼女の身体（写真）をユーザがクリックによって傷つけることで、アイデンティティの多様性を喚起するもので、他者性について的人文学的テキストを伴っていた。《%WRONG Browser》は、オランダを拠点とするネットアートのパイオニアである2人組の、ノイズやエラーを彷彿される詩的なアートブラウザシリーズの「.jp」版として、日本語を意識した縦表示を採用、ディスプレイを横に向けて閲覧することが推奨された。《plaNet Former》は、アルゴリズムによる建築の新たな可能性を追求していた市川創太が率いる doubleNegatives（現：dNA

（doubleNegatives Architecture）の初のインターネット上作品であり、任意に打ち込んだサイトからウェブロボットがサイト内リンクをたどって異なるサイトに移動していくプロセスを、惑星状の球体としてリアルタイムに表示することで「つながり」を可視化した。その後2003年の発表に向けて、ニューヨークのRSG（Radical Software Group）との制作に入っていたが、CyGnet 終了により完成することはなかった。

開設当初は、担当部署において思いがけない問題が発生する。自社サーバの閲覧制限のために作品を見ることができなかったり、トップページや作品がスムーズに動かない、そのような時代だった²⁰。アクセス人口も、開設当初はいうまでもなく、数年後においても決して多くなかった。アートにおいては、美術館がネット上の美術館を立ち上げ始めた例もあるが、それらの多くが空間を仮想的に再現するもので、ネットならではの特性を生かした作品は見られなかった。その意味で資生堂 CyGnet の試みは、作品的、技術的に先んじ過ぎていた。

資生堂 CyGnet は、2003年のプログラム終了後サイトの公開は停止され、現在 CyGnet の存在は、アートシーンにおいてもほとんど知られていない。

資生堂 CyGnet が存在していた5年間は、インターネットが急速に浸透していく、まさに革新的な時代であった。開設当初はダイヤルアップ接続で、インターネットのマルチメディア化（VRML、Flash、RealPlayer、Java など）が始まった矢先であったが、その後オープンソースが注目され、2000年代には常時接続、検索エンジンの時代に移行、ファイル交換ソフトやソフトウェア作品が生まれていく。CyGnet の各作品は、各時代のインターネットの動向を受けとめ反映した意味において歴史の証言者ともいえる。

国内では、メディアアート関係者を中心に反響があったが、現代美術関係者にとっては、資生堂の先見的な取り組みとしての注目はあったものの、まだまだ理解し難い状況であった。社内においても同様であった²¹。

²⁰ 資生堂企業文化部（当時）樋口昌樹インタビュー（P30～31）

²¹ 資生堂企業文化部（当時）樋口昌樹インタビュー（P30～31）

しかしそのような中、資生堂 CyGnet は若手アーティストを輩出していった。朝岡は第1回「大地の芸術祭」に出展し、近森、エキソニモ、doubleNegatives はその後国内外で活動を展開する。

エキソニモの《DISCODER》は、その後インスタレーション版として発表され（コマンド N、2000 年、キュレーションは、コマンド N ネットワークメンバーでもあった筆者）、近森は資生堂の企業展示を含め複数の仕事を手掛けている。

社内には、資生堂 CyGnet の作品データも資料もほぼ残されていないという。インターネットやデジタル化が急速に進んだ 1990 年代末から 2000 年代初頭はインターネットが普及する端境期であり、全世界的にデータの保存やアーカイブ化への眼差しやシステムが確立されていなかったことが挙げられる。それはまた、ネットアートやメディアアートが、デジタルを介在させ、時代の技術環境（ハード、ソフト、システム）に依存し、常にユーザとの関係においてインタラクティブに展開する、一種パフォーマンスに近い性質をもつためである。また、目まぐるしく変化する技術環境において、データの保管や読み取りが極めて困難となっていることも挙げられる。資生堂 CyGnet についてもそのような流れの中にある²²。

しかしそれだけではないだろう。資生堂 CyGnet 公開期には、企業内の再編成があり、岩城氏が資生堂を去っている。そのような経緯もあってか、宣伝部にも企業文化部にも資料が残されていない。また資生堂の社史でも言及されていないようである。複数部署の共同主催だからこそ実現した CyGnet だが、そのことによって活動の歴史的な位置付けや資料の保存についての責任の所在も曖昧になったのではないか。

資生堂 CyGnet は、ネット作品の制作やネットギャラリーの公開など、企業が行うメディアアートのメセナとして重要な活動であった。しかし時代的な要因（展開時期、作品や技術的先見性、データ保存への眼差し）から、その存在は忘れられ、企業メセナ、美術史など諸評価の土台にも載せられていない。資料や制作された作品を、今後の調査研究で掘りおこすとともに、当時の企業メセナの在り方を確認していくことが必要であるだろう。

現在、資生堂 CyGnet で実験的に探求していたインターネットは当時と飛躍的に普及した。そのような中、先験的にネット上の新作を発表し続けていたこのプログラム、そして作品を質と意義を再確認することは重要である。また企業メセナ協議会の創立と同時期に設立され、多くの企業に影響を与えてきた企業文化部が、2019 年 1 月より「アート&ヘリテージ」室と変更されたことは直視すべき事実であろう。企業文化や企業メセナの意味が、時代の転換期において再検討されつつある。そのような時代において、未来を展望するためにも、芸術文化と企業、ネット作品やデータの保存の問題を振り返り、公開することが求められる。

²² 作品データについては、各アーティストや宣伝部コンピュータデザイングループで関わっていた人々に所在を確認することも考えられる。

資生堂 CyGnet は、そのための、前後に類例がないユニークな事例として看過されるべきではないだろう。

7.1.5 1990年代のメディアアート、そして21世紀へ

ここでは1990年代という、メディアアートが登場した時代の海外の状況をまず俯瞰し、その上で企業メセナとメディアアートが結びつき、最盛期を迎えた国内の状況、及び21世紀の現在を確認する。

1990年代初頭からヨーロッパでは、東西冷戦崩壊後、国家体制の変化や民主化運動の高まり、民族対立などで激動の時代を迎えた。1990年代半ばからのインターネットの登場は、国を超えたネットワークを加速化させ、メディアアートはアクティビズムと時には接しながら、ネットアートやデジタル上のコミュニティを生み出していく。そこでは1998年頃からのLinux OSに代表されるオープンソース・ムーブメントも同期していた。

1990年代半ばよりオランダロッテルダムで隔年で開催された電子芸術フェスティバルDEAF (Dutch Electronic Art Festival) は、インディペンデントなメディア組織V2_Organisationが主催し、数々の先見的なメディアアート作品を招聘するだけでなく、公共空間でのメディアアートプロジェクトのコミッションを積極的に行った²³。

1979年にオーストリア放送協会(ORF)とオーバーエスターライヒ州政府により州都リンツで開始された電子芸術フェスティバル、アルスエレクトロニカは、1987年にプリ・アルスエレクトロニカ(コンペティション)を加え、1996年にアルスエレクトロニカ・センター(AEC)を開館する。同年共同アーティスティック・ディレクターにゲルフリート・シュトッカーが就任(～現在)、開発チームを含むフューチャーラボを置き、メディアアートやシステム開発受注も手掛ける体制でIT産業の推進も担っている。²⁴

1997年には、1989年からの準備期間を経てZKM(カールスルーエ・アート・アンド・メディア・センター)がドイツ・カールスルーエに開館、東欧諸国にはハンガリー出身の投資家ジョージ・ソロスによるソロス財団がセンターを開設、ITに関わる文化社会支援を行っている。このようにヨーロッパでは、メディアアートの大きなうねりが起き、数多くのメディアアート、ネットアート、公共空間でのインタラクティブ・プロジェクトが生まれ、フェスティバルや施設が増加した。

²³ DEAFは、キヤノン・アートラボ作品で製作された作品の発展形をヨーロッパで初展示している。ウルリーケ・ガブリエルの《パーセプチュアル アリーナ》(アートラボ第3回企画展)の発展形である《アリーナ・ライフ》、三上晴子《モレキュラー インフォマティクス》のVer. 2.0(2人体験用)など。

²⁴ プリ・アルスエレクトロニカでは、1990年代半ば頃からアートラボ作品に加え、数多くの日本のアーティストが受賞をし(坂本龍一+岩井俊雄、池田亮司、藤幡正樹、明和電機、エキソニモなど)、フェスティバルでの紹介が増えていく。その後日本のメディアアートシーンに加え、国内企業や産業との関係が強まり、大阪の「ナレッジキャピタル」や2018年からは博報堂とイノベーション創出コミュニティ『Ars Electronica Tokyo Initiative』を展開している。

日本では、21世紀が差し迫ってきた時期に企業メセナとメディアアートの関係が全盛期を迎える。1997年以降、キヤノン・アートラボはインターネットと展示空間をつなぐ作品を主体に、高度かつ複雑なセンシングやインタラク션을實現、1998年には古橋悌二の《LOVERS-永遠の恋人たち》がニューヨーク MoMA に收藏される。NTT インターコミュニケーション・センター[ICC]が、1997年4月に東京オペラシティに開館、常設の ICC コレクション²⁵、企画展など活動を本格化する。1998年には資生堂 CyGnet が開設される。

1986年に NTT や KDDI などを株主に大阪に開設された ATR（株式会社国際電気通信基礎技術研究所）は、1989年京都府精華町のけいはんな学研都市に移転した。1994-1995年の ICC 滞在アーティストを経て 1995年に ATR の客員芸術家となったクリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョノーは、同時期に ATR に滞在中であった生物学者で人工生命プログラム「Tierra」の開発者トマス・レイの協力でインタラクティブ作品《エーヴォルヴ（A-Volve）》（1994）を制作、ICC がプレイベントを時折り開催していた NTT MEDIA LAB（東京南麻布）で展示した。体験者のドローイングが 3D のヴァーチャル生物となり水槽に現れ、生存競争を繰り広げる本作は、大きな反響を得た。

企業メセナとは異なるが、そのような状況とパソコンやインターネットの普及は、メディアアートや情報デザインを教える新たな教育機関や学科を誕生させた。1990年にいち早く慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）に開設された環境情報学部には、元・朝日新聞記者でジェフリー・ショウら数多くのインタラクティブ・アートを国内に紹介した坂根巖夫、藤幡正樹、日本のインターネットを黎明期から支えた村井純らがあり、1990年代半ばより江渡浩一郎などメディアアートにおいてもユニークな人材を輩出した。1996年に岐阜県では知事・梶原拓の肝入りでメディアアートを主軸とする IAMAS（岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー、現・情報科学芸術大学院大学）が、坂根巖夫（初代学長）のもと、クリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョノー、ドイツのケルン・メディア芸術大学出身の三輪眞弘（現・IAMAS 学長）、本調査研究総合ディレクター関口敦仁らを迎え大垣市に開設された。IAMAS は、県が同市で同年に開館したソフトピアジャパンセンター²⁶と同

²⁵ ICC コレクションでは、「常設展示」として国内外の 10 組のメディアアーティストによる新作が約 2 年間公開された（アグネス・ヘゲドシュ+ジェフリー・ショウ+ベルント・リンターマン+レスリー・スタック、クリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョノー、グレゴリー・バーサミアン、カール・シムズ、ウルリーケ・ガブリエル、日本からは岩井俊雄、ダムタイプ、三上晴子など）。無響室という環境のための三上晴子作品《存在、皮膜、分断された身体》では、NTT 基礎研究所のエンジニアの技術協力があつた。コレクションは 1998 年までに 14 作品となり、現在も保管されているが、機材の老朽化により再現不可能なものが多い。バーサミアン作品《ジャグラー》のみ現在も展示・稼働している。ICC はまた、ICC ビエンナーレを 1997、1999 年に開催している。

²⁶ センター開館に遡り、1990 年 IT 関連産業振興を目的にした先進情報産業団地・公益財団法人ソフトピアがスタートしている。

時開設で、将来的な IT 起業の活性化という知事のビジョンも含まれていた²⁷。1998 年には多摩美術大学情報デザイン学科（伊藤俊治、久保田晃弘、三上晴子らが着任）²⁸、東京藝術大学に先端芸術表現科が開設（藤幡正樹が着任）、その後全国の美術大学・芸術大学で開設が続いた。

またメディアアートは、21 世紀を目前に公共施設で展開する時代が訪れようとしていた。1990 年代後半には、せんだいメディアテーク（2001 年開館、仙台市）、国立の日本科学未来館（2001 年開館、東京）。山口情報芸術センター[YCAM]（2003 年開館、山口市）の準備が、21 世紀初頭の開館を目指し始められている。中でも YCAM は、1997 年から設計を担当した磯崎新のもと、ダムタイプ、熊倉純子（当時企業メセナ協議会在籍）、阿部一直、筆者らがソフトウェア・プログラム委員として、アーティストの滞在制作や技術チームの配備、アーティスト側から見た機材や空間などの側面からアドバイスをを行い、建築に反映された。開館前には、阿部一直（本調査研究ディレクター）がチーフキュレーターとして就任し、アーティストと技術チームとのコラボレーションによる新作発表や国内外の巡回サポートを実施した。アートラボのノウハウが、2000 年代には公共のセンターで生かされたのである²⁹。

ICC は、1999 年の NTT の分割再編後、NTT 東日本所属となり、2001 年に規模を縮小して再開館した³⁰。メディアアートの場の、企業メセナ枠のセンターから公共施設への展開は、同時にメディアアートを受容する人々の数や層の拡張を意味していた。1990 年代には、ほとんどのメディアアート作品が、暗い空間でセンサを装着した限られた数の体験者のみに受容されるものだった。21 世紀になり、インターネットやモバイル技術を得てメディアアートは、公共空間で広く人々のインタラクションを誘発するものへと拡張したのである。

国内のメディアアート関連を含むコンペティションとしては、1995 年に学生 CG コンテスト（主催：現・公益社団法人 CG-ARTS 協会）³¹ が、1997 年には文化庁メディア芸術

²⁷ IAMAS からは、株式会社ライゾマティクスを設立し、メディアアートや商業的なプロジェクトを手がける真鍋大渡、石橋素らを始め、数多くのメディアアーティスト、IT 企業、研究者を輩出している。

²⁸ 三上晴子は専任として着任のため 2000 年に帰国、筆者は 2001 年より非常勤で加わった。

²⁹ 2003 年の開館記念プロジェクト、テキストメッセージが 20 本のサーチライトの光としてセンターの周囲を飛び交い、誰もが受け取ることのできるプロジェクト、ラファエル・ロサノ＝ヘメル《アモーダル・サスペンション＝飛び交う光のメッセージ》のキュレーションは、阿部一直と筆者が担当。YCAM は、数々の実験的なメディアアート作品を生み出し、その名を世界的にした。阿部は 2017 年まで、アーティストック・ディレクター／副館長を務めた。

³⁰ ICC はその後、2005 年に一時閉館、2006 年春のリニューアルオープンの際、無料展示ゾーン「オープン・スペース」（毎年度更新）を開始し現在に至る。

³¹ CG-ARTS 協会は、1985 年の CG カリキュラム研究会に発し、1988 年に「画像情報生成処理技術者の育成に関する研究会」が大学研究者とともに発足、1990 年にキヤノン販売

祭が開始されている。また 2000 年から 2009 年まで、NHK 番組「デジタル・スタジアム」（ナビゲーター：中谷日出）で幅広いデジタル作品が紹介されている。

21 世紀に入り広がったパソコンやインターネット、それによる共有文化、DIY 文化の出現は、デジタル表現を急速に浸透させた。1990 年代に先験的に追求されたメディアアートの在り方から、日常のものづくりの延長や、娯楽や産業に隣接した表現が多く生まれていく。2010 年代にはコンピュータや高精細プロジェクター、スマートフォンの進化とともに、公共空間、美術館、芸術祭、娯楽施設など様々な場所で最新技術を駆使したアートや体験の場が生まれている。またインターネットが日常に浸透した世代を中心に、ポスト・インターネット作品が生み出されている。VR や AI、ロボティクス、バイオテクノロジー、宇宙技術などの進展に同期して、メディアアートはますます拡張し、「イノベーション」という名のもとに産業やビジネス志向が強まっている。

「メディアアート」は常に拡張してきたが、現在「アート」という概念自体の拡張も含め、その言葉がどこまで可能かを問い直す時期ともいえる。

現在は、「企業メセナとメディアアート」よりも、企業の、最先端技術を駆使したクリエイションへの注目が顕著になっている。企業はデジタル表現に、アートというよりビジュアルインパクトを主体としたスペクタクル性や楽しさを求めている。また企業メセナは、芸術文化支援から、CSR（企業の社会的責任）として社会や環境支援に目を転じがちである。

そのような中、更新される技術を批評と共に、創造的に転用していくメディアアートの重要性は、ますます高まっているように思われる。

7.1.6 まとめ（歴史的評価）

企業メセナとメディアアートの関係は、1990 年代が全盛期であった。21 世紀になってメディアアートは産業と結びつく傾向が強まり、企業メセナは CSR の流れとともに、社会や地域、環境にシフトし始めている。しかし当時、企業が実験的なメディアアートを継続支援したという事実には大きな意義があった。だからこそ、現在のメディアアートシーンの活性化や国際的なプレゼンスが生まれたといえる。現在の広範なデジタル表現の隆盛は、1990 年代の実験の恩恵を、自覚するしないに関わらず享受している。現代においては、技術、規模的にスペクタクルなクリエイションが可能となっている。と同時に、技術や社会、アートへの多層な眼差しをもつ作品は減少している。

メディアアートにおいてはそもそも、技術よりもビジョンが先んじていた。現在流通していたり、様々なデジタル表現で駆使される技術（例：プロジェクションマッピング、

株式会社（現・キヤノンマーケティングジャパン株式会社）をはじめ IT 関連企業などのサポートを受け設立準備を開始、1991 年創設。学生 CG コンテストは 2011 年度より CG を「Campus Genius」とし、新しいメディアやテクノロジーを用いた作品を幅広く受け入れている。

VR、AI、AL、データ可視化など）は、1990年代のメディアアートで実験的に展開されていた。様々なメディアの特性を掘り起こし、直線的に進む科学技術に批評性を挟む眼差しがそこには見られた。

現代の若者の多くは、VRやAIが昨今の技術だと思っているという。今後ますますデジタルネイチャー世代が増えていく中、現代に見られる表現やコンテンツが、メディアアートの系譜において、試行錯誤とともに形成されていたことを知ることは重要である。未来は現在を知ることから展望され、現在は過去を知り学ぶことから展望されるからである。

企業は、1990年代の企業メセナへの注目とメディアアートの登場から活動を展開した。しかし様々な理由（トップの意向、経済的理由、時代の動向、社内再編成など）から、活動はしばしば突然終了し、担当者や資料が拡散し、保存に向けられることがなかった。

大学や研究期間、美術館であれば、作品の保存・修復、資料の保存や研究が根幹的な活動として認識されている。一方企業は、消費経済の中で製品やシステムを送り出すが、それらは常に更新され、資料の保存はさほど意識されていない。企業メセナ協議会が生まれても、作品や資料の保管の意識をもたない制作や展示主体の活動で、その重要性を自覚し共有する場は生まれなかったようである。

メディアアートにおいてはまた、作品や作品関連資料の保管やアーカイブ化が、作品に応じて異なるものの、総じて非常に困難な事実がある。作品が各時代のソフトやハード、インフラに依存すること、作品自体が体験者ごとに生成するものも含め、一種パフォーマンスに近く、再現困難なものが多いこと、そして経年劣化により何年かごとに修復やデータの移行、機材の変更や新たなプログラミングなどが必要であることなどが主な理由である。アーティスト存命中は本人の意思が反映できるものの、逝去後の作品の保管やバージョンアップ、修復、再現についてどのようなクライテリアを持ちうるのか、など検討点は多い。

しかし企業だけの問題ではない。当時はメディアアートが大きく展開した時期であり、メディアアートの当事者（アーティスト、キュレータ、エンジニアなど）でも、作品の保管や修復、資料の保管の問題を検討する土壌が形成されていなかった。問題が大きく顕在化したのは、ここ10年のことである。メディアアートに関わっていた関係者の多くが、メディアアートの根幹を体験そのものと見なし、映像や資料記録は残しても、作品の再現・保管・修復を長期的に検討することができなかった。作品の特性上、残すものではない、そもそも不可能だと見なししていたこともある。

企業メセナ以降、それまで広告や宣伝部が担ってきた芸術文化支援が、企業文化部や文化支援部署の管轄になったのは喜ぶべきことである。しかし本腰を入れて継続的にメディアアートの制作・展示・保管・研究を行うためには、たとえば財団化を目指すことが一つの道としてあっただろう。キャノン・アートラボの資料は、キュレータの阿部や筆者が当時事務所が解散する際に、レスキューのため個人的に移動し保管してきたものと、当時のアートラボのエンジニアや事務局担当者が、何度かの資料処分を経て保持しているものが

現在確認されている。本調査研究では、その中から全体を俯瞰するためのオフィシャルな資料（アートラボの事務局で共有ファイルとしたもの）を中心に資料がデジタル化された。本調査研究では活動の全体的な俯瞰に加え、アートラボ第8回および第9回企画展を重点的に調査しているが、今後他の展覧会や諸活動の詳細、加えて、今回加わっていない膨大な映像や異なるフォーマットのデータの確認、各アーティストが保管している資料の確認、またアートラボが買い上げながらその存在が確認されていない作品の調査などを行う必要があるだろう。

アートラボについては、将来的にはしかなるべき組織に引き取ってもらい、保管・アーカイブの公開などを移管する体制が望まれる。キヤノン株式会社にとっても、1990年代に国内外で注目されたアートラボを運営していた事実の公開は名誉なことであり、メディアアートや企業メセナの研究者にとってのみならず、広く人々にメディアアートの意義と展開を伝える機会となるはずである。

本調査研究は、スパイラル／ワコールアートセンター、キヤノン・アートラボ、資生堂CyGnetを中心としたが、各企業の特色や活動内容も含め、現在一般にアクセスできない貴重な情報や経緯を一部であるが掘り起こすことができた。同時に1985年～2005年に企業がメディアアートやデジタル表現への支援を様々な形で行ってきたことが確認された。また日本のメディアアートの系譜と特徴、現在に至る流れを俯瞰したことで、企業メセナとメディアアートが連携した時代の特徴と位置付けが明確になった。

本調査研究を契機に、今回の3件の対象のより詳細な研究が継続されるとともに、今回新たに掘り起こされた活動への研究が展開していくこと、それにより企業メセナとメディアアートという、現在保管・公開が最もなされていない領域の存在と意義が広く認識されるとともに、ゆくゆくは、これら資料の保管先が決定し、公開されていくことの重要性を共有する次第である。

参考：

- ・企業メセナ協議会サイト：<https://www.mecenat.or.jp/ja/about/post/intention/>
- ・ワコールホールディングス株式会社サイト：<https://www.wacoalholdings.jp/>
- ・『Partner of Forerunners - Canon's Cultural Support Activities キヤノンの文化支援プロジェクト [1991-2000]』（キヤノン株式会社、2000年）
- ・株式会社資生堂サイト：<https://www.shiseidogroup.jp/>
- ・四方幸子「メディア・アートの30年－科学技術の進展の中で」（美術評論家連盟会報19号「特集「くらい[krei-]ものごと 分け／隔て」、2018年）
<http://www.aicajapan.com/ja/no19shikata/>
- ・四方幸子「メディア・アートのアーカイブ：課題と展望」（美術評論家連盟会報ウェブ版第5号、2015年）
http://www.aicajapan.com/newsletter_n/webnewsletter_5.pdf

第8章 まとめ

平成30年度メディア芸術連携促進事業 連携共同事業で行う本調査研究事業「1985～2005年間の企業メセナによるメディアアート展示資料の調査研究事業」は日本のメディアアート活動において、企業メセナ活動による美術全般や新たな表現としてのメディアアートへのサポートは大きな意義と歴史的意味付けがあるにも関わらず、その評価や位置付けが行われておらず、また、企業自身も過去の文化的貢献を顧みながら文化資産として残すということに消極的にならざるを得ない状況を鑑みて、これらの活動を調査し、資料や作品の状況を明らかにしていくことの必要性から始められた。

その中で、特にキャノン・アートラボ、資生堂 CyGnet、スパイラル／株式会社ワークールアートセンターにフォーカスを当てて、メディアアートアーカイブへとつながる方法を模索したことは、それぞれ現在の表現活動につながる重要な展示企画を行いながら方向性の異なる企業体制によって活動していたことを、はっきりと見いだすことができた点は大変な成果であったと考えられる。まずは一年足らずの調査事業であったが、各企業の個性によるメセナ活動の方法論的相違点やサポートターゲットの相違点が存在し、それらからプロジェクトや作品の特徴も生み出されているところを見て取れた。今回のプロジェクトメンバーの阿部一直や四方幸子はこれらのプロジェクトの企画にも深く関わりながらも20年近い時間的距離から新たな企業との関係性を見出したように、既存の美術展企画とは異なるメディアアートを取りまく技術インフラと企業文化が新しい表現方法を生じさせる要素を作り上げていたと認めることができよう。

今回の調査過程で残されていた資料のボリュームについてはそれぞれのプロジェクトで差はあるが、企画の事務サポート資料、体制とその所在によって異なる技術的サポート資料、作家の個人的資料などそれぞれの所在を確かめることができた。それらの資料が展示の状況を表すための根本的なリソースとなるかは、今はまだ正確な判断ができる状況ではなく、今後、作品の復元やアーカイブなどの作業が発生する機会に応じて、それらの所在や内容の意味が改めて問われていくだろう。

資料内容や目録を正確に見ていくと、キャノン・アートラボを中心に主な資料は集められたが、まだ一部の企画では不足しており、作品で扱われたデバイスやシステム、プログラムの所在については網羅していない。今回の調査では作家に依存している技術や機材との関係もまとめていく必要性が見えた。これらについては作家の声をしっかり聞くことでそれらの所在を明らかにしていける可能性を得ている。今後は作家とコンタクトを取りながら、作品や関連資料の所在を明らかにしていくことが望まれる。特に資生堂 CyGnet はウェブスペースでの展覧会で作品コンテンツは作家に依存していたため、よりアクティビティ資料も含めて残っておらず、改めて作家との連携による作品実行復元によって、改めてアーカイブできる映像などの企画資料の保存が必要となってくる。

第8章 まとめ

今後はこのような新たなアーカイブをターゲットとして、欠けている資料や実行映像などを調査し、その所在を確かめ、再稼働の確認などの活動を進めていくことを目指していくべきであろう。

第8章 まとめ

執筆者及び関係者

関口敦仁

阿部一直

四方幸子

明貫紘子

水野響

藤田千彩

河村陽介

後藤流音

水間彩乃

藤原生美

付録

付録

付録1 イメージデータ目録

表付録1 イメージ関連資料デジタル化変換対応表

冊子 ID	フィル ム ID.	数 量	種別	状態	イベン ト 略名	デー タ 名 称	展覧会名	製作者名	備考
A	CP	4	4x5	ポジ	AL1	ACP	アートラボ第1回 企画展	コンプレッソ・プラス ティコ	
A	NK	30	4x5	ポジ	AL1	ANK	アートラボ第1回 企画展	中原浩大	
A	FM	27	4x5	ポジ	AL1	AFM	アートラボ第1回 企画展	福田美蘭	
A	CP	40	35mm	ポジ	AL1	ACP	アートラボ第1回 企画展	コンプレッソ・プラス ティコ	stereo image
B	CA	1	4x5	ポジ	AL1	BCA	アートラボ第1回 企画展	コマーシャル	
B	CP	2	4x5	ポジ	AL1	BCP	アートラボ第1回 企画展	コンプレッソ・プラス ティコ	
B	FM	1	4x5	ポジ	AL1	BFM	アートラボ第1回 企画展	福田美蘭	
B	CA	1	35mm	ポジ	AL1	BCA	アートラボ第1回 企画展	コマーシャル	
B	FM	2	BR	ポジ	AL1	BFM	アートラボ第1回 企画展	福田美蘭	
T	KN	5	35mm	ネガ	AL1	TKN	アートラボ第1回 企画展	中原浩大	本人保管
T	KN	1	DV,Hi8	ビデオ	AL1	TKN	アートラボ第1回 企画展	中原浩大	本人保管
T	KN	21	切り絵	紙	AL1	TKN	アートラボ第1回 企画展	中原浩大	本人保管
T	KN	87	スケッ チ	紙	AL1	TKN	アートラボ第1回 企画展	中原浩大	本人保管
T	KN	22	スケッ チ	トレペ	AL1	TKN	アートラボ第1回 企画展	中原浩大	本人保管
T	KN	7	スケッ チ	セル	AL1	TKN	アートラボ第1回 企画展	中原浩大	本人保管
C	MI	11	4x5	ポジ	AL2	CMI	アートラボ第2回 企画展	ミッション・インヴィ ジブル	
C	GK	10	4x5	ポジ	AL2	CGK	アートラボ第2回 企画展	ヘラルド・ファン・ダ ー・カープ	
C	MI	19	35mm	ポジ	AL2	CMI	アートラボ第2回 企画展	ミッション・インヴィ ジブル	
C	GK	34	35mm	ポジ	AL2	CGK	アートラボ第2回 企画展	ヘラルド・ファン・ダ ー・カープ	
J	MI	26	35mm	ポジ	AL2	JMI	アートラボ第2回 企画展	ミッション・インヴィ ジブル	
J	GK	12	35mm	ポジ	AL2	JGK	アートラボ第2回 企画展	ヘラルド・ファン・ダ ー・カープ	

付録

E	UG	15	35mm	ポジ	AL3	EUG	アートラボ第3回 企画展	ウルリーケ・ガブリエ ル	
E	UG	2	BR	ポジ	AL3	EUG	アートラボ第3回 企画展	ウルリーケ・ガブリエ ル	
E	UG	30	4x5	ポジ	AL3	EUG	アートラボ第3回 企画展	ウルリーケ・ガブリエ ル	
O	UG	3	35mm	マウン ト	AL3	OUG	アートラボ第3回 企画展	ウルリーケ・ガブリエ ル	
P	UG	4	35mm	マウン ト	AL3	PUG	アートラボ第3回 企画展	ウルリーケ・ガブリエ ル	
F	TF	5	BR	ポジ	AL4	FTF	アートラボ第4回 企画展	古橋 悌二	Lovers
F	TF	7	35mm	ポジ	AL4	FTF	アートラボ第4回 企画展	古橋 悌二	Lovers
F	TF	1	4x5	ポジ	AL4	FTF	アートラボ第4回 企画展	古橋 悌二	Lovers
P	TF	1	35mm	マウン ト	AL4	PTF	アートラボ第4回 企画展	古橋 悌二	Lovers
G	MS	15	35mm	ポジ	AL5	GMS	アートラボ第5回 企画展	三上 晴子	Clinic
H	MS	3	BR	ポジ	AL6	HMS	アートラボ第6回 企画展	三上 晴子	information
H	MS	31	35mm	ポジ	AL6	HMS	アートラボ第6回 企画展	三上 晴子	information
I	KR	4	35mm	ポジ	AL7	IKR	アートラボ第7回 企画展	Knowbotic Research	
I	KR	6	BR	ポジ	AL7	IKR	アートラボ第7回 企画展	Knowbotic Research	
I	KR	2	35m	ネガ	AL7	IKR	アートラボ第7回 企画展	Knowbotic Research	
O	KR	2	35mm	ポジ	AL7	OKR	アートラボ第7回 企画展	ノウボティック・リサ ーチ	
M	KE	3	35mm	ポジ	AL8	MKE	アートラボ第8回 企画展	江渡 浩一郎	
M	KE	42	35mm	ポジ	AL8	MKE	アートラボ第8回 企画展	江渡 浩一郎	
M	KE	5	35m ネ ガ	ネガ	AL8	MKE	アートラボ第8回 企画展	江渡 浩一郎	
P	KE	2	35mm	マウン ト	AL8	PKE	アートラボ第8回 企画展	江渡 浩一郎	本人保管
N	SA	42	35mm	ポジ	AL9	NSA	アートラボ第9回 企画展	関口 敦仁	
S	SA	1	2.0GB	DAT	AL9	SSA	アートラボ第9回 企画展	関口 敦仁	
O	CN	2	35mm	マウン ト	AL10	OCN	アートラボ第10 回企画展	カールステン・ニコラ イ	
P	CN	4	35mm	マウン ト	AL10	PCN	アートラボ第10 回企画展	カールステン・ニコラ イ	
D	DT	1	4x5	ポジ	OP1	DDT	オープン・コラボ レーション	DTI [Digital Therapy Institute]	
D	HM	4	4x5	ポジ	OP1	DHM	オープン・コラボ レーション	本木 秀明	

付録

D	BP	15	4x5	ポジ	OP1	DBP	オープン・コラボ レーション	Bulbous Plants	
D	DT	4	35mm	ポジ	OP1	DDT	オープン・コラボ レーション	DTI [Digital Therapy Institute]	
K	DT	34	35mm	ポジ	OP1	KDT	オープン・コラボ レーション	DTI [Digital Therapy Institute]	
K	MH	5	35mm	ポジ	OP1	KMH	オープン・コラボ レーション	本木秀明	
K	BP	20	35mm	ポジ	OP1	KBP	オープン・コラボ レーション	Bulbous Plants	
Q	DA	38	35mm	ポジ	P3	QDA	第3回プロスペク ト展	ダニエラ・アリーナ・ プレーヴェ	
O	CM	5	4x5	ポジ	P5	OCM	第5回プロスペク ト展	クリスティアン・メラ ー	

付録

付録2 史料目録

表付録2 調査資料目録

item no.	event no.	event date range (start)	event venue	item segment definition	author/personality (JP)	item type	item definition	physical-formal description	quant	extension	digital-formal description
イベントID	アイテム番号	催事の開催期間(始)	催事の開催場所	アイテムカテゴリーの定義	著者＝オリジナル・アイテムの作成主体(日)	アイテムの種類	アイテムの定義	オリジナル・アイテムの物理的＝形式的記述	オリジナル・アイテムの数量	拡張子	デジタル・ファイルの形式的記述
AL01	0001	1991.06.27	外苑前TEPIA 3F エキジションゾーン	Box2. 出版物	アートラボ、コンプレッソ・プラスティコ、中原浩大、福田美蘭、四方幸子、阿部一直、石井弥夢、榎木野衣、開発チエ	出版物	カタログ 『アートラボ第1回企画展』	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
AL01	0002	1991.06.27	外苑前TEPIA 3F エキジションゾーン	映像 DVD/ARTLAB-Movie (1) 1991-1995	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
AL01		1991.06.27	外苑前TEPIA 3F エキジションゾーン	AL1中原保管資料	[unprocessed]						
AL02	0003	1992.07.17	ニューピアホール	Box2. 出版物	アートラボ、ヘラルド・ファン・ダー・カープ、ミッション・インヴィジブル、四方幸子、阿部一直、大澤真幸、杉田敦、ダルスター、ヤコブ・グロート、上野俊哉、デーナ・フリース＝ハンセン、開発チエ、辻大介、榎木野衣、市原研太郎	出版物	カタログ 『アートラボ第2回企画展 Total Hoverty Mission Invisible』	exhibition catalogue	2 (combined)	pdf	digital document
AL02	0004	1992.07.17	ニューピアホール	映像 DVD/ARTLAB-Movie (1) 1991-1995	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
AL02	0005	1992.07.17	ニューピアホール	写真冊子内の資料	ミッション・インヴィジブル	イラストレーション	作品コンセプトビジュアル?	drawing	18 (combined)	pdf	digital document
AL02	0006	1992.07.17	ニューピアホール	写真冊子内の資料	ヘラルド・ファン・ダー・カープ	写真	作品コンセプトビジュアル?	print	5 (combined)	pdf	digital document
AL03	0007	1993.09.23	ヒルサイドブラザ	Box2. 出版物	アートラボ、ウルリーケ・ガブリエル、四方幸子、阿部一直、服部桂	出版物	カタログ 『アートラボ第3回企画展 パーセプチュアル アリーナ空間のパラドックス ウルリーケ・ガブリエル』	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
AL03	0008	1993.09.23	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (1) 1991-1995	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
AL04	0009	1994.09.23	ヒルサイドブラザ	Box2. 出版物	アートラボ、古橋梯二、四方幸子、阿部一直、浅田彰、バーバー・ロンドン	出版物	カタログ 『アートラボ第4回企画展 Lovers/永遠の恋人たち 古橋梯二』	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
AL04	0010	1994.09.23	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (1) 1991-1995	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
AL05	0011	1995.10.21	www.canon.co.jp/cast/	映像 DVD/ARTLAB-Movie (1) 1991-1995	NHK	映像	テレビ番組「日曜美術館」	unknown	1	vob	digital movie
AL05	0012	1995.10.21	www.canon.co.jp/cast/	映像 DVD/ARTLAB-Movie (1) 1991-1995	ARTLAB事務局	映像	記録映像 「Canon Video News」	unknown	1	vob	digital movie

付録

AL05	0013	1995.10.21	www.canon.co.jp/cast/	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	記録映像 「Canon Video News」	unknown	1	vob	digital movie
AL05	0014	1995.10.21	www.canon.co.jp/cast/	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	記録映像 「デスクトップ画面の記録」	unknown	1	vob	digital movie
AL05	0015	1995.10.21	www.canon.co.jp/cast/	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ (AL5)	brochure	1	pdf	digital document
AL05	0016	1995.10.21	www.canon.co.jp/cast/	写真冊子内の資料	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース 『キヤノンがインターネットによるインタラクティブ・アート展を開催』	typescript (photocopy)	6 (combined)	pdf	digital document
AL06	0017	1996.03.30	ヒルサイドブラザ	Box2. 出版物	アートラボ、三上晴子、四方幸子、阿部一直、サブ・コース	出版物	カタログ 『アートラボ第6回企画展 モレキュラー インフォマティクス: 視線のモルフロジー 三上晴子』	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
AL06	0018	1996.03.30	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
AL06	0019	1996.03.30	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	NHK 教育	映像	テレビ番組「未来潮流 21世紀空想美術館 再統合するアート」	unknown	1	vob	digital movie
AL06	0020	1996.03.30	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像 (日本語)	unknown	1	vob	digital movie
AL06	0021	1996.03.30	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像 (英語)	unknown	1	vob	digital movie
AL07		1997.10.04	ヒルサイドブラザ	Box5. AL7-1-2	[unprocessed]						
AL07		1997.10.04	ヒルサイドブラザ	Box5. アートラボ第7回企画展 1-1	[unprocessed]						
AL07	0022	1997.10.04	ヒルサイドブラザ	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	送付状「アートラボ第7回企画展カタログ送付のお知らせ」	typescript	1	pdf	digital document
AL07	0023	1997.10.04	ヒルサイドブラザ	Box2. 出版物	アートラボ、ノウボティック・リサーチ (KR+cF)、四方幸子、阿部一直、ジークフリート・ツィーリンスキー、アンドレアス・ブレックマン、ヴォルフガング・エルンスト、レーマー・ファン・トーン、野々村文宏	出版物	カタログ 『アートラボ第7回企画展 10_DENCIES [テンデンシーズ]: 情報からの都市への問い ノウボティック・リサーチ』	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
AL07	0024	1997.10.04	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像 (?) Ars Electronica エントリー用?	unknown	1	vob	digital movie
AL07	0025	1997.10.04	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	Ars Electronica Festival	映像	記録映像/テレビ番組? 「Prix Ars Electronica 98」 (ドイツ語)	unknown	1	vob	digital movie
AL07	0026	1997.10.04	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像 (?) Ars Electronica エントリー用?	unknown	1	vob	digital movie
AL07	0027	1997.10.04	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	記録映像 「ウェブサイト デスクトップ画面の記録」	unknown	1	vob	digital movie
AL07		1997.10.04	ヒルサイドブラザ	Box. 5. アートラボ第7回企画展 1-1	[unprocessed]						
AL08	0028	1999.06.28	www.canon.co.jp/cast/	Box3. ARTLAB 8	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース 『キヤノンがインターネット上で「SoundCreatures on the Web」をオープン (http://www.canon.co.jp/cast/)』	typescript	3 (combined) x 3	pdf	digital document

付録

AL08	0029	1999.06.28	www.canon.co.jp/cast/	Box3. ARTLAB 8	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース 最終原稿『キヤノンがインターネット上で「SoundCreatures on the Web」をオープン (http://www.canon.co.jp/cast/)」	typescript	3 (combined) x 3	pdf	digital document
AL08	0030	1999.06.28	www.canon.co.jp/cast/	Box3. ARTLAB 8	高見澤 (キヤノン株式会社 広報部)	書簡	FAX 文化支援推進課 水内課長「SoundCreatures on the Web 報道発表の件」	typescript-in-form (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0031	1999.06.28	www.canon.co.jp/cast/	Box3. ARTLAB 8	天野真一 (キヤノン株式会社 文化支援推進課)	文書一般	依頼書「報道発表依頼書 SoundCreatures on the Web」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0032	1999.06.28	www.canon.co.jp/cast/	Box3. アートラボ8 SoundCreatures 1998/10月	電波新聞、日刊工業新聞	クリッピング	電波新聞 記事「キヤノン メディアアート作品を」ネット上で体験可能」/日刊工業新聞 記事「サウンドとビジュアルをネットで観る」	typescript (photocopy)	2	pdf	digital document
AL08	0033	1999.06.28	www.canon.co.jp/cast/	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	記録映像 「ウェブサイト デスクトップ画面の記録」	unknown	1	vob	digital movie
AL08	0034	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box2. 出版物	アートラボ、江渡浩一郎、四方幸子、阿部一直、山口優、三輪真弘	出版物	カタログ 『アートラボ第8回企画展「SoundCreatures [サウンド・クリーチャーズ] 江渡浩一郎」	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
AL08	0035	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	株式会社プレシーズ	文書一般	見積書 アートラボ宛 「SoundCreatures袋詰セット代」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0036	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	株式会社プレシーズ	文書一般	見積書 アートラボ宛 「SoundCreatures袋詰セット代一式」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0037	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一 (キヤノン株式会社 文化支援推進課)	文書一般	FAX 西鉄航空 栗田宛「FAX送信のご案内」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0038	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	Invoice O.K. Center for Contemporary Art 宛	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0039	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	栗田 (西鉄航空 新宿営業所)	文書一般	FAX アートラボ 天野宛「書類送付のご案内」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0040	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	西鉄航空 新宿営業所	文書一般	Invoice 「西鉄航空 研修資料」	typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0041	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	西鉄航空 新宿営業所	文書一般	Invoice	Form	1	pdf	digital document
AL08	0042	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	図面	会場図面 (手書き)	Hand Drawing	1	pdf	digital document
AL08	0043	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	O.K. Center for Contemporary Art	図面	会場図面1	Drawing	1	pdf	digital document
AL08	0044	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	大野一生 (財団法人国際メディア研究財団)	書簡	メール 四方幸子宛「Re: TransArs 99: 機材搬出/リントス渡航滞在」	typescript (printout)	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0045	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	財団法人国際メディア研究財団	文書一般	ATAカルネ	manu/typescript-in-form (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0046	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	Invoice O.K. Center for Contemporary Art 宛 (ケーブル類)	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0047	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	財団法人国際メディア研究財団	文書一般	ATAカルネ発給申請書用 総合物品表	manu/typescript-in-form (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0048	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	Invoice O.K. Center for Contemporary Art 宛 (LED類)	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0049	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	財団法人国際メディア研究財団	文書一般	ATAカルネ発給申請書	manu/typescript-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0050	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	財団法人国際メディア研究財団	文書一般	ATAカルネ発給申請書用 総合物品表	manu/typescript-in-form	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0051	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	大野一生 (財団法人国際メディア研究財団)	書簡	FAX アートラボ 天野/玉井宛「FAX Cover Sheet」	manu/typescript-in-form (photocopy)	6 (combined)	pdf	digital document

付録

AL08	0052	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	四方幸子	書簡	メール 玉井ノアートラボ・ファクトリース タッフ宛「FM Frequenzies」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL08	0053	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	O.K. Center for Contemporary Art	図画	会場図面2	Drawing	1	pdf	digital document
AL08	0054	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一（アートラボ・ファクトリー）	イラスト レーション	「SoundCreatures SYSTEM Total Plan」	System Diagram (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0055	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	「SoundCreatures Goods LIST Ver. 2.5」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0056	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	アートラボ・ファクトリー	文書一般	「輸出品リスト Ver.1.5」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0057	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	四方幸子	書簡	メール 天野ノアートラボ・ファクトリース タッフ宛「AL8 アルス出展 現状メモ」	typescript (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0058	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一（アートラボ・ファクトリー）	イラスト レーション	「SoundCreatures SYSTEM Total Plan」	System Diagram	1	pdf	digital document
AL08	0059	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	「SoundCreatures Goods LIST Ver. 2.0」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0060	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	アートラボ・ファクトリー	文書一般	「輸出品リスト Ver.1.0」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0061	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	「Restrictions in setting of “SoundCreatures” Ver.1.0」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0062	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	東京税関東京航空貨物出張所	文書一般	「輸出許可通知書（輸出申告控）」	typescript- in-form	1	pdf	digital document
AL08	0063	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	西鉄航空	文書一般	JAFa シッピング・インフォメーション	manuscript- in-form	1+4 (copy)	pdf	digital document
AL08	0064	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	西鉄航空	書簡	FAX アートラボ 天野宛「Shipping Schedule Information」	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0065	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	大野一生（財団法人国際メディア研究財団）	書簡	FAX アートラボ 四方宛「お世話様です。」	manu/typescr ipt-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0066	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	文書一般	FAX DCプロジェクト 駒井宛 「FAX送信のご 案内」	manuscript- in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0067	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 文化支援推 進課	文書一般	「受諾書 撮影依頼」	manuscript- in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0068	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 文化支援推 進課	文書一般	「受諾書 写真作品の資産計上」	manuscript- in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0069	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	近口？（ヒルサイドバンケッ ト）	メモ	メモ 天野真一（キャノン株式会社 文化支 援推進課）宛「先日は、御利用をいただきあ りがとうございました。」	manuscript	1	pdf	digital document
AL08	0070	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	近口？（ヒルサイドバンケッ ト）	文書一般	請求書 キャノン株式会社 文化支援推進課 宛「アートラボ第8回企画展サウンドクリ ャーズレセプションパーティー式」	typescript- in-form	1	pdf	digital document
AL08	0071	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	四方幸子	文書一般	プレスリリース修正原稿	manu/typescr ipt	1	pdf	digital document
AL08	0072	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	江渡浩一郎	書簡	FAX 天野宛「LOC New School 議事録」	typescript	15	pdf	digital document
AL08	0073	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	メモ	スケジュール、スケッチ	manuscript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0074	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	江渡浩一郎	書簡	メール AL8メンバー宛「SoundCreaturesア ルス展、アイデア、問題点」	typescript (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0075	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	木村（アートラボ・ファクト リー）	書簡	メール AL8メンバー宛「Re: SoundCreaturesアルス出展概要」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL08	0076	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	四方幸子	書簡	メール AL8メンバー宛「SoundCreaturesア ルス出展概要」	typescript (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0077	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	文書一般	FAX 高見澤（キャノン広報部）宛 「FAX送信 のご案内」	manu/typescr ipt-in-form	5 (combined)	pdf	digital document

付録

AL08	0078	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	「アートラボ第8回企画展 開催報告「サウンドクリエーチャーズ」アーティスト：江渡浩一郎」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0079	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	駒井 (DC プロジェクト)	文書一般	アートラボ 天野宛「FLCD貸出書」1	manu/typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0080	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	駒井 (DC プロジェクト)	文書一般	アートラボ 天野宛「FLCD貸出書」2	manu/typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0081	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	「アートラボ第8回企画展 中間報告」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0082	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	高辻ジュンコ (NPC Advertising Co., Ltd.)	書簡	FAX アートラボ 天野宛「ヒルサイドブラザ 請求書の件」	typescript-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0083	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一 (キャノン株式会社 文化支援推進課)	書簡	連絡票 キャノン株式会社 山下常務宛「アートラボ第8回企画展 オープニングレセプション招待状について」	typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0084	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	水上一 (ヒルサイドブラザ 総支配人)	文書一般	キャノン株式会社 文化支援推進課 水内行治宛「ヒルサイドバンケット使用承諾書」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0085	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一 (キャノン株式会社 文化支援推進課)	書簡	FAX ヒルサイドブラザ総支配人 水上一宛「拝啓 秋の候、[...]」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0086	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	和文資料一式 「キャノン・アートラボ 第8回企画展 「SoundCreatures (サウンドクリエーチャーズ)」 アーティスト：江渡浩一郎」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0087	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	英文資料一式 「Canon ARTLAB 8th Original Exhibition "SoundCreatures" artist: Kouichirou Eto」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0088	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル「アートラボ第8回企画展 運営マニュアル Ver.1.0」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
AL08	0089	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	マシンデザインオフィス	書簡	FAX アートラボ宛「キャノンアートラボ企画展MOD設置工程」	typescript (photocopy)	2	pdf	digital document
AL08	0090	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一 (キャノン株式会社 文化支援推進課)	書簡	連絡票 「アートラボ第8回企画展 オープニングレセプション開催のご案内」	typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0091	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一 (アートラボ・ファクトリー)	イラストレーション	「ARTLAB Network 概念図」	System Diagram (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0092	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	四方幸子、阿部直一	メモ	スケジュール 「AL8 製作物及び広報スケジュール」	manuscript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0093	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	書簡	村上課長宛「Email拝見しました、文面までお考えいただきありがとうございます。」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL08	0094	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	高見澤 (キャノン株式会社 広報部)	書簡	取材日程連絡票 2件	manuscript-in-form (photocopy)	1+1 (copy)	pdf	digital document
AL08	0095	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	柘植雅敏 (月刊イメージングジョイ編集長)	書簡	FAX キャノン広報部 猪谷和臣宛「取材ご協力依頼書」	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0096	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	文書一般	プレスリリース原稿案	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0097	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	NTT	文書一般	天野真一 (キャノン株式会社 文化支援推進課) 宛 「INSネット64お申込票」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0098	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	SoundCreatures Java Applet 02-05. jpeg	Screenshot	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0099	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	図面	「アートラボ第8回企画展 SoundCreatures 参考図」	Drawing/Hand Drawing	16	pdf	digital document
AL08	0100	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一 (キャノン株式会社 文化支援推進課)	文書一般	ファストネット株式会社宛「ご利用サービス解除申込書」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0101	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	円田 (ファストネット株式会社)	書簡	FAX アートラボ 天野宛「設定書」	manu/typescript-in-form (photocopy)	7 (combined)	pdf	digital document
AL08	0102	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	村上潤一 (キャノン広報宣伝部)	書簡	メール 天野宛「Re: Canon WWWページ掲載依頼」	typescript (printout)	1	pdf	digital document

付録

AL08	0103	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	国際メディア研究財団	文書一般	スケジュール 「制作スケジュール」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0104	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	「AL8 シフト」	manu/typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0105	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	文書一般	キャノン社員名簿及びID	typescript	5 (combined)	pdf	digital document
AL08	0106	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	松本（ファストネット株式会社）	書簡	FAX アートラボ 天野宛「ファクシミリ送信票」	typescript-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0107	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 文化支援推進課	書簡	連絡票 山下常務／富永室長／西垣アドバイザー宛「アートラボ第8回企画展 オープニングレセプションについて」	typescript-in-form (photocopy)	2	pdf	digital document
AL08	0108	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	文書一般	キャノン株式会社 DCプロジェクト 和慎一宛「アートラボ第8回企画展 ご協力お願い」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0109	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 社会・文化支援センター）	文書一般	送付状 「アートラボ第8回企画展 SoundCreatures（サウンドクリエーター）江渡浩一郎 チラシ配布のお願い」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0110	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 社会・文化支援センター）	文書一般	FootWork宛 「梱包及び発送作業依頼」	manu/typescript	1	pdf	digital document
AL08	0111	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	リスト	チラシ送付先	typescript-in-form	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0112	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	谿石静佳（NHK）	書簡	「前略 この度は私どもの番組の取材にありがとうございました。」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0113	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 社会・文化支援センター 社会・文化支援室	文書一般	『アートラボ作品「LOVERS」のニューヨーク近代美術館への寄贈について』	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0114	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	書簡	FAX ヒルサイドバンケット 近江宛「請求書再発行のお願い」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0115	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	清野（株式会社キャノン保険センター）	書簡	FAX 天野宛「FAX送信のご案内」	manu/typescript-in-form (photocopy)	5 (combined)	pdf	digital document
AL08	0116	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	文書一般	山口優プロフィール	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0117	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	書簡	FAX NTT渋谷外商部 杉山文子宛「ヒルサイドテラス臨番の代表番号設定の件」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0118	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	書簡	FAX キャノン保険センター 清野宛「保険金額の算定をお願いいたします。」	typescript-in-form	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0119	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	依頼書「依頼書 撮影依頼」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0120	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	棟朝（ヒルサイドブラザ）	書簡	FAX 天野宛「書類送付のご案内」	manu/typescript-in-form (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0121	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	水内行治（キャノン株式会社 文化支援推進課）	文書一般	「ヒルサイドバンケット使用申込書」	manu/typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0122	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	水内行治（キャノン株式会社 文化支援推進課）	文書一般	「ヒルサイドブラザ使用申込書」	manu/typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0123	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	高見澤（キャノン株式会社 広報部）	書簡	FAX 文化支援推進課 水内課長「アートラボ第8回企画展 報道発表の件」	typescript-in-form	1	pdf	digital document

付録

AL08	0124	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	文書一般	依頼書「報道発表依頼書 アートラボ第8回 企画展 サウンドクリエーターズ [音の生物たち] (仮)」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0125	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	アブレット画面の手書きドローイング	Hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0126	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	江渡浩一郎、シンドウ	イラストレーション	システム図	System Diagram	1	pdf	digital document
AL08	0127	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一、シンドウ（アートラボ・ファクトリー）	リスト	「AL8 機材リスト Ver.0.32」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0128	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	書簡	FAX 国際メディア研究財団 大野宛「請求書作成に関するお願い」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0129	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	駒井（DC プロジェクト）	文書一般	アートラボ 天野宛「FLCD貸出書」3	manu/typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0130	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 社会・文化支援センター 文化支援推進室	文書一般	企画書「アートラボ第8回企画展 企画書」	typescript	12 (combined)	pdf	digital document
AL08	0131	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	資料複写	企画書用参考資料1 著書のコピー（リゲティによる「コンティヌム」の解説）	typescript (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0132	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	企画書用参考資料2 ブラウザとインストールの関係を図解	Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0133	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一（アートラボ・ファクトリー）	メモ	「AL8 技術検討メモ：位置検出、無線モデム」	typescript	2	pdf	digital document
AL08	0134	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一（アートラボ・ファクトリー）	メモ	「AL8 技術検討メモ：タッチパネル、抵抗膜方式」	typescript	2	pdf	digital document
AL08	0135	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	江渡浩一郎、シンドウ	イラストレーション	システム図 Ver不明	System Diagram	1	pdf	digital document
AL08	0136	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	シンドウ（アートラボ・ファクトリー）	リスト	「AL8 機材リスト Ver.0.1」	typescript	2	pdf	digital document
AL08	0137	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	文書一般	制作スケジュール	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0138	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	文書一般	開発スケジュール	manuscript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0139	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	文書一般	打ち合わせ議事録？	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0140	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	ロボット手書きドローイング1	Hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0141	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	ロボット手書きドローイング2	Hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0142	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	メモ	技術要件	manuscript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0143	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	メモ	技術要件（マッピング）	manuscript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0144	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	アリーナ手書きドローイング	Hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document

付録

AL08	0145	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	コンソール画面手書きドローイング	Hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0146	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	ブラウザ画面手書きドローイング	Hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0147	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	イラストレーション	ロボット回路手書きドローイング	Hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0148	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	水内行治（キャノン株式会社文化支援推進課）	文書一般	「ヒルサイドブラザ使用申込書」	manu/typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0149	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	四方幸子	書簡	FAX 天野宛 カタログ文字校正？	manu/typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0150	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	狭間（株式会社プレシーズ）	書簡	FAX アートラボ 天野宛 「SoundCreatures カタログ見積書2種」	manu/typescript-in-form	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0151	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	狭間（株式会社プレシーズ）	書簡	FAX アートラボ 天野宛 「SoundCreatures 関連（印刷物）見積書」	manu/typescript-in-form	5 (combined)	pdf	digital document
AL08	0152	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	狭間（株式会社プレシーズ）	書簡	FAX アートラボ 天野宛 「SoundCreatures チラシ再見積書」	manu/typescript-in-form	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0153	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	円田（ファストネット株式会社）	書簡	FAX アートラボ 天野宛「ファクシミリ送信票 御見積書」	typescript-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0154	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	円田（ファストネット株式会社）	書簡	FAX アートラボ 天野宛「ファクシミリ送信票 ISDN LAN IP接続サービス申込書」	typescript-in-form (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0155	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社文化支援推進課）	書簡	FAX ファストネット 円田、松本宛「FAX送信のご案内 FastNetインターネットサービス利用契約申込書」	manuscript-in-form	7 (combined)	pdf	digital document
AL08	0156	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	NTT渋谷支店外商部	書簡	FAX アートラボ 天野宛「INSネット64お申込票」	form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0157	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	天野真一（キャノン株式会社文化支援推進課）	文書一般	「INSネット64お申込票」	manuscript-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0158	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	資料複写	ISDN回線使用取り扱い説明書	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0159	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	野田電気興業株式会社	書簡	封筒（アートラボ 天野宛）	envelope	1	pdf	digital document
AL08	0160	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	野田電気興業株式会社	文書一般	見積書「ヒルサイドブラザ臨時電話回線布設工事」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL08	0161	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	株式会社キャノン保険センター	文書一般	保険契約書類一式（¥730）	manu/typescript-in-form	5 (bound)	pdf	digital document
AL08	0162	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	株式会社キャノン保険センター	文書一般	保険契約書類一式（¥270）	manu/typescript-in-form	9 (bound)	pdf	digital document
AL08	0163	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース「キャノンがアートラボ第8回企画展「SoundCreatures（サウンドクリエイチャーズ）」を開催」	typescript x 5	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0164	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 社会・文化支援センター	書簡	封筒（未使用）	envelope	1	pdf	digital document
AL08	0165	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キャノン株式会社 社会・文化支援センター	印刷物	招待状 オープニングレセプション招待状（日英、AL8）	card	2	pdf	digital document

付録

AL08	0166	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ (AL8、二つ折り)	sheet	2	pdf	digital document
AL08	0167	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	安田火災海上保険株式会社	書簡	保険証 キヤノン株式会社 文化支援推進課 水内宛 (未開封)	envelope	1	pdf	digital document
AL08	0168	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	英文資料一式 「On "Soureatures" by Kouichirou Eto」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0169	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	ARTLAB事務局	文書一般	和文資料一式 「キヤノン・アートラボ 第8回企画展 「SoundCreatures (サウンドクリエチャーズ) アーティスト: 江渡浩一郎	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0170	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一 (アートラボ・ファクトリー)	イラストレーション	「ARTLAB Network 概念図」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL08	0171	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一 (アートラボ・ファクトリー)	イラストレーション	「ARTLAB8 機器構成図 Ver.1.5」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL08	0172	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	玉井俊一 (アートラボ・ファクトリー)	イラストレーション	「ARTLAB8 機器構成図 Ver.1.0」 (カラー)	system Diagram	1	pdf	digital document
AL08	0173	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	江渡浩一郎	イラストレーション	SoundCreaturesプレス用図版3種 (CG)	drawing	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0174	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	キヤノン株式会社 社会・文化支援センター 文化支援推進室	文書一般	企画書「アートラボ第8回企画展 企画書」 (オリジナル)	typescript	17 (combined)	pdf	digital document
AL08	0175	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	文書一般	企画書「ARTLAB8 仮企画書」1	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0176	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	不明	文書一般	企画書「ARTLAB8 仮企画書」2	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0177	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	野口靖	文書一般	企画書「さぐるかたち (仮称) 企画書」	typescript	5 (combined)	pdf	digital document
AL08	0178	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	野口靖	文書一般	企画書「0.5秒後の自己 (仮称) 企画書」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
AL08	0179	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	馬野訓子	文書一般	企画書「Self-not-Self」	typescript	12 (combined)	pdf	digital document
AL08	0180	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 8	馬野訓子、山元四朗	文書一般	企画書「duplex」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
AL08	0181	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像 (英語) Ars Electronicaエントリー用?	unknown	1	vob	digital movie
AL08	0182	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	NHK BS2	映像	テレビ番組「新・真夜中の王国 Entertainment News」	unknown	1	vob	digital movie
AL08	0183	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	NHK BS2	映像	テレビ番組「Weekend Joy」	unknown	1	vob	digital movie
AL08	0184	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	不明	書簡	イメージングジョイ 柘植編集長宛「写真ご送付のお知らせ」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document

付録

AL08	0185	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	大田原慶子（キヤノン株式会社アートラボ）	書簡	太田佳栄宛「写真ご送付のお知らせ」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0186	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	大田原慶子（キヤノン株式会社アートラボ）	書簡	湯澤和彦宛「写真ご送付のお知らせ」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0187	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	大田原慶子（キヤノン株式会社アートラボ）	書簡	鈴木宛「写真ご送付のお知らせ」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0188	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	大田原慶子（キヤノン株式会社アートラボ）	書簡	太田佳栄宛「写真ご送付のお知らせ」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL08	0189	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル「アートラボ第8回企画展 運営マニュアル Ver. 1.0」	typescript	12 (combined)	pdf	digital document
AL08	0190	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	ARTLAB事務局	出力物	ステッカー 「ARTLAB SoundCreatures」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL08	0191	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	ARTLAB事務局	出力物	ステッカー 「Kouichirou Eto "SoundCreatures"」	typescript (printout)	2	pdf	digital document
AL08	0192	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	ARTLAB事務局	出力物	ステッカー 「江渡浩一郎 "SoundCreatures"」	typescript (printout)	2	pdf	digital document
AL08	0193	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	ARTLAB事務局	文書一般	アートラボ第8回企画展「SoundCreatures (サウンドクリーチャーズ)」アンケート	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0194	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース「キヤノンがアートラボ第8回企画展「SoundCreatures (サウンドクリーチャーズ)」を開催」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0195	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	ARTLAB事務局	文書一般	英文資料一式 「Canon ARTLAB 8th Original Exhibition "SoundCreatures" artist: Kouichirou Eto	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
AL08	0196	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	不明	文書一般	音の解説両面コピー用「アートラボ第8回企画展「SoundCreatures」作品資料」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0197	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	ARTLAB事務局	文書一般	和文資料一式 「キヤノン・アートラボ 第8回企画展 「SoundCreatures (サウンドクリーチャーズ)」アーティスト：江渡浩一郎	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0198	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	びあ	クリッピング	びあ イベント欄「江渡浩一郎展」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AL08	0199	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	びあ	クリッピング	びあ イベント欄「江渡浩一郎展」	typescript (photocopy)	5	pdf	digital document

付録

AL08	0200	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	びあ	クリッピング	びあ イベント欄「江渡浩一郎展」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AL08	0201	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	江渡浩一郎、鈴木宣也、STUDIO VOICE	クリッピング	STUDIO VOICE インタビュー記事「メディア・アート」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AL08	0202	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	江渡浩一郎、鈴木宣也、STUDIO VOICE	クリッピング	STUDIO VOICE インタビュー記事「メディア・アート」	typescript (photocopy)	6	pdf	digital document
AL08	0203	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	日経クリック	クリッピング	日経クリック イベント欄「アートラボ第8回企画展「SoundCreatures」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AL08	0204	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	日経クリック	クリッピング	日経クリック イベント欄「アートラボ第8回企画展「SoundCreatures」	typescript (photocopy)	7	pdf	digital document
AL08	0205	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	美術手帖	クリッピング	美術手帖 イベント欄「Exhibition」	typescript (photocopy)	5	pdf	digital document
AL08	0206	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	BRUTUS	クリッピング	BRUTUS イベント欄「アートラボ第8回企画展」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AL08	0207	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	BRUTUS	クリッピング	BRUTUS イベント欄「アートラボ第8回企画展」	typescript (photocopy)	6	pdf	digital document
AL08	0208	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	餃子	クリッピング	餃子 イベント欄「代官山とサウンドとWebのコラボレーション」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AL08	0209	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	餃子	クリッピング	餃子 イベント欄「代官山とサウンドとWebのコラボレーション」	typescript (photocopy)	6	pdf	digital document
AL08	0210	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	Tokyo Journal	クリッピング	Tokyo Journal イベント欄「Hilside Plaza」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AL08	0211	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	Tokyo Journal	クリッピング	Tokyo Journal イベント欄「Hilside Plaza」	typescript (photocopy)	6	pdf	digital document
AL08	0212	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	日本物流新聞	クリッピング	日本物流新聞 イベント欄「キャノンがアートラボ第8回企画展「サウンドクリーチャーズ」を開催	typescript (clip)	6	pdf	digital document
AL08	0213	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	朝日新聞 (夕刊)	クリッピング	朝日新聞 イベント欄「サウンド・クリーチャーズ・江渡浩一郎」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AL08	0214	1998.10.17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	朝日新聞 (夕刊)	クリッピング	朝日新聞 イベント欄「サウンド・クリーチャーズ・江渡浩一郎」	typescript (photocopy)	6	pdf	digital document

付録

AL08	0215	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	不明	文書一般	露出一覧 「アートラボ 第8回企画展 SoundCreatures (サウンドクリエチャーズ 雑誌・新聞掲載一覧)」	typescript (photocopy)	8	pdf	digital document
AL08	0216	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	Imaging Joy	クリッピング	Imaging Joy 記事「Digital Artのココロ」	typescript (clip)	2 (combined)	pdf	digital document
AL08	0217	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	Imaging Joy	クリッピング	Imaging Joy 記事「Digital Artのココロ」	typescript (photocopy)	5	pdf	digital document
AL08	0218	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	キャノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	「アートラボ第8回企画展 開催報告「サウンドクリエチャーズ」アーティスト：江渡浩一郎」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AL08	0219	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	江渡浩一郎, Dream	クリッピング	Dream 記事『「つながっちゃっている」世の中が面白い』	typescript (photocopy)	15	pdf	digital document
AL08	0220	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	江渡浩一郎, AERA Mook	クリッピング	AERA Mook 記事「音の交流から生まれる次世代の音楽」	typescript (photocopy)	3 (combined) x 2	pdf	digital document
AL08	0221	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	キャノン株式会社 アートラボ	印刷物	展覧会フライヤー	typescript	2	pdf	digital document
AL08	0222	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	井上明彦	書簡	ハガキ (礼状) ARTLAB事務局宛	manu/typescript	1	pdf	digital document
AL08	0223	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	国立国会図書館	書簡	ハガキ (礼状) ARTLAB事務局宛	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0224	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	大阪芸術大学図書館	書簡	ハガキ (礼状) ARTLAB事務局宛	manu/typescript	1	pdf	digital document
AL08	0225	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	名古屋造形芸術大学付属図書館 / 名古屋造形芸術短期大学付属図書館	書簡	ハガキ (礼状) ARTLAB事務局宛	manu/typescript	1	pdf	digital document
AL08	0226	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	女子美術大学図書館	書簡	ハガキ (礼状) ARTLAB事務局宛	manu/typescript	1	pdf	digital document
AL08	0227	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	キャノン株式会社 社会・文化支援センター	文書一般	プレスリリース 原稿1『アートラボ 第8回企画展「SoundCreatures (サウンドクリエチャーズ)」アーティスト：江渡浩一郎』	typescript	5 (combined)	pdf	digital document
AL08	0228	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	キャノン株式会社 社会・文化支援センター	文書一般	プレスリリース 原稿2『アートラボ 第8回企画展「SoundCreatures (サウンドクリエチャーズ)」アーティスト：江渡浩一郎』	typescript	5 (combined)	pdf	digital document
AL08	0229	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	キャノン株式会社 社会・文化支援センター	文書一般	プレスリリース 最終バージョン『アートラボ 第8回企画展「SoundCreatures (サウンドクリエチャーズ)」アーティスト：江渡浩一郎』	typescript	6 (bound)	pdf	digital document

付録

AL08	0230	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	キャノン株式会社 社会・文化支援センター	文書一般	プレスリリース 原稿「Canon's ARTLAB holds its 8th Original Exhibition "SoundCreatures" artist: Kouichirou Eto」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0231	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	キャノン株式会社 社会・文化支援センター	文書一般	プレスリリース 最終バージョン「Canon's ARTLAB holds its 8th Original Exhibition "SoundCreatures" artist: Kouichirou Eto」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0232	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	不明	イラストレーション	「NETWORK SPACE」	System Diagram	1	pdf	digital document
AL08	0233	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	不明	文書一般	作品解説（日英）「The structure of SoundCreatures」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL08	0234	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	Box3. アートラボ8 Sound Creatures 1998/10月	不明	文書一般	作品解説（英）「The structure of SoundCreatures」	typescript	1	pdf	digital document
AL08	0235	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像（英語）Ars Electronicaエントリー用？	unknown	1	vob	digital movie
AL08	0236	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ（AL8）	sheet	1	pdf	digital document
AL08	0237	1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	出力物	アプレット画面キャプチャー？	screenshot (printout)	1	pdf	digital document
AL08		1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	AL8江渡保管資料	[unprocessed]						
AL08		1998. 10. 17	ヒルサイドブラザ	AL8江渡保管資料（データ）	[unprocessed]						
AL09	0238	1999. 10. 06	ヒルサイドブラザ	Box. 6 第3回プロジェクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	依頼書 キャノン株式会社法務部宛「法務案件処理依頼書」	typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0239	1999. 10. 06	ヒルサイドブラザ	Box. 6 第3回プロジェクト展4-3	関口敦仁、キャノン株式会社	文書一般	契約書「アートラボ・スポンサーシップ契約書」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
AL09	0240	1999. 10. 06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラストレーション	「HumanBodyの構造」	drawing	1	pdf	digital document
AL09	0241	1999. 10. 06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラストレーション	「HumanBodyのテクスチャマッピング」	drawing	1	pdf	digital document
AL09	0242	1999. 10. 06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	文書一般	テキスト引用「われわれの心は窓を持たない。 [...] 」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0243	1999. 10. 06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	メモ	「GPSを利用した実空間と映像情報の融合提示システム」	manuscript	1	pdf	digital document
AL09	0244	1999. 10. 06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	藤原えみり	クリッピング	掲載雑誌不詳 レビュー「ふにやふにやの摩訶不思議な形、それはアナタやワタシの身体。」	cripping	1	pdf	digital document
AL09	0245	1999. 10. 06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース 「アートラボ第9回企画展 分離する身体 アーティスト：関口敦仁」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document

付録

AL09	0246	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース (英) 「The 9th ARTLAB Original Exhibition "Connetcting Re- Body" collaborated with artirt Atsuhito Sekiguchi」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AL09	0247	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	ARTLAB事務局	文書一般	作品解説 原稿「分離する身体 作品体験ガ イド」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0248	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	ARTLAB事務局	文書一般	作品解説 (英) 原稿「Information on how to experience "Connecting Re-Body"」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0249	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	関口敦仁	文書一般	アーティスト・ステイトメント 原稿「この 作品は、 [...] 」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0250	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	関口敦仁	文書一般	アーティスト・ステイトメント (英) 原稿 「Note on "Connecting Re-Body" by Atsuhito Sekiguchi」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0251	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	ARTLAB事務局, 関口敦仁	文書一般	作品解説+アーティスト・ステイトメント 「分離する身体 作品体験ガイド」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0252	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	ARTLAB事務局, 関口敦仁	文書一般	作品解説+アーティスト・ステイトメント (英) 「Information on how to experience "Connecting Re-Body"」	typescript	2	pdf	digital document
AL09	0253	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル「アートラボ第9回企画展 運営 マニュアル Ver. 2. 0」	typescript	9 (combined)	pdf	digital document
AL09	0254	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	資料複写	「代官山マップ」	hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0255	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラスト レーショ ン	図解 「ModelingViewerの状態遷移」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL09	0256	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラスト レーショ ン	図解 「プロセス間の通信とシステム状態遷 移の関係」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL09	0257	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラスト レーショ ン	図解 「KeirakuViewer状態遷移」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL09	0258	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラスト レーショ ン	図解 「ModelingViewerのデータフロー」	system Diagram	2	pdf	digital document
AL09	0259	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	文書一般	マニュアル 「polygoniezerGE. exeの使用方 法」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0260	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	文書一般	マニュアル 「skelviewの使用法」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
AL09	0261	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	磯沼トモユキ (アートラボ・ ファクトリー?)	書簡	メール 関口敦仁宛 「アートラボの磯沼で す。モデリングビューワの評価版が完成しま した。 [...] 」	typescript (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0262	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	文書一般	仕様書 「プロセス間の通信仕様について」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0263	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	磯沼トモユキ (アートラボ・ ファクトリー) ?	文書一般	マニュアル 「モデリングビューワ Version β1 マニュアル」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL09	0264	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	玉井俊一 (アートラボ・ファク トリー)	書簡	FAX 関口敦仁宛 「本日、7/14 A-Plus社と 詳細打合せを行いました。 [...] 」	manuscript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0265	1999. 10. 0 6	ヒルサイドブラ ザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	玉井俊一 (アートラボ・ファク トリー)	書簡	FAX 関口敦仁宛 「A-Plus社よりセンサの設 計 (概要) が届きましたので転送致します。 [...] 」	manuscript (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document

付録

AL09	0266	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	玉井俊一（アートラボ・ファクトリー）	書簡	FAX 関口敦仁宛 「先程、お電話した感圧センサー関係の件です。 […]」	manu/typescript (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document
AL09	0267	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	杉山新子（アートラボ・ファクトリー？）	書簡	メール 関口敦仁宛 「つば温度測定ムービーの内容」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0268	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	前田ケイタ（NK-EXA）	書簡	メール 関口敦仁宛 「Re: Canon Art Lab」	typescript (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0269	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	磯沼トモユキ（アートラボ・ファクトリー）？	書簡	メール 関口敦仁宛 「Skelview」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0270	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラストレーション	図解 「システム構成（ソフト）仮案」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL09	0271	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラストレーション	図解 「システム構成（マシン分類）仮案」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL09	0272	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラストレーション	図解 「モデリングビューワー（仮称）アーキテクチャー」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL09	0273	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	関口敦仁	図面	フロアプラン 「分離する身体 プロジェクトプラン」	floor plan	1	pdf	digital document
AL09	0274	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	キャノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	スケジュール 「ARTLAB スケジュール」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0275	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	別所（アートラボ・ファクトリー？）	イラストレーション	「ARTLAB9 Sound System」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL09	0276	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	アートラボ・ファクトリー	イラストレーション	「ARTLAB Computer System Plan Ver.1.7」	system Diagram (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0277	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	文書一般	「つばインターフェイス出力データ」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0278	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	磯沼トモユキ（アートラボ・ファクトリー？）	書簡	メール 関口敦仁宛 「アートラボの磯沼です。ポータブル版のビジュアル面は90%程度完成しました。 […]」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0279	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	アートラボ・ファクトリー	書簡	FAX 関口敦仁宛 手のドローイング	drawing (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0280	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	文書一般	マニュアル 「skelview_usage.txt skelview.exeの使用方法」	typescript (printout)	3 (combined)	pdf	digital document
AL09	0281	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	イラストレーション	「スケルトンファイルフォーマット (BioVersion)」	drawing	1	pdf	digital document
AL09	0282	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	不明	文書一般	図解 「スケルトンファイルフォーマット (BioVersion) ファイル構造」	typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0283	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	ARTLAB事務局	図面	「分離する身体 作品概観」	floor plan	1	pdf	digital document
AL09	0284	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	関口敦仁	図面	什器図面「つばセンサーボタン&音声入力」	drawing	1	pdf	digital document
AL09	0285	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	前田ケイタ（NK-EXA）	書簡	メール 関口敦仁／磯沼宛 「Houdini CHOPs etc」	typescript (printout)	2	pdf	digital document
AL09	0286	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	前田ケイタ（NK-EXA）	書簡	メール 関口敦仁宛 「Re: Canon Art Lab」	typescript (printout)	2 (combined)	pdf	digital document

付録

AL09	0287	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	前田ケイタ (NK-EXA)	書簡	メール 関口敦仁宛 「Re: Video-In COP for SGI VWS320」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0288	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	前田ケイタ (NK-EXA)	書簡	メール 関口敦仁ノ平林宛 「Houdini Player」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0289	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	前田ケイタ (NK-EXA)	書簡	メール 関口敦仁ノ平林宛 「Video-In COP for SGI VWS320」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0290	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	前田ケイタ (NK-EXA)	書簡	メール 関口敦仁宛 「Re: PIPEINOUTの使い方」1	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0291	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	前田ケイタ (NK-EXA)	書簡	メール 関口敦仁宛 「Re: PIPEINOUTの使い方」2	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0292	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	アートラボ・ファクトリー	イラストレーション	「ARTLAB Computer System Plan Ver.1.1」	system Diagram (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0293	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	関口敦仁, キヤノン株式会社	文書一般	契約書「アートラボ・スポンサーシップ契約書」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
AL09	0294	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	株式会社エイプラス	図面	什器図面	drawing	8 (combined)	pdf	digital document
AL09	0295	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	マシシデザインオフィス	図面	フロア平面図、什器詳細図など	drawing	9 (combined)	pdf	digital document
AL09	0296	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	マシシデザインオフィス	図面	フロア平面図、什器詳細図など	drawing (photocopy)	9 (combined)	pdf	digital document
AL09	0297	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	マシシデザインオフィス	図面	フロア平面図、什器詳細図など	drawing	15 (combined)	pdf	digital document
AL09	0298	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box1. 1999 Canon ARTLAB	マシシデザインオフィス	図面	フロア平面図、什器詳細図など	drawing	5 (combined)	pdf	digital document
AL09	0299	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	イラストレーション	作品スケッチ 「AL9の展開版打ち合わせ」	hand Drawing (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0300	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キヤノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	スケジュール 「ARTLAB スケジュール」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0301	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	アートラボ・ファクトリー	文書一般	スケジュール 「ARTLAB 開発日程計画 Ver.1.2」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0302	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル 「アートラボ第9回企画展 運営マニュアル Ver.2.0」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
AL09	0303	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	文書一般	リスト 「アートラボ第9回企画展 事務局準備物」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0304	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	橋, 高辻 (株式会社エスピーシー)	文書一般	「チャーター便申込書」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0305	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キヤノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	依頼書「依頼書 撮影依頼」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0306	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キヤノン株式会社 広報部, ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース 『キヤノンがアートラボ第9回企画展「分離する身体」を開催』	typescript	3	pdf	digital document
AL09	0307	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	連絡票 文化支援推進課宛「アートラボ第9回企画展 報道発表の件」	typescript-in-form	1	pdf	digital document

付録

AL09	0308	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キャノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース 原稿『キャノンがアートラボ第9回企画展「分離する身体」を開催』	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0309	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース 「アートラボ第9回企画展 分離する身体 アーティスト：関口敦仁」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL09	0310	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	尾池弘江（キャノン株式会社 文化支援推進課）	文書一般	依頼書「報道発表依頼書」	typescript-in-form (photocopy)	2	pdf	digital document
AL09	0311	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	四方幸子	書簡	メール 天野／尾池宛「プレス・リーク1（案）」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0312	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	文書一般	スケジュール プレス、印刷物スケジュール	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0313	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	文書一般	作品解説 「分離する身体 作品体験ガイド」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0314	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	文書一般	作品解説（英）「Information on how to experience "Connecting Re-Body"」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0315	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局、関口敦仁	文書一般	作品解説＋アーティスト・ステイメント 「分離する身体 作品体験ガイド」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0316	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局、関口敦仁	文書一般	作品解説＋アーティスト・ステイメント（英）「Information on how to experience "Connecting Re-Body"」	typescript	2	pdf	digital document
AL09	0317	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一（キャノン株式会社 文化支援推進課）	書簡	FAX キャノン小杉事業所総務 船戸宛 「アートラボ第9回企画展オープニングレセプションの地図および、本企画展のプレスリリース資料をお送りします。」	typescript-in-form	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0318	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	資料複写	雑誌不明 ヒルサイドパンケットの情報	periodical	1	pdf	digital document
AL09	0319	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	文書一般	リスト 「配布先」	manu/typescript	1	pdf	digital document
AL09	0320	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	株式会社ワタナベ流通	書簡	FAX アートラボ 天野宛「お見積書（封入・封緘作業）」	manu/typescript-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0321	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	平井元（キャノン株式会社 コーポレートコミュニケーション本部）	印刷物	招待状（英）レセプション招待状	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0322	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	平井元（キャノン株式会社 コーポレートコミュニケーション本部）	印刷物	招待状（和）レセプション招待状	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0323	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キャノン株式会社 コーポレートコミュニケーション本部 社会・文化支援室 文化支援推進課	文書一般	企画書 「第9回アートラボ企画展 企画書」1	typescript	11 (combined)	pdf	digital document
AL09	0324	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	文書一般	企画書 「第9回アートラボ企画展 分離する身体（仮題）アーティスト：関口敦仁」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AL09	0325	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キャノン株式会社 コーポレートコミュニケーション本部 社会・文化支援室 文化支援推進課	文書一般	企画書 「第9回アートラボ企画展 企画書」2	typescript	9 (combined)	pdf	digital document
AL09	0326	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	関口敦仁、キャノン株式会社	文書一般	契約書 最終稿「アートラボ・スポンサーシップ契約書」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document

付録

AL09	0327	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	関口敦仁, キヤノン株式会社	文書一般	契約書 総務部法務訂正版「アートラボ・スポンサーシップ契約書」	typescript	7 (bound)	pdf	digital document
AL09	0328	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	関口敦仁, キヤノン株式会社	文書一般	契約書 下書き「アートラボ・スポンサーシップ契約書」	typescript	7 (bound)	pdf	digital document
AL09	0329	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	森利之 (キヤノン株式会社 法務第一課)	書簡	メール 天野宛「第9回アートラボ企画展契約書」	typescript (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0330	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一 (キヤノン株式会社 文化支援推進課)	書簡	FAX キヤノン保険センター 清野宛「保険金額の算定をお願いいたします。」	typescript-in-form	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0331	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	文書一般	企画書 「第9回アートラボ企画展ドラフト」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0332	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	関口敦仁	文書一般	企画書 「1999 Canon Art Lab 企画展示プラン」1	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0333	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	関口敦仁	文書一般	企画書 「1999 Canon Art Lab 企画展示プラン」2	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0334	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	関口敦仁, 磯沼	イラストレーション	作品資料 (構成プラン、スケッチ、配置図、システム図など)	drawing/system Diagram/floor plan (printout)	8 (combined)	pdf	digital document
AL09	0335	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	浦田工業株式会社	資料複写	商品パンフレット「圧力分布測定装置」	product catalogue	3 (combined)	pdf	digital document
AL09	0336	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	関口敦仁?	クリッピング	作品資料 参照イメージ	clipping (printout)	12 (combined)	pdf	digital document
AL09	0337	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	図面	平面図「ヒルサイドブラザ B2階平面図」	floor plan (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0338	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル 「分離する身体 操作説明」	typescript (printout)	3 (combined)	pdf	digital document
AL09	0339	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	日本インターグラフ株式会社	書簡	FAX 天野宛「貸出機の返却送付先」	typescript-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0340	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	水内行治 (キヤノン株式会社 文化支援推進課)	文書一般	日本インターグラフ株式会社宛「借用申込書」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0341	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	資料複写	名刺コピー「日本インターグラフ株式会社 伊東孝明」	card (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0342	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一 (キヤノン株式会社 文化支援推進課)	書簡	FAX 浦田工業株式会社 ST開発部 システム開発課 前川宛「拝啓 先日は当社までご足労いただき大変ありがとうございました。 […]」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0343	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	リスト	「13. プレゼンテーション用品」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0344	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	アートラボ・ファクトリー	イラストレーション	「ARTLAB9 Computer System Plan Ver.1.7」	system Diagram (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0345	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一 (キヤノン株式会社 文化支援推進課)	書簡	FAX 新都市開発 水上/棟朝宛「電源容量増設につきまして、ご対応ありがとうございます。 […]」	typescript-in-form	1	pdf	digital document

付録

AL09	0346	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	マミシデザインオフィス	図面	平面図 ヒルサイドブラザ B2階平面図 電気容量プラン	floor plan	1	pdf	digital document
AL09	0347	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一（キヤノン株式会社文化支援推進課）	書簡	FAX? 新都市開発 棟朝宛「拝啓 お世話になっております。 […]」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0348	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	資料複写	名刺コピー 5社6名分	card (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0349	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	シンドウ（アートラボ・ファクトリー）	リスト	「AL9 機材リスト Ver.0.1」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0350	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	秋定（アートラボ・ファクトリー）	メモ	作品資料 ラフスケッチ、メモ「AL9 パーツエディター状態遷移図（ラフスケッチ）」	hand Drawing/manuscript (photocopy)	5 (combined)	pdf	digital document
AL09	0351	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	柿崎（株式会社エイプラス）	書簡	FAX 玉井宛「感圧センサ (RD100)概要」	hand Drawing/manuscript (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0352	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	リスト	アーティスト名?	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0353	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	別所（アートラボ・ファクトリー?）	イラストレーション	「ARTLAB9 Sound System」	system Diagram	1	pdf	digital document
AL09	0354	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	玉井俊一（アートラボ・ファクトリー）	書簡	手紙? 緑屋電気株式会社 監宛「注文書を送付させていただきます。 […]」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0355	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	玉井俊一（アートラボ・ファクトリー）?	資料複写	名刺コピー 「緑屋電気株式会社 監 豊」	card (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0356	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一（キヤノン株式会社文化支援推進課）	書簡	FAX NPC 高辻宛「FAX送信のご案内 見積書」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0357	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	内藤電誠工業株式会社	書簡	FAX 玉井宛「液晶モニターユニット御見積書」	typescript-in-form (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0358	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	メモ	作品資料 メモ	hand Drawing/manuscript (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document
AL09	0359	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	株式会社ヨコハマイメージシステム	書簡	FAX アートラボ 天野宛「感圧センサの資料として […]」	typescript (photocopy)	5 (combined)	pdf	digital document
AL09	0360	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	資料複写	名刺コピー 2社3名分	card (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0361	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	浦田工業株式会社	資料複写	商品パンフレット「圧力分布測定装置」	product catalogue	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0362	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	書簡	送付状 「チラシ配布のお願い」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0363	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一（キヤノン株式会社文化支援推進課）	ストレージ	フロッピーディスク 「フォトショップデータ フィルム出力 Res.40」	unknown	1	pdf	digital document
AL09	0364	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キヤノン株式会社 コーポレートコミュニケーション本部 社会・文化支援室 文化支援推進課	文書一般	企画書 「第9回アートラボ企画展 企画書」3	typescript	11 (combined)	pdf	digital document

付録

AL09	0365	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ (AL9)	sheet	2	pdf	digital document
AL09	0366	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	印刷物	DM (AL9)	card	2	pdf	digital document
AL09	0367	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	平井元 (キヤノン株式会社コーポレートコミュニケーション本部)	印刷物	招待状 オープニングレセプション招待状 (日英、AL9)	card	1	pdf	digital document
AL09	0368	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	写真	記録写真 展示風景	print	10 (combined)	pdf	digital document
AL09	0369	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	出力物	作品図版 プリンター出力?	screenshot (printout)	1	pdf	digital document
AL09	0370	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	文書一般	企画書 表紙?	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0371	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一 (キヤノン株式会社文化支援推進課)	書簡	FAX ビットラビット 高橋宛「FAX送信のご案内 プレスリリース送付」	manuscript-in-form	4	pdf	digital document
AL09	0372	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース『キヤノンがアートラボ第9回企画展「分離する身体」を開催」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AL09	0373	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース 「アートラボ第9回企画展 分離する身体 アーティスト：関口敦仁」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AL09	0374	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	朝倉不動産株式会社ヒルサイドテラス	書簡	FAX アートラボ 天野宛「お世話になっております。10月6日のヒルサイドバンケットにてのレセプションパーティにつきまして [...]」	typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0375	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	キヤノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	進行表「アートラボ第9回企画展オープニングレセプション」	typescript	1	pdf	digital document
AL09	0376	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ヒルサイドブラザ	書簡	送付状 アートラボ 天野宛「書類送付のご案内 ヒルサイドブラザ使用承認書」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0377	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ヒルサイドブラザ	文書一般	承認書 「ヒルサイドブラザ駐車場貸切承認書」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0378	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ヒルサイドブラザ	文書一般	承認書 「ヒルサイドブラザ使用承認書」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0379	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ヒルサイドブラザ	書簡	送付状 アートラボ 天野宛「書類送付のご案内 ヒルサイドバンケット使用承認書」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0380	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ヒルサイドブラザ	文書一般	承認書 「ヒルサイドバンケット使用承認書」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0381	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ヒルサイドブラザ	文書一般	承認書 「使用承認書」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0382	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	水内行治 (キヤノン株式会社文化支援推進課)	文書一般	申込書 ヒルサイドブラザ宛「ヒルサイドバンケット使用申込書」	manuscript-in-form	1+1 (copy)	pdf	digital document
AL09	0383	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	水内行治 (キヤノン株式会社文化支援推進課)	文書一般	申込書 ヒルサイドブラザ宛「ヒルサイドブラザ使用申込書」	manuscript-in-form	1+1 (copy)	pdf	digital document
AL09	0384	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ヒルサイドブラザ	書簡	送付状 アートラボ 天野宛「書類送付のご案内 ブラザホール申込書」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document

付録

AL09	0385	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	ヒルサイドブラザ	文書一般	申込書 フォーム「ヒルサイドブラザ使用申込書」	form	1	pdf	digital document
AL09	0386	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	朝倉不動産株式会社ヒルサイドテラス	書簡	FAX アートラボ 天野宛「お世話になっております。ヒルサイドバンケットに關してのお申し込みを [...]」	typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AL09	0387	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一（キヤノン株式会社文化支援推進課）	書簡	FAX ヒルサイドテラス 棟朝宛「FAX送信のご案内 ヒルサイドブラザ追加申込書」	manuscript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0388	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	天野真一（キヤノン株式会社文化支援推進課）	書簡	FAX ヒルサイドテラス 近江宛「FAX送信のご案内 ヒルサイドバンケット使用申込書」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0389	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	文書一般	連絡票 コーポレートコミュニケーション本部 平井宛「アートラボ第9回企画展 オープニングレセプション招待状について」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AL09	0390	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	不明	文書一般	リスト 「配布先」	manu/typescript	1	pdf	digital document
AL09	0391	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	Box3. ARTLAB 9	水内行治（キヤノン株式会社文化支援推進課）	文書一般	連絡票 ドラフト「アートラボ第9回企画展 オープニングレセプション開催のご案内」	typescript-in-form	4	pdf	digital document
AL09	0392	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像（日本語）	unknown	1	vob	digital movie
AL09	0393	1999.10.06	ヒルサイドブラザ	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	記録映像 「デスクトップ画面の記録」	unknown	1	vob	digital movie
AL09		1999.10.06	ヒルサイドブラザ	冊子アートラボ第9回企画展	[unprocessed]						
AL10	0394	2000.10.28	ヒルサイドブラザ	映像DVD/ARTLAB&NCP2000:3Q-2001	アートラボ, 2dkCo., Ltd?	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
AL10	0395	2000.10.28	ヒルサイドブラザ	映像DVD/ARTLAB&NCP2000:3Q-2001	アートラボ, 2dkCo., Ltd?	映像	プレゼンテーション用ビデオ? 「Ars Electronica 2001」	unknown	1	vob	digital movie
AL10	0396	2000.10.28	ヒルサイドブラザ	映像DVD/ARTLAB&NCP2000:3Q-2001	アートラボ, 2dkCo., Ltd?	映像	記録映像「Solarisの画面」	unknown	1	vob	digital movie
AL10	0397	2000.10.28	ヒルサイドブラザ	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース 『ARTLAB10 Polar』（英語）	typescript (photocopy)	6 (combined)	pdf	digital document
AL10	0398	2000.10.28	ヒルサイドブラザ	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	文書一般	作品案内「Polar アクセス方法」（日本語）	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL10	0399	2000.10.28	ヒルサイドブラザ	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	文書一般	作品案内「Polar Access」（英語）	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
AL10	0400	2000.10.28	ヒルサイドブラザ	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ（AL10）	brochure	1	pdf	digital document
AL10		2000.10.28	ヒルサイドブラザ	AL10"Polar"	[unprocessed]						
ALmisc	0401	1991.07.24	*	Box2. 出版物	アートラボ, 四方幸子, 阿部一真, 七瀬至映, 中島浩, Digital Research Laboratories (D. R. L.), 浅利晃, カレル・ドゥデセク, ベンヤミン・ハイデルスベルガー	出版物	定期刊行物 『NEn No.1』	periodical	1	pdf	digital document

付録

ALmis c	0402	1992.04.15	*	Box2. 出版物	アートラボ、四方幸子、阿部一 直、七瀬至映、中島浩、宇治野 宗輝、藤本由紀夫、永原康史、 スー・ハイマン、杉田敦、ルト ガー・ヒューネンズ、布施英利	出版物	定期刊行物 『NEEn No.2』	periodical	1	pdf	digital document
ALmis c	0403	1991.4.9.	*	メセナ協議会情 報ライブラリー 資料	キャノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース「キャノンが新しい形の文化 支援活動を開始 芸術とハイテクの融合を推 進する“ARTLAB(アートラボ)”が誕生」	typescript (photocopy)	4 (combined)	pdf	digital document
ALmis c	0404	1991.06.27	*	Box2. 出版物	アートラボ、藤幡正樹、梶川泰 司、伊藤俊治、辻大介、榎木野 衣、岩淵潤子、ポール・ヴィリ リオ	出版物	コンセプトブック 『Artlab Concept Book』	concept book	1	pdf	digital document
ALmis c	0405	1998-1999	*	映像 DVD/ARTLAB- Movie (2) 1996-1999	ARTLAB事務局	映像	プロモーション・ビデオ「キャノン アート ラボ活動1998-1999」	unknown	1	vob	digital movie
ALmis c	0406	2000.06.30	*	Box2. 出版物	キャノン株式会社、水内行治、 阿部一直、四方幸子、高橋淳 子、石神森、伊藤俊治、バー バーラ・ロンドン、ジークフ リート・ツイーリンスキー、ア レックス・アドリアンセンズ	出版物	『Partner of Forerunners: キャノンの文化 支援プロジェクト [1991-2000] 』	report	1	pdf	digital document
ALmis c	0407	1999.09.04	OK Center	映像 DVD/ARTLAB1995 -2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	記録映像	unknown	1	vob	digital movie
ALmis c	0408	1995.6.22	The Museum of Modern Art, New York	メセナ協議会情 報ライブラリー 資料	The Museum of Modern Art, New York	印刷物	展示解説 "Video Spaces: Eight Installations"	exhibition catalogue	5 (combined)	pdf	digital document
ALmis c	0409	2001	www.canon.co.jp /cast/	Home Page	ARTLAB事務局	プログラ ムデータ	cast			pdf	digital document
ALmis c	0410	2001	www.canon.co.jp /cast/	Home Page	ARTLAB事務局	プログラ ムデータ	art			pdf	digital document
ALmis c	0411	1991.06.29	外苑前TEPIA 4F TEPIAホール	映像 DVD/ARTLAB- Movie (1) 1991-1995	アートラボ、オットー・E・レ スラー、フィリップ・ケオ、伊 藤俊治、奥出直人、藤幡正樹	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
ALmis c	0412	1997.01.	有楽町マリオン 朝日ホール	映像 DVD/ARTLAB- Movie (2) 1996-1999	キャノン株式会社	映像	記録映像「Canon Video News」	unknown	1	vob	digital movie
ALmis c	0413	1997.01.	有楽町マリオン 朝日ホール	映像 DVD/ARTLAB1995 -2000:2Q	キャノン株式会社	映像	記録映像「Canon Video News」	unknown	1	vob	digital movie
ALmis c				映像DVD/ ARTLAB+α	[unprocessed]						
ALmis c	0414	1996		メセナ協議会情 報ライブラリー 資料	World Art	出版物	記事 "dumb type"	periodical	6 (combined)	pdf	digital document
ALmis c	0415	1993.4.20		メセナ協議会情 報ライブラリー 資料	キャノン株式会社 社会・文化 支援センター	出版物	記事「INCの活動『ARTLAB』」	concept book	4 (combined)	pdf	digital document
ALOpe n		1993.03.27	美術館	Box.5 AL1オー プン・コラボ レーション	[unprocessed]						

付録

ALOpen	0416	1993.03.27	0美術館	Box2. 出版物	アートラボ, Bulbous Plants, DTI (Digital Therapy Institute), 本木秀明, 四方幸子, 阿部一直, 伊藤俊治, 榎木野衣	出版物	カタログ 『アートラボ第1回オープン・コラボレーション展 サイコスケープ: アートからの精神観測 Bulbous Plants DTI (Digital Therapy Institute) 本木秀明』	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
ALOpen	0417	1993.03.27	0美術館	映像 DVD/ARTLAB-Movie (1) 1991-1995	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
ALOpen	0418	1993.03.27	0美術館	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	印刷物	デスクトップ画面キャプチャー?	screenshot (printout)	29 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0419	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	スケジュール 「LOVERS' 98 活動実施計画 Ver. 0.2」	manu/typescript-in-form	1	pdf	digital document
ALSpecial	0420	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	送付状「アートラボ特別展掲載紙・誌ファイル送付のお知らせ」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0421	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	送付状「アートラボ特別展ご報告」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0422	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	キヤノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	報告書「アートラボ特別展 開催報告」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0423	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	キヤノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	報告書「アートラボ特別展 開催報告」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0424	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	不明	文書一般	マニュアル「特別展LOVERSの立ち上げ方法」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0425	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	不明	文書一般	マニュアル「特別展LOVERSの終了方法」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0426	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	事務書類		19	pdf	digital document
ALSpecial	0427	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	保険関係書類		4	pdf	digital document
ALSpecial	0428	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル「アートラボ特別展 運営マニュアル」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0429	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局, 阿部一直, 四方幸子, バーバラ・ロンドン, 浅田彰	文書一般	テキスト「Texts on " LOVERS"」(日本語)	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0430	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局, 阿部一直, 四方幸子, バーバラ・ロンドン, 浅田彰	文書一般	テキスト「Texts on " LOVERS"」(英語)	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0431	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	不明	文書一般	アンケート「アートラボ特別展「LOVERS」古橋悌二/「frost frames」高谷史郎 アンケート」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0432	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	ステッカー他運営マニュアル		4	pdf	digital document
ALSpecial	0433	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	不明	写真	記録写真 サムネール「アートラボ特別展 LOVERS」		1	pdf	digital document
ALSpecial	0434	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	木村	写真	記録写真「LOVERS/frost frames オープニング」			pdf	digital document

付録

ALSpecial	0435	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	高谷史郎	書簡	FAX		6	pdf	digital document
ALSpecial	0436	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	不明	図面	フロア平面図「アートラボ特別展「LOVERS」古橋倭二／「frost frames」高谷史郎」	floor plan (printout)	3 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0437	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	書簡	FAX スパイラル宛「入館届」		4 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0438	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	不明	図面	立面図、フロア平面図		16	pdf	digital document
ALSpecial	0439	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	書簡	FAX パイオニア宛		16	pdf	digital document
ALSpecial	0440	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	キヤノン株式会社 製品安全第一課	書簡	FAX アートラボ宛		12	pdf	digital document
ALSpecial	0441	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	キヤノン株式会社 製品安全部	文書一般	「FCC/FDA例外出荷依頼書記入要領」		19	pdf	digital document
ALSpecial	0442	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	「対策品該当判定依頼書／結果通知書」		22	pdf	digital document
ALSpecial	0443	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	シャープ株式会社	文書一般	「対策品該当判定依頼書／結果通知書」		13	pdf	digital document
ALSpecial	0444	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	「対策品該当判定依頼書／結果通知書」		14	pdf	digital document
ALSpecial	0445	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	阿部一直	書簡	FAX? NPC高辻宛「お世話になっております。先日のエキジビションのアルバイトの時間 [...]」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0446	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	LOVERS物流関係書類		34	pdf	digital document
ALSpecial	0447	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	MoMA寄贈に関する覚書について		8	pdf	digital document
ALSpecial	0448	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	The Museum of Modern Art NY	書簡	手紙 キヤノン株式会社 御手洗富士夫取締役社長宛		6	pdf	digital document
ALSpecial	0449	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	不明	写真	ボラロイド写真 梱包荷物の写真		7	pdf	digital document
ALSpecial	0450	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	MoMA寄贈に関する覚書について		10	pdf	digital document
ALSpecial	0451	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	MoMA寄贈に関する覚書、 SHIPPINGについて		28	pdf	digital document
ALSpecial	0452	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	MoMA寄贈について他、プレス関係		15	pdf	digital document
ALSpecial	0453	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	天野真一（キヤノン株式会社 文化支援推進課）	文書一般	連絡票「アートラボ特別展 オープニングレセプション開催のご案内」	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
ALSpecial	0454	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース「キヤノンがアートラボ特別展を開催 「LOVERS」 古橋倭二／「frost frames」 高谷史郎」	typescript (photocopy)	5 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0455	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース「Canon's ARTLAB presents "LOVERS: Teiji Furuhashi / frost frames: Shiro Takatani" (英語)」	typescript (photocopy)	7 (combined)	pdf	digital document

付録

ALSpecial	0456	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	クリッピング	掲載紙クリッピング		7	pdf	digital document
ALSpecial	0457	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	シアターTV	印刷物	チラシ「Theater TV Monthly Schedule 4・5 1998 APR. + 1998 MAY.」	sheet	2	pdf	digital document
ALSpecial	0458	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	文書一般	招待状発送について		5	pdf	digital document
ALSpecial	0459	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	ARTLAB事務局	印刷物	招待状 オープニングレセプション招待状	card	1	pdf	digital document
ALSpecial	0460	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 5 Lovers/Frost Frames-1-3	スパイラル	印刷物	フライヤー「スパイラル・スケジュール 3+4+5 1998」	sheet	1	pdf	digital document
ALSpecial	0461	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-1						pdf	digital document
ALSpecial	0462	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-1	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース「キヤノンがアートラボ特別展を開催 「LOVERS」 古橋倭二/「frost frames」 高谷史郎」	typescript	5 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0463	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-10	ARTLAB事務局, 長谷川祐子	文書一般	テキスト レビュー「アートラボ特別展 “LOVERS” 古橋倭二/ “frost frames” 高谷史郎」の文字おこし	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0464	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-11	ARTLAB事務局	文書一般	送付状 「写真ご送付のお知らせ」		8	pdf	digital document
ALSpecial	0465	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-12	ARTLAB事務局	文書一般	作品解説「アートラボ特別展「LOVERS」古橋倭二/「frost frames」高谷史郎」（日本語）	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0466	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-13	ARTLAB事務局	文書一般	作品解説「ARTLAB Exhibition “LOVERS” (Teiji Furuhashi) / “frost frames” (Shiro Takatani)」(英語)	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0467	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-2	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース「Canon's ARTLAB presents “LOVERS: Teiji Furuhashi / frost frames: Shiro Takatani」(英語)	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0468	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-3	キヤノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	報告書「アートラボ特別展 開催報告」	typescript	1	pdf	digital document
ALSpecial	0469	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-4	ARTLAB事務局	クリッピング	掲載誌リスト、「アートラボ特別展掲載リスト」クリッピングなど		45	pdf	digital document
ALSpecial	0470	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-5	Masato Fukuoka, Art&ScienceNews	クリッピング	ニュースレター「Art&ScienceNews 第16号」	email newsletter (printout)	1	pdf	digital document
ALSpecial	0471	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-6	大日本印刷, 長谷川祐子	クリッピング	ウェブサイト レビュー「アートラボ特別展 “LOVERS” 古橋倭二/ “frost frames” 高谷史郎」	web site (printout)	4 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0472	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-7	大日本印刷, 四方幸子, 阿部一	クリッピング	ウェブサイト レビュー「アートラボ特別展 “LOVERS” 古橋倭二/ “frost frames” 高谷史郎」	web site (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0473	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-8	大日本印刷, 長谷川祐子	クリッピング	ウェブサイト レビュー「アートラボ特別展 “LOVERS” 古橋倭二/ “frost frames” 高谷史郎」	web site (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0474	1998.05.10	スパイラルガーデン	Box. 6 Lovers/Frost Frames-4-9	大日本印刷, 四方幸子, 阿部一	クリッピング	ウェブサイト レビュー「アートラボ特別展 “LOVERS” 古橋倭二/ “frost frames” 高谷史郎」	web site (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
ALSpecial	0475	1998.05.10	スパイラルガーデン	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	ARTLAB事務局	映像	告知ビデオ	unknown	1	vob	digital movie

付録

ALSpecial	0476	1998.05.10	スパイラルガーデン	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	高谷史郎	映像	記録映像	unknown	1	vob	digital movie
ALSpecial	0477	1998.05.10	スパイラルガーデン	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	告知ビデオ	unknown	1	vob	digital movie
ALSpecial	0478	1998.05.10	スパイラルガーデン	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	高谷史郎	映像	記録映像	unknown	1	vob	digital movie
AP1	0479	1995.04.22	東長寺講堂P3	メセナ協議会情報ライブラリー資料	ARTLAB事務局	文書一般	アートラボ第1回プロスペクト展「TERRAIN」開催報告	typescript (photocopy)	11 (combined)	pdf	digital document
AP1	0480	1995.04.22	東長寺講堂P3	メセナ協議会情報ライブラリー資料	ARTLAB事務局	文書一般	チラシ「アートラボ第1回プロスペクト展『TERRAIN』」	typescript (photocopy)	2 (combined)	pdf	digital document
AP1	0481	1995.04.22	東長寺講堂P3	映像DVD/「UlrikeGabriel」TERRAIN	ARTLAB事務局, P3 art and environment	映像	記録映像 (未編集)	unknown	1	mov	digital movie
AP1	0482	1995.04.22	東長寺講堂P3	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局, P3 art and environment	印刷物	チラシ (Prospect 1)	sheet	1	pdf	digital document
AP1	0483	1995.04.22	東長寺講堂P3	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局, P3 art and environment	印刷物	DM (Prospect 1)	card	1	pdf	digital document
AP2	0484	1997.05.17	東長寺講堂P3	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	NHK BS2	映像	テレビ番組「Weekend Joy」	unknown	1	vob	digital movie
AP2	0485	1997.05.17	東長寺講堂P3	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局, P3 art and environment	印刷物	チラシ (Prospect 2)	sheet	1	pdf	digital document
AP2	0486	1997.05.17	東長寺講堂P3	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局, P3 art and environment	印刷物	DM (Prospect 2)	card	1	pdf	digital document
AP3		1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-2	[unprocessed]						
AP3	0487	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	報告書「アートラボ第3回プロスペクト展「ウルティマ・ラティオ：物語のカスケード」ダニエラ・アリーナ・プレーヴェ 開催報告」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
AP3	0488	1999.05.27	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.70 1999 Summer	brochure	1	pdf	digital document
AP3	0489	1999.05.27	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '99-'00	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「『ウルティマ・ラティオ 物語のカスケード』」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
AP3	0490	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	展覧会資料		16	pdf	digital document
AP3	0491	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	会場費 (スパイラル)、取材、機材操作メモなど		12	pdf	digital document
AP3	0492	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	取材FAX、報道発表依頼書など		10	pdf	digital document
AP3	0493	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル「アートラボ第3回プロスペクト展 運営マニュアル」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document

付録

AP3	0494	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	連絡票 「アートラボ第3回プロスペクト展オープニングレセプション開催のご案内」		4	pdf	digital document
AP3	0495	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	Bernhard J. Dotzler	資料複写	「Hamlet-Machine」	typescript (photocopy)	5 (combined)	pdf	digital document
AP3	0496	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ダニエラ・アリーナ・プレーヴェ	文書一般	作品解説 一式		9	pdf	digital document
AP3	0497	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	スパイラル?	文書一般	「スパイラルガーデン日報」		11	pdf	digital document
AP3	0498	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	システム構成、保険関係など		18	pdf	digital document
AP3	0499	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース「アートラボ第3回プロスペクト展 「ウルティマ・ラティオ：物語のカスケード」ダニエラ・アリーナ・プレーヴェ」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AP3	0500	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	電波新聞	クリッピング	電波新聞 記事「アートラボ第3回プロスペクト展キヤノンが来月27日から東京で開催」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AP3	0501	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	企業メセナ協議会	書簡	FAX 企業メセナ情報掲載について		4	pdf	digital document
AP3	0502	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	天野真一（キヤノン株式会社文化支援推進課）	文書一般	依頼書「報道発表依頼書 アートラボ第3回プロスペクト展 ウルティマ・ラティオ（究極の決断）（仮）」	typescript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
AP3	0503	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	送付状 「チラシ配布のお願い」	typescript	1	pdf	digital document
AP3	0504	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	キヤノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	企画書 「アートラボ第3回プロスペクト展 企画書」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
AP3	0505	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	キヤノン株式会社 文化支援推進課	文書一般	企画書 「作品のねらい」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AP3	0506	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	企画書、アグリーメント、制作メモなど作品資料		24	pdf	digital document
AP3	0507	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	企画書「アートラボ第3回プロスペクト展 企画書」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
AP3	0508	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局	文書一般	企画書「アートラボ99年度計画」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
AP3	0509	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	ARTLAB事務局、ダニエラ・アリーナ・プレーヴェ	図面	平面図、運送関係、書簡など		13	pdf	digital document
AP3	0510	1999.05.27	スパイラルガーデン	Box. 6 第3回プロスペクト展4-3	Masato Fukuoka, Art&ScienceNews他	クリッピング	クリッピング、取材関係		7	pdf	digital document
AP3	0511	1999.05.27	スパイラルガーデン	映像 DVD/ARTLAB-Movie (2) 1996-1999	NHK BS2	映像	テレビ番組「新・真夜中の王国 Entertainment News」	unknown	1	vob	digital movie
AP3	0512	1999.05.27	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ (Prospect 3)	sheet	1	pdf	digital document
AP3	0513	1999.05.27	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	出力物	デスクトップ画面キャプチャー? 1	screenshot (printout)	1	pdf	digital document

付録

AP3	0514	1999.05.27	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	出力物	デスクトップ画面キャプチャー?2	screenshot (printout)	1	pdf	digital document
AP3	0515	1999.05.27	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	印刷物	DM (Prospect 3)	card	1	pdf	digital document
AP4	0516	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	コーポレートコミュニケーション本部 社会・文化支援室 文化支援推進課	文書一般	報告書「アートラボ第4回プロスペクト展「DRIVE [ドライブ]」ジョーダン・克蘭ダール 開催報告書」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
AP4	0517	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	ARTLAB事務局	文書一般	レクチャー、スパイラル日報、運営マニュアルなど		60	pdf	digital document
AP4	0518	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	ARTLAB事務局	文書一般	機材リスト、報道発表、企画書、制作メモ、図面など		54	pdf	digital document
AP4	0519	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	天野真一（キヤノン株式会社 文化支援推進課）	書簡	FAX送付状		3	pdf	digital document
AP4	0520	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	不明	図面	スパイラル平面図／立面図		2	pdf	digital document
AP4	0521	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	不明	図面	展覧会パース		2	pdf	digital document
AP4	0522	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	コーポレートコミュニケーション本部 社会・文化支援室 文化支援推進課	文書一般	企画書「アートラボ第4回プロスペクト展企画書」	typescript	11 (combined)	pdf	digital document
AP4	0523	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	マシニングデザインオフィス	図面	プロジェクター位置、什器図面など	floor plan (printout)	25 (combined)	pdf	digital document
AP4	0524	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ (Prospect 4)	sheet	1	pdf	digital document
AP4	0525	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	電波新聞	クリッピング	電波新聞 記事「アートラボ第4回プロスペクト展キヤノンが5月17日から28日から」	typescript (clip)	1	pdf	digital document
AP4	0526	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	スタジオボイス他	クリッピング	クリッピング		9	pdf	digital document
AP4	0527	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース「アートラボ第4回プロスペクト展「DRIVE (ドライブ)」プレスリリース送付の件」	typescript (photocopy)	4 (combined)	pdf	digital document
AP4	0528	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	ARTLAB事務局	文書一般	プレスリリース「ARTLAB-Prospect 4 "Drive"」(英語)	typescript (photocopy)	5 (combined)	pdf	digital document
AP4	0529	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース「キヤノンがアートラボ第4回プロスペクト展「DRIVE (ドライブ)」を開催」	typescript	3 (bound)	pdf	digital document
AP4	0530	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-4	ARTLAB事務局	文書一般	送付状 「アートラボ第4回プロスペクト展「DRIVE (ドライブ)」チラシ配布のお願い」	typescript	1	pdf	digital document
AP4	0531	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	不明	写真	作品写真 広報用	print	2	pdf	digital document
AP4	0532	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	コーポレートコミュニケーション本部 六本木 文化支援推進室	文書一般	連絡票 「アートラボ第4回プロスペクト展オープニングレセプション開催のご案内」	typescript	1	pdf	digital document
AP4	0533	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル「アートラボ第4回プロスペクト展 運営マニュアルVer.1.3」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
AP4	0534	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	ARTLAB事務局	文書一般	作品関連資料、関連イベントレクチャーについて		3	pdf	digital document

付録

AP4	0535	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	ARTLAB事務局	文書一般	作品資料 「ドライブ参考資料」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
AP4	0536	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	ARTLAB事務局, ジョーダン・克蘭ダル	文書一般	作品解説 「Related Texts to "Drive" by Jordan Crandall」	typescript	11 (combined)	pdf	digital document
AP4	0537	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	art他	クリッピング	掲載記事リスト、クリッピングなど		37	pdf	digital document
AP4	0538	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	ARTLAB事務局, ジョーダン・克蘭ダル	文書一般	アーティスト・ステイトメント 「on DRIVE」 (英語)	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
AP4	0539	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	ARTLAB事務局	リスト	連作先リスト	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AP4	0540	2000.05.17	スパイラルガーデン	Box. 6 第4回プロスペクト展4-5	ARTLAB事務局	文書一般	アンケート「アートラボ第4回プロスペクト展 DRIVE (ドライブ) アンケート」	form	1	pdf	digital document
AP4	0541	2000.05.17	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '99-'00	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「キヤノンがアートラボ第4回プロスペクト展「DRIVE(ドライブ)」を開催」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
AP4	0542	2000.05.17	スパイラルガーデン	映像 DVD/ARTLAB1995-2000:2Q	ARTLAB事務局	映像	オフィシャル記録映像	unknown	1	vob	digital movie
AP4	0543	2000.05.17	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ (Prospect 4)	sheet	1	pdf	digital document
AP4	0544	2000.05.17	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局	印刷物	DM (Prospect 4)	card	1	pdf	digital document
AP4	0545	2000.05.17	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局, ジョーダン・克蘭ダル	文書一般	作品解説「「ドライブ」参考資料」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
AP4	0546	2000.05.17	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ジョーダン・克蘭ダル	文書一般	アーティスト・ステイトメント 「アートラボ第4回プロスペクト展「ドライブ」関連資料」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AP4	0547	2000.05.17	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ジョーダン・克蘭ダル	文書一般	アーティスト・ステイトメント 「on Drive」 (英語)	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
AP4	0548	2000.05.17	スパイラルガーデン	写真冊子内の資料	ARTLAB事務局, ジョーダン・克蘭ダル	文書一般	作品解説「Related Text to "Drive" by Jordan Crandall」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
AP5	0549	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	文化支援推進室	文書一般	スケジュール 「プロスペクト5日程表」	typescript-in-form	1	pdf	digital document
AP5	0550	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	不明	図面	スパイラル平面図/立面図 plan A	floor plan	2 (combined)	pdf	digital document
AP5	0551	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	不明	図面	スパイラル平面図/立面図 plan B	floor plan	2 (combined)	pdf	digital document
AP5	0552	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	四方幸子	書簡	メール 玉井俊一「ミハエルよりいくつか」	email (printout)	2 (combined)	pdf	digital document
AP5	0553	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	ARTLAB事務局	文書一般	マニュアル 「アートラボ第5回プロスペクト展 運営マニュアル Ver.1.1」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
AP5	0554	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	ミハエル・サウブ	文書一般	テックライダー 「R111-supreme practicles 1999/2000/2001 technical rider version 05.05.2001」	typescript	23 (combined)	pdf	digital document
AP5	0555	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	キヤノン株式会社 広報部	文書一般	プレスリリース「キヤノンがアートラボ第5回プロスペクト展「R111: 仮想から物質へ」を開催」	typescript	5 (combined)	pdf	digital document

付録

AP5	0556	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	ミヒヤエル・サブ	写真	作品写真 プレスマテリアル	digital photo (printout)	4 (combined)	pdf	digital document
AP5	0557	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	ARTLAB事務局, パブリックリレーションセンター	文書一般	プレスリリース「アートラボ・プロスペクト展／第5回「R111: 仮想から物質へ」ミヒヤエル・サブ」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
AP5	0558	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	ミヒヤエル・サブ	文書一般	テックライダー 「R111-supreme practices 1999/2000/2001 technical rider version 11.1.2001」 (英語)	web site (printout)	19 (combined)	pdf	digital document
AP5	0559	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	文化支援推進室	文書一般	「プロスペクト展「R111」Q・A集」	typescript-in-form (photocopy)	3 (combined)	pdf	digital document
AP5	0560	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	コーポレートコミュニケーション本部 パブリックリレーションセンター 社会・文化支援室 文化支援推進課	文書一般	企画書 「アートラボ第11回企画展 企画書」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
AP5	0561	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	ARTLAB事務局	印刷物	チラシ (Prospect 5)	sheet	1	pdf	digital document
AP5	0562	2001.06.01	スパイラルガーデン	Box. 6 第5回プロスペクト展4-6	不明	図面	スパイラル平面図／立面図 plan B	floor plan	2 (combined)	pdf	digital document
AP5	0563	2001.06.01	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.81 2001 June-July	brochure	1	pdf	digital document
AP5	0564	2001.06.01	スパイラルガーデン	映像DVD/ARTLAB&NGP2000:3Q-2001	キヤノン株式会社	映像	記録映像「Canon Video News」	unknown	1	vob	digital movie
CG	0565	1997	*	Box1. 準備段階	四方幸子	書簡	FAX 樋口昌樹宛「先日は失礼しました！ [...]」	manu/typescript	1	pdf	digital document
CG	0566	1997	*	Box1. 準備段階	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	文書「ヴァーチャルギャラリー打合せ」	typescript	1	pdf	digital document
CG	0567	1998	*	Box1. 準備段階	四方幸子	文書一般	企画書「資生堂ヴァーチャル・ギャラリー (仮称) プロジェクト」	typescript	4 (bound)	pdf	digital document
CG	0568	1998	*	Box1. 準備段階	四方幸子	書簡	FAX Peter Fischli & David Weiss宛 "Dear Mr. Peter Fischli & Mr. David Weiss, [...]"	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
CG	0569	1998	*	Box1. 準備段階	四方幸子	文書一般	企画書「フィシュリ&ヴァイス (スイス)」	typescript	7 (bound)	pdf	digital document
CG	0570	1998	*	Box1. 準備段階	四方幸子	文書一般	企画書「ビロロッティ・リスト (スイス)」	typescript	4 (bound)	pdf	digital document
CG	0571	1998	*	Box1. 準備段階	四方幸子	文書一般	企画書「カールステン・ヘラー／+α (ベルギー)」	typescript	6 (bound)	pdf	digital document
CG	0572	1998	*	Box1. 準備段階	四方幸子	文書一般	企画書「中村政人 (日本)」	typescript	4 (bound)	pdf	digital document
CG	0573	1998	*	Box1. 準備段階	四方幸子	文書一般	企画書「ディラー&スコフィディオ (米国)」	typescript	4 (bound)	pdf	digital document
CG	0574	1998	*	Box1. 準備段階	不明	文書一般	文書「検討事項」	typescript	2 (bound)	pdf	digital document
CG	0575	1998	*	Box1. 準備段階	不明	文書一般	文書「アーティスト候補」	typescript	1	pdf	digital document

付録

CG	0576	1998	*	Box1. 準備段階	不明	文書一般	文書「その他候補」	typescript	1	pdf	digital document
CG	0577	1998	*	Box1. 準備段階	不明	文書一般	文書「資生堂HPアクセス」	typescript	1	pdf	digital document
CG	0578	1998	*	資生堂企業資料館	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	CyGnet 写真資料	[unprocessed]	[unprocessed]		
CG	0579	1998	*	資生堂企業資料館	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	CyGnet 関連図書他資料	[unprocessed]	[unprocessed]		
CG	0580	*	*	Box1. RSG (Radical Software Group)	不明	文書一般	企画書「資生堂出し分」	typescript	3 (bound)	pdf	digital document
CG	0581	1997.12.02	*	Box1. 準備段階	樋口昌樹 (株式会社資生堂 企業文化部)	書簡	FAX 四方幸子宛「FAX送付のごあんない」	manuscript-in-form (photocopy)	1	pdf	digital document
CG	0582	1998.01.	*	資生堂企業資料館	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	CyGnet ヴァーチャルギャラリープロジェクト アーティスト資料	[unprocessed]	[unprocessed]		
CG	0583	1998.04.	*	資生堂企業資料館	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	CyGnet 進行スケジュール	[unprocessed]	[unprocessed]		
CG	0584	1998.05.	*	資生堂企業資料館	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	CyGnet 打合せ資料	[unprocessed]	[unprocessed]		
CG	0585	1998.07.	*	資生堂企業資料館	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	CyGnet 出展企画書 PAGE-KAGE	[unprocessed]	[unprocessed]		
CG	0586	1998.10.02	*	資生堂企業資料館	Scias	クリッピング	Scias 記事「デジタルメディアの生態史」	[unprocessed]	[unprocessed]		
CG	0587	2003.01.22	*	Box1. RSG (Radical Software Group)	RSG (featuring Futureframers)	出力物	企画書「Radical Software Group- Proposal for CyGnet」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
CG	0588	2003.01.24	*	Box1. RSG (Radical Software Group)	アレクサンダー・ギャロウェイ	書簡	メール 四方幸子宛「TW3」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
CG	0589	2003.01.29	*	Box1. RSG (Radical Software Group)	四方幸子	書簡	メール Alexander Galloway宛「Re: TW3」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
CG	0590	2003.01.30	*	Box1. RSG (Radical Software Group)	四方幸子	書簡	メール 樋口昌樹宛「RSG:新プラン」	typescript (printout)	3 (bound)	pdf	digital document
CG	0591	2002	www.shiseido.co.jp/cygnets	Box1. doubleNegative s 《plaNet Former》	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	プレスリリース「CyGnetに新作《plaNet Former》登場！」	typescript	2 (bound)	pdf	digital document
CG	0592	1998.08.	www.shiseido.co.jp/cygnets	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	企画書「モルナー・ダニエル《タイレル・ハンガリー》概要」	typescript	3 (bound)	pdf	digital document
CG	0593	1998.08.	www.shiseido.co.jp/cygnets	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	文書「タイレル・ハンガリー/EastEdge」	typescript	1	pdf	digital document

付録

CG	0594	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	Jinx aka Szabo Sandor	書簡	メール 四方幸子宛「Hi Yukiko, Hiroo [...]」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
CG	0595	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	企画書「codename . tyrell.hungary」	typescript	4 (bound)	pdf	digital document
CG	0596	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	テキスト「タイレル・ハンガリー社小史」	typescript	12 (combined)	pdf	digital document
CG	0597	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	テキスト「Minpage:」	typescript	8 (bound)	pdf	digital document
CG	0598	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	テキスト「Question 1-73」	typescript	3 (bound)	pdf	digital document
CG	0599	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	デヴィッド・ディヒーリ	クリッピング	Studio Voice 記事「EastEdge (ライレル・ハンガリー)」	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
CG	0600	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	プロフィール「Daniel Molnar」	typescript	3 (bound)	pdf	digital document
CG	0601	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	プロフィール「ダニエル・モルナー」	typescript	2 (bound)	pdf	digital document
CG	0602	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. EastEdge (tyrell.hungary)	不明	文書一般	テキスト「Trell.Hungary全訳」	typescript	7 (bound)	pdf	digital document
CG	0603	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. 初プレスリリース	株式会社資生堂 企業文化部	印刷物	DM	card	4	pdf	digital document
CG	0604	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. 初プレスリリース	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	プレスリリース「新しいメディア・アートの可能性を探る CyGnet開設のお知らせ」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
CG	0605	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. 初プレスリリース	不明	文書一般	プレスリリース「Creative CyGnet Art Gallery on the Internet (Cyber Gallery Network) available late July」	typescript (photocopy)	2 (bound) (+1)	pdf	digital document
CG	0606	1998. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. 初プレスリリース	不明	文書一般	プレスリリース「新しいメディア・アートの可能性を探る CyGnet開設のお知らせ」	typescript	3 (bound)	pdf	digital document
CG	0607	1999. 04.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. exoneme (DISCODER)	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	プレスリリース「CyGnetに新作登場! DISCODER by exonemo」	typescript	5 (bound)	pdf	digital document
CG	0608	1999. 04.	www.shiseido.co.jp/cygnet	資生堂企業資料館	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	プレスリリース「CyGnetに新作登場! DISCODER by exonemo」	typescript	5 (bound)	pdf	digital document
CG	0609	1999. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. misc.	坂本憲一 (日本経済新聞 文化部)	クリッピング	日本経済新聞 記事「デジタルでアートの世界広がる」	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
CG	0610	1999. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	資生堂企業資料館	坂本憲一 (日本経済新聞 文化部)	クリッピング	日本経済新聞 記事「デジタルでアートの世界広がる」	typescript (photocopy)	1	pdf	digital document
CG	0611	1999. 08.	www.shiseido.co.jp/cygnet	資生堂企業資料館	日経アート	クリッピング	日経アート 記事「インターネットならではの双方向型ネットギャラリー開設」	[unprocessed]	[unprocessed]		

付録

GG	0612	2000. 02.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. Milica Tomic (i am milica tomic)	株式会社資生堂 企業文化部	文書一般	プレスリリース「CyGnetに新作登場! i am milica tomic」	typescript	3 (bound)	pdf	digital document
GG	0613	2000. 02.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. Milica Tomic (i am milica tomic)	四方幸子	書簡	メール 三紀宛「i am milica tomic」追加訳お願い」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
GG	0614	2000. 02.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. Milica Tomic (i am milica tomic)	四方幸子	書簡	メール 樋口昌樹宛「Milicaリリース英訳」	typescript (printout)	2 (bound)	pdf	digital document
GG	0615	2000. 02.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. Milica Tomic (i am milica tomic)	四方幸子	書簡	メール 樋口昌樹宛「Re: Final」	typescript (printout)	1	pdf	digital document
GG	0616	2000. 02.	www.shiseido.co.jp/cygnet	Box1. Milica Tomic (i am milica tomic)	四方幸子	書簡	メール 樋口昌樹宛「Re: PR」	typescript (printout)	5 (bound)	pdf	digital document
SP	0617	1995. 11. 1	エスプラナード&エントランス	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.56 1995 Autumn	brochure	1	pdf	digital document
SP	0618	2005. 6. 8.	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.105 2005 June-July	brochure	1	pdf	digital document
SP	0619	1988. 3. 18	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.12	brochure	1	pdf	digital document
SP	0620	1988. 3. 18	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '88	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Kodama: Neo Tone Neo Style」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
SP	0621	1990. 8. 2	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.26	brochure	1	pdf	digital document
SP	0622	1990. 8. 2	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '90	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「pH」	typescript	9 (combined)	pdf	digital document
SP	0623	1988. 8. 19	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '88	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「PONKO-本郷重彦・音・遊・館」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
SP	0624	1994. 6. 1	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '94	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「クリティカル・クエスト・ジャパン」	typescript	17 (combined)	pdf	digital document
SP	0625	1991. 2. 21	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '91	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「クリントン・ガロファノ展」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
SP	0626	1992. 9. 1	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.39 September-October	brochure	1	pdf	digital document
SP	0627	1992. 9. 1	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '92	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「ジョン・ケスラー展: アート&テクノロジー」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
SP	0628	1991. 12. 10	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '91	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Background Music」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SP	0629	1990. 10. 1	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '90	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「デイヴィッド・ホックニーファックス・アート展」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
SP	0630	1989. 5. 1	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '89	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「プレジャー・ドーム 吉原悠博展 presented by Shachihata」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
SP	0631	1993. 7. 8	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '93	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「マンフレート・シュトゥンフ展」	typescript	9 (combined)	pdf	digital document

付録

SP	0632	1995. 7. 21	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.55 1995 Summer	brochure	1	pdf	digital document
SP	0633	1995. 7. 21	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '95-'96	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「『ミュージック・ボックス・プロジェクトーアートになったオルゴール』展」	typescript	11 (combined)	pdf	digital document
SP	0634	1992. 7. 29	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '92	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「メデューサの視線」	typescript	9 (combined)	pdf	digital document
SP	0635	2001. 3. 22	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.80 2001 April-May	brochure	1	pdf	digital document
SP	0636	2002. 3. 15	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.99 2004 June-July	brochure	1	pdf	digital document
SP	0637	1985. 10. 24	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '85-'86	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「ロバート・ロンゴ」展	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
SP	0638	1994. 4. 22	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '94	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「江頭慎展ー不可能な(乗り)もの」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
SP	0639	1995. 1. 19	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '95-'96	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「『時の向こうへ: 野村仁』展」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
SP	0640	1994. 9. 20	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.50 1994 August-September	brochure	1	pdf	digital document
SP	0641	1994. 9. 20	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '94	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「『欲望の砂漠ー快楽原則の彼岸』展」	typescript	13 (combined)	pdf	digital document
SP	0642	1997. 5. 8.	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.621997 Summer	brochure	1	pdf	digital document
SP	0643	1997. 5. 8.	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.64 1997-1998 Winter	brochure	1	pdf	digital document
SP	0644	1997. 5. 8.	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '97-'98	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「『サウンド・ガーデンー浸透する空間』クリスティアン・メラー展 プレス・コンファレンスのご案内」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
SP	0645	1992. 3. 27	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '92	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「NTT インターコミュニケーション' 92『脱着するリアリティ』入江経一・藤幡正樹」	typescript	19 (combined)	pdf	digital document
SP	0646	1999. 7. 22	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '99-'00	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Paradise 「高橋士郎・高橋正」展ー充気膜構造と表層ー」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SP	0647	1989. 3. 30	スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.18	brochure	1	pdf	digital document
SP	0648	1989. 3. 30	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '89	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「メタリズム」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
SP	0649	1989. 11. 7	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '89	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「スパイラル・テイク・アート・コレクション」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
SP	0650	1997. 10. 8	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '97-'98	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「ダムタイプ コンサート『OR』」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
SP	0651	1985. 5. 23	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '85-'86	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Bill Fontana's 「Acoustical Journeyー音の旅」展」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document

付録

SP	0652	1996. 9. 10	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '95-'96	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Art Life 21『ジョイン・ミー!』」	typescript	15 (combined)	pdf	digital document
SP	0653	1998. 9. 17	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '97-'98	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「第3回Art Life 21『混沌を撃て——エレクトロニックイメーজの時代』」	typescript	10 (combined)	pdf	digital document
SP	0654	1995. 11. 3	スパイラルガーデン	Spiral Press Release '95-'96	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「完成作品発表展覧会のご案内」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
SP	0655	2000. 3. 29	スパイラルガーデン、各所	Spiral Press Release '99-'00	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「スパイラル大作戦: スーパーサインプロジェクト」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
SP	0656	1992. 7. 3.	スパイラルホール	Spiral Press Release '92	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「NOIJECT」	typescript	9 (combined)	pdf	digital document
SP	0657	1990. 8. 8	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 26	brochure	1	pdf	digital document
SP	0658	1990. 8. 8	スパイラルホール	Spiral Press Release '90	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「pH」	typescript	9 (combined)	pdf	digital document
SP	0659	1991. 1. 10	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 28	brochure	1	pdf	digital document
SP	0660	1991. 1. 10	スパイラルホール	Spiral Press Release '91	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「新機械劇場」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
SP	0661	1991. 7. 5	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 32 July-August	brochure	1	pdf	digital document
SP	0662	1991. 7. 5	スパイラルホール	Spiral Press Release '91	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「ミュンヘンハウゼン男爵の大冒険」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
SP	0663	1995. 1. 7	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 51 1994 October–November	brochure	1	pdf	digital document
SP	0664	1995. 1. 7	スパイラルホール	Spiral Press Release '95-'95	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「ダムタイプ『S/N』」	typescript	17 (combined)	pdf	digital document
SP	0665	1993. 1. 12	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 40 November–December	brochure	1	pdf	digital document
SP	0666	1993. 1. 12	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 41 January–February	brochure	1	pdf	digital document
SP	0667	1993. 1. 12	スパイラルホール	Spiral Press Release '93	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「ダムタイプ『パフォーマンスpH』」	typescript	7 (combined)	pdf	digital document
SP	0668	2000. 12. 08	スパイラルホール	映像DVD/ARTLAB&NCP2000:3Q-2001	不明	映像	記録映像	unknown	1	vob	digital movie
SP	0669	2000. 12. 08	スパイラルホール	映像DVD/ARTLAB&NCP2000:3Q-2001	キヤノン株式会社	映像	記録映像「Canon Video News」	unknown	1	vob	digital movie
SP	0670	1985. 12. 06	スパイラルホール	Spiral Press Release '85-'86	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「ISSEY MIYAKE "JUST A MOMENT" VIDEO INSTALLATION BY KAZUMI KURIGAMI」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SP	0671	2000. 4. 14	スパイラルホール	Spiral Press Release '99-'00	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「SICF (スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル)」	typescript	11 (combined)	pdf	digital document
SP	0672	1993. 10.	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 46 1993 December – 1994 January	brochure	1	pdf	digital document

付録

SP	0673	1993. 10.	スパイラルホール	Spiral Press Release '93	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「第1回Art Life 21『人間になろう』」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
SP	0674	1994. 1. 7	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 46 1993 December - 1994 January	brochure	1	pdf	digital document
SP	0675	1994. 1. 7	スパイラルホール	Spiral Press Release '93	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「ビデオ・ダンス」	typescript	2 (combined)	pdf	digital document
SP	0676	2005. 5. 2	スパイラルホール	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 105 2005 June-July	brochure	1	pdf	digital document
SP	0677	1987. 7. 16	スパイラルホール	Spiral Press Release '87	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「勅使河原三郎ダンス公演『月は水鏡―傀儡王子の旅』」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
SP	0678	1988. 7. 29	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Press Release '88	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「エヴァ・マリア・シェーン展 & ダンス工場ベルリン」	typescript	6 (combined)	pdf	digital document
SP	0679	1998. 4. 25	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Press Release '97-'98	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Fumiyart3」	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
SP	0680	1987. 07. 29	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 8	brochure	1	pdf	digital document
SP	0681	1987. 07. 29	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Press Release '87	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「JAPAN 87 ビデオ・テレビ・フェスティバル」	typescript	12 (combined)	pdf	digital document
SP	0682	1987. 07. 29	スパイラルホール & スパイラルガーデン	カタログ	ビデオ・テレビジョン・フェスティバル組織委員会, Video Gallery SCAN	出版物	カタログ「電視 Electrovisions」	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
SP	0683	1989. 07. 31	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 20	brochure	1	pdf	digital document
SP	0684	1989. 07. 31	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Press Release '89	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Japan 89 第2回ビデオ・テレビ・フェスティバル」	typescript	8 (combined)	pdf	digital document
SP	0685	1989. 07. 31	スパイラルホール & スパイラルガーデン	カタログ	ビデオ・テレビジョン・フェスティバル組織委員会, 株式会社トレヴィル	出版物	カタログ 1/2 (2冊組)	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
SP	0686	1989. 07. 31	スパイラルホール & スパイラルガーデン	カタログ	ビデオ・テレビジョン・フェスティバル組織委員会, 株式会社トレヴィル	出版物	カタログ 2/2 (2冊組) 「Delicate Technology」	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
SP	0687	1992. 02. 01	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 35 January-February	brochure	1	pdf	digital document
SP	0688	1992. 02. 01	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Press Release '92	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Japan 92 第3回ビデオ・テレビ・フェスティバル」	typescript	14 (combined)	pdf	digital document
SP	0689	1992. 02. 01	スパイラルホール & スパイラルガーデン	カタログ	ビデオ・テレビジョン・フェスティバル組織委員会, 株式会社トレヴィル	出版物	カタログ「Japan 92 3rd Video Television Festival at Spiral」	exhibition catalogue	1	pdf	digital document
SP	0690	1999. 3. 10	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 69 1999 Spring	brochure	1	pdf	digital document
SP	0691	1999. 3. 10	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Press Release '99-'00	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「Spiral TV 企画概要」	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SP	0692	1994. 2. 1	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No. 47 February-March	brochure	1	pdf	digital document
SP	0693	1994. 2. 1	スパイラルホール & スパイラルガーデン	Spiral Press Release '94	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「『人間の条件』展」	typescript	19 (combined)	pdf	digital document

付録

SP	0694	1992. 6. 26	横浜・みなとみらい21地区内倉庫	Spiral Press Release '92	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	プレスリリース「NO1JECT」	typescript	9 (combined)	pdf	digital document
SP	0695	1988. 5.		Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.13	brochure	1	pdf	digital document
SP	0696	1995. 2		Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.53 February-March	brochure	1	pdf	digital document
SPmisc	0697	1988	*	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.11	brochure	1	pdf	digital document
SPmisc	0698	1991	*	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.34 November-December	brochure	1	pdf	digital document
SPmisc	0699	1998	*	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.67 1998 Autumn	brochure	1	pdf	digital document
SPmisc	0700	2000	*	Spiral Paper	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	印刷物	Spiral Paper No.74 2000 April-May	brochure	1	pdf	digital document
SPmisc	0701	1985/1986	*	Spiral Press Release '85-'85	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '85-'86 表紙と目次	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0702	1987	*	Spiral Press Release '87	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '87 表紙と目次	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0703	1988	*	Spiral Press Release '88	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '88 表紙と目次	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0704	1989	*	Spiral Press Release '89	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '89 表紙と目次	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0705	1990	*	Spiral Press Release '90	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '90 表紙と目次	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0706	1991	*	Spiral Press Release '91	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '91 表紙と目次	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0707	1992	*	Spiral Press Release '92	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '92 表紙と目次	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0708	1993	*	Spiral Press Release '93	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '93 表紙と目次	typescript	4 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0709	1994	*	Spiral Press Release '94	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '94 表紙と目次	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0710	1995/1996	*	Spiral Press Release '95-'96	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '95-'96 表紙と目次	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0711	1997/1998	*	Spiral Press Release '97-'98	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '97-'98 表紙と目次	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
SPmisc	0712	1999/2000	*	Spiral Press Release '99-'00	スパイラル (株式会社ワコールアートセンター)	文書一般	Spiral Press Release '99-'00 表紙と目次	typescript	3 (combined)	pdf	digital document
VS1	0713	1994	キャノン	Box4. VQL 第1/2クール	[unprocessed]						
VS2	0714	1994	キャノン	Box4. VQL 第1/2クール	[unprocessed]						

付録

VS3	0715	1995	キヤノン	Box4. VOL 第3 クール	[unprocessed]						
VS4	0716	1995	キヤノン	Box4. VOL 第4 クール	[unprocessed]						
VS5	0717	1996	キヤノン	Box4. VOL 第5 クール	[unprocessed]						
VS6	0718	1996	キヤノン	Box4. VOL 第6 クール	[unprocessed]						
VS7	0719	1997	キヤノン	Box3. VOL 第7 クール	[unprocessed]						
VSmisc	0720	1994		Box3. VOL写真	[unprocessed]						

本報告書は、文化庁の委託業務として、大日本印刷株式会社が実施した平成 30 年度「メディア芸術連携促進事業 連携共同事業」の成果を取りまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。